

ヲ本條約ニ適用ス兩國官憲間ノ通信ニ於テハ原本ヲ以テ正文トス原本ハ之ヲ正文トスルノ限ニアラス

第四條 今後兩國官憲及官吏間ノ交信ハ相互ノ階級及地位ニ從ヒ且最モ絶對ナル相互主義ノ基礎ニ依リテ定メラル

ヘキモノトス該公信ハ省城其他ノ地點ニ於ケル佛國上級官吏及清國上級官吏間ニ於テハ照會ニ依リ、佛國屬僚及清國地方上級官吏間ニ於テハ佛國屬僚ハ申陳ニ依リ清國地方上級官憲ハ制行ニ依リ、兩國屬僚間ニ於テハ前記ノ如ク完全ナル平等ノ基準ニ依リテ行ハルヘキモノトス

商人及其他一般ニ公ノ性質ヲ有セサル個人ハ相互官憲ニ

對スル照會トシテ申告シ若ハ通達スル一切ノ文書ニ於テ相互ニ稟呈ノ形式ヲ用フヘシ

佛國人カ清國官憲ニ對シ文書ヲ提出スル一切ノ場合ニ於テ其稟呈ハ先ツ之ヲ佛國領事ニ差出スヘシ佛國領事ハ該稟呈カ理由アリ且其形式妥當ナリト認メタルトキハ爾後ノ手續ヲ爲シ然ラサルトキハ其内容ヲ訂正セシメ若ハ其送達ヲ拒絶スヘシ一方ニ於テ清國人カ佛國領事ニ對シ文書ヲ提出セムトスルトキハ清國官憲ニ對シテ前段同様ノ手續ヲ履行シ清國官憲亦前段同様ニ行動スヘシ

第五條 佛國皇帝陛下ハ諸國官憲及佛國商人並佛國臣民ニ

於ケル媒介ヲ爲サシメ且定メラレタル規則ノ嚴格ナル遵守ヲ監督セシメムカ爲本條約第六條ニ掲タル清帝國ノ海港及河港ニ駐在スル佛國領事若ハ領事代理ヲ任命スルコトヲ得

之等ノ官吏ハ相當ノ注意及尊敬ヲ以テ待遇セラルヘタ其駐在地ノ上級官憲トノ公ノ關係及通信ハ最モ完全ナル平等ノ原則ニ基クヘキモノトス

若シ該官憲ノ手續ニ就キ告訴セムトスルトキハ直接地方上級官吏ニ之ヲ爲シ直ニ佛國皇帝陛下ノ全權公使ニ之ヲ通告スヘシ

佛國領事ナキトキハ佛國人タル船長及商人ハ友邦領事ノ介入ニ依リ不可能ナルトキハ稅關長ニ之ヲ申告スヘシ稅關長ハ該船長若ハ商人ニ對シ本條約ノ利益ヲ保障スル方法ヲ講スルコトニ注意スヘシ

第六條 經驗テ依レハ外國貿易ニ對シテ新ニ港ヲ開タコトハ時代ノ要求ノ一ナルコト立證セラレタルニ依リ廣東省ニ於ケル粵州及潮州、臺灣島ニ於ケル安平及淡水、福建省全部、山東省ニ於ケル鄧州及江蘇省ニ於ケル南京ノ各港ハ廣東、上海、寧波、廈門、福州ト同一ノ特權ヲ享有スヘキコトヲ約定ス南京ニ就テハ在清國佛國官憲ハ帝國

軍隊ニ依リテ叛徒カ追放セラレタル後ニ限り其國民ニ對シ旅券ヲ下付シ得ヘキモノトス

第七條 佛國人及其家族ハ前條ニ掲タル海岸及河岸ニ所在スル清帝國ノ港並都市ニ於テ完全ナル保障ノ下ニ何等ノ隠匿ナク旅行、居住及商工業ノ經營ヲ爲スコトヲ得佛國人及其家族ハ旅券ヲ有スルトキ前記各地點間ヲ進行スルコトヲ得但シ各地沿岸ニ於テ隱密ニ賣買ヲ督ムコトハ明白ニ禁止セラル若シ之ヲ犯スモノアルトキハ該取引ニ關係セル商船及商品ヲ沒收ス沒收ハ清國政府ノ利益ノ爲ニ之ヲ行フモノトス但シ清國政府ハ法律ニ依リ差押及沒收ヲ宣告スル以前當該地點ヨリ最近ノ地ニ在ル佛國領事ニ之ヲ通告スルコトヲ得

第八條 佛國人力在清國佛國外交官吏若ハ領事ノ下付ニ係リ清國官憲ノ檢證セル佛國西語及支那語ヲ以テ作成シタル旅券ヲ携帶スルコトヲ特別ノ條件トスルトキハ一切ノ保障ノ下ニ清國內地ノ都市若ハ外國船舶ノ出入ヲ許可セサル港ニ赴クコトヲ得

ノ滯在許可證ノ下付ヲ拒否セムトスル場合ニハ如何ナル方法ニ依ルモ虐待侮辱スルコトナク之ヲ最近地ニ在ル領事館ニ送致スヘシ

舊條約ニ定メラレタルカ如ク開港場ニ滯在シ若ハ通過スル佛國人ハ旅券ナクシテ該開港場近隣地方ヲ進行シ清國國民ト同様自由ニ其職業ヲ督ムコトヲ得ヘシ但シ當該佛國人ハ佛國領事及清國地方官憲ノ協定ニ依リ定メラルヘキ一定ノ範圍ノ地域ヲ出ウルコトヲ得ス

在清國佛國官吏ハ自國國民カ旅券ヲ請求スルトキ叛徒ノ起ラサル地點ニ限り其國民ニ對シテ旅券ヲ下付スヘシ清國官憲ハ佛國官憲ニ對シテ留マシキ一切ノ保障ヲ提供スヘキモノニ對シテノミ旅券ヲ下付スヘキモノトス

第十條 凡テ佛國人ニシテ本條約第六條ノ規定ニヨリ開港場ノ一ニ至ルモノハ滯在期間ノ長短ヲ問ハス其商品ヲ置キ署名國ノ一トノ協定ニ依リテ加フルコトアルヘキ修正ニ關スル一切ノ變更ハ單ニ實施ナル事實ノミニ依リ直ニ佛國商業及佛國商人ニ適用セラルヘキモノトス

屋及店舗ヲ建設スルコトヲ得佛國人ハ又同様ノ方法ニ依リ教會堂、病院、養育院、學校及墓地ヲ設置スルコトヲ得此目的ノ爲地方官憲ハ佛國領事ト協力シテ佛國人ノ在留ニ最モ適スル市街及前記建造物ヲ建設シ得ヘキ地點ヲ指定スヘシ家屋及土地ノ賃借料ハ當事者間ニ於テ自由ニ之ヲ協定スヘシ而シテ出來得ル限り當該地方時價ノ平均ニ依リテ定ムヘキモノトス

清國官憲ハ其國民力過當ノ價格ヲ貪リ若ハ之ヲ強要スルコトヲ防止シ佛國領事ハ佛國人カ所有者ノ同意ヲ強要スル力爲暴力又ハ強制ヲ用ヒサルヘキコトヲ監視スヘシ開港場ニ於テ佛國人ニ讓許セラルヘキ家屋ノ數及土地ノ面積ハ制限セラルコトナク權利者ノ必要及便宜ニ依リテ定メラルヘキコトヲ約定ス清國人力佛國人ノ教會堂若ハ墓地ヲ破壊シタルトキハ當該犯罪人ハ國法ニ從ヒテ嚴罰ニ處セラルヘキモノトス

第十一條 佛國人ハ開港場ニ於テ自由ニ且當事者間ノ協定ニ依ル給料ヲ以テ若ハ唯佛國領事ノ介入ノミニ依リ買辦、通譯、學者、職人、水夫及僕婢ヲ選定スルコトヲ得ヘシ又支那語及其他清帝國內ニ於テ使用セラル一切ノ言語ヲ話シ若ハ書タコトヲ習得スルカ爲國內ノ支那學者ニ處セラルヘキモノトス

止シ且清帝國內諸州ニ於テ價值ナキモノトス

第十四條 今後清國ニ於テ如何ナル特權アル商事會社モ設立セラルコトヲ得ス商業ニ對スル專賣ノ實施ヲ目的トスル一切ノ聯合ニ付亦同シ本條ニ違背スルトキ清國官憲ハ佛國領事若ハ領事代理ノ意見ニ依リ當該聯合ヲ解散セシムル方法ヲ講スルコトニ注意スヘシ尙清國官憲ハ自由競争ヲ阻害スヘキ一切ノ事項ヲ除去スルカ爲豫め禁令ヲ以テ該組合存立ノ防止ニ努ムヘキモノトス

第十五條 佛國船舶カ一開港場ノ水域内ニ到レルトキハ直ニ其港内ニ入ルカ爲欲スルトコロノ水先案内人ト契約ヲ爲スノ權能ヲ有ス而シテ一切ノ法定課金ヲ支拂ヒタル後出航セムトスルトキ還港ナク出港スルカ爲同様水先案内人ノ使用ヲ拒否セラレサルモノトス

凡テ佛國船舶ノ爲ニ水先案内ノ職業ヲ營マムトスルモノハ船長ノ證明書三種ヲ提出シタル上佛國領事ニ依リ佛國民ニ對シテ實施スルト同様ノ方法ヲ以テ指定セラルヘキモノトス

水先案内人ニ支拂フヘキ報酬ハ公平ノ原則ニ基キ各港各別ニ佛國領事若ハ領事代理ニ於テ航行ノ距離及航海ノ狀態ニ依リ之ヲ適當ニ定ムヘシ

ヲ履入レ且支那學者ヲシテ其文書若ハ科學的又ハ文學的ノ事業ニ助力セシムルコトヲ得佛國人ハ凡テノ清國人ニ對シ自國語若ハ外國語ヲ教授シ障礙ナク佛文ノ書籍ヲ販賣シ又ハ支那文ノ書籍ヲ購入スルコトヲ得

第十二條 清帝國內ニ在ル佛國人ニ屬スル一切ノ財產ハ清國人ニ依リ不可侵ト看做サレ且當ニ尊重セラルヘキモノトス清國官憲ハ如何ナル場合ニ於テモ佛國船舶ヲ抑留シ又ハ公私ノ如何ヲ問ハス之ヲ徵發スルコトヲ得サルモノトス

第十三條 基督教ハ人ヲ德ニ至ラシムルコトヲ以テ本質的ノ目的トスルモノナレハ一切ノ基督教團體ノ會員ハ其身體、財產及宗禮ノ自由ナル執行ニ對シ完全ナル保障ヲ享有スヘシ而シテ第八條定ムルトコロノ正規ノ旅券ヲ携ヘ平和ニ清帝國內地ニ赴カムトスル傳道者ニ對シテハ有效ナル保護ヲ與フヘキモノトス清帝國政府ハ清帝國內ニ於ケル一切ノモノニ對シ其欲スルトコロニ依リ基督教ニ歸依シ其宗禮ヲ執行スルモ此事實ニ對シテ如何ナル刑罰ヲ科スルコトナク如何ナル障礙ヲ齎スヘカラス從前清國內ニ於テ政府ノ命令ニ依リ基督教ニ反對シテ書カレ、宣告セラレ若ハ公刊セラレタル一切ノ事項ハ全部之ヲ廢ルヘキモノトス

第十六條 水先案内人カ佛國商船ヲ港内ニ導入シタル後稅關長ハ船舶ヲ監視シ庫輸入ノ實施ヲ防止スルカ爲一名又ハ二名ノ稅關吏員ヲ派遣スヘシ該吏員ハ其便宜ニ依リ各自船舶内ニ留ルコトヲ得若ハ佛國船舶ニ搭乗スルコトヲ得該吏員ノ給料、食料及手當ハ清國稅關ノ負擔トシ船長若ハ荷受人ニ對シテハ如何ナル賠償若ハ報酬ヲモ請求スルコトヲ得サルモノトス本規定ニ對スル一切ノ違背ヘ其收得額ニ應シテ處罰セラルヘシ該收得額ハ全部返還セラルヘキモノトス

第十七條 佛國商船カ一開港場ニ到着セル後二十四時間内ニ相當ノ障礙ナキトキハ船長、船長ナキトキハ事務長若ハ荷受人ニ於テ佛國領事館ニ赴キ佛國領事ニ對シ船舶書類、船荷證券及積荷表ヲ手交スヘシ又ニ二十四時間内ニ付五十「ビアストル」ノ罰金ヲ課セラルヘキモノトス但シ該罰金ハ二百「ビアストル」ヲ超ユルコトヲ得ス稅關長ハ佛國領事館ヨリ迅速セラルル翻目書受領後直ニ

船艤ヲ開クヘキ許可證ヲ下付スヘシ若シ船長カ前記許可證受領以前ニ其船艤ヲ開キ載貨陸揚ヲ開始シタルトキハ五百「ピアストル」ノ罰金ヲ課セラレ且陸揚シタル商品ハ清國政府ノ利益ノ爲ニ全部抑留セラルヘキモノトス

第十八條 佛國船長及佛國商人ハ載貨及旅客輸送ノ爲其款スルトコロノ船艤及其他ノ船舶ヲ貨借スルコトヲ得該船ノ貨借料ハ清國官憲ノ介入ナク當事者ノ意志ニ依リテ之ヲ定ムルモノトス隨テ清國官憲ハ該船ノ災害、僞妄若ハ滅失ニ際シテ其被害ニ對シ何等ノ保障ヲモ與フルコトナシ該船ノ數ハ之ヲ限ラス且何人ニ對シテモ其獨占經營ヲ讓許セス積込陸揚商品ヲ擔夫ニ依リテ持運フモノニ付亦同シ

第十九條 佛國商人力積込又ハ陸揚スヘキ商品ヲ有スル一切ノ場合ニ於テハ先ツ佛國領事若ハ領事代理ニ對シテ該商品ニ關スル通告ヲ爲サシムヘシ稅關長ハ直ニ積込若ハ陸揚ニ關スル許可證ヲ下付スヘシ稅關長ハ締約國ニ損害ヲ發生セサラシムルカ爲適當ナル形態ニ在ル商品ノ検査ニ着手スヘシ

佛國商人ハ検査ノ場所ニ立會スルコトヲ要ス(自ラ立會

スルコトヲ欲セサルトキハ)稅金支拂ノ爲ノ検査ニ着手スル際其利益ヲ監視スルカ爲必要ナル凡テノ資格ヲ有スルモノヲシテ代理セシムヘシ然ラサルトキハ爾後一切ノ請求ハ之ヲ無效トス

從價課稅商品ニ關シテハ當該商人力其價格決定ニ付清國官吏ト協定ヲ達タルコト能ハサルトキハ雙方ニ於テ該商品ノ検査ヲ爲スヘキ二名又ハ三名ノ商人ヲ指定スヘシ而シテ之等商人ノ評價格中最最高額ヲ以テ當該商品ノ眞實ノ價格ヲ構成スルモノトス

稅金ノ賦課ハ正味ニ依ル故ニ包裝及外包ノ重量ハ之ヲ扣除ノ中ヨリ若干ノ箱及桶ヲ選出シ先ツ其總重量ヲ量り次テ之ニ課稅シ量計荷相ニ關スル平均稅額ヲ以テ爾他一切ノ稅額トナスヘシ

若シ商品ノ検査中何等カノ困難起リテ解決スルコト能ハサルトキ佛國商人ハ佛國領事ノ介入ヲ請求スルコトヲ得領事ハ直ニ聚爭物件ヲ稅關長ニ了知セシメ兩人ニ於テ之ニ關シ協定ヲ達タルコトニ務ムヘシ但シ該請求ハ二十四時間内ニ爲スニアラサレハ爾後之ヲ爲スコトヲ得サルモ

ノトス論争ノ審判繼續スル間稅關長ハ當該物件ヲ登録スルコトナク以テ論争ノ審理及解決ニ對スル一切ノ自由ヲ留保スヘシ

輸入商品ニシテ損害ヲ蒙リタルモノハ其損害ニ因ル減價ニ比例シテ稅金ノ減額ヲ受タヘシ損害ニ因ル減價ハ從價稅決定ニ付定メタルトコロト等シク公平ニ且必要アルトキハ辦假認定書ニ依リテ之ヲ定ムヘキモノトス

第二十條 清國ノ一港ニ入レル凡テノ佛國船舶カ第十六條ニ定ムル陸揚許可證ヲ受ケサルトキハ其到着後二日以内ニ噸稅、海關稅ヲ支拂フコトナク該港ヲ去リ他ノ港ニ赴クコトヲ得該稅ハ該佛國船舶カ爾後其商品ノ賣買ヲ實施スヘキ港ニ於テ之ヲ支拂フヘキモノトス

第二十一條 輸入稅ハ商品ノ陸揚ニ從ヒ且其檢證ノ後佛國船長若ハ佛國商人ニ於テ之ヲ支拂フヘキコトヲ協定ス商品積込ノ際ニ於ケル輸入稅ニ關シテ亦同シ佛國船舶ノ負擔スヘキ噸稅及海關稅ノ支拂ヲ了シタルトキ稅關長ハ受領證ヲ下付スヘシ佛國領事ニ於テ該受領證ノ提示ヲ受ケタルトキハ船長ニ對シテ船舶書類ヲ交付シ且其出港ヲ許可スヘシ

稅關長ハ一又ハ數多ノ交換所ヲ指定シ清國政府ノ定ムル

トコロニ依リ佛國商人ノ負擔スル金額ヲ受領セシムヘシ而シテ該交換所吏員ノ領收スル一切ノ支拂ハ清國政府ニ於テ之ヲ受領シタルモノト看做ス該金額支拂ハ地金若ハ外國硬貨幣ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘク銀價トノ比率ハ時、所及事情ニ從ヒ各港ニ於テ佛國領事若ハ領事代理及稅關長ノ協定ニ依リテ決定セラルヘキモノトス

第二十二條 前記二日ノ期間超過セル後載貨ノ陸揚ニ着手スル以前各佛國商船ハ左ニ定ムルトコロニ依リ噸稅ノ支拂ヲ了スヘキモノトス百五十噸及其以上ノ法定噸數ヲ有スル船舶ハ一噸ニ付五「マース」(二分ノ一兩)、百五十噸以下ノ船舶ハ一噸ニ付二「マース」(十分ノ一兩)ノ割合ニ依ル從來着紙發航ノ際賦課セラレタル一切ノ報償及附加課金ハ明白ニ之ヲ廢止シ他ノ如何ナルモノヲ以テシテモ之ニ代フルコトヲ許サス

前記稅金ノ支拂ニ際シ稅關長ハ船長若ハ荷受人ニ對シ噸稅全部ノ支拂ヲ立證スル證明書ノ形式ヲ有スル受領證ヲ下付スヘシ爾後佛國船舶ノ寄航スル他ノ五港ノ稅關長ニ對シ該證明書ヲ提示スルトキ船長ハ其船舶ニ關スル噸稅ノ支拂ヲ免除セラレ凡テ佛國船舶ノ外國ヨリ清國ニ向フ各航海ニ於テ唯一回課稅セラルモノトス

船船、二桅船、沿岸航海船及其他佛國船舶（甲板ノ有無ヲ問ハス）ニシテ船客、行李、文書、燃料及一般ニ課稅品ナラサル一切ノ物件ノ輸送ニ使用セラルモノハ噸稅ヲ免除セラル若シ以上ノ物件以外ノ商品ヲ輸送スルトキハ該船舶ハ百五十噸以下ノ船舶ノ種別ニ入り一噸十分ノ一兩（一「マース」）ノ割合ヲ以テ稅金ヲ支拂フヘキモノトス。佛國商人ハ常ニ「ジヤンタ」船及其他ノ清國船舶ヲ貨借スルコトヲ得之等船舶ハ噸稅ヲ課セラルコトナシ。

第二十三條 凡テノ佛國商品カ五港ノ一ニ就キ稅率表ニ從ヒ海關稅ヲ支拂ヒタル後ハ將來如何ナル場合ニ於テモ増加セラルコトナキ現行低減稅率ニ依リ通過稅ヲ支拂フノ外如何ナル他ノ附屬稅金ヲモ課セラルコトナクシテ清國商人ニ依リ國內ニ搬入セラルヘシ若シ清國稅關ノ吏員カ本條約及前條ノ規定ニ反シテ不法ノ徵稅ヲ爲シ若ハ多額ノ稅金ヲ豫收セルトキハ中國法律ニ依リテ處罰セラルヘキモノトス。

第二十四條 凡テ佛國船舶ニシテ五港ノ一ニ入り其商品ノ一部ノミヲ陸揚スルモノハ陸揚シタル商品ニ付キテノミ海關稅ヲ支拂フヘシ其商品殘部ハ之ヲ他港ニ輸送シテ販賣スルコトヲ得ルモノトス此場合ニハ海關稅ヲ支拂フヘ

シ佛國人カ一港ニ於テ商品ノ關稅ヲ支拂ヒタル後該商品ヲ再輸出シ仙港ニ赴キテ販賣セムトスルトキハ佛國領事若ハ領事代理ニ對シテ之ヲ豫告スヘシ佛國領事若ハ領事代理ハ之ヲ稅關長ニ通告シ稅關長ハ商品ノ性質及包裝ノ完備セルコトヲ確認シタル上請求者ニ對シ該商品ニ關スル關稅カ現ニ支拂ハレタルコトヲ立證スル證明書ヲ下付スヘシ。

佛國商人力該證明書ヲ携ヘテ他港ニ到レルトキハ佛國領事ノ仲介ヲ以テ之ヲ稅關長ニ提示シ稅關長ハ當該載貨ニ關シ逕滯ナク無價ニテ免稅陸揚許可證ヲ下付スヘシ然レトモ若シ相當官憲ニ於テ該再輸出商品ノ中ニ密輸入品若ハ輸入禁制品アルコトヲ發見シタルトキハ檢證ヲ經タル後清國政府ノ利益ノ爲ニ沒收セラルヘキモノトス。

第二十五條 緊急ナル場合ヲ除キ特別許可證ナクシテハ如何ナル商品ノ積換モ之ヲ行フコトヲ得ス積換ヲ爲ササルヘカラサル場合ニハ先ツ之ヲ佛國領事ニ照會シ領事ハ之ニ證明書ヲ下付スヘシ稅關長ハ該許可證ヲ聞了シタル上當該商品ノ積換ヲ許可スヘシ稅關長ハ積換ニ立會セシムルカ爲何時ニテモ稅關吏員ヲ派遣スルコトヲ得危險アル場合ヲ除キ凡テ許可セラレサル積換ヲ爲シタルトキハ達

法ニ積換ヘタル商品全部ヲ清國ノ利益ノ爲ニ沒收スヘキモノトス。

第二十六條 各開港場ニ於テ稅關長ハ自ラ商品及貨幣並廣東稅關ニ於テ使用スル度量衡ニ適合シ且適合セルコトヲ證明スル印章ヲ具有スル度量衡ニ關シ法定比率表ハ清國政府ニ對シ之ヲ佛國領事館ニ寄託スヘシ該比率表ハ清國政府ニ對スル稅金課金ノ決済其餘一切ノ支拂ノ基準トナルヘキモノトス度量衡ニ關シテ爭アルトキ亦之ニ依リテ決定スヘキモノトス。

第二十七條 清國ニ於テ佛國商業ニ關シ豫收スル輸入稅ニ付テハ各產地ノ署名調印セル本條約附屬稅率ヲ適用スヘシ將來ノ增額ヲ明白ニ禁止セラレ且如何ナル課金若ハ附加稅ヲモ增收スヘカラサル稅金ノ支拂ニ依リ佛國人ハ佛國及外國ノ港ヨリ本條約署名ノ日及附屬稅率表分類以後明白ニ禁止セラレ若ハ特別ノ專賣ノ目的物タラサル一切ノ商品ヲ自由ニ清國ニ輸入シ且之ヲ一切ノ仕向地ニ向テ輸出スルコトヲ得。

清國政府ハ將來禁制品若ハ專賣品タルヘキ物品ノ種類ヲ增加スル權能ヲ拋棄シタルニ因リ今後該稅率表ニ對シテハ豫メ佛國政府ト協議ヲ遂ケ其充分ニシテ完全ナル同意

ヲ得ルニアラサレハ如何ナル修正ヲモ加フルコトヲ得サルモノトス。

稅率表竝現行諸條約中ニ挿入セラレ又ハ挿入セラルヘキ一切ノ約定若ハ今後誇張セラルヘキ一切ノ約定ニ關シ商人及一類ニ清國ニ在ル凡テノ佛國人ハ時ト所トヲ間ハス最惠國國民ノ待遇ヲ受ケル權利ヲ當ニ正當ニ有スヘキモノトス。第二十八條 適當ナル正規ノ稅率表ノ公布ニ依リテ今後密輸入ニ關スル一切ノ口實ヲ除去セルニ因リ此種ノ如何ナル行為ト雖モ五港ニ於テ佛國商船ニ依リテ實行セラレタルモノト推定スヘキニアラス然ラサル場合ニハ佛國商人ニ依リ前記諸港ノ一ニ密輸入セラレタル一切ノ商品ヘ其價格及性質ノ如何ヲ問ハス不正ニ陸揚セラレタル一切ノ禁制物貨ト同様該地方官憲之ヲ捕獲シ且清國政府ノ利益ノ爲ニ沒收セラルヘキモノトス又清國政府ニ於テ適宜ナリト思惟セルトキハ違反アリトセラルル船舶ノ清國ニ入ルコトヲ得若シ外國船舶カ不法ニ佛國國旗ヲ掲揚スルトキハ佛國政府ハ其濫用ヲ禁遇スルカ爲ニ必要ナル處置ヲ執ルコトヲ得ヘシ。

權限ノ實施ヲ容易ナラシムルカ爲佛國皇帝陛下ハ五港ニ各一隻ノ軍艦ヲ碇泊セシムルコトヲ得該軍艦ノ存在ニ因リ如何ナル不都合モ惹起セサルカ爲ニ必要ナル處置ヲ執ルヘシ而シテ該軍艦ノ指揮官ハ陸地トノ交通及船員警察ニ關スル第三十二條ノ規定ヲ實施セシムル命令ヲ受領スヘシ又佛國軍艦ハ固ヨリ如何ナル稅金ヲモ賦課セラレサルヘキモノトス

第三十條 凡ナ商業保護ノ爲ニ巡航スル佛國軍艦ハ其寄航スル一切ノ清國ノ港ニ於テ友好ヲ以テ接受待遇セラルヘキモノトス該佛國軍艦ハ清國ノ港ニ於テ必要ナル豫備及食料補給ノ各種物件ヲ獲得スルコトヲ得而シテ港ニ投錨セルトキハ修理ヲ爲シ且修理ノ目的ノ爲ニ必要ナル材料品ヲ購買スルニ些少ノ反對ヲモ受クヘカラサルモノトス佛國商船力不可抗力若ハ其他一切ノ事情ニ因リ如何ナル清國ノ港タルヲ問ハス之ニ避難セサルヘカラサル場合ニ付亦同シ

佛國商船力沿岸ニ於テ沈没セルトキハ最近地ノ清國官憲ハ之ヲ知リタル後直ニ乗組員ヲ救助シ緊急ナル必要ヲ充シ船舶ノ救濟及商品ノ保存ノ爲緊急ナル處置ヲ執ルヘシ

次テ清國官憲ハ遭難ノ場所ヨリ最近ノ地ニ在ル佛國領事

又ハ領事代理ニ對シ全部ノ事情ヲ通告シ以テ相當官憲トノ協力ニ依リ乘組員ヲ歸國セシメ且船舶及載貨ノ殘留品ニ於テモ佛國及清國間若ハ佛國及清國ノ敵國間ノ自由ナル通商ハ阻害セラレサルモノトス佛國船舶ハ實數アル封鎖ノ場合ヲ除キ常ニ障礙ナク各港間ヲ巡航シ平時ノ如ケ取引ヲ爲シ禁制品タラサル一切ノ種類ノ商品ヲ輸入若ヘ輸出スルコトヲ得ヘキモノトス

第三十二條 船員其他ノモノカ佛國軍艦若ハ商船ヨリ逃走若ハ脱走セルトキハ清國官憲ハ佛國領事ノ請求若ハ之ヲ缺クトキハ船長ノ請求ニ依リ當該逃走者若ハ脱走者ヲ發見シ之ヲ當該軍艦若ハ商船ニ歸還セシムルカ爲ニ一切ノ努力ヲ爲スヘシ同様ニ若シ清國人タル逃走者若ハ刑事被告カ佛國人ノ家屋内若ハ佛國人ニ屬スル船舶内ニ潜匿スルトキハ清國地方官憲ハ之ヲ佛國領事ニ告知シ領事ハ該被告ノ罪責ヲ實證シタル上直ニ其引渡實施ノ爲必要ナル手續ヲ爲スヘシ雙方ニ於テ一切ノ潜匿ヲ避止スルコトニ注意スヘシ

第三十三條 水夫上陸スルトキハ佛國海軍及清國人間ノ争

闘ノ一切ノ機會ヲ出來得ル限り除去スルカ爲佛國領事ニ於テ作成シタル上地方官憲ニ通告セル特別風紀規則ニ服スヘキモノトス

第三十四條 佛國商船カ清國沿岸ニ於テ海賊ノ攻撃若ハ劫掠ヲ受ケタルトキハ最近地ニ於ケル文武官憲ハ當該事實ヲ知リタル後直ニ犯罪者ノ搜索ヲ開始シ犯罪者カ逮捕セラレ法律ニ依リテ處罰セラルコトニ對シテ怠慢アルヘカラス場所及狀態ノ如何ニ係ラス掠奪セラレタル商品ヲ發見シタルトキハ之ヲ佛國領事ニ手交スヘク領事ハ之ヲ權利者ニ返還スルノ責ヲ有ス犯罪者ヲ逮捕シ得サルカ資難物件ノ全部ヲ回復スルコト能ハサルトキハ清國官吏ハ同種ノ場合ニ關シテ法律ノ譯スル刑罰ヲ受クヘシ但シ清國官吏ハ金錢上ノ責任ヲ負フコトナキモノトス

第三十五條 佛國人力清國人ニ對シテ爲スヘキ訴訟事件若ハ請求アルトキハ先ツ其訴訟ヲ佛國領事ニ提起スヘシ領事ハ事案ヲ審査シタル後示談ヲ以テ之ヲ解決スルニ努ムヘシ同様ニ清國人力佛國人ニ關シテ訴訟ヲ起スヘキトキハ佛國領事其請求ヲ聞キ示談ニ依リテ解決スル方法ヲ講スヘシ但シ何レノ場合ヲ問ハス事案ノ解決困難ナルトキハ佛國領事ハ相當清國官憲ノ助力ヲ請求シ雙方協力シテ

事案ヲ審理シ衝突ノ原則ニ依リテ之ヲ決裁スヘシ第三十六條 若シ爾後佛國人力清國臣民ヨリ損害ヲ蒙リ若ハ凌辱又ハ酷遇ヲ受ケタルトキハ該清國臣民ハ地方官憲ノ訴追ヲ受ケ清國地方官憲ハ佛國人ノ防護及保護ノ爲ニ必要ナル處置ヲ執ルヘシ懲漢若ハ浮浪者ノ一隊カ佛國人ノ家屋、店舗若ハ佛國人ノ建設セル其他一切ノ建造物ヲ劫掠、破壊若ハ燒燬セシムトスルトキニ於テモ清國地方官憲ハ佛國領事ノ請求若ハ各自ノ行動ニ依リ暴亂ヲ鎮壓シ犯罪者ヲ逮捕シ且之ヲ嚴罰ニ處スルカ爲至急軍隊ヲ送ルヘシ但シ爾後ニ於ケル被害者ノ正當ナル損害賠償請求權ノ行使ヲ妨ケサルモノトス

第三十七條 若シ將來清國人力佛國人タル船長若ハ商人ノ債務者トナリ欺妄若ハ其他一切ノ方法ニ依リ損害ヲ加ヘタルトキハ佛國人タル船長若ハ商人ハ事物ノ舊狀ヨリ生スル連帶責任ヲ主張スルコトヲ得ス唯其領事ヲ介シテ地方官憲ニ訴フルコトヲ得ヘシ地方官憲ハ事件ヲ審理シタル後國法ニ從ヒ被告ヲ強制シテ其契約ヲ履行セシムルコトニ付疏漏ナカルヘシ然レトモ債務者知レセルカ死亡セルカ若ハ破産シテ支拂フヘキモノナキトキハ佛國商人ハ清國官憲ヲシテ保障セシムルコトヲ得サルモノトス佛國

商人ノ側ニ於テ狀若ハ不拂アルトキハ領事ハ前段同様ノ方法ニ依リ請求者ニ協力スヘシ但シ佛國領事及佛國政府ハ如何ナル方法ニ於テモ之カ責任ヲ負フコトナシ
第三十八條 若シ不幸ニシテ佛國人及清國人間ニ紛議若ハ争闘ノ起レルトキ茲其際銃器又ハ其他ノ方法ニ依リ一人又ハ數人ノ死傷者ヲ出シタルトキハ清國人ハ清國官憲ニ逮捕セラレ清國官憲ハ之ヲ審理シ必要ナル場合ニハ國法ニ依リテ之ヲ處罰スヘシ佛國人ニ付テハ佛國領事ノ請求府ノ決定スヘキ手續及規定ニ從ヒ佛國法律ニ依リ正規ノ處分ニ付スルカ爲必要ナル一切ノ處置ヲ執ルヘキモノトス本條約ニ定メサル類似ノ一切ノ場合ニ於テモ亦同様ニ清國ニ於テ發生スル重罪及輕罪ノ鑑定ニ關シテ佛國人ハ常ニ佛國法律ノ適用ヲ受クヘキモノトス
第三十九條 清國ニ在ル佛國人間ニ生スル紛議若ハ爭訟モ亦佛國裁判管轄ニ屬ス佛國人及外國人間ニ争訟ヲ生スルトキト雖モ清國官憲ニ於テ如何ナル方法ニ依ルモ之ニ干與スヘカラサルコトヲ約定ス清國官憲ハ又佛國商船ニ關シテハ如何ナル行動ヲモ執ラス佛國官憲及船長之ヲ管轄スヘキモノトス

右證據トシテ兩國全權ハ本條約ニ署名調印ス
 千八百五十八年六月二十七日即成豐八年五月十七日天津ニ於テ本書四通ヲ作ル

(兩國全權署名調印)

附屬特別條款

第一條 佛蘭西國宣教師「オーギュスト・ジヤドウレーヌ」殺戮ノ罪アル西林縣長官ハ之ヲ禦官シ且以後何等ノ職務ヲモ執行ヘルコト能ハサルモノナルコトヲ聲明ス
第二條 清國駐劄佛國公使閣下ニ宛テラレタル公信ハ閣下ニ右措置ノ執行ヲ通知スヘク右措置ノ執行ハ北京新報ヲ以テ之ヲ公表シ且適宜ニ其理由ヲ附スヘシ
第三條 佛蘭西國及英吉利國ノ同盟國軍隊カ廣東市ヲ占領スル以前佛國人及佛國保護民ニシテ其財產カ同市住民ノ爲ニ掠奪又ハ燒却セラレタルモノニ對シテハ補償ヲ附與スヘシ
第四條 莫大ナル軍備ニ因リテ生シタル費用ハ佛蘭西國ニ對シ清國官憲カ其請求シタル賠償及補償ノ附與ヲ頑強ニ拒絶シタルコトニ原因スルモノナルヲ以テ該費用ハ廣東

千ノ規定ニ變更ヲ加フルコトヲ妥當ナリト思料シタルトキハ之カ爲本條約批准書交換後滿十二年ヲ經タル後清國政府ニ對シテ商議ヲ開始スルコトヲ得又本條約ニ明定セラレタルモノヲ除クノ外一切ノ義務ハ之ヲ佛國領事若ハ領事代理並佛國民ニ課スルノ限ニアラス一方ニ於テ其約定セル如ク清國政府ヨリ他國ニ對シテ供與セラレ又ハ供與セラルヘキ一切ノ權利、特權、免除及保障ハ佛國人之ヲ享有スヘキモノトス
第四十一條 佛蘭西國皇帝陛下ハ清國皇帝陛下ニ對シ好感ノ證憑ヲ供與セムト欲シ廣東ニ於ケル事變茲該事變ニ依リテ佛國皇帝陛下ノ政府ニ對シテ生シタル負擔ニ關スル既往ノ諸問題ニ付本條約中ニ亘細ニ挿入セラレタル同一ノ效力及價值ヲ有スル別條款ヲ以テ約定スルコトニ同意ス
第四十二條 本修好通商航海條約ノ批准書ハ本條約署名ノ後一年ノ期間内若ハ出來得ル限り速ニ佛國皇帝陛下及清國皇帝陛下ニ依リ北京ニ於テ交換セラルヘキモノトス批准書交換ノ後本條約ハ其公布ヲ確固ナラシムルカ爲省城及各地方ニ於ケル一切ノ清帝國ノ上級官憲ニ告知セラリ一年ノ期間内ニ支拂ハルヘシ
 市稅關金庫之ヲ佛蘭西國皇帝陛下ニ支拂フヘシ
 大略二百萬兩(二,〇〇〇,〇〇〇)ノ金額ニ達シタル該補償及軍備ノ費用ハ清國駐劄佛國公使ニ之ヲ拂込ミ該公使ニ於テ領收證ヲ附與スヘシ
 右二百萬兩ノ金額ハ清國駐劄佛國公使閣下ニ對シ年次六分ノ一完六年間廣東稅關金庫ヨリ之ヲ支拂フヘシ右金額ノ支拂ハ硬貨幣又ハ稅關證券ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ但シ右證券ハ輸入稅及輸出稅ノ支拂トシテ該政廳ニ支拂フヘキ金額ノ十分ノ一ニ限リ該政廳之ヲ受領スヘキモノトス即チ例ヘハ一商人力廣東稅關ニ對シ輸入稅又ハ輸出稅トシテ一萬兩ノ金額ヲ支拂フヘキ場合當該商人ハ硬貨幣九十兩及證券千兩ヲ以テ之カ支拂シ爲スコトヲ得ルカ如シ全額六分ノ一ノ第一回支拂ハ本條約ノ調印ノ日ヨリ一年ノ期間内ニ支拂ハルヘシ
 廣東ニ於テ清國官憲及佛國公使ノ任命スル混合委員會ハ該證券ノ發行方法並形式、價格及其使用後ノ破棄ノ方法ヲ定ムル規則ヲ決定スヘシ

第五條 佛國軍隊ノ廣東撤退ハ前記二百萬兩ノ金額支拂完済ノ後成ルヘク速ニ實行セラルヘシ但シ右軍隊ノ退去ア

早ムルカ爲豫メ稅關證券六年分ヲ一括シテ發行シ清國駐

在佛國公使館祕書課ニ寄託スルコトヲ得ヘシ

第六條 前記諸條ハ之ト一體ヲ爲ス條約中ニ插入セラレタルト同一ノ效力及價值ヲ有スヘク尙各全權ハ右諸條ニ署名調印セリ

耶蘇紀元千八百五十八年六月二十七日即咸豐八年五月十七日天津ニ於テ本書四通ヲ作ル

男爵 グローヴ

(清國全權署名調印)

千八百六十年十月二十五日北京

ニ於テ調印

同年同月同地ニ於テ批准書交換

佛蘭西國皇帝陛下及清國皇帝陛下ハ兩帝國間ニ起レル紛議ヲ終結シ且兩國間ニ存在シ來リ遺憾ナル事件ノ爲ニ中絶シ

天津條約追加講和條約

タル平和友好ノ關係ヲ再設シ且之ヲ永久ニ保障セムト欲シ各々左ノ如ク其全權委員ヲ任命セリ

(兩國全權委員氏名省略)

右各全權ハ其全權委任狀ヲ交換シ之力良好安富ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 清國皇帝陛下ハ昨年六月中佛國及英國ノ全權公使カ天津諸條約ノ批准書ヲ交換スルカ爲北京ニ赴カムトシテ天津ニ到レル際天津河口ニ於テ清國陸軍官憲ノ執リタル行爲ヲ遺憾トス

第二條 佛蘭西國皇帝陛下ノ高級委員タル大使カ天津條約批准書交換ノ爲北京ニ到ルトキハ該首都帶在中其階級ニ相當スル名譽ヲ以テ待遇セラルヘク同使節ニ委任セラレタル高級使命ヲ障礙ナク完行シ得ルカ爲清國官憲ヘ可能ナル一切ノ便益ヲ供與スヘキモノトス

第三條 千八百五十八年六月二十七日天津ニ於テ署名セラレタル條約ハ前條定ムルトコロノ批准書交換ヲ了シタル後本條約ニ依リ修正セラレタルモノヲ除キ直ニ其全條項ニ亘リ忠實ニ實施セラルヘキモノトス

第四條 清國皇帝陛下カ佛國政府ニ對シ賠償金トシテ二百万兩ノ支拂ヲ爲スヘキコトヲ約定セル天津條約第四條ハ

之ヲ無效トシ本條ヲ以テ之ニ代ヘ該賠償金總額ヲ八百萬兩ト定ム

廣東ヨリ天津條約ノ定ムル二百萬兩ニ對シ既ニ内金トシテ支拂ハレタル金額ハ之ヲ本條定ムルトコロノ八百萬兩ニ對シ豫メ内金トシテ支拂ハレタルモノト看做ス

天津條約第四條ニ於テ二百萬兩ノ金額ニ關シテ定メラレタル支拂規定ハ之ヲ無效トス本條約定ムル處ノ八百萬兩ノ金額ニ對シ清國政府ノ支拂フヘキ殘餘金額ニ付テハ開港場ニ於ケル關稅純收入ノ五分ノ一ヲ三月毎ニ其支拂ニ充ツヘキモノトス第一期ハ本年十月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス該金額ハ佛國ニ對スル賠償金支拂ノ爲ニ特ニ之ヲ控除シ支拂期日ニ於テ佛國公使若ハ其代理人ニ對シ「西哥」ビアストル若ハ銀貨ヲ以テ手交スヘシ

但シ該金額中五十萬兩ハ豫メ天津ニ於テ來十一月二十日若ハ清國政府カ適當ナリト思料スルトキハ其レヨリモ早タ一時ニ支拂ハルヘキモノトス

佛國公使及清國官憲ノ任命スル混合委員會ハ賠償金全額支拂ノ實施、金額ノ實證、受領證ノ併與茲其支拂勘定ニ關シテ必要ナル一切ノ手續履行ニ付遵守スヘキ規則ヲ

ヲ以テ本條約署名ノ日以後外國貿易ニ對シテ開放セラル
ヘシ本條約ハ批准書ノ交換ヲ要セシテ兩國ノ義務ヲ發
生シ且天津條約中ニ挿入セラレタルト同一ノ效力及價値
ヲ有スヘキモノトス

天津ヲ占領セル佛國軍隊ハ本條約第四條ニ定ムル五十萬
兩ノ金額支拂後該都市ヲ撤退シ大沽及山東ノ北部海岸ニ
駐屯シ爾他ノ清帝國海岸ノ占領地撤退ニ關スルト同一ノ
條件ヲ以テ同地ヲ撤退スヘシ但シ佛國軍隊指揮官ハ適當
ナリト思料スルトキ冬期期間中其全軍隊ヲ天津ニ駐屯セ
シメ且同指揮官ニ於テ出發ヲ適當ナリト思料セサル限り

清國政府カ其負擔スヘキ賠償金全額ノ支拂ヲ了スル迄同
地ヲ撤退スルコトヲ要セサルモノトス

第八條 本條約署名セラレ天津條約ノ批准書交換ノ直後舟
山島ヲ占領スル佛國軍隊ハ同島ヲ撤退シ北京ノ前面ニ駐
屯スル佛國軍隊ハ天津、山東ノ北部海岸ニ在ル大沽若ハ
廣東ノ都市ヨリ撤退シ且佛國政府ニ於テ適當ナリト思料
スルトキハ賠償金全額八百萬兩ノ支拂ヲ完了スルニ至ル
迄之等ノ全地點若ハ一地點ニ軍隊ヲ駐屯セシムルコトア
得

第九條 兩締約國間ニ於テ天津條約ノ批准セラレタル後直
得

ニ清帝國內ノ一切ノ州ノ高級官吏ニ對シテ勅令ヲ發シ同
國官憲ヲシテ凡テ清國人ニシテ居住又ハ營利ノ爲ニ海外
諸國ニ赴カムトスルモノニ對シ其意志ニ依リ其一身及其
家族カ清帝國內ノ開港場ニ入港スヘキ佛國船舶ニ乘船ス
ルコトヲ許容セシムヘキコトヲ約定ス

又之等ノ移出民ノ利益ニ於テ其完全ナル行動ノ自由ヲ保

障シ且其利益ヲ防護スルカ爲相當清國官吏ハ當ニ自由意
志ニ依ル履庸契約ニ於ケル道德及安全ノ保障ヲ確保スヘ
キ諸規則ヲ作成スルカ爲在清國佛國公使ト協定ヲ達クヘ
キコトヲ約定ス

第十條 末條 兩締約國ハ錯誤ニ依リ天津佛清條約ニ於テ
五百噸以上ノ船舶ニ對シテ一噸ニ付五「マース」ト定メラ
レ千八百五十八年ニ英國及清國間竝北米合衆國及清國間
ニ署名セラレタル條約ニ於テ四「マース」ト定メラレタル
噸稅ニ付テハ佛國ニ對シ最惠國待遇ニ關スル明白ナル請
求權ヲ附與スル天津條約第二十七條末項ヲ援用スルコト
ナク該噸稅額カ一噸ニ付四「マース」ヲ超ユヘカラサルコ
トヲ約定ス

千八百六十年十月二十五日北京ニ於テ本講和條約四通ヲ作
成シ兩國全權之ニ署名シ自ラ調印ス

修好善隣ニ關スル假 協約

千八百八十四年五月十一日
天津ニ於テ調印

(兩國全權署名調印)

第一條 佛蘭西國ハ東京ニ接壤スル清國南部ノ國境ヲ尊重
シ如何ナル國ノ侵略ニ對シテモ如何ナル場合ニ於テモ之
ヲ保護スヘキコトヲ約定ス

第二條 清國ハ佛蘭西國カ供與スル善隣關係ノ正式ノ保障
ヲ得タル上南方國境ノ保全及安寧ニ關シテハ東京ニ駐屯
シ如何ナル國ノ侵略ニ對シテモ如何ナル場合ニ於テモ之
ヲ保護スヘキコトヲ約定ス

第三條 本條約ノ商議ニ於ケル清國ノ交譲的態度ヲ謝シ李
開下ノ愛國的ナル聰明ヲ尊重スルカ爲佛蘭西國ハ清國ニ
對シ損害賠償ノ要求ヲ放棄ス之ニ對シテ清國ハ東京ト接
境スル南部國境ノ全廣度ニ亘リ一方ニ於テハ佛蘭西國及
安南國間、他方ニ於テハ佛蘭西國及清國間ニ於ケル商品
取引ノ自由ヲ許容シ通商條約ヲ締結シ清國商業者ノ側ニ
リ利益アル條件ヲ以テ關稅ヲ規定スヘキコトヲ約定ス

第四條 佛蘭西共和國政府ハ安南國ト締結シ東京ニ固スル
既存諸條約ヲ廢止スル確定條約ノ作成ニ於テ清國ノ國威
ヲ傷タルカ如キ修辭ヲ使用セサルヘキコトヲ約定ス
メタル後左ノ諸條ヲ約定セリ

欽差全權大臣太子太傅一等肅毅伯 李鴻章

佛蘭西共和國政府
海軍二等艦長「ラルダ」艦司令官「レジオン・ドンタール」

勳章「エルネスト・フランソワ・フールニエ」

右各員ハ相互ニ其全權委任狀ヲ交換シ其良好妥當ナルヲ認
メタル後左ノ諸條ヲ約定セリ

委員ヲ任命スヘシ該委員ハ三月ノ期間内ニ於テ前各條定ムル所ノ基礎ニ依リ確定的ニ商議ヲ遂クルカ爲會同スヘキモノトス

外交上ノ慣行ニ從ヒ佛蘭西文ヲ以テ正文トス
千八百八十四年五月十一日即光緒十年四月十七日天津ニ於テ本書四通ヲ作成ス中二通ハ佛蘭西文、二通ハ支那文トシ各通ニ兩國全權委員署名ノ上親ラ調印シ各全權各文一通ヲ保管ス

(兩國全權署名調印)

修好通商平和條約

千八百八十五年六月九日天津ニ

於テ調印

千八百八十五年十一月二十八日

北京ニ於テ批准書交換

佛蘭西共和國大統領及清國皇帝陛下ハ兩國力同時ニ安南事件ニ干涉セルヨリ起リタル平和ヲ結了セムトスル等シキ希望ニ動カサレ且佛國及清國間ニ存セル昔日ノ和親通商關係

ヲ恢復改善セムコトヲ欲シ千八百八十四年五月十一日天津ニ於テ署名シ千八百八十五年四月十三日ノ勅令ヲ以テ批准セル假條約ヲ基礎トシ兩國民共通ノ利益ニ適應セル新條約ヲ締結スルコトニ決定セリ

之カ爲兩締約國ハ左ノ如ク其全權委員ヲ任命セリ
佛蘭西共和國大統領

在清國特命全權公使勵誠會員南極星大勳章等「イム、デュール、バトノートル」

清國皇帝陛下

欽差大學士太子太傅北洋通商大臣直隸總督伯爵四品李鴻章

副使欽差軍機大臣刑部尚書戶部國庫管理北京駐在總驍軍左翼世襲士官教練學校長邊疆左旗兵清人徵員指揮官協欽差禮部官鄧

右各全權ハ相互ニ全權委任狀ヲ示シ其良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸款ヲ締結セリ

第一條 佛蘭西國ハ清帝國ニ隣接スル安南國ノ諸州ニ於ケル秩序ヲ恢復維持スヘキコトヲ約ス之カ爲佛蘭西國ハ公共ノ安寧ヲ危タル掠奪隊及浮浪人ヲ分散放逐シ且再ヒ之ヲ組織スルコトヲ禁スルカ爲必要ナル處置ヲ爲スヘシ

但シ佛國軍隊ハ清國及東京間ノ國境ヲ凡テノ來襲ニ對シテ保全擔保スルモ如何ナル場合ニ於テモ決シテ之ヲ越ユルコト能ハサルモノトス

第三條 本條約署名以後六月ノ期間内ニ兩締約國ノ任命スル委員ハ清國及東京間ノ國境ヲ確認スルカ爲國境地點ニ赴クヘシ該委員ハ必要ナル場所ニ境界標ヲ明瞭ナラシムヘキ境界標ヲ定置スヘシ若シ之等ノ分界標ノ設置若ヘ現在ニ於ケル東京境界ノ詳細ナル更定ニ關シ該委員間ニ協定ヲ達ケサル場合ニハ兩國共通ノ利益上之ヲ兩國政府ニ報告スヘシ

清國ハ又東京ノ清國接壤諸州ニ逃亡セル團體ヲ分散放逐シ且佛國保護ノ下ニ置カルル人民中ニ叛亂ヲ起サムカ爲清國領域内ニ於テ編成セムトスル團體ヲ解散シ且清國ニ與ヘラレタル國境安全ノ保障ヲ考量シ東京ニ其軍隊ヲ派スルコトヲ避止スヘキモノトス

兩締約國ハ特別協約ニ依リ清國及安南國間ニ罪人ノ引渡フ行フヘキ條件ヲ定ムヘシ
清國人タル植民若ハ昔時ノ兵士ニシテ安南國ニ於テ農工商ニ從事シテ平和ナル生活ヲナシ其行爲ノ非難スヘカラサルモノハ其身體及財產ニ對シ佛國保護民ト同一ノ保障ヲ享有スヘシ

第二條 清國ハ佛國ノ企テタル平和ノ事業ヲ危クスヘキ何等ノ措置ヲモ爲ササルコトヲ決シ現在及將來ニ於テ佛國及安南國間ニ直接交渉シ若ハ交渉セムトスル條約、協約及協定ヲ尊重スヘキコトヲ約定ス

清國及安南國間ノ關係ニ關シテハ清帝國ノ威嚴ヲ毫モ侵害セス且本條約ニ毫モ違反セサルヘキモノナルコトヲ約定ス

第五條 輸入及輸出ノ通商ハ清國及東京間陸路境界ニ依リモノハ帝國官憲ノ請求ニ依リ佛國官憲ヨリ交付スル正規ノ旅券ヲ有セサルヘカラス

該地點ノ選擇並數ハ兩國間通商ノ方向並程度ニ從ヒ之ヲ定ムヘク尙清帝國內地ニ施行セラル諸規則ヲ斟酌スヘキモノトス如何ナル場合ニテモ之等地點ノ中二箇所ハ清國國境上ニ之ヲ指定スヘキモノトス一ハ老聞ノ上部ニ他ハ諒山ノ下部ナルコトヲ要ス佛國商人ハ外國通商ニ對スル開港場ニ於ケルト同一ノ條件及同一ノ便宜ヲ以テ該地點ニ居所ヲ定ムルコトヲ得清國皇帝陛下ノ政府ハ該地點ニ稅關ヲ設置シ共和國政府ハ該地點ニ領事ヲ駐在セシムルコトヲ得該領事ノ特權及職權ハ開港場ニ於ケル同級ノ官吏ト同一ナルモノトス

仙方ニ於テ清國皇帝陛下ヘ佛蘭西共和國政府トノ協定ニ依リ東京ノ主要都府ニ駐在スル領事ヲ任命スルコトヲ得廣東ノ清國諸省間ニ於テ陸路ニ依リ通商ヲ行フヘキ條件ヲ確定スヘシ該規定ハ兩締約國ノ任命スル委員本條約ノ署名後三月ノ期間内ニ之ヲ熟議決定スヘシ

第六條 本條約附屬ノ特別規則ニ依リ東京及雲南、廣西、

署名後三月ノ期間内ニ之ヲ熟議決定スヘシ

該通商ノ目的物タル商品ハ東京及雲南、廣西兩省ニ於ケ

ル出入ニ際シ外國通商ニ關スル現行稅率以下ノ租稅ヲ課

セラルヘキモノトス但シ低減稅率ハ東京及廣東間ニ於テ

陸境ニ依リ運送セラル商品ニ適用セス又條約ニ依リテ

既ニ開放セル港ニ於テハ之ヲ施行スルノ限り在ラス各種ノ武器、機関、糧食、彈藥ノ取引ハ各締約國版圖内ニ於テ發布セル法律及規定ノ定ムル所ニ依ル阿片ノ輸出及輸入ニ關シテハ前記通商規則中ニ定メラルヘキ特別規定ニ依リテ之ヲ定ム

コトヲ許サス

清國及安南國間ノ海上通商ニ關シテハ等シタ特別規則ノ定ムル所ニ依ル當分ノ間現行慣習ハ少シモ之ヲ變改スル

樊殿スヘシ

他方ニ於テ清國カ鐵道敷設ヲ決定スルトキハ之ヲ佛國ノ工作ニ委スヘキコトヲ約定ス而シテ佛蘭西共和國政府ハ佛國ニ於テ必要ナル人員ヲ求ムルカ爲清國ニ對シ一切ノ便宜ヲ供與スヘシ但シ本條項ハ之ヲ佛國ノ爲ニ拂他的ノ特權ヲ構成スルモノト看做スコトヲ得ス

第八條 本條約ノ通商條項及附帶規則ハ本條約批准書交換ノ日以後滿十年ノ後之ヲ改正スルコトヲ得然レトモ期限六月以前ニ兩締約國カ改正ヲ爲サムトスル希望ヲ發表セ

サル場合ニハ通商條項ハ更ニ十年間其效力ヲ有シ以下之ニ準スヘキモノトス

通 商 條 約

千八百八十六年四月二十五日

天津ニ於テ調印

千八百九十六年八月七日北京

ニ於テ批准書交換

第九條 本條約署名後直ニ佛國軍隊ハ基隆ヲ撤退シ且公海ニ於ケル検査等ヲ止ムヘキ命令ヲ受クヘシ本條約署名後一月ノ期間内ニ佛國軍隊ハ臺灣島及澎湖列島ヨリ全ク撤退スヘシ

第十條 佛國及清國間ニ於ケル舊條約協定及協約ノ條款ニシテ本條約ニ依リ變更セラレサルモノハ爾後充分ノ效力ヲ有スヘシ

本條約ハ清國皇帝陛下ニ依リテ速ニ批准セラルヘシ而シテ佛蘭西共和國大統領ニ依リテ批准セラレタル後批准書ノ交換ハ出來得ル限り最短期間内ニ北京ニ於テ行ハルヘキモノトス

千八百八十五年六月九日即光緒十一年四月二十七日天津ニ於テ本書四通ヲ作ル

バトノートル（印）

李鴻章（印）

（印）

鄧錦（印）

（印）

全權公使、外務省政務次長「レヂオン、ドゥ、メール」勳章、伊太利國王冠章、駐清特派使節「フランソア、ジヨルヂュ、コゴルダン」

隨員佛蘭西國領事、瑞典國「グスター・ワザ」勳章、白耳義國「レオボルド」勳章、フランス、エドモン、ブリューウエール

太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣會辦海軍事務直隸
總督一等肅毅伯爵 李鴻章

右各全權ハ相互ニ其全權委任狀ヲ示シ其良好妥當ナルヲ認
メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 兩締約國ハ一千八百八十五年六月九日ノ條約第五條
ノ規定ニ依リ現在諒山以北及老闊上流ノ二地方ヲ開市場
トスルノ必要アルコトヲ議定ス

清國ハ此兩地ニ稅關ヲ設ケ佛蘭西國ハ此兩地ニ領事ヲ置
ク該佛蘭西國領事ハ清國ニ於ケル最惠國ノ領事ノ享有ス
ル一切ノ權利及特權ヲ享有スヘキモノトス

兩國國境劃定委員會ノ事業カ本條約調印ノ時マテニ完結
セサルトキハ諒山以北ニ於テ通商ノ爲ニ開放セラルヘキ
地點ハ本年内ニ清國政府及在北京佛蘭西國公使間ノ協定
ヲ經テ之ヲ選定スヘキモノトス老闊上流ニ於テ通商ノ爲
開放セラルヘキ地點モ亦兩國國境劃定ノ後協定ニ依リテ
之ヲ定ムヘシ

第二條 帝國政府ハ河内及海防ニ對シテハ佛蘭西共和國政
府ト商議ヲ經タル上領事ヲ駐在セシムルコトヲ得ルモノ
トス之等領事ハ佛國ニ於ケル最惠國ノ領事ト同様ノ待遇
ヲ受ケ且之ト同様ノ權利及特權ヲ享有シ其一切ノ國家的
開放セラルヘキ地點モ亦兩國國境劃定ノ後協定ニ依リテ

關係ハ保護國ヲ管轄スル佛蘭西國官憲ト之ヲ承辦スヘシ
第三條 兩締約國ハ其領事ヲ駐在セシムル地方ニ於テ夫々
其地方官憲ヲシテ該領事カ公館ニ駐在スルコトニ關シ便
宜ヲ圖ラシムヘキコトヲ約定ス
佛蘭西國國民ハ一千八百五十八年六月二十七日ノ條約第七
條、第十條、第十一條、第十二條及其他ノ條款ニ定ムル
條件ニ依リ清國國境ニ於ケル開市場地帶内ニ居住スルコ
トヲ得安南國人モ亦此等ノ地域内ニ於テ同様ノ特典アル
待遇ヲ享受スヘキモノトス

第四條 清國國民ハ安南國ノ全地域ニ於テ土地ヲ所有シ
屋ヲ建造シ商館ヲ開設シ且店舗ヲ經營スルノ權利ヲ有ス
清國國民、其家族及其財產ハ歐羅巴最惠國國民ト同様ノ
保護保障ヲ享受シ且之ト同様遇ソ受ケサルヘキモノトス
清國官商ノ公私ノ書信及電報ハ佛蘭西國郵電政廳ヨリ正
確ニ遞送セラルヘキモノトス

佛蘭西國國民ハ清國ヨリ之ト同様ノ特典アル待遇ヲ受ケ
ヘキモノトス

第五條 佛蘭西國國民、佛蘭西國保護民若ハ東京ニ在住ス
ル外國人ハ旅券を携帶スルトキニ限リ國境ヲ越エテ清國
ニ入ルコトヲ得該旅券ハ旅行者カ相當ノモノナルトキニ

限り佛蘭西國官憲ノ要求ニ依リ清國國境官憲ヨリ下付セ
ラレ歸國ノ際ニハ返還セラレ且失效スヘキモノトス旅行
者カ土民若ハ賑人ノ占據スル地域ヲ通過スヘキトキハ旅
券面ニ該地域ニ之ヲ保護スヘキ清國官憲ナキ旨ヲ記載ス
ルコトヲ要ス

清國國民カ陸路ニ依リ清國ヨリ東京ニ赴カムトスルトキ
ハ前項ト同シク旅行者カ相當ノモノナルトキニ限リ清國
官憲ノ要求ニ依リ佛蘭西國官憲ノ下付スル旅券ヲ携帶ス
ルコトヲ要ス

兩國官憲ヨリ下付スル旅券ハ單ニ旅行ノ爲ニノミ用ヒラ
レ商品輸送ニ關シ免稅證ト看做サルヘキニアラス
清國地域内ニ在ル清國官憲及東京ニ在ル佛蘭西國官憲ハ
旅券ナクシテ國境ヲ越ユルモノヲ逮捕シ裁判及必要ナル
處罰ノ爲夫々相當官憲ニ引渡スノ權利ヲ有ス

安南國ニ在スル清國人ハ單ニ帝國官憲ヨリ國境通過ヲ
許容スル通行券ヲ得テ東京ヨリ清國ニ入ルコトヲ得
國境開市場地帶内ニ在スル佛蘭西國國民及外國人ハ該
地帶ノ周圍五十里ノ地域内ニ於テ旅券ナタシテ自由ニ移
動スルコトヲ得

第六條 清國國境ニ於ケル開市場地帶内ニ於テ佛蘭西國商

通過許可證ヲ請求セサリシ商品ハ內國生産物ニ對シ國內
ニ於テ賦課スル一切ノ關稅及釐金稅ヲ課セラルヘキモノ

トス

第七條 清國市場ニ於テ佛蘭西國國民若ハ佛蘭西國保護民ノ購買セル商品ハ輸入商品通過ニ關スル千八百五十八年六月二十七日ノ條約附屬規則第七ニ規定セラルル條件ニ依リ東京ニ輸出スルカ爲國境開市場迄之ヲ輸送スルコトヲ得

清國商品カ輸出ノ爲國境開市場ニ到着セルトキハ該商品ノ性質、分量並之ニ隨行スルモノノ氏名ニ關シ稅關ニ對シ届出タ爲スヘシ稅關ハ檢證ヲ爲スヘシ通過許可證ヲ有スル商人カ國內ニ於テ購入スル商品ニシテ釐金稅及關稅ヲ支拂ハサルモノニ付キテハ先ツ清國海關稅一般規則ニ定ムル通過稅ヲ支拂フヘキモノトス次ニ一般稅率ヨリ三分ノ一ヲ減シタル輸出稅ヲ支拂フヘキモノトス稅率表ニ記載セラレサル商品ニ關シテハ百分ノ五ノ從價稅ヲ支拂フヘシ之等ノ稅金ヲ支拂ヒタル後商品ハ自由ニ之ヲ国外ニ出シ國境ヲ超エテ輸送スルコトヲ得ルモノトス

國內ニ於テ商品ヲ購入シ通過許可證ヲ有セサル商人ハ收稅局通過ニ際シ關稅及釐金稅ヲ支拂フヘシ收稅局ハ領收證ヲ下付スヘシ該商人カ稅關ニ到リタルトキハ該領收證ノ點檢ヲ受ケテ通過稅ノ支拂ヲ免除セラルモノトス

佛蘭西國商人及佛蘭西國保護民ニシテ雲南省及廣西省ノ國境稅關ニ依リ商品ノ輸入及輸出ヲナスモノ及清國商人ニシテ東京ト商品ノ輸入及輸出ヲ爲スモノハ其馬車及駕獸ニ關シ一切ノ通行稅ヲ支拂ハサルモノトス國境ヲ貫流スル可航水路上ニ於ケル兩締約國船舶ハ兩國關稅規則ニ從ヒ噸稅ヲ課セラルヘシ

本條及前條ノ規定ニ關シテ兩締約國ハ若シ清國及第三國間ニ清國市西國境ニ於ケル陸路通商ニ關シ共同ノ協定ニ依リ新關稅率ノ設定セラレタルトキハ佛蘭西國モ亦其適用ヲ受クヘキコトヲ約定ス

第八條 版賣セラレサル外國商品ニシテ三十六月以内ニ清國國境稅關ニ就キ輸入稅ヲ支拂ヒタル後爾他ノ清國國境稅關ニ向ヒ再輸送セラルヘキモノハ其輸送中最初ノ稅關ニ於テ検査ヲ受ケ其包裝完全ニシテ何等抽出若ヘ變更ナカリシトキハ最初支拂ヒタル稅金額ノ免稅證ヲ下付セラルヘキモノトス該免稅證所持人ハ爾後新ニ支拂フヘキ稅金ノ受領證ニ對シ之ヲ國境稅關ニ引渡スコトヲ得ヘシ稅關ハ亦同一稅關ニ對スル爾後一切ノ支拂ニ對シ三年間有效ナル證券ヲ引渡スコトヲ得現金ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ返還スルコトナシ

該商品カ清國ノ開港場ニ向ツテ再輸出セラルル場合ニハ

カラス該商品ハ國內ニ入ルニ際シテ通過稅ヲ免除セラルヘキモノトス

該開港場ニ於テ清國海關稅一般規則ニ依リ輸入稅ヲ課セラルヘシ此場合ニハ國境稅關ノ免稅證若ハ證券ヲ使用シ得ルノ限ニアラス又稅金領收證ニ對シ第一回納稅ニ際シテ國境稅關ノ下付セル受領證ヲ提示スルコトヲ得ス

通過稅ニ關シテハ稅關ニ於テ一度支拂ハタル後ハ開港

場ニ適用セラルヘキ規則ニ依リ證券若ハ免稅證ノ下付ヲ許サス

第九條 清國商品ニシテ國境稅關ノ一ニ就キ通過稅及輸出稅ヲ納入シタル後販賣ノ爲爾他ノ國境稅關ニ向ツテ再輸送セラルヘキモノハ第二ノ稅關ニ於テ再輸入稅トシテ既納輸出稅ノ半額ヲ課セラルニ過キス該商品ハ開港場ニ於テ設ケラルル規則ニ依リ外國商人之ヲ國內ニ於テ輸送スルコトヲ得ス該清國商品カ一清國開港場ニ輸送セラルトキハ外國商品ト同様ニ取扱ハルヘタ且海關一般稅率ニ依リ新ニ輸入稅全額ヲ納付セサルヘカラス

該商品ヲ入國スルカ爲ニハ通過稅ノ納付ヲ免除セラル清國海港ヨリ安南國ノ港ニ向ケ輸出セラル清國商品ニシテ陸境ニ輸送セラレ次テ清國版圖内ニ入ルヘキモノハ

外國商品ト同様ニ取扱ヘレ且輸入地方稅ヲ納付セサルヘ

ニ於テ孰ルヘキ處置ヲ検査スル一切ノ自由ヲ有ス

佛蘭西國、安南國若ハ清國ノ船舶ニ搭載セラレ可航水路ヲ上下スル商品ヘ欺罔ノ嫌疑若ハ積荷ノ狀況ト積荷届出トノ間ニ相違アルニ非レハ國境ニ於テ必シモ之ヲ陸揚スルヲ要セス税關ハ檢査ヲ爲スカ爲該船舶ニ對シテ税關吏員ヲ派遣スルコトヲ得ルニ過キス

第十一條 陸境ニ依リ東京ニ輸入セラル清國原產ノ生産物ハ佛安稅率ニ從ヒ輸入稅ヲ支拂ハサルヘカラス東京ヲ出ツルニ際シテハ如何ナル輸出稅ヲモ支拂フコトナシ佛蘭西國カ東京ニ於テ定ムル新稅半ハ之ヲ帝國政府ニ通告スルコトヲ要ス

東京ニ於テ内國產ノ物品ニ對シ消費稅、間接稅若ハ保障稅ヲ定ムルトキハ清國ノ同種生産物モ亦其輸入ニ際シ之ニ相當スル稅金ヲ支拂フヘキモノトス

第十二條 清國商品ニシテ清國ニ輸出セラルカ爲東京ヲ通シテ兩國境稅關ノ一ニ依リ他方ノ國境稅關若ハ安南國ノ港ニ向ケ輸送セラルモノハ價額百分ノ二ヲ超過セサル特別通過稅ヲ課セラルヘキモノトス該商品ハ清國ノ版圖ヲ出ツルニ際シ佛蘭西國稅關官憲ノ認證ヲ經ルコトヲ要シ稅關官憲ハ東京輸送中並積換港ニ於テ佛蘭西國官憲

東京ヲ通過スル清國生產物ニ適用セラルヘキ特別待遇ヲ享受スヘキ商品ノ品質、數量、眞實ノ發送地若ヘ眞實ノ仕向地ニ關シ明白ナル方法ニ依リ佛蘭西國政廳ヲ欺罔スル一切ノ虛偽ノ届出若ハ取扱アルトキハ該商品ヲ沒收スヘキモノトス凡テ沒收ノ宣告アリタルトキ當該商人ハ清國官憲トノ協議ニ依リ正當ニ定メラルヘキ商品價格ニ相當スル金額ヲ納付シテ該商品ニ關シ其責ヲ免ルルコトヲ得

東京ヲ通シテ清國國境稅關ニ達スルカ爲安南國ノ港ニ向ケ清國ノ港ヨリ發送セラルヘキ清國商品ニ對シテハ安南國ニ於テ同一ノ規則及同一ノ通過稅ヲ適用スヘキモノトス

第十三條 左記物品ハ其出入ニ際シ清國稅關ノ檢證ヲ經ルコトヲ要ス該物品カ眞ニ外國ヨリ來リ外國人ノ自用ニ充テラレ且其數量ニシテ適當ナルトキハ之ニ對シ國境自由通過ヲ許容スル免稅證ヲ下付スヘキモノトス

金銀長塊

外國硬貨幣

粉、玉蜀黍粉、沙葛澱粉

乾麵炮

肉類及野菜罐詰

乾酪、牛酪、糖菓

外國衣服

寶石

銀器

香料

各種石鹼

木炭

西洋蠟燭及外國蠟燭

煙草

葡萄酒、麥酒、酒精飲料

第十四條 兩締約國ハ發送地ノ如何ヲ問ハス一方東京及地方、雲南、廣西及廣東間ノ陸境ニ依ル阿片ノ賣買及輸送ヲ禁止スヘキコトヲ約定ス

第十五條 米及穀物ノ輸出ハ清國ニ於テハ之ヲ禁止ス右物品ノ輸入ハ清國ニ於テハ之ヲ免稅ス左ノ物品ノ輸入ハ清國ニ於テハ之ヲ禁止ス

火薬

彈丸

小銃及大砲

大砲彈藥

硫黃

鉛亞鈴

鹽

不道德ナル刊行物

違反アルトキハ該商品ハ之ヲ全部沒收ス清國官憲力武器若ハ火薬ヲ購買セシメ又ハ商人カ武器若ハ火薬購買ノ特許ヲ受ケタルトキハ清國關稅ノ特別監督ノ下ニ其輸入ヲ許可セラルヘシ又清國官憲ハ佛國領事トノ協議ヲ經タル處分ニ委付スルカ爲之ヲ逮捕シ該官憲ニ引渡サルヘキモノトス

後東京ヲ通シテ清國ニ輸送セシメムトスル武器及火薬ニ對シ佛安稅關ニ於ケル一切ノ稅ノ免除ヲ受ケルコトヲ得東京ニ於ケル武器、火薬及不道德ナル刊行物ノ輸入モ亦之ヲ禁止ス

第十六條 安南ニ居住スル清國人ハ刑事事件、稅務事件其ノ條件ヲ適用セラルヘキモノトス國境開市場ニ於ケル清國臣民及佛蘭西國人若ハ安南國人間ニ起レル訴訟ハ混合裁判廷ニ於テ清國及佛蘭西國人若ハ佛蘭西國保護民ノ犯シタル重罪若ハ輕罪ニ關シテハ一千八百五十八年六月二十七日ノ條約第二十八條、第二十九條ノ規定ニ據ルヘシ

第十七條 清國人タル逃亡人若ハ清國法ニ依ル重罪犯人カ清國國境開市場地帶内ニ於テ佛蘭西國人若ハ佛蘭西國保護民ニ屬スル家屋若ハ船舶内ニ潛伏スルトキヘ地方官憲之ヲ領事ニ通告シ領事ハ犯罪人ニ關スル犯跡ノ證據ニ基キ直ニ犯罪人ヲ法律ニ依ル正規ノ處分ニ委付スルカ爲必要ナル處置ヲ執ルヘシ

清國人タル犯罪人又ハ重罪若ハ輕罪ノ報告ニシテ安南國ニ於テ潛匿ノ場所ヲ求ムルモノハ清國官憲ノ請求ニ依リ

追加通商條約

千八百八十六年四月二十五日即光緒十二年三月二十二日天津ニ於テ本書四通ヲ作ル

チエー、コゴルダン（印）
エー、ブリューウエール（印）
李鴻章（印）

其犯罪ノ證據ニ基キ犯罪人引渡ニ關シ最モ寛大ナル待遇ヲ受クヘキ國ノ臣民カ佛蘭西國ヨリ引渡サルヘキ一切ノ場合ニ於テ之ヲ搜索シ、逮捕シ及引渡スヘキモノトス
佛蘭西國人及佛蘭西國保護民タル犯罪人又ハ重罪若ハ輕罪ノ被告ニシテ清國ニ於テ潛匿ノ場所ヲ求ムルモノハ佛國官憲ノ請求ニヨリ犯罪ノ證據ニ基キ法律ニ依ル正規ノ處分ニ委付スルカ爲之ヲ逮捕シ該官憲ニ引渡サルヘキモノトス

兩締約國ハ注意ヲ以テ一切ノ隱匿ヲ避止スルコトヲ要ス
第十八條 前條ニ定メラレサル一切ノ困難ニ關シテハ現行諸條約ニ依リ現在都府及開港場ニ適用セラルル稅關規則ニ依リテ之ヲ決スヘキモノトス

該規則ノ不充分ナル場合ニ於テハ兩國吏員ハ之ヲ相互ニ兩國政府ニ照會スルコトヲ要ス
本條約ハ一千八百八十五年六月九日ノ條約第八條ノ規定ニ依リ批准書交換十年後ニ之ヲ改正スルコトヲ得

第十九條 本通商條約ハ兩締約國政府ノ批准ヲ經タル後佛蘭西國、清國及安南國ニ於テ公布セラルヘキモノトス批准書交換ハ本條約署名ノ日以後一年ノ期間以内若ハ出來得ル限り速ニ北京ニ於テ之ヲ行フヘシ

之カ爲兩締約國ハ左ノ如ク其全權委員ヲ任命シタリ
佛蘭西共和國大統領

代議院議員前內務大臣前宗教大臣政府委員
在清國佛蘭西共和國特派使節

清國皇帝陛下

エルネスト、コンスタン

二等親王管理總理衙門

慶親王

副使 總理衙門大臣工部左侍郎

孫

右各全權ハ相互ニ其全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 千八百八十六年四月二十五日天津ニ於テ署名シタル條約ハ批准書交換後直ニ其凡テノ條款ヲ忠實ニ實施スヘシ

但シ本條約ニ依リ變更セラルヘキモノハ固ヨリ此限ニアラス

第二條 千八百八十六年四月二十五日ノ條約第一條ノ實施ニ當リ兩締約國ハ廣西省龍州及雲南省蒙自ノ兩都府カ佛安通商ニ對シ開放セラルヘキコトヲ約定ス又老開水路上蒙自附近ニ在ル蠻耗モ亦龍州及蒙自ト等シク開市場タルヘク且佛蘭西共和國政府カ蒙自ニ領事官憲ヲ駐在セシムルノ權利ヲ有スヘキコトヲ約定ス

第三條 清國及東京間ノ通商ヲ最モ迅速ニ發達セシムルカ

爲千八百八十六年四月二十五日ノ條約第六條及第七條ニ定ムル輸入、輸出稅ヲ一時左ノ如ク變更ス
開市場ニ依リ清國ニ輸入セラル外國商品ハ海關一般稅率ヨリ其十分ノ四ヲ低減シタル輸出稅ヲ課セラルヘキモノトス
第四條 清國原產ノ生產品ニシテ千八百八十六年四月二十五日ノ條約第十一條第一項ニ依リ輸入稅ヲ納入シ且東京ヲ通シテ安南國ノ港ニ向ツテ輸送セラルモノカ清國以外ノ國ニ仕向ケラルトキハ該港ヲ出ツルニ際シ佛安稅關稅率ノ定ムル輸出稅ヲ課セラルヘキモノトス

第五條 清國政府ハ「ビタル」若ハ百清國斤ニ付二十兩ノ輸出稅ヲ徵收シテ東京原產阿片ノ陸境ニ依ル輸出ヲ許可ス佛國人若ハ佛國保護民ハ龍州、蒙自及蠻耗ニ於ケル外阿片ヲ購買スルコトヲ得ス内國商人ノ支拂フヘキ釐金稅及入市稅ハ「ビタル」ニ付二十兩ヲ超ユルコトヲ得サルモノトス

清國商人ニシテ國內ヨリ阿片ヲ持來ルモノハ商品ト同時ニ購買者ニ對シテ釐金稅全額ノ納入ヲ證明スヘキ受領證

ヲ手交スヘシ購買者ハ輸出稅ノ納入ヲ爲スヘシ

該阿片カ陸境若ハ開港場ニ依リ再ヒ清國ニ入ルトキハ之

ヲ清國原產再輸入生產品ト同視スルコトヲ得ス

第六條 佛國及安南國船舶ハ軍艦及軍隊、武器若ハ火薬ノ輸送ニ用ヒラルモノヲ除キ諒山ヨリ「カオ、バング」ニ且諒山及龍州間竝龍州及「カオ、バング」間ヲ回航スルコトヲ得ヘキモノトス

此等船舶ハ各航行毎ニ一噸ニ付百分ノ五兩ノ噸稅ヲ課セラル但シ其載貨ハ如何ナル稅ヲモ課セラルコトナキモノトス

清國仕向ノ商品ハ本條第一項ニ定ムル河川竝陸路及就中諒山ヨリ龍州ニ至ル官道ニヨリ之ヲ輸送スルコトヲ得但シ清國政府カ國境ニ稅關ヲ設置スルニ至ルマテ陸路ニヨリテ輸送セラル商品ハ龍州ニ於テ納稅シタル後ニ非サレハ之ヲ販賣スルコトヲ得ス

第七條 佛國カ將來清國及清帝國南部竝南西部ニ在ル諸國間ノ政治通商關係ヲ定ムルコトヲ目的トスル條約及協約ニ依リ最惠國ニ許與セラルヘキ一切ノ特權免除（其性質ノ如何ヲ問ハス）竝通商上ノ利益ヲ當然ニ且事前協商ノ要ナク享受スヘキコトヲ約定ス

千八百八十七年六月二十六日ノ追加通商條約
ノ補足條約

コソンスターン（印）
慶親王（印）

千八百九十六年八月七日北

京ニ於テ批准書交換

管理總理各國事務衙門 慶親王殿下

總理各國事務衙門大臣軍機大臣 徐

佛蘭西共和國大統領及清國皇帝陛下ハ渭江ニ至ル迄劃定セラレタル清國及安南國間ノ國境ニ於テ兩國間ノ通商ノ發達ヲ促進シ且之ヲ擴張セムコトヲ希望シ千八百八十六年四月二十五日天津ニ於テ署名セラレタル通商條約及千八百八十七年六月二十六日北京ニ於テ署名セラレタル追加通商條約ノ良好ナル實施ヲ確保セムコトヲ希望シ數箇ノ新規定ヲ包含シ且前條約ニ定ムルトコロノ數箇ノ規定ヲ改正スル補足條約ヲ締結スルコトニ決定セリ

之カ爲兩締約國ハ各其全權委員ヲ任命セリ即チ

佛蘭西共和國大統領

清國駐劄佛蘭西國特命全權公使「オフィシェ、ドウ、ラ、レジオン、ドナル」『グラン、クロア、ドウ、ロルド、ドウ、ランデバンダンス、デュ、モンテネグロ』『グラン、ドフィシェ、ド、ロルド、ロワイアル、ドウ、シャルル、トゥロア、デスバニユ』『グランドフィシェ、ドウ、ロルド、ロワイアル、ドウ、ラ、クーロンヌ、ディタリ』「オーグスト、ジエラール」

清國皇帝陛下

右各全權委員ハ其全權委任狀ヲ示シ互ニ其良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 國境警察ヲ確保スル爲ニ佛蘭西共和國政府ハ廣東省國境ニ於ケル芒街ト相對スル東興街ニ領事階級ノ役員ヲ置クノ権利ヲ有スヘキコトヲ約定ス

清國及安南國間境界ノ共同警察ヲ實施スヘキ條件ハ佛蘭西共約國ハ佛國領安南トノ通商ノ爲ニ廣西省ニ於ケル龍州及雲南省ニ於ケル蒙自ヲ開クコトヲ約定ス尙通商ニ對シテ開カルル一地點ハ保勝ヨリ蒙自ニ至ル水路ニ在リテハ盤耗ニ非スシテ河口ナルコト及佛蘭西共和國政府ハ河口ニ蒙銀駐在ノ領事官屬員一名ヲ置クノ権利ヲ有スヘク同時ニ清國政府ハ該地ニ稅關吏一名ヲ置クヘキコトヲ約定ス

第二條 千八百八十七年六月二十六日北京ニ於テ署名セラレタル追加通商條約第二條ハ次ノ如ク之ヲ改正ス

「兩締約國ハ佛國領安南トノ通商ノ爲ニ廣西省ニ於ケル

ノ開港場ニ於ケルカ如ク同地ニ領事一名ヲ置クノ權利ヲ有シ同時ニ清國政府ハ稅關吏一名ヲ該地點ニ置クヘキコトヲ約定ス

地方官壹ハ佛國領事ノ官舍設置ヲ追拂セシムルコトニ努

力スヘシ

佛蘭西國人及佛蘭西國保護民ハ千八百八十六年六月二十七日ノ條約第七條、第十一條、第十二條及其他ノ諸規定竝千八百八十六年四月二十五日ノ條約第三條ニ定ムル條件ニ依リ思茅ニ住居スルコトヲ得ヘシ清國ニ仕向ケラル貨物ハ諸河川殊ニ羅校河及渭江ニ由ルコトヲ得且陸路殊ニ猛烈又ハ倚邦ニ通スル清國官道ニ依リテ思茅及普洱ニ之ヲ運搬スルコトヲ得其商品ニ關スル稅金ハ思茅ニ於テ之ヲ支拂フヘシ

第四條 千八百八十六年四月二十五日ノ通商條約第九條ハ次ノ如ク之ヲ改正ス

「一、清國ノ貨物ニシテ國境貿易ノ爲ニ開カレタル龍州、蒙自、思茅、河口ノ四市中ノ何レカ一ヨリ他ヘ通過スルモノハ安南國ヲ經由スルニ當リ十分ノ四ヲ減シタル輸出稅ヲ支拂フヘシ該稅金支拂特別證明書ニシテ該貨物ニ添附スヘキモノヲ交付ス該貨物ニシテ他ノ市ニ送

千八百八十七年六月二十六日追加通商條約ノ補足條約

千八百八十七年六月二十六日ノ追加通商條約ノ補足條約

五五八

第五條 清國ハ雲南省、廣西省及廣東省ニ於ケル鎮山經營ニ關シテ先ツ佛國ノ工業家及技師ニ對シテ之ヲ申入ルヘク其經營ハ清國本國工業ニ關シテ帝國政府ノ制定シタル規則ニ從フヘキモノトス

鐵道ハ其既存ノモノタルト安南國ニ於テ計畫中ノモノタルトヲ間ハス兩國ノ了解ノ後確定スヘキ條件ヲ以テ清國領土ニ到ル迄延長スヘキコトヲ協定ス

第六條 千八百八十八年十二月一日芝罘ニ於テ署名セラレタル佛蘭西國及清國間ノ電信條約第二條ハ次ノ如ク之ヲ補足ス

「ニ、思茅第二廳及安南國間ニ於テ清國ニ在リテハ思茅局、安南國ニ在リテハ孟阿營局即チ下猛岩局（策洲ヨリ兩國邦ニ至ル半途ニ在リ）ノ兩局間ニ接續線ヲ設置スヘシ

電報料金表ハ芝罘電信條約第六條ニ從ヒテ之ヲ定ムヘキモノトス」

第七條 本條約ニ合マール通商規定ハ特殊ノ性質ノモノニシテ而モ互讓ノ結果龍州、河口、蒙自、思茅等ト安南國トノ間ノ關係ノ必要上決定セラレタルモノナルニ因リ其結果タル利益ハ兩締約國ノ人民及其保護民ニ依リテ以上

二決定セラレタル國境ノ地點及河川及陸路ニ於テノミ主ニ關シテ先ツ佛國ノ工業家及技師ニ對シテ之ヲ申入ルヘク其經營ハ清國本國工業ニ關シテ帝國政府ノ制定シタル規則ニ從フヘキモノトス

第八條 右諸規定ハ千八百八十七年六月二十六日ノ追加條約ノ本文ニ挿入セラレタルト同様ニ實施セラルヘキモノトス

第九條 本條約ニ依リテ改正セラレサル佛國及清國間ノ諸條約及諸取極ノ規定ハ引續キ其效力ヲ有ス本補足條約ハ今後清國皇帝陛下ニ依リテ批准セラルヘク又佛蘭西共和國大統領ニ依リテ批准セラレタル後其批准書交換ハ最短期間内ニ北京ニ於テ之ヲ行フヘシ

千八百九十五年六月二十日即光緒二十一年五月二十八日北京ニ於テ本書四通ヲ作ル

アーチェラール（印）
慶親王（印）
徐慶（印）
王正廷（印）

千九百二十八年十二月二十二日
南京ニ於テ調印

關稅條約

千九百二十八年十二月二十二日

南京ニ於テ調印

佛蘭西共和國政府及支那共和國政府ハ幸ニ兩國間ニ存在スル友好關係ヲ更ニ鞏固ニセントノ希望ニ促サレ且其ノ通商關係ヲ發達セシメンカ爲ニ條約ヲ締結スルニ決シ之カ爲左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

佛蘭西共和國大統領
支那國駐劄佛蘭西共和國特命全權公使「コンマンドール、ド・ラ・レジョン、ドノール」伯爵「デー、ヅ、マルテル」
支那共和國國民政部主席

支那共和國國民政府外交部長 王 正 廷

因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 佛蘭西國及支那國間ニ從來締結セラレ且現ニ效力ヲ有スル諸條約ニ掲ケラレタル一切ノ規定ニシテ支那國ニ於ケル商品ノ輸入及輸出ニ對スル稅、戻稅、通過稅及噸稅ノ稅率ニ關スルモノハ之ヲ廢止シ其ノ效力ヲ喪失セ

第二條 何レノ締約國ノ國民モ他方締約國ノ領域、屬地、植民地及保護領内ニ於テ其ノ輸入及輸出ニ際シ如何ナル口實ヲ以テスルモ內國民又ハ別國ノ國民ノ納付スル所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ何等ノ關稅、課金又ハ內國租稅ヲモ徵收セラルコトナカルヘシ

第三條 本條約ハ佛蘭西語及支那語ヲ以テ作成シ兩文ハ憲合ニハ佛文ノ本文ヲ以テ標準トス
本條約ハ成ルヘク速ニ批准セラルヘタ批准書ハ巴里ニ於テ交換セラルヘシ本條約ハ兩國政府力互ニ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約二通ニ署名調印セリ
千九百二十八年十二月二十二日即支那共和國十七年十二月二十日南京ニ於テ作ル

(署名) 純綿縮紗
純綿織物
純綿節紐

以書翰啓上致候陳者本日締結セラレタル條約第一條ニ關シ
本使ハ次項ニ掲タル協定ノ締結迄別表ニ舉示セラレタル支
那國商品ニ對シテハ佛蘭西國最低稅率カ引續キ適用セラル
ヘキ旨ヲ閣下ニ對シテ確認スルノ光榮ヲ有シ候

支那國政府カ佛蘭西國最低稅率ノ利益ヲ獲得セント希望ス
ル其ノ他ノ物品ニ付テハ佛蘭西國政府ハ其ノ關稅法上ノ理

由ニ依リ其ノ最低稅率ヲ一括シテ許與スルコト不可能ナル
ヲ以テ互惠協定稅率ヲ制定スル特別協定ヲ商議スルヲ適當

ト相認メ候
本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月二十二日南京ニ於テ

佛蘭西國公使署名

外交部長 王 正 廷閣下
佛蘭西國へ輸入セラルニ當リ最低稅率ヲ許與セラル支
那國商品表

純綿織物
純綿輕羅

内豆蔻ノ實(英入又ハ英ナシ)
唐 辛 子
肉 桂
丁子ノ蕾
茶

以書翰啓上致候陳者國民政府ト佛蘭西國政府トノ間ニ締結
セラレタル條約第一條ノ適用ニ關シ本日附貴翰ヲ以テ御申
越ノ趣意承致候

本部長ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具
本部長ハ茲ニ閣下ニ對シテ御通知致候

千九百二十八年十二月二十二日南京ニ於テ

外交部長署名
支那國駐劄佛蘭西共和國特命全權公使

伯爵「デー、ブ、マルテル」閣下

以書翰啓上致候陳者等ニ其ノ目的ニ到達シタル交渉ノ進行
中閣下ト本使ハ兩國間ニ懸案トナレル諸問題ヲ均シク友好
ノ精神ヲ以テ研究致候而テ本使ハ閣下及本使間ノ意見交換
ノ結果ヲ左記ノ如ク明確ニ致シ置タヘキモノト存候
一、佛蘭西國政府ハ千八百八十六年四月二十五日ノ佛支條
約、千八百八十七年六月二十六日ノ追加通商條約及千八
百九十五年六月十日ノ右條約ノ補足條約ノ補足條約ニ代
ハルヘキ新條約ノ締結ノ爲直ニ交渉ヲ開始スルノ意ア
リ

兩國政府ノ利益ノ爲右交渉ノ期間中印度支那ニ關シテハ
現狀ニ對シテ何等ノ變更ヲセ加ヘラレサルヘシ但シ海上
及陸上ニ於ケル國境稅率ノ割一ナルヘキ原則ハ有效ニ存
讀スヘキヲ以テ支那國海上國境ニ於テ實施セラル
ヘリ

ハ同時ニ印度支那國境ニ於テモ適用セラルヘキ了解アル
モノトス尤モ輸入及輸出ニ對スル減稅ノ現行率ハ佛蘭西

國政府カ速ニ締結セントノ意ヲ有スル交渉ノ繼續中ハ尙
數力ヲ有スルモノトス

二、佛支經濟關係ノ發達ノ爲ニハ商品カ過重ナル租稅ヲ負
擔セサルコトヲ必要トス

釐金ノ廢止カ佛蘭西國政府並ニ支那國政府ニトリテ望マ
ノ趣意承致候

一、印度支那國境ニ支那國新關稅率ヲ遠カラス適用スルコト及新條約ノ締結ニ至ル迄印度支那ニ於テ現狀ヲ維持スルコト

二、釐金廢止ノ好時機ナルコト

三、或種借款ノ償還ヲ確保スルニ適當ナル手段ヲ執ルノ有利ナルコト

本部長ハ右諸項ニ關シ全然同意ナルコト茲ニ閣下ニ對シテ御通知致候

本部長ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月二十三日南京ニ於テ

支那國駐劄佛蘭西共和國特命全權公使

伯爵「デー、ヅ、マルテル」閣下

以書翰啓上致候陳者本部長ハ國民政府カ遠カラス其ノ交涉

ヲ開始スヘキ豫定ノ印度支那ニ關スル新條約ヲ千九百二十九年三月三十一日以前ニ佛蘭西國政府ト締結シ得ヘキコト

ヲ希望スル旨閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有シ候

尤モ本日附貴翰中言及セラレタル印度支那國境ニ於ケル輸入及輸出ニ對スル減稅ニ關スル規定ハ新條約カ未タ締結セ

ラ・サル場合ト雖モ千九百二十九年三月三十一日以後適用セラレサルヘク候

千九百二十八年十二月二十三日南京ニ於テ

支那國駐劄佛蘭西共和國特命全權公使
外交部長署名

伯爵「デー、ヅ、マルテル」閣下

以書翰啓上致候陳者印度支那國境ニ於ケル輸入及輸出ニ對スル減稅ノ現行率ハ新條約締結ノ未タ交渉カ開始セラレサル場合ト雖モ千九百二十九年三月三十一日ヲ以テ其ノ適用ヲ廢止セラルヘキ旨本日附貴翰ヲ以テ御申越相成候本使ハ取敢ヘ斯右御通告ノ趣了承致候

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月二十三日南京ニ於テ

外交部長 王 正 廷閣下

佛蘭西國公使署名

海南島不割讓ニ關スル 交換公文

千八百九十七年三月

(管理總理衙門及總理衙門各大臣署名)

(備考)千八百九十七年三月三日附佛蘭西國公使「デュバイ」氏ヨリノ書翰ト内容同一ナルニヨリ之ヲ載錄セス

東京隣接諸省不割讓ノ 約束ニ關スル交換公文

千八百九十八年四月

總理衙門ヨリ清國駐劄佛蘭西共和國公使
「ジエラール」氏宛ノ書翰
以書翰致啓上候陳者光緒二十三年二月一日(千八百九十七年三月三日)附貴翰ヲ以テ敵國總理衙門宛佛蘭西共和國公使
ニ友好善隣ノ緊密ナル關係ヲ有スルカ故ニ海南島カ確定的
若ハ一時的讓渡又ハ海軍碇泊若ハ石炭貯藏所ノ名義ヲ以テ
清國ヨリ如何ナル他國ニモ決シテ割讓若ハ讓渡セラルルコ
トナカルヘキコトニ關シ特別ノ價值ヲ附與スルモノナリト
ノ趣申越相成敬承致候

清國駐劄佛蘭西共和國代理公使「デュバイ」
氏ヨリ總理衙門宛ノ書翰

敵國總理衙門ハ瓊州(海南島)ハ清國ノ領土ニ屬シ清國ハ
右地域ニ對シテ正當ニ其主權ヲ行フモノナリト思惟ス如何
ソ之ヲ他國ニ割讓スルコトヲ得ムヤ加之他國ニ期限附貸與
ヲ爲セシ事實ハ今日亮モ存セス右閣下ニ對シ正式ニ及回答
候 敬具

光緒二十三年二月十三日(千八百九十七年三月十五日)

海南島不割讓交換公文・東京隣接諸省不割讓交換公文

本代理公使ハ殿下及諸閣下カ本書翰ノ受領ヲ認メテ共和國政府ノ要望ニ從ヒ公文ヲ以テ回答相成候ハ欣快ノ至リニ有之候右得貴意候 敬具

千八百九十八年四月四日北京ニ於テ

デー、デュバイユ

東京雲南府間鐵道、廣州灣租借及佛蘭西人ノ郵便業務參加ニ關スル交換公文

千八百九十八年四月四日（千八百九十八年四月四日）
（前記公文書轉載省略）

總理衙門ヨリ「デュバイユ氏宛ノ書翰」
以書翰致啓上候陳者光緒二十四年三月十四日（千八百九十八年四月四日）敵國總理衙門ハ次ノ通閣下ノ公文ヲ領收致候（前記公文書轉載省略）

總理衙門ハ東京隣接ノ清國諸省ハ敵國ニ對シ最大ノ利害關係ヲ有スル重要ナル國境地點ナルカ故ニ常ニ清國ニ依リテ管轄セラレ且其主權ノ下ニ置カルヘキモノト認ムルモノニ有之候右諸省カ何レノ一國ニモ讓渡セラレ若ハ貨與セラルヘキ理由毫モ無之候

貴國政府ハ右ノ保證ヲ受クルコトニ特別ノ價值ヲ附與相成候間總理衙門ハ右正式ノ回答ヲ閣下ニ提出スルコトヲ要スル儀ト信シ候右閣下ニ於テ御領承相成日貴國政府ニ御傳達相成度候

光緒二十四年三月二十日（千八百九十八年四月十日）

千八百九十八年四月四日
（管理總理衙門及總理衙門各大臣署名）

清國駐劄佛蘭西共和國代理公使「デュバイユ」氏ヨリ總理衙門宛ノ書翰

以書翰致啓上候陳者貴我會商ノ結果及本代理公使ニ特別權限ヲ附與スル共和國政府ノ正式ノ訓令ニ基キテ本代理公使ハ殿下及諸閣下ニ請フニ清帝國ト佛蘭西共和國トヲ結合スル友好善隣ノ關係ヲ一層緊密ナラシムヘキ左ノ協定ニ同意セラレムコトヲ以テスルノ光榮ヲ有シ候

一、清國政府ハ佛蘭西國政府又ハ其指定スヘキ佛蘭西國會社ニ東京ノ國境上ヨリ雲南府ニ至ル鐵道敷設ノ權利ヲ許與ス但シ清國政府ハ右線路及其附屬物ノ爲ニ土地ヲ許與

スルノ外他ノ何等ノ義務ヲ有セス右鐵道線ノ道筋ヘ此際

之ヲ調査シ且兩國政府ノ取極ニ依リ後日決定セラルヘシ
鐵道章程ヘ協議ノ上之ヲ作成スルモノトス

二、清國政府ハ佛蘭西國ニ對スル友誼ニ基キ廣州灣ノ海灣

（前記公文書轉載省略）

ヲ九十九年間佛蘭西國政府ニ賃貸ス佛蘭西國政府ハ右海

灣ニ海軍碇泊所及貯炭所ヲ建設スルコトヲ得租借地域ノ

境界ハ實地調査ノ後後日兩國政府間ノ取極ヲ以テ決定セ

ラルヘシ租借料ハ後日之ヲ協定ス

三、清國政府カ確定セル郵便業務ヲ組織シ且其長官ニ一名

ノ高級官吏ヲ置クトキハ外國官吏ノ補助ヲ受クヘキコトヲ申出テ及右職員ノ選擇ニ關シテ佛蘭西國政府ノ推薦ヲ參照スヘキコトヲ快ク聲明ス

本代理公使ハ殿下及諸閣下等カ兩國政府ノ取極ヲ構成スヘ

キ同一文書ヲ以テ本公司書ノ領收ヲ承認スルノ厚意ヲ有セ

テレムコトヲ希望スルモノニ有之候但シ右二通ノ公文書ハ

協約ノ效力ヲ有スルモノニ候

右照會得貴意候 敬具

千八百九十八年四月九日北京ニ於テ

デー、デュバイユ

廣州灣租借ニ關スル條約

千八百九十八年十一月十六日

廣州灣ニ於テ訓印

千九百年二月十九日清國批准

第一條 濟國政府ハ佛蘭西國トノ友好關係ニ基キ廣州灣ニ海軍碇泊所及貯炭所ヲ設置スル爲佛蘭西國政府ニ九九年ヲ期限トシテ同灣ヲ貸與ス但シ該租借ハ讓與地域ニ對スル清國ノ主權ヲ依然害セサルモノトス

第二條 讓與地域ハ海軍碇泊所及貯炭所ノ安全、補給及正常ノ發展ニ必要ナル水域及土地ヲ包含スヘク租借地外ノ土地及水域ハ清國ニ歸屬ス依テ佛蘭西國租借地ハ左ノ地方ヲ含ム

一 東海島

二 硼洲全島（硼洲島ト東海島トヲ隔タル水道ハ清國船鉛ノ通航及碇泊ニ必要ナルニ因リ上記船舶ハ將來隨意ニ日何等稅金ヲ課セラルコトナク佛蘭西國租借地タル右水道ヲ通過シ又ハ之ニ碇泊スルコトヲ得ヘシ）

三 南方ヲ通明河トシ西方ヲ遂溪縣ニ於ケル雷州府ノ官道トシ新墟ヨリ北方ニ過ル境界ヲ有スル雷州府ノ一地帶、志滿ヨリ境界ハ同市ト福建村トノ間ヲ過ルモノトシ北東方赤坎ニ向フヘシ
赤坎、志滿及新墟ハ租借地ニ編入シ黃略、麻草、新增及福建ノ各村ハ依然清國ノ管轄ニ屬ス境界線カ吳川縣ニ接合スリ同村ヲ南方ニ取り之ト福建トノ間ヲ過り東方海ニ向ヒ、調神島ノ北方ヲ過半且該境界線カ吳川縣ニ接合スヘキ兜離窩ニ向フヘシ境界ハ西方ノ營ニ近キ吳川河ニ至ル迄吳川縣ヲ西ヨリ東ニ横斷スヘク又同河ノ河床ノ中央線ニ從ヒテ海ニ至ルヘシ海上地域ハ幅員三海里（即チ十支那里）トスヘシ黃坎ハ依然清國ニ屬スヘシ幅員三海里ノ水域ハ遂溪縣ニ於ケル境界ニ接合スルニ至ルヘキ海上限界ヲ成スヘタ該界線ハ上記通明河ノ中央ヲ通過スルモノトス

本條約ニ署名シ且合意ヲ以テ地圖ヲ作成シタルトキハ確定的限界ハ兩國政府ノ任命シタル官吏ノ特別審査ヲ以テ之ヲ定ムヘシ上記官吏ハ兩國間ニ生スルコトアルトキ確執ヲ避タル爲運籌ナク其任務ヲ行フコトヲ要ス

第三條 該地域ハ租借期間九十九年ノ間佛蘭西國ノミ之ヲ

ノ現存ノ條約肆ニ清國及東京間ノ關接關係ヲ定ムル條約ノ規定ニ從ヒ取扱ハルヘシ

第七條 清國政府ハ佛蘭西國カ赤坎ニ近キ廣州灣沿岸ノ一地點ト安鋪近傍ノ沿岸ノ一地點トヲ聯絡スル鐵道線路及電信線ヲ設タルコトヲ容認ス買收ノ必要アル土地ハ清國地方官憲ノ協力ヲ以テ佛蘭西國官吏之ヲ獲得スヘシ該官憲ハ其所有者カ相當ナル價格ニ限り請求スルナア監督スヘキモノトス建設及經營ノ費用ハ佛蘭西國ノ負擔トス支那人ハ適用サルヘキ一般稅率ニ從ヒ鐵道線路及電信線ヲ使用スルノ權利ヲ有ス清國官憲ハ其地方内ニ於テ該路及材料ノ保護ヲ監督スヘタ該線路及材料ノ修理及維持ハ佛蘭西國ノ負擔トス

佛蘭西國ハ亦安鋪ニ至ル鐵道線ノ到達地點ニ於テ該鐵道場ニ於ケルト同様ニ取扱ハルヘシ
佛蘭西國ハ右ノ地域及港ノ施政上其欲スル一切ノ規則ヲ發布シ殊ニ燈火、浮標及標識ノ建設及維持ノ費用ニ充ツルコトヲ目的トスル燈臺稅及噸稅ヲ徵收スルコトヲ得ヘシ右ノ措置ハ廣州灣ニ適用セラルヘシ本條約第二條所定ノ硼洲及東海ノ水域ニ關シテハ此限ニ在ラス

第六條 犯罪人引渡ノ場合生スルトキハ佛蘭西國及清國間

千八百九十九年十一月十七日廣州灣ニ於テ本書八通ヲ作成

ス中四通ハ佛文、四通ハ支那文ヲ以テ斯争議アル場合ニハ
佛文ノ正文ニ據ル

廣州灣境界劃定全權委員司合長官海軍少將

ジー・クールジョール（印）

廣州灣境界劃定全權委員廣西及江南總督

蘇元春（印）

佛支南京事件解決協定文

民國十七年十月十七日發表

王正廷氏ノ佛國代理公使宛公文要領（十月一日）

昨年三月二十四日發生セル南京事件ニ關シ國民政府ハ佛支兩國國民間ノ友誼ヲ増進セんカ爲メ同事件ヲ即時解決スルノ用意ヲ有ス、同事件ハ國民政府ノ成立以前共產黨ノ煽動ニヨリ發生セルモノナルコト調查ノ結果判明セルカ南京在留ノ佛蘭西國人ノ受ケタル身體及財產ノ損失ニ對シテハ國民政府ニ於テ衷心之ヲ遺憾トスル旨ヲ茲ニ表示スルモノナリ、國民政府ハ爾後在支佛蘭西國人ノ生命財產ニ對スル保護及ヒ本事件ニ關係セル軍隊其ノ他ニ對スル處罰ニ付既ニ有效ナル手段ヲ講シ兩國國民ノ友誼ヲ毀損セントスル共產黨及ヒ其ノ惡勢力ヲ已ニ掃蕩シタルヲ以テ今後必ス十外人保護ノ事ハ一層容易トナルヘク在支佛蘭西國人ノ生命及ヒ其ノ正當ナル利益ハ再ヒ斯タノ如キ暴行又ハ搾取ヲ受ケサルヘキヲ誓約ス、國民政府ハ兩國ノ友誼ヲ保持センカ爲メ在支佛蘭西國人ノ生命財產ノ毀損ニ對シ國際法ノ一般原則ニ照シ充分且ツ迅速ニ賠償ヲ爲スノ準備ヲ有ス、之カ爲メ國民政府ハ佛支共同調査委員會ヲ組織シ支那國人ノ爲メニ蒙リシ在支佛蘭西國人ノ實際ノ損害ヲ現地ニ於テ査定セコトヲ提議スルモノナリ

佛國代理公使ノ王正廷氏宛回答文（十月一日）

千九百二十八年十月一日附ノ通牒ニ關シ本代理公使ニ於テモ貴部長ト同シク佛支兩國國民ノ友誼ノ維持及ヒ增進ニ蓋支ナキ條件ノ下ニ南京事件ヲ解決セントスルノ用意ヲ有ス、佛國政府ハ此ノ精神ニ基キ千九百二十七年三月二十四日佛國人民カ南京ニ於テ受ケタル生命ノ喪失、身體上ノ傷害及ヒ物質上ノ損失ニ對シ貴國政府カ衷心遺憾ノ意ヲ示サレシヲ諒トス、從テ國民政府カ責任者懲罰ノ意ヲ明示セラ

レタルニ對シテハ本使ハ満足ヲ以テ之ヲ了承シ且ツ國民政府カ犯罪者處罰及ヒ責任者懲罰ヲ必スヤ速カニ實行セラルコトヲ確信シ尙ホ將來在支佛蘭西國人ヲ保護シ再ヒ斯クノ如キ事件ヲ發生セシメサル爲メ國民政府カ適當ノ措置ヲ執ルモノト了解ス
本使ハ佛支共同委員會ヲ設ケ双方ヨリ委員ヲ選定シテ在支佛蘭西國人側ノ一切ノ物的損害ノ實證査定ニ任セシメ以テ遠カニ賠償ヲ行ハシムルコトニ同意ス、國民政府カ上記諸項目ヲ履行サルハ體テ兩國國民ノ友誼増進ニ資スル所
以ナルヲ本使ハ確信ス

王正廷氏ノ照會（十月九日）

本部長ハ佛支兩國從來ノ想篤ナル關係ヲ增進スル爲メ貴國政府カ更ニ一步ヲ進メテ平等及ヒ領土主權相互尊重ヲ原則トシテ兩國間ノ現行條約ノ改訂ヲ行ヒ且懸案ノ解決ノ爲メ手段ヲ執ラレンコトヲ希望ス

佛國代理公使ノ回答（十月九日）

貴部長カ十月九日附通牒ニ於テ佛支現行條約ノ改訂及ヒ懸案ノ解決ヲ希望スル旨表示サレタルニ對シ本使ハ支那國民

(第五) 獨逸國、支那國間ノ條約

膠州灣委附ニ關スル
條約

一千八百九十八年三月六日調印

山東省曹州府ニ於ケル宣教師事件正ニ其落着ヲ告ケタル後清國政府ハ從來獨逸國ノ表明セル厚誼ニ對シ尙一層其感謝の承認ヲ顯示スルノ妥當ナルヲ信シ茲ニ獨逸國政府及清國政府ハ同等且相互ノ希望ニ基キ兩國ノ修好的關係ヲ鞏固ニシ以テ益々兩國臣民相互間ノ經濟上及通商上ノ關係ヲ發達セシメムカ爲次ノ別約ヲ締結セリ

第一章 膠州ノ租借

第一條 清國皇帝陛下ハ清獨間ノ修好的關係ヲ鞏固ニシ而シテ之ト同時ニ清國ノ軍事上ノ準備ヲ確實ニセムトスル目的ヲ以テ滿潮ノ際ニ於ケル膠州灣ノ周圍五十「キロメートル」(清國里數百里)ノ地域内ニ於ケル主權ニ基ク

切ノ權利ハ之ヲ自己ニ保有スルモ獨逸軍隊ニ對シテハ此地域内ニ於テ何時ニテモ自由ノ通過ヲ許容スヘタ茲同地内ニ於テハ豫メ獨逸國政府ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ何等ノ處分若ハ命令ヲ爲ササルヘク而シテ特ニ將來必要トナルヘキ水路ノ整理ニハ何等ノ故障ヲ申立テサルヘキコトヲ約ス清國皇帝陛下ハ獨逸國政府ト協議ノ上右地域内ニ軍隊ヲ駐屯セシメ並其他軍事上ノ處分ヲ行フヘキ權利ヲ留保ス

第二條 清國皇帝陛下ハ獨逸國カ船舶ノ修繕及儀裝又ハ其材料及準備品ノ貯藏並其他之ニ附屬スル施設ヲ爲ス爲他ノ諸強國ト同様清國ノ海岸ニ一地域ヲ所有セムトスル獨逸皇帝陛下ノ正當ナル希望ヲ充タサムトスル目的ヲ以テ先ツ九十九年間膠州灣口ノ兩岸ヲ租借地トシテ獨逸國ニ引渡スヘシ獨逸國ハ適當ノ時期ニ於テ前記建造物及港口保護ノ爲波引渡地域ニ築城ヲ實行スルノ任ニ當ルヘシ

第三條 清國政府ハ爭議ノ發生ヲ避ケムカ爲租借期間中租

借地ニ對シテ其統治權ヲ行使スルコトナク却テ其行使ヲ獨逸國ニ委附スヘシ其區域左ノ如シ

一 湾口ノ北部
險島ノ東北端ヨリ蟠山港ニ向テ引ケル條線ヲ以テ東北境トセル岬頭

二 湾口ノ南部
齊伯山島ノ南南西ニ位スル彎曲ノ極西南點ヨリ笛羅山島ノ方ヘ引ケル條線ヲ以テ西南境トナセル岬頭

三 齊伯山島及險島
四 現在ニ於ケル最高潮時ノ湾内全水面

五 膜州灣ノ前面ニ存在シ該灣ノ海面防禦上必要ナル全島嶼即チ笛羅山、祚連島等

獨逸國租借地ノ境界並灣ノ周圍五十「キロメートル」地帶ノ境界ハ締約國政府雙方ヨリ任命スヘキ委員ニ於テ其地形ニ應シ詳細ニ確定スヘキコトヲ留保ス
清國ノ軍艦及商船ハ膠州灣ニ於テ獨逸國ト親交アル他ノ國民ノ船舶ト同様ノ恩典ヲ享クヘシ而シテ同灣ニ於ケル清國船舶ノ出入立碇泊ニ關シテハ灣全水面ニ對シ讓受ケタル統治權ニ基キ獨逸國政府カ臨機他ノ國民ノ船舶ニ對シ定課スルノ必要アリト認ムル制限ノ外別ニ何等ノ制限

權ヲ保全スヘキ方法ニヨリ獨逸國政府ニ於テ其稅城及收稅及收稅方法ヲ確定的ニ規定セムカ爲清國政府ト協定スヘシ而シテ右ニ關シテハ別ニ商議ヲ開クヘキ事ヲ留保ス

第一條 清國政府ハ山東省ニ於ケル左記鐵道ノ敷設ヲ獨逸國ニ許可ス

一 膠州灣ヨリ濰縣、青州、博山、淄川、鄒平ヲ經テ濟南及山東省ノ境界ニ至ルモノ

二 膠州灣ヨリ沂州ニ向ヒ更ニ轉シテ萊蕪縣ヲ經テ濟南府ニ至ルモノ

濟南府ヨリ山東省ノ境界ニ至ル線路ハ先ツ濟南府ニ至ル線路ノ竣工ヲ俟チテ始メテ起工シ以テ清國ノ自ラ敷設スヘキ幹線トノ接續ヲ便ニスヘシ
全企業ニ關シ別ニ定ムル詳細章程中ニハ右後段鐵路經過ノ地點ヲモ詳定スヘシ

第二條 以上ノ各鐵道ヲ敷設スル爲一個又ハ數個ノ獨清鐵道會社ヲ設立シ獨逸國及清國ノ商人等ハ其株式ノ募集ヲ爲シ且雙方ヨリ信任スヘキ役員ヲ任命シテ企業ノ管理ニ當ラシムルコトヲ得ヘシ

第三條 詳細ナル事項ヲ規定スル爲兩締約國ハ速ニ別條約

第三章 山東省ニ於ケル優先權

山東省内ニ於テ人、資本或ハ材料ニ付外國ノ助力ヲ必要トスル總テノ場合ニハ清國政府ハ先ツ此種ノ事項ニ關係アル

獨逸國工業家及商人ニ對シ該事業及該材料ノ供給ニ從事セムコトヲ申出ツルノ義務ヲ有ス

獨逸國工業家及商人ニシテ斯ル事業ニ從事シ又ハ材料ヲ供給セムトスル意志ナキ場合ニ於テハ清國ハ任意ニ他ノ方法ニ依ルコトヲ得ヘシ

本條約ハ兩締約國ノ君主ニ於テ之ヲ批准セラルヘク而シテ批准書ハ清國ノ批准書伯林到着後獨逸國ノ批准書ヲ在伯林清國公使ニ交付シテ其交換ヲ行フヘシ
本條約ハ正本四通印ヲ獨文及漢文各二通ヲ以テ作成セラレ而シテ一千八百九十八年三月六日即チ光緒二十四年二月十四日兩締約國ノ代表者ニ依テ署名セラル

(總理衙門印)

獨逸帝國公使

フライヘル、フォン、ハイキング (印)

大清帝國總理各國事務大臣官員

李鴻章 (印)

大清帝國總理各國事務大臣官員

同

薛 (印)

千九百年三月二十一日濟南ニ

於テ調印

山東鐵道章程

山東巡撫袁世凱及兩都統旗昌ア甲トシ山東鐵道會社代表者普國鐵道技監「ハー、ヒルデアラント」ヲ乙トシ茲ニ山東省内ニ於ケル鐵道建設中一切ノ不穩ト妨害トヲ豫防シ且山東省民ト會社トノ間ニ於ケル親交的關係ヲ維持セんカ爲左記鐵道章程ヲ締結ス本章程ハ膠州租借地ノ境界ヨリ濟南ニ至ル間ノ鐵道ニ關スルモノニシテ柏林ニ於ケル山東鐵道會社重役ノ同意ヲ受ケルワ要シ且獨支兩國大ノワ以テ同一ノ意味ヲ記載セラルモノトス

第一條 膠州灣條約第二章第四條ニ依リ獨支鐵道會社設立セラレ獨支兩國人ニ對シ株券ヲ發行ス會社ヘ當分獨逸人ノミニ依リテ管理セラルヘク各半年每ニ會社ヨリ支那人持株ノ總數ヲ濟市交涉局ニ通報スヘシ而シテ支那人持株ノ總價格十萬兩ニ達セハ山東巡撫ハ會社ニ對シ一支那人持株

吏ヲ選派シ此官吏ヲシテ株主ヲ代表シテ會社事務ノ輔佐ニ任セシム

第二條 將來若シ山東省内ニ於テ會社ノ支店ヲ設置スル場

合ニハ各支店ニモ一文那官吏ヲ派遣スルモノトス

第三條 可能ニ地方人民ノ利益ヲ考慮スルカ爲鐵道通過

地方ニ關シテハ地方官並ニ其他ノ紳士ト商議スルヲ要

ス此商議ノ結果ヲ避タル爲巡撫ハ支那官吏ヲ專派シ立會ノ

上辦理セシム

但シ線路ノ位置ニ關スル技術上ノ決定ハ會社ノ技師ニ一

任スヘキモノトス線路圖ハ二萬五千分ノ一ノ梯尺ニテ之作リ

山東巡撫ニ呈報シ然ル後始メテ土地購買ヲ行フコ

トヲ得敷設工事ハ用地ノ買收ヲ終リタル後ニ非サレハ着

手スルヲ得斯勝地ハ從來ノ如ク迅速且平穩ニ實施シ其運

延若クハ地主個人トノ爭議ノ爲鐵道工事ヲ延滞セシムル

コトナキヲ要ス

如斯困難ヲ避タル爲前記ノ支那官吏ハ勝地ニ關シ他介者トナリ又之ヨリ生スル諸紛糾ノ解決ニ任スヘシ用地ハ地

方ノ時價ニ照シ廉直ナル方法ニテ購買セラルヲ要ス會

社ノ鐵道敷設及其將來擴張ノ爲必要ヲ限度トシ夫レ以上

ノ土地ヲ買收スルヲ得ス
用地ノ幅員ヲ左ノ最小數ニ定ム
簡單ナル停車驛 長サ六百三十米 幅七十米
地方小驛 長サ七百三十米 幅百米
小市邑附近ノ驛 長サ八百五十米 幅百三十米
大都會附近ノ驛 現地ノ狀況ニ應シ之ヲ定ム
築堤ニ要スル土ヲ採取スル爲ノ土地ハ前記面積以外トス
ニ適應スヘキ橋梁若クハ排水渠ヲ橋梁シ以テ農田ニ損害
ヲ及ホササルヲ要ス
第四條 鐵道線路ノ水路ニ逢着スル場合ニ於テハ其流水量
築堤ニ要スル土ヲ採取スル爲ノ土地ハ前記面積以外トス
ニ適應スヘキ橋梁若クハ排水渠ヲ橋梁シ以テ農田ニ損害
ヲ及ホササルヲ要ス
第五條 鐵道ハ市街ノ城壁、要塞、公共的建造物及堅要ナ
ル住民地ヲ通過シ若クハ損害ヲ與ヘサル如ク其線路ヲ遷
フヲ要ス
第六條 家屋、農園及村落、祠廟、墓地殊ニ圍牆及植樹セ
ラレタル高貴ノ墓地ハ成ルヘク鐵道ノ通過ヲ避タルヲ要
ス若シ之ヲ避タルコトヲ得サルトキハ豫メ二箇月前ニ地
方官憲ヲ經テ其旨ヲ所有者ニ通告シ且合議ノ上之ニ起因
スル損害ヲ賠償スヘシ
其賠償額ノ標準ハ現所有地ノ場合ニ於テ前ト同一ノ價值
アル物件ヲ取得若クハ建設スルカ爲毫モ金錢上ノ損害ヲ
取扱スルモノトス

蒙ラサルニアリ

第七條 勝地ノ爲ノ丈量ニハ單位トシテ「弓」ヲ使用ス一弓

ハ五尺ニシテ一尺ハ〇米三三八ニ等シ一畝ハ三百六十弓

即九千平方尺トシテ算用セラル山東鐵道會社ヨリ支拂フ

地租ニ關シテハ支那ノ他所ニ於ケル最惠鐵道會社ノ現行

規定ヲ適用ス

第八條 準備作業及敷設工事中農作物ニ被ラシメタル損害

ハ地方官憲ト議定セラルヘキ價格ニ從ヒ會社之ヲ支拂フ

モノトス

第九條 會社ノ希望ニ從ヒ地方官ヨリ鐵道ニ派遣セル補助

員ノ俸給ハ會社ヨリ支拂フモノトス

此金額ハ勝地價格内ニ算入スルヲ得ス

地價ハ會社ヨリ知縣ニ交付ス知縣ハ地價ノ正當ナル發給

ニ關シ其責ニ任スルモノトス

尙知縣ハ買收地ノ地契ヲ會社ニ交付スルヲ要ス

第十條 會社若シ鐵道工事ノ現場附近ニ於テ事務所若クハ
宿舎ノ爲家屋ヲ賃借セント欲セハ其地ノ知縣ニ申出ツヘ

シ

知縣ハ家主ト商議シ會社ニ代ツテ契約ヲ締結スヘシ

第十一條 鐵道工事ノ爲必要ナル材料ノ購買ハ公平ニ之ヲ

タル名義ヲ詐稱スルモノアルトキヘ地方官ニ於テ之ヲ逮
捕處罰スルヲ得ヘシ

第十六條 鐵道保護ノ爲外國軍隊ノ使用ヲ許サス 山東巡撫
ハ鐵路實測間及工事中並ニ營業開始後土團及暴徒ノ爲妨
害ヲ來サシムルコトニ關シ極力有效ナル手段ヲ講スヘキ
モノトス

第十七條 鐵道ノ目的ハ單ニ商業及交通ノ發達ニアルカ故

外國軍隊及軍械ハ之ヲ輸送スルヲ得ス

然レトモ戰時若クハ時變ニ際シ如斯輸送ヲ強制セラル
場合ハ會社其實ニ任セサルモノトス而シテ又山東巡撫ハ
敵ノ占領セル部分ニ對シテハ保護ノ責ナキモノトス

第十八條 講和及火災ニ際シ難民救濟ノ爲糧食及被服輸送
ノ場合ニハ其運賃ハ獨逸鐵道規定ニ從ヒ割引セラルヲ
要ス若シ又賊匪鎮壓ノ爲軍隊派遣ノ場合ニハ同様獨逸軍
隊及軍用材料ノ例ニ照シ割引セラルモノトス

第十九條 停車場ニ稅局設置ノ場合ニハ會社へ支那稅局ヲ
輔佐シ其徵稅ヲ容易ナラシムヘシ

稅務管理局ノ要求ニ依リ會社ニ於テ設備スヘキ必要ナル
建物ノ費用ハ常ニ豫メ協定セラルヘキ約束ニ從ヒ管理局
會社へ拂戻スヘキモノトス

第二十條 鐵道附近ノ市街及村落ノ住民ハ成ルヘタ會社ニ
於テ人夫及材料供給ノ請負ニ使用スルヲ要ス

第二十一條 租借地外ニ於テ會社ニ使用スル支那臣民支那
ノ法律ニ違反ノ場合ニハ當該地方官ノ裁判ニ附セラルヘ
キモノトス

右ノ如キ使用人ニ對シ法律上ノ手續ヲ必要トシ地方官ヨ
リ公然會社ニ照會ノ場合ニハ之ヲ曲庇スルカ如キ處置ヲ
取ルヲ得ス

外國人ニ對スル告訴ハ正當ナル法律ニ從ヒ處斷セラル
ヲ要ス如斯キ場合ニ於テ會社自ラ過シテ事實ヲ調查シ且
相當處分ヲ加フルヲ要ス

第二十二條 沿線ノ住民ハ鐵道ニ於テ成ルヘク之ヲ使用シ
其貨銀ハ該地ノ習慣ニ照シ支拂フヘシ萬一鐵道工夫ト地
方民トノ間ニ鬭争ノ生セル場合ハ地方官之ヲ處分スルノ
權アリ鐵道工夫ハ擅ニ人家ニ入ルヲ禁ス犯ス者ハ嚴罰ニ
處セラルヘシ

第二十三條 鐵道全部竣工後保線及看守ニ要スル工夫其他
ノ人員ハ當該地方紳董ノ推薦ニ從ヒ附近ノ市街及村落ノ
住民中ヨリ成ルヘク雇用スルヲ要ス之等人民ノ行爲ニ關
シテハ同紳董之カ責ニ任シ且地方官發給ノ憑單ヲ携帶セ
ル

シムルヲ要ス

第二十四條 鐵道營業開始後會社ハ事務ノ爲生セル人命若
クハ貨物ノ損害ニ對シ其實ニ任シ地方ノ習慣ニ從ヒ死傷
者ニ慰藉救恤ヲ行ヒ又他日會社ニ於テ制定發布スヘキ細
則ニ從ヒ損害貨物ノ賠償ヲ支拂フヘシ

粗漏怠慢ノ爲建築、列車ニ由リテ生セル人命財產ノ損害
モ亦會社其實ニ任スルモノトス

第二十五條 洪水ノ爲築堤ノ崩壞若クハ橋梁ノ破損等鐵路
ニ危險ノ虞アルトキハ之等ノ故障ヲ全然除去セル後ニ非
サレハ營業ヲ再興スヘカラス

第二十六條 線路ノ踏査、敷設及營業ノ爲會社ヨリ保護ヲ
願出ツル場合ニハ山東巡撫ハ直チニ之ニ應スヘシ此軍隊
ニ對シ會社ヨリ給スヘキ給與額ハ別ニ之ヲ商議ス

第二十七條 獨逸租借地内ニ於ケル主權ハ青島總督之ヲ防
護ス山東省内ニ於ケル其他ノ部分ニテ鐵道通過地方ノ主
權ハ山東巡撫之ヲ防護ス

第二十八條 將來支那政府ハ本鐵道ヲ買收スルコトヲ得其
時期及條件ハ改メテ之ヲ議定ス以上ノ章程ハ承認後山東
省内各官憲及鐵道吏員ニ通知シ發行セシムルコトヲ要
ス

獨支協約

千九百二十一年五月二十日訓印

獨支協約並附屬公文書

濟南ニ於テ

光緒二十六年二月二十一日

山東巡撫袁世凱(印)
副都統桂昌(印)
山東鐵道會社ハーベルデブランド(印)

大中華民國大總統ト大獨逸共和國大統領ハ本日大獨逸共和
國聲明ノ文書ヲ以テ根據トナシ兩國ノ協約ヲ締結シ友好及
商務關係ヲ恢復センコトヲ願フ・並ニ領土主權ノ尊重ト相互
平等各種原則ノ實行ハ各民族間親睦ヲ維持スル唯一ノ方法

タルヲ悟リ之ノ爲各全權委員ヲ派遣スルコト左ノ如シ

大中華民國大總統特派
顧惠慶

大獨逸共和國大統領特派
フォン・ボルヒ

各委員ハ全權委任狀ヲ相互ニ檢閱シタル後議定スルコト左

ノ如シ

第一條 兩締約國ハ相互ニ正式外交代表ヲ派遣スルノ権ヲ有ス此項代表ハ駐在國ニ於テ相互ニ國際公法上承認スルトコロノ一切ノ權利及不可侵權ヲ有ス

第二條 兩締約國內ニ他國ノ領事館或ハ副領事ノ駐在スル處ニ相互ニ領事或ハ副領事或ハ代理領事ヲ任命スルノ権ヲ有ス此項官吏ハ他國同等官ト同一ノ優禮待遇ヲ享有ス

第三條 此國人民カ彼國國內ニ在リテハ所在地ノ法律規則ノ規定ヲ遵奉シ遊歷、居住及商工業經營ノ權利ヲ有ス但シ第三國人民ノ遊歷、居住及商工業經營ヲ得ルノ地ヲ以テ限り斯兩國人民ハ生命財産ノ方面ニ於テハ均シタ所 在法廷管轄ノ下ニアリ兩國人民ハ所在國ノ法律ヲ遵守ス可ク其各種納稅ハ所在國本國人民ノ納付スル額ヲ超ユルヲ得ス

第四條 兩締約國ハ關稅ニ關スル一切ノ事件ハ各當該國內部ノ法令規定ヲ用フル事ヲ得但シ兩國間或ハ他國產出ノ未製品或ハ既成品ニ對シテ納付スル輸出入稅或ハ通過稅

(獨逸ハ戰時狀態及「ヴエルサイユ」條約ニヨリ已ムヲ得ス)

シテ凡ソ支那ト締結スルトコロノ于八百九十八年三月六日

ノ條約及其他一切山東省ニ關スル文書並ニ獲得セル一切ノ權利、產業權、特權ヲ拋棄スルコト(陳述ス)

此故ソ以テ獨逸ハ以上各種ノ權利、產業權、特權ヲ支那ニ還付スルノ能力ナシ

又正式ニ聲明スルモノ左ノ如シ
在支領事裁判權ノ取消ヲ承認ス

獨逸政府ハ獨逸北京駐在公使館所屬練兵場ニ關スル全部ノ權利ヲ拋棄ス右ハ支那カ「ヴエルサイユ」條約第百三十條第一項所載ノ官有財產等ノ文字ハ該地ヲ概括スルト爲スカ爲ナリ並ニ支那各處獨逸軍收容ノ費用ヲ支那政府ニ償還スルコトヲ準備ス

獨逸代表ノ支那總長ニ宛テタル公文書
獨逸ハ「ヴエルサイユ」條約ヲ總括承認履行又能ハサルモ若シ獨逸ニシテ諸條約ノ承認ヲ欲スルノ意アリ且ツ障礙アリテ將來該約ヲ修正スル時該約中ノ各條款第百二十八條乃至第百三十四條ノ外發生スル所ノ各種ノ權利支那ノ爲關係アリト認メ支那カ其現在ノ原文ニ照シ或ハ將來修正スルノ時ハ其修正文ニ照シテ要求ヲ提出スルノ場合獨逸政府ハ之ニ反對セス

雙方質疑ニ對スル聲明書

獨逸代表ハ獨逸聲明書及獨支協約ノ字句ノ改訂ノ爲獨逸政府ノ調合ヲ奉シ貴總長ニ向ツテ聲明スルコト左ノ如シ

(一) 在獨支那貨物ノ關稅協約中第四條ニ指ス所ノ兩國輸出入稅及通過稅ハ當該國本國人民納付ノ稅率ヲ超過スルヲ得ストノ一語ハ支那カ「ヴエルサイユ」條約第二百六十四條ノ利益ヲ利用スルニ妨ケナシ

(二) 損失賠償 獨逸聲明文書内ニ稱スル所ノ獨逸人收容費償還ヲ準備ストノ一節ハ獨逸カ「ヴエルサイユ」條約中ノ原則ニ照シ支那ノ損失ヲ賠償スルノ外獨逸ハ尚支那各處軍人收容費ヲ償還スルヲ願フノ意ナリ獨逸政府ハ已ニ清理ヲ受ケタル在支獨逸人財產所得各金額ノ半及未タ清理ヲ受ケサル產業ノ價值總數ノ半ヲ負擔シテ回収方並ニ現金四百萬元及津浦、湖廣鐵道債券ヲ支那政府ニ交付シ最時賠償金ノ一部トナス

(三) 在獨支那人財產 在獨支那人ノ動產不動產ハ本協約批准後完全ニ還付ス

(四) 在獨支那人財產 在獨支那人ノ動產不動產ハ本協約シテ便宜ヲ與ヘ之ヲシテ入學或ヘ實地練習セシメンコトヲ願フ

ハ當該國本國人民納付ノ稅率ヲ超過スルヲ得ス

第五條 本日獨逸共和國聲明文書及本協約各條件ハ他日正式條約ノ根據トス

第六條 本協約ハ漢、獨、佛三國文ヲ以テ作製シ解釋ニ不

同アル時ハ佛文ニ據ル

第七條 本協約ハ成ル可ク速力ニ批准シテ兩國政府相互ニ通知スヘタ批准ノ日ヨリ效力ヲ發生ス

獨逸代表ノ外交部ニ對スル聲明書

獨逸共和國政府代表「ボルヒ」照會ヲナスコト 本代表正式委任ヲ奉シ本國名義ヲ以テ貴總長ニ向ツテ聲明スルコト左ノ如シ

獨逸共和國政府ハ獨支ノ友誼及通商關係ヲ恢復センコトヲ願フ此項關係ハ應ニ完全ナル平等及切實ナル相互主義ニ基キ普通國際法ノ規定ニ合フモノニ因ル千九百十九年九月十五日中華民國大總統頒布ノ對獨平和恢復ノ命令ニヨル

獨逸ハ支那ニ對シテ盡ス可キ千九百十九年六月二十八日「ヴエルサイユ」條約ニ對シ千九百二十年一月十日ヨリ實行開始スルモノ及第一百二十八條ヨリ第百三十條ニ至リ發生スル義務ヲ擔任ス

尙左記各項ニ對シテ貴總長ノ回答ヲ望ム

(一) 獨逸人財產將來ノ保障 支那政府ハ在支獨逸人ニ對

シテ正當ナル事業ニ對シ完全ニ保障ヲ與ヘ茲ニ普通國際法ノ原則或ハ支那法律ノ規定ニ依ルノ外再ヒ其財產ヲ差押ヘサルコトヲ承諾スルヤ否ヤ

(二) 司法ノ保障 在支獨逸人ノ訴訟事件ハ全ク新設ノ法廷ニ依リ新法律ヲ以テ審理シ上訴權アルヤ否ヤ茲ニ正式ノ訴訟手續ヲ以テ辦理シ訴訟期間ニ於テ獨逸辯護士及通譯ニシテ法廷ノ正式認可ヲ經タル者ヲシテ輔助セシムル十否ヤ

(三) 會審公堂ノ事件 獨逸人ノ會審公堂ニ於ケル被告事件ニ付キ支那ハ將來如何ニ辦理スルヤ

(四) 支那對敵通商條令 此項各種條令ハ協約批准ノ日ヨリ其效力ヲ失フヤ否ヤ

(五) 支那債務ノ整理 支那政府ハ「ヴエルサイユ」條約第二百九十六條ノ公共清理處ニ加入ノ意アルヤ否ヤ

外交總長ノ回答

(一) 獨逸政府カ在獨支那人ニ對スルト同様ニ辦理ス

(二) 獨逸辯護士ハ法廷ノ許可ヲ經テ補助ヲ爲スコトヲ得

(三) 獨逸人ノ會審公堂ニ於ケル原被告事件ハ支那ハ將來

尙一解決法ヲ求メ各面トモ公平ナラシム

(四) 提案ハ別ニ聲明ス

前ニ海關ニ登記シタル獨逸商標ハ協約ノ日ヨリ當然其效力ヲ失フ國定稅率普通施行以前ノ輸入ハ暫ク通用稅率ニヨリ關稅ヲ納ム

(五) 公共清理處ニ加入セサルコトヲ聲明ス 又獨逸政府ノ爲以上述フル所載時賠償ノ一部ヲ擔任シ茲ニ支那政府ニ交付ストノ語ニ服シ支那政府ハ批准ノ日ヨリ獨逸人財產ノ清理ヲ停止シ茲ニ前項債還ノ時及獨支協約批准以前清理處所得及差押ヘタル各產業ヲ原所有主ニ還付ス

前記ノ辦法ハ和約第百三十三條第二款ノ清理差押及獨逸人財產管理各事務ニ對スル結果トス

德華銀行及井涇礦務局ハ支那主管機關ヨリ之ト別ニ辦法ヲ商議ス但シ北京、漢口等ノ未タ清理ヲ謀サル德華銀行ノ家屋ハ前項ノ辦法ニ依リ原所有主ニ還付スルヲ得

民國外交總長 虞 惠 延

通商條約

千九百二十八年八月十七日南京
ニ於テ調印

千九百二十九年一月二十一日南
京ニ於テ批准書交換

獨逸國及支那共和國ハ帝ニ兩國間ニ存在スル友好關係ヲ更ニ鞏固ナラシメ且兩國間ノ通商關係ヲ擴張シ促進セシメントノ希望ニ促サレ之カ爲條約ヲ締結スルニ決定シ左ノ如ク各全權委員ヲ任命セリ

獨逸國大統領
支那國駐劄獨逸國特命全權公使「エツチ、フォン、ボルヒ」
支那共和國國民政府主席
外交部長 王 正 延

因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後兩國間ノ左ノ條約ヲ協定セリ

第一條 關稅事項ニ關スル待遇ノ絕對的均等ニ到達シ且千九百二十一年五月二十日ノ獨逸國支那國間ノ協定ヲ補充スルノ目的ヲ以テ兩締約國ハ一切ノ關稅及之ニ關聯スル事項ニ付締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ領域内ニ於テ別國ニ許與セラル待遇ニ比シ何等差別的待遇ニ服セシメラレ

サルヘキコトヲ約ス

兩締約國ノ國民ハ如何ナル場合ニ在リテモ他ノ一方ノ領域内ニ於テ貨物ノ輸入又ハ輸出ニ際シ該國ノ國民又ハ別

第三條 本條約ハ獨逸語、支那語及英吉利語ヲ以テ作成シ解釋ノ相違アル場合ニハ英吉利語ノ本文ニ據ルヘシ
第四條 本條約ハ成ル可ク速ニ批准セラルヘク且兩國政府力批准ノ行ハレタルコトヲ相互ニ通知シタル日ヨリ效力ヲ生スヘシ

千九百二十八年八月十七日即支那共和國十七年八月十七日
南京ニ於テ本書二通ヲ作成ス

エツチ、フォン、ボルヒ (印)
王 正 延 (印)

(第六) 伊太利國、支那國間ノ條約

伊支南京事件解決協定文

民國十七年十月八日發表

王外交部長ノ「ヴァーレ」總領事宛通牒(要領)

昨年三月二十四日發生セル南京事件ニ關シ余ハ閣下ニ次ノ如ク通告スルノ光榮ヲ有ス、幸ニ伊支兩國間ニ存スル厚誼ヲ増進セントスルノ希望ニ促サレ國民政府ハ最近商定ノ趣旨ニ基ツキ南京事件ニ即時解決ヲ與フヘキ用意ヲ有ス、該事件ハ南京政府ノ成立以前全ク共產黨ノ煽動セシモノナルコト調査ノ結果判明シタルカ南京ニ於ケル伊太利國人ノ死ニ對シテハ國民政府ニ於テ切實ニ之ヲ遺憾トスル旨ヲ茲ニ表明スルノ光榮ヲ有ス、國民政府ハ既ニ該事件關係者ヲ處罰シ在支伊太利國人ノ生命財產ニ對スル完全ナル保護ニ付有效ナル措置ヲ講セリ、國民政府ハ國際法上ノ確立シタル

原則ニ照ラシ南京ニ於テ失命シタル伊太利國人ニ對シ相當ナル賠償ヲ為スノ用意ヲ有ス、仍ツテ右賠償額査定ノ為メ伊支共同委員會ヲ設置セシコトヲ提議スルモノナリ

「ヴァーレ」總領事ノ王部長宛覆牒(要領)

余ハ千九百二十八年九月二十四日附貴通牒(通牒全文採錄)ノ受領ヲ確認スルノ光榮ヲ有ス、余ハ國民政府ノ發布セル命令並ニ該命令ニ現ハレタル同政府ノ意圖ヲ了承シ、茲ニ伊太利政府ノ為メニ千九百二十七年三月發生セル南京事件ノ解決ニ關スル閣下ノ通牒ヲ受諾スルモノナリ

(備考)外交部長王正廷氏ハ十月八日伊國代表上海總領事「ダニエル、ヴァーレ」氏トノ間ニ伊支間南京事件解決ニ關シ右ノ如キ兩文ヲ交換シ、次テ國民政府ハ同十一日「コンムニケ」ヲ發シテ此ノ趣旨公表セリ

修好通商暫定條約

千九百二十八年十一月二十
七日南京ニ於テ調印

伊太利王國及支那共和國ハ幸ニ兩國間ニ存スル友好ノ關係ヲ鞏固ニシ其ノ通商關係ヲ増進シ且堅固ニセントノ希望ニ均シク促サレ修好通商暫定條約ヲ締結スルコトニ決シ之力爲左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

伊太利國皇帝陛下
伊太利國駐劄伊太利國特命全權
公使「コンマンダー、オブ、ザ、クライン、
オーダー、オブ、ザ、クライン、
オブ、イタリー」、「オフィサ
ー、オブ、ザ、オーダー、オブ、
エス、エス、モーリス、アンド、
ラザルス」

支那共和國國政府主席

國民政府外交部長 王 正 廷
國民政府外交部長

因テ各全權委員ハ會合シ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 兩締約國ハ關稅稅率及之ニ關スル一切ノ事項カ専ラ各其ノ國ノ國法ニ依リ規定セラルヘキコトヲ約ス

互ニ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ實施
セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

千九百二十八年十一月二十七日〔「ファシスト」第七年〕即支

那共和國十七年十一月二十七日南京ニ於テ作ル

支那共和國國民政府全權外交部長 王 正 廷

支那國駐劄伊太利國特命全權公使 ダニエレ・ヴァレー

附屬書第一

以書翰啓上致候陳者本部長ハ本日支那國及伊太利國間ニ署名セラレタル條約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力ヲ發生スルモノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ名ニ於テ陳述スル光榮ヲ有シ候

右期日前ニ支那國政府ハ伊太利國臣民ニ對スル裁判權ノ回収ニ關シ伊太利國政府ト細目協定ヲ爲スヘク候前記ノ期日迄ニ右協定ノ成立セサル場合ニハ伊太利國臣民ハ支那國カ治外法權ノ撤廢ニ付華盛頓諸條約ノ署名國全部ト協定ヲ締結シタル後定ムヘキ期日ヨリ支那國ノ法令及裁判權ニ服スヘキモノニ候尤モ右期日ハ前記諸國ノ全部ニ對シテ適用セラルヘキモノニ有之候

「ダニエレ・ヴァレー」閣下

以書翰啓上致候陳者本日附書翰ヲ以テ左記ノ趣意申越相成敬承致候

「本部長ハ本日支那國及伊太利國間ニ署名セラレタル條約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力ヲ發生スルモノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ名ニ於テ陳述スルノ光榮ヲ有シ候 右期日前ニ支那國政府ハ伊太利國臣民ニ對スル裁判權ノ回収ニ關シ伊太利國政府ト細目協定ヲ爲スヘタ候前記ノ期日迄ニ右協定ノ成立セサル場合ニハ伊太利國臣民ハ支那國カ治外法權ノ撤廢ニ付華盛頓諸條約ノ署名國全部ト協定ヲ締結シタル後定ムヘキ期

日ヨリ支那國ノ法令及裁判權ニ服スヘキモノニ候尤モ右

期日ハ前記諸國ノ全部ニ對シテ適用セラルヘキモノニ有之候 「華盛頓諸條約ノ署名國」トハ千九百二十一年乃至二十二年華盛頓ニ於テ開催セラレタル軍備縮小會議ニ於テ太平洋及極東問題ノ討議ニ直接參加シタル支那國以外ノ諸國ノ義ト

ノ諸國ノ義ト解セラルヘク候」

本使ハ伊太利國政府カ前記ノ陳述ニ全然同意ナルコトヲ陳

テ太平洋及極東問題ノ討議ニ直接參加シタル支那國以外ノ諸國ノ義ト解セラルヘク候

右回答旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十一月二十七日南京ニ於テ

外交部長 王 正 廷閣下 ダニエレ・ヴァレー

附屬書第二

宣 言

本部長ハ千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那國國民政府ニ依リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

支那國領域内ニ於ケル伊太利國臣民及伊太利國領域内ニ於ケル支那國人民ハ今後支那國政府及伊太利國政府ニ依リ夫

夫正當ニ發布セラルル法令及規則ニ規定セラルヘキ稅金又ハ課金ヲ支拂フヘキモノトス但シ右稅金又ハ課金ハ別國ノ國民ニ依リ支拂ハル所ト異リ又ハ之ヨリ高キモノナルコトヲ得ス

ダニエレ、ヴァアレー
王 正 廷

(第七) 白耳義國、支那國間ノ條約

修好通商暫定條約

一千九百二十八年十一月二十
二日南京ニ於テ調印

自己ノ名ニ於テ及現行ノ諸協定ニ基キ「ルクセシブルグ」國大公殿下ノ名ニ於テ行動スル白耳義國皇帝陛下及支那共和國國民政府ハ相互ニ白耳義國「ルクセシブルグ」國同盟及支那國間ニ幸ニシテ既ニ存在スル友好關係ヲ更ニ鞏固ナラシメントノ希望ニ促サレ修好通商暫定條約ヲ締結スルニ決シ之カ爲左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

白耳義國皇帝陛下

支那國駐劄白耳義國臨時代理公使男爵「ジー、ギヨーム」

支那共和國國民政府主席

支那共和國國民政府外交部長

王 正 廷

因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ交換シ之カ良好安

第三條

兩締約國ハ相互及均等待遇ノ原則ニ基ク通商航海

條約締結ノ目的ヲ以テ成ルヘク速ニ交渉ヲ開始スヘシ
第四條 本條約ハ佛文、支那文及英文ソ以テ作成ス解釋ニ
付相違アル場合ニハ英文ノ本文ヲ以テ標準トス
第五條 本條約ハ成ルヘク速ニ批准セラレ批准書ハ南京ニ
於テ交換セラルヘク兩國政府カ互ニ其ノ批准ノ完了セラ
レタルコトヲ通告シタル日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約二通ニ署名調印セリ

千九百二十八年十一月二十二日即支那共和國十七年十一月
二十二日南京ニ於テ作ル

支那國駐劄白耳義國 全權臨時代理公使 男爵 ジー・ギヨーム (印)

支那共和國國民政府 全權外交部長 王 正 廷 (印)

附屬書第一

以書翰啓上致候陳者本部長ハ本日支那國及白耳義國間ニ調
印セラレタル條約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力
ヲ發生スルモノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ
名ニ於テ陳述スルノ光榮ヲ有シ候

右期日前ニ支那國政府ハ白耳義國臣民ニ對スル裁判權ノ回
收ニ關シ白耳義國政府ト細目協定ヲ爲スヘク候前記ノ期日
千九百二十八年十一月二十二日南京ニ於テ
男爵 ジー・ギヨーム

外交部長 王 正 廷

附屬書第二

宣 言

本部長ハ千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ
諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那共和國國民政府ニ依
リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

王 正 廷

附屬書第三

共同宣言

支那國及白耳義國兩政府ハ兩締約國カ國際私法ニ基ク原則
フ一般のニ承認スル限りニ於テ本日調印セラレタル支白條
約中ニ自國法ノ適用カ公安ニ反スル場合ヲ除キ支那國ニ於
テ白耳義國及「ルクセンブルグ」國臣民並ニ白耳義國及「ル

迄ニ右協定ノ成立セサル場合ニハ白耳義國臣民ハ爾後現ニ
支那國ニ於テ治外法權ヲ享有スル列國ノ過半數カ之ヲ拠棄
スルニ同意スルト同時ニ直ニ支那國ノ法令及裁判權ニ服ス
ヘキモノニ候
「本部長ハ本日支那國及白耳義國間ニ調印セラレタル條
約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力ヲ發生スルモ
ノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ名ニ於テ陳
述スルノ光榮ヲ有シ候右期日前ニ支那國政府ハ白耳義國
臣民ニ對スル裁判權ノ回収ニ關シ白耳義國政府ト細目協
定ヲ爲スヘク候前記ノ期日迄ニ右協定ノ成立セサル場合
ニハ白耳義國臣民ハ爾後現ニ支那國ニ於テ治外法權ヲ享
有スル列國ノ過半數カ之ヲ拠棄スルニ同意スルト同時ニ
直ニ支那國ノ法令及裁判權ニ服スヘキモノニ候」
本官ハ白耳義國政府カ本件ニ付同意ナルコトヲ閣下ニ通告

附屬書第四

宣 言

クセンブルグ」國ニ於テハ支那國人民ニ對ジ各其ノ個人ノ
地位ニ關スル自國法ノ適用ヲ保證スルノ一項ヲ押入スルノ
必要ヲ認メサリシコトヲ宣言ス

男爵 ジー・ギヨーム

王 正 廷

附屬書第五

宣 言

本部長ハ支那國ニ於ケル白耳義國臣民カ領事裁判ノ特權ヲ
享受スルコトヲ停止セラレ且兩國ノ關係カ完全ナル均等ノ
立場ニ立ツニ至リタル場合ニハ支那國政府ハ現ニ支那國人
民カ白耳義國及「ルクセンブルグ」國ノ領域ノ如何ナル部分
ニ於テモ居住シ、商業ヲ營ミ及財產ヲ取得スルコトヲ許容
スルコトヲ條件トシテ同一ノ權利ヲ享受スルコトヲ許容ス
ヘキコトヲ支那共和國國民政府ノ名ニ於テ宣言スルノ光榮
ヲ有ス

王 正 廷

附屬書第五

宣 言

本官ハ支那國ニ於ケル白耳義國及「ルクセンブルグ」國臣民ハ支那國政府ニ依リ正當ニ發布セラレタル法令及規則ニ規定セラルヘキ税金ヲ支拂フヘシ但シ右税金ハ支那國ト條約關係ヲ有スル凡テノ列國ノ人民ニ依リ支拂ハルヘキモノナルコトヲ本國政府ノ名ニ於テ宣言スルノ光榮ヲ有ス

男爵 ジー、ギヨーム

民國十八年八月三十日
天津ニ於テ署名
民國二十年一月十五日批
准交換

白耳義國政府ハ白支兩國間ニ現存スル親善關係ヲ鞏固ニセシカ爲メニ千九百二年二月六日（光緒二十七年十二月二十八日）ノ白支協定ニ依リ承認セラレタル天津ニ於ケル白耳義租界ヲ自發的ニ且ツ無代價ニテ中華民國國民政府ニ還附センコトヲ希望スルニ因リ兩國政府ハ右目的ヲ以テ左ノ全權委員ヲ任命セリ

白耳義國皇帝陛下
支那國駐劄公使館參事官 男爵「ジユール・ギヨーム」
中華民國國民政府主席
外交部條約委員會顧問 凌 冰
內務部土地司科長 趙 光 庭
特命全權公使 黃 宗 法
天津特別第一區主任 陳 鴻 鑑
右雙方委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルコトヲ認メタル後左ノ如ク議定セリ

第一條 白耳義政府ハ千九百二年二月六日ノ白支條約ニ依リ獲得セル天津白耳義租界ヲ本協定實施ノ日ヨリ國民政府ニ返還ス同時ニ右條約及ヒ之ニ關スル各種約束ハ效力ヲ失フモノトス

第二條 該租界ノ白耳義臨時工部局ハ本協定實施ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

總テ白耳義國行政上ノ公文書、帳簿其ノ他一切ノ書類ハ之ヲ國民政府ニ引繼キ同時ニ臨時工部局ハ租界行政ニ關スル全責任ヲ解除サルヘシ

第三條 本協定實施ノ日ヨリ天津舊白耳義租界ハ全然支那

ノ法令ニヨリ統治且ツ保護サルヘシ同時ニ現行支那政府

ノ課稅ニ服スルモノトス

第四條 白耳義租界公有財產即チ埠頭、棧橋、道路、鐵道及ヒ其ノ敷地（別紙附圖ニ示サレタルQ字B段地ヲ含ム）並ニ別紙目錄ニ掲ケラレタル工部局所有機械、工具、備品、營裝及ヒ工部局名義ニ依ル銀行預金ハ本協定ノ實施ノ日ヨリ中華民國國民政府ニ引渡スヘシ

第五條 天津白耳義租界「ソシエテ、アノニム」ニ對シテモ亦均シタ之ノ規定ハ「ソシエテ、アノニム」ハ新タナル事態ニ適合スル様其ノ名稱、組織ヲ改ムヘシ本協定第六條ノ規定ハ「ソシエテ、アノニム」ニ對シテモ亦均シタ之ヲ適用ス

第六條 白耳義領事館ノ發給シタル白耳義租界内私有土地ニ關スル地券及ヒ證明書ハ本協定實施ノ日ヨリ一月以内

ニ中國主管官廳ニ交付シ中國主管官廳ハ之ト引換ニ永代租借證ヲ發給スヘシ右ニ對シ土地一畝ニ付一元ノ登記料

ヲ課ス中國主管官廳ハ一月以内ニ上記新證書ヲ發給スルモノトス

第七條 本協定ハ成ルヘク速ニ批准セラルヘク兩國政府力批准アリタルコトヲ相互ニ通告シタル日ヨリ之ヲ實施ス

第八條 本協定ハ中國文、佛文、英文ヲ以テ各二通ヲ作成シ若シ解釋ヲ異ニスル場合ハ英文ニ依ル

附屬書第一

交換公文

右證據トシテ兩國全權代表ハ本協定ニ署名調印スルモノナリ
中華民國十八年八月三十一日即西曆千九百二十九年八月三十一日天津ニ於テ之ヲ作ル
中國全權委員 凌 冰
白耳義國全權委員 趙 光 庭
陳 鴻 鑑
法 (印)
(備考)附圖省略

以書翰啓上致候陳者中華民國國民政府全權委員ハ本日締結セラレタル協定第三條ニ關シ白耳義租界内ノ地稅ハ地上ニ建築物ノ有無ニ拘ラス他日中華民國國民政府カ地稅ニ關スル法律ヲ公布スル迄現行稅率ヲ維持スヘキコトヲ聲明スルノ光榮ヲ有シ候
本委員ハ茲ニ閣下ニ向テ重ネテ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百二十九年八月三十一日天津ニ於テ

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

白耳義國全權委員 男爵「ジー、ギヨーム」嚴
以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左記ノ通御申越相成
敬承致候

「中華民國國民政府全權委員ハ本日諒藉セラレタル協定

第三條ニ關シ白耳義租界ノ地稅ハ地上ニ建築物ノ有無ニ
拘ラス他日中華民國國民政府カ地稅ニ關スル法律ヲ公布
スル迄現行稅率ヲ維持スヘキコトヲ聲明スルノ光榮ヲ有
シ候」

本委員ハ白耳義國政府カ本件ニ付同意セルコトヲ閣下ニ通
告スルノ光榮ヲ有シ候

本委員ハ茲ニ閣下ニ向テ重ネテ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十九年八月三十一日天津ニ於テ

男爵 ジー、ギヨーム

中華民國全權委員職

附屬書第二

附屬書第三

宣 言

閩廣義園(福建、廣東出身者同鄉會)ハ滿足スヘキ方法ヲ以
テ其ノ所有スル土地ノ一部カ一號路建設ノ用ニ供セラレタ
ルコトヲ證明スルニ於テハ之ニ相當スル面積ヲ有シ且ツ上
記義園土地ニ近接スル土地ヲS地段中ヨリ無償ニテ分與フ

宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

天津電車電燈公司カ白耳義租界臨時工部局ノ同意ヲ得テ設
置シタル天津舊白國租界内ノ送電設備換言スレハ大小電
柱、電線、變電機竝ニ器具及ヒ人家接續線及ヒ「メータ」
ハ全ク該公司ノ所有タルヘシ又天津電車電燈公司ハ舊白國
租界ニ於テ繼續シテ電流ヲ供給スルコトヲ得但シ電線ノ擴
張ヲナサント欲スルトキハ豫め地方主管官廳ノ許可ヲ受ク
ヘキモノトス

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

凌 趙 光 法 庭 冰 宣 言

第八 丁抹國、支那國間ノ條約

修好通商暫定條約

千九百二十八年十二月十二日
南京ニ於テ調印

丁抹王國及支那共和國ハ兩國間ニ幸ニ存在スル友好關係ヲ
鞏固ナラシメ且其ノ通商關係ヲ増進シ及堅固ナラシメンコ
トノ希望ニ均シク促サレ修好通商暫定條約ヲ締結スルニ決
シ之カ爲左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

丁抹國及「アイスランド」國皇帝陛下

支那國駐劄丁抹國及「アイスランド」國特命全權公使

「ヘンリック、デ、カオフマン」

支那共和國國民政府主席

支那共和國國民政府外交部長 王 正 延
因テ各全權委員ハ會合シ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良
好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 兩締約國ハ關稅並ニ之ニ關スル一切ノ事項ニ關シ締
約國ノ何レモ他ノ一方ノ領域内ニ於テ別國ニ對シ許與セ
ラル所ヨリ不利益ナル待遇ヲ受ケサルヘキコトヲ約ス
締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ領域内ニ於テ如何ナル
口實ヲ以テスルモ物品ノ輸入又ハ輸出ニ際シ該國ノ國民
又ハ別國ノ國民ニ依リ支拂ハル所ト異リ又ハ之ヨリ高
キ何等ノ關稅、内地課金又ハ租稅ヲ徵收セラルコトナ
カルヘシ

第二條 各締約國ノ國民ハ他方締約國ノ領域内ニ於テ該締
約國ノ法令及其ノ裁判所ノ裁判權ニ服スヘク其ノ權利ノ
主張及擁護ノ爲自由且容易ニ裁判所ニ申出フルコトヲ得
ヘシ

第三條 兩締約國ハ絕對的均等、通商關係ニ於ケル無差別
待遇及主權ノ相互尊重ノ原則ニ基ク修好、通商及航海條
約締結ノ目的ヲ以テ成ルヘク速ニ交渉ヲ開始スルコトニ
決定セリ

第四條 本條約ハ丁抹語、支那語及英吉利語ヲ以テ二通ヲ
作成シ意義ノ相違アル場合ニハ英吉利語ノ本文ヲ以テ標
準トス

第五條 本條約ハ成ルヘク速ニ批准セラルヘク兩國政府力
互ニ其ノ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ
實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

千九百二十八年十二月十二日即支那共和國十七年十二月十
二日南京ニ於テ作成ス

支那國駐劄丁抹國及「アイスランド」國特命全權公使
ヘンリック、カオフマン（印）

支那共和國國民政府全權外交部長

王 正 延（印）

附屬書第一

以書翰啓上致候陳者本部長ハ本日支那國及丁抹國間ニ調印

修好通商暫定條約

「ヘンリック、デ、カオフマン」閣下
右申述旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百二十八年十二月十二日南京ニ於テ

支那國駐劄丁抹國公使

「ヘンリック、デ、カオフマン」閣下

以書翰啓上致候陳者本日附貢翰ヲ以テ左記ノ趣旨申越相成

五九五

敬承致候

「本部長ハ本日支那國及丁抹國間ニ調印セラレタル條約

第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力ヲ發生スルモノ

ト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ名ニ於テ陳述

スルノ光榮ヲ有シ候 右期日前ニ支那國政府ハ丁抹國臣

民ニ對スル裁判權ノ回收ニ關シ丁抹國政府ト細目協定ヲ

爲スヘク候前記ノ期日迄ニ右協定ノ成立セサル場合ニハ

丁抹國臣民ハ支那國力治外法權ノ撤廢ニ付華盛頓諸條約

ノ署名國全部ト協定ヲ締結シタル後定ムヘキ期日ヨリ支

那國ノ法令及裁判權ニ服スヘキモノニ候尤モ右期日ヘ前

記諸國ノ全部ニ對シテ適用セラルヘキモノニ有之候

「華盛頓諸條約ノ署名國」トハ千九百二十一年乃至二十二

年華盛頓ニ於テ開催セラレタル軍備縮小會議ニ於テ太平

洋及極東問題ノ討議ニ直接參加シタル支那國以外ノ諸國

ノ義ト解セラルヘタ候」

本使ハ丁抹國政府カ前記ノ陳述ニ全然同意ナルコトヲ閣下

ニ通告スルノ光榮ヲ有シ候

右回答旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月十二日南京ニ於テ

ヘンリック、デ、カオフマン

附屬書第三

宣 言

本部長ハ支那國ニ於ケル丁抹國臣民力領事裁判及其ノ他ノ特權ヲ享受スルコトヲ停止セラレ且兩國ノ關係力完全ナル均等ノ立場ニ立ツニ至リタル場合ニハ支那國政府ハ現ニ支那國人民カ丁抹國ノ法令及規則ニ規定セラルル制限ニ從ヒ丁抹國領域ノ如何ナル部分ニ於テモ居住、商業及財產取扱ノ權利ヲ享有スル事實ニ鑑ミ支那國ニ於ケル丁抹國臣民ニ對シ其ノ法令及規則ニ規定セラルヘキ制限ニ服スルコトヲ條件トシテ同一ノ權利ヲ許容スヘキコトヲ支那共和國國民政府ノ名ニ於テ宣言スルノ光榮ヲ有ス

王 正 廷

附屬書第一

宣 言

本部長ハ千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那共和國國民政府ニ依リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

王 正 廷

外交部長 王 正 廷閣下

附屬書第四

共同宣言

丁抹國領域内ニ於ケル支那國人民及支那國領域内ニ於ケル丁抹國臣民ハ今後丁抹國政府及支那國政府ニ依リ夫々正當ニ發布セラルル法律及規則ニ規定セラルヘキ稅金又ハ課金ヲ支拂フヘキモノトス但シ右稅金又ハ課金ハ別國ノ國民ニ依リ支拂ハルル所ト異リ又ハ之ヨリ高キモノナルコトヲ得

ス

ヘンリック、カオフマン

王 正

廷

(第九) 和蘭國、支那國間ノ條約

關稅條約

千九百二十八年十二月十九日
南京ニ於テ調印

和蘭國皇帝陛下及支那共和國國民政府ハ幸ニ兩國間ニ存在スル友好關係ヲ鞏固ニシ日其ノ通商關係ヲ更ニ發達セシメントノ熱心ナル希望ニ促サレ此ノ目的ヲ以テ條約ヲ締結スルニ決シ之カ爲左ノ如ク各全權委員ヲ任命セリ

和蘭國皇帝陛下

支那國駐劄特命全權公使「コンマンダー、イン、ザ、オーダー、オブ、オレンヂ、ナツソーア」(ナイト、イン、ザ、オーダー、オブ、ザ、ネーザーランズ、ライオン)

「ウイレム、ヤコブ、アウデンドハイク」

支那共和國國民政府主席

支那共和國國民政府外交部長 王 正 廷

因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ
第一條 和蘭王國及支那國間ニ從來締結セラレ且現ニ效力有スル諸條約ニ掲ケラレタル一切ノ規定ニシテ支那國ニ於ケル商品ノ輸入及輸出ニ對スル稅、戻稅、通過稅及噸稅ノ稅率ニ關スルモノハ之ヲ廢止シ其ノ效力ヲ喪失セシメ完全ナル國家ノ關稅自主權ノ原則ヲ適用スヘシ但シ締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ領域、屬地及植民地内ニ於テ前記ノ事項竝ニ之ニ關聯スル一切ノ事項ニ關シ別國ニ許與セラルル待遇ニ比シ毫モ差別的ナラサル待遇ヲ享有スルコトヲ條件トス

何レノ締約國ノ國民モ他方締約國ノ領域、屬地又ハ植民地内ニ於テ其ノ輸入及輸出ニ際シ如何ナル口實ヲ以テスルモ該國ノ國民又ハ別國ノ國民ノ納付スル所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ何等ノ關稅、内地課金又ハ租稅ヲモ徵收セラルルコトナカルヘシ

第二條 本條約ハ和蘭語、支那語及英吉利語ヲ以テ二通ヲ作成ス是等ノ本文ノ間ニ意義ノ相違アル場合ニハ英吉利文ニ表示セラレタル意義ニ據ルモノトス

第三條 本條約ハ成ルヘタ速ニ締約國ニ依リ批准セラルヘタ批准書ハ南京ニ於テ交換セラルヘシ本條約ハ兩國政府

カ互ニ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ實

施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

千九百二十八年十二月十九日即支那共和國十七年十二月十九日南京ニ於テ作ル

ダブルユー、ゼー、アウデンドハイク

王 正 廷

以書翰啓上致候陳者本日閣下ト本使ニ於テ署名シタル和蘭

國及支那國間ノ關稅關係ヲ規定スル條約第一條ノ意義及範

圍ニ關シ一切ノ疑問ヲ排除スルノ目的ヲ以テ本使ハ和蘭國

政府カ該條ニ於テ尙左ノ事項ヲ包含スルモノト思考スルモノナルコトヲ閣下ニ對シテ陳述スルノ光榮ヲ有シ候

締約國ノ一方ノ產品又ハ製品ハ他ノ一方ノ領域、屬地又ハ植民地ニ輸入セラルルニ際シ又ハ他ノ一方ノ領域、屬地又ハ植民地ニ輸出セラルルニ際シ同様ノ物品カ別國ヨリ輸入セラレ又ハ別國ヘ輸出セラルル場合ニ現ニ課セラレ又ハ今後課セラルルコトアルヘキ所ト異ルカ又ヘ之ヨリ高キ何等

ノ關稅、内地課金又ハ租稅ヲ課セラルコトナカルヘシ
貴輪及此ノ返輪ハ兩締約國間ニ於テ本條約ト同一ノ效力ヲ
有スヘキモノニ有之候

右回答申述旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

王 正 廷

支那國駐劄和蘭國公使

「ウイレム、ヤコブ、アウデンドイク」閣下

下名ハ本日關稅事項ニ關スル和蘭國及支那國間條約ニ署名シタル後兩國間ノ現行通商航海條約ノ改訂セラルル場合ニハ左記ノ問題モ亦討議及處理セラルヘキコトヲ各自國政府ニ代リテ茲ニ宣言ス

(一) 相互ノ領域内ニ於テ互ニ許與セラルヘキ無差別待遇ニ

關シ本日署名セラレタル條約第一條ニ定メラレタル規定ノ效力ヲ明ニ喪失セシムルカ如キ同一種類及同一用途ノ

物品ニ付テノ不合理ニシテ詳細綿密ナル分類及區別ノ回避

(二) 萬國條約ニ於テ關稅事項ニ關シ何等カ特別ノ利益カ或

種ノ義務ノ遂行ニ附屬セシメラルル場合ニハ和蘭國政府

及支那國政府ハ兩國政府カ何レモ右萬國條約ニ加入シタル場合ニノミ右利益ヲ相互ニ許與スヘシ

千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

「ガソリン」(礦物性ノモノ)箱入ニ非サルモノ

十米「ガロン」ニ付一、〇一二

機械油 從價 一二・五%

人造絹絲 從價 一〇%

煉乳 從價 一二・五%

毛製品及其ノ交織物(毛絲ヲ除ク) 從價 一五% 及一二・五%

紙、塗糊及「エナメル」シタルモノ又ハ塗糊若ハ「エナメル」シタルモノ、光澤ヲ附シタルモノ、「アート」印刷料紙、銀行券紙、筆記用紙、「グラッキン、ベーバー」ビューラ、ベーバー

浮彫附文ハ其ノ他裝飾附用紙 從價 一二・五%

紙、「ラッダ」ヲ含ムモノ 從價 一二・五%

紙、「メカニカル、ウードバルブ」ヲ含マサルモノ 從價 一〇%

紙、「クラフト」、包裝用紙 從價 一〇%

他ニ規定セラレサル一切ノ紙 從價 七・五%

「ココア」

尙本使ハ右國定稅率ハ其ノ公布後二箇月間ハ效力ヲ生セサルヘキモノト諒解致候

ダブルユー、ゼー、アウデンドイク
王 正 廷
以書翰啓上致候陳者關稅自主權ニ關スル閣下及本使間ノ會談ニ關シ本使ハ支那國國定稅率ノ實施セラルル場合ニハ本使カ右會談中舉示シタル物品ニ對シテハ右稅率ノ實施セラルヘキ日ヨリ起算シ一年間左記ノ最高稅率ヲ適用スルコト國民政府ノ意思ナリト諒解致候

糖蜜 從價 七・五%

赤砂糖(和蘭標本第十一號未滿ノモノ)及綠砂糖 從價 一二・五%

白砂糖(和蘭標本第十號ヲ超エタルモノ)但シ精製
糖ヲ含ム 從價 一二・五%

角砂糖及棒砂糖(白) 從價 一七・五%

冰砂糖 從價 一七・五%

石油類 從價 一七・五%

燈用石油 箱入ニ非サルモノ 從價 一七・五%

燈用石油 箱(五米「ガロン」ニ二纏)入ノモノ 從價 一七・五%

燈用石油 箱(五米「ガロン」入二纏)入ノモノ 從價 一七・五%

十「ガロン」ニ付〇、八四七
「ガソリン」、「ナフサ」及「ベンズ」(礦物性ノモノ)
箱(五米「ガロン」入二纏)入ノモノ 一箱ニ付一、〇五七

外交部長 王 正 廷 閣下

閣下ニ於テ前記事項ノ正否ヲ確認セラルルヲ得ハ幸甚ニ候

右申述旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

ダブルユー、ゼー、アウデンドイク

以書翰啓上致候陳者閣下ニ於テ支那國國定稅率ノ實施セラルル場合ニハ閣下カ閣下及本部長トノ會議中舉示セラレタル物品ニ對シテハ右稅率ノ實施セラルヘキ日ヨリ起算シ一年間閣下ノ引用セラレタル最高稅率ヲ適用スルコト國民政府ノ意思ナリト諒解セラルル旨本月十九日附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣意承致候

本部長ハ前記ノ陳述ヲ以テ正確ナリト確認スルノ光榮ヲ有シ候尤モ本部長ハ本回答ニ際シ貴翰中ニ舉示セラレタル稅率ノ或種ニ付再度審查致度存候

右回答旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

王 正 廷
支那國駐劄和蘭國公使
「ダブルユー、ゼー、アウデンドイク」閣下

(第十) 諾威國、支那國間ノ條約

關 稅 條 約

千九百二十八年十一月十二日
上海ニ於テ調印

諸威國及支那共和國ハ何レモ兩國間ニ幸ニ存在スル親善關係ヲ維持セシコトノ熱心ナル希望ニ促サレ且兩國間ノ通商關係ヲ擴張シ之ヲ鞏固ニセシコトヲ欲シ是等ノ目的ヲ促進スヘキ條約ヲ協定スル爲左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

諸威國皇帝陛下

支那國駐劄諾威國代理公使 「エヌ、オール」
支那共和國國民政府主席

支那共和國國民政府外長 王 正 延
因テ各全權委員ハ會合シ正當ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 諾威國及支那國間ニ從來締結セラレ且現ニ效力ヲ有スル諸條約ニ掲ケラレタル一切ノ規定ニシテ支那國ニ於ケル商品ノ輸入及輸出ニ對スル稅、戻稅、通過稅、噸稅ノ稅率ニ關スルモノハ之ヲ廢止シ其ノ效力ヲ喪失セシメ完全ナル國家ノ關稅自主權ノ原則ヲ適用スヘシ但シ諸國ノ一方ハ他ノ一方ノ領域内ニ於テ前記ノ事項並ニ之ニ關聯スル一切ノ事項ニ關シ別國ニ許與セラルル待遇ニ比シ毫モ差別的ナラサル待遇ヲ享有スルコトヲ條件トス何レノ締約國ノ國民モ他方締約國ノ領域内ニ於テ其ノ輸入及輸出ニ際シ如何ナル口實ヲ以テスルモ該國ノ國民又ヘ別國ノ國民ノ納付スル所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ何等ノ關稅、内地課金又ハ租稅ヲモ徵收セラルルコトナカルヘシ

第二條 本條約ノ英吉利文及支那文ハ慎重ニ比較照合セラレタルモ兩文ノ間ニ意義ノ相違アリタル場合ニハ英吉利文ニ表示セラレタル意義ニ據ルモノトス

本條約ハ成ルヘク速ニ批准セラルヘク兩國政府カ批准ノ完了セラレタルコトヲ相互ニ通告シタル日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ支那文及英吉利文ニテ作成セラレタル本條約二通ニ署名調印セリ

千九百二十八年十一月十二日即支那共和國十七年十一月十二日上海ニ於テ作成ス

支那國駐劄諾威國全權代理公使 エヌ、オール
支那共和國國民政府全權外交長 王 正 延
交換公文

(千九百二十八年十一月十五日)

王 正 延

支那國駐劄諾威國代理公使「エヌ、オール」殿

以書翰啓上致候陳者諾威國政府力均等及主權ノ相互尊重ヲ基礎トシテ千八百四十七年ノ條約ニ代ルヘキ新條約締結ノ爲文渉ヲ開始スヘキコトヲ提議スル本月十五日附貴翰ノ趣敬承致候
諾威國政府カ關稅及其ノ關係事項ニ關スル新條約ヲ提議セル千九百二十八年九月十二日附貴翰中ニ表示セラレタル希望ニ早速應シタルノ事實ハ本官ノ見ル所ニ依レハ諾威國ノ支那共和國ニ對シテ抱懷スル友情ヲ證シテ餘リアルモノニ候而シテ此ノ友情カ兩國間ニ於テ新關稅條約ノ締結トナリテ現レタル日本官ハ均等及主權ノ相互尊重ヲ基礎トシテ千八百四十七年ノ條約全體ノ改訂問題ヲ審議セラルル場合諾威國政府ノ友好的態度ハ改變セラルコトナカルヘキコトヲ深ク信シ居リ候

右回答申述旁本官ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

セシムルトキハ困難及紛糾ノ發生ノ因ツ爲スヘキ旨陳述スルノ光榮ヲ有シ候此ノ故ニ貴國政府力均等及主權ノ相互尊重大ノ基礎トシテ千八百四十七年ノ條約ニ代ルヘキ新條約締結ノ爲支那共和國國民政府ト直ニ交渉ヲ開始セラレント
本部長ノ希望ニ有之候

(第十二) 葡萄牙國、支那國間ノ條約

澳門割讓ニ關スル葡清 議定書

千八百八十七年三月二十六日

葡萄牙國王政府及清國皇帝ノ政府ハ兩國間ニ既ニ三世紀間以上存在スル友好關係ヲ條約ニ議定セント欲シ此ニ豫備議定書ヲ作成ス之カ爲ニ下ニ署名セル葡國外務大臣 Henrique De Barros Gomes 及清國海關幫辦 James Duncan Campbell ハ各其本國政府ヨリ適法ノ委任ヲ受ケ次ノ議定書ヲ協定セリ

第一條 最惠國約款ヲ有スル友好及通商ノ條約ハ北京ニ於テ締結印セラルヘシ

第二條 清國ハ澳門及其附屬地カ他ノ葡國領土ト同シク永久ニ葡國ノ占有及支配ノ下ニアルヘキソ確認ス

第三條 葡萄牙ハ清國ノ同意ヲ受ケルコトナクシテ澳門及

澳門割讓ニ關スル葡清 條約

千八百八十七年十二月一日
光緒十三年十月十七日

第一條 葡萄牙國並ニ「アルガルアス」皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間ノ平和ト親交トハ永久ナルヘク而ジテ兩國民ハ本條約締結者相互ノ領土内ニ於テ生命財産ニ對スル完全有效ナル保護ヲ受クヘキモノナリ

第二條 大清國ハ葡萄牙國ノ永久的澳門占有並ニ統治ニ關スル「リスボン」締約第二條ヲ全部承認スルモノナリ

但シ境界線確定ノ爲雙方政府ハ委員ヲ任命シ而シテ其境界線ハ特別協約ニ依リテ之ヲ定ムヘシ境界線確定ノ件完了セサル間ハ其問題ニ關シテハ凡テ現狀ヲ維持シ締盟國

何レモ加減變更ヲ爲ササルヘシ

第三條 葡萄牙國ハ大清國ト前以テ協約ナクシテ澳門ヲ他ニ譲リ渡ササルコトニ關スル「リスボン」締約第三條ノ全

部ヲ承認スルモノナリ

(以下省略)

修好通商暫定條約

千九百二十八年十二月十九日
南京ニ於テ調印

「ボルトガル」共和國及支那共和國ハ四百年以上幸ニ兩國間ニ存在シタル友好關係ヲ鞏固ニシ且其ノ通商關係ヲ増進シ堅固ナラシメントノ希望ニ均シ促サレ修好通商暫定條約ヲ締結スルニ決シ之カ爲ニ左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命

「ジヨアン、アントニオ、デ、ビアンキ」

支那共和國、國民政府主席

支那共和國國民政府外交部長 王 正 廷

因テ各全權委員ハ會合シ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 兩締約國ハ關稅及之ニ關聯スル一切ノ事項ニ關シ締約ラ各其ノ國ノ國法ニ依リ規定セラルヘキコトヲ約ス
尙兩締約國ハ關稅稅率及之ニ關聯スル一切ノ事項ニ關シ締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ領域内ニ於テ如何ナル所ヨリ不利益ナル待遇ヲ課セラレサルコトヲ約ス

「ボルトガル」共和國及支那共和國ハ四百年以上幸ニ兩國間ニ存在シタル友好關係ヲ鞏固ニシ且其ノ通商關係ヲ増進シ堅固ナラシメントノ希望ニ均シ促サレ修好通商暫定條約ヲ締結スルニ決シ之カ爲ニ左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命

カルヘシ

第二條 各締約國ノ國民ハ他方締約國ノ領域内ニ於テ該締約國ノ法令及其ノ裁判所ノ裁判權ニ服スヘク其ノ權利ノ主張及擁護ノ爲自由且容易ニ裁判所ニ申出ツルコトヲ得ヘシ

第三條 兩締約國ハ絕對的均等、通商關係ニ於ケル無差別待遇及主權ノ相互尊重ノ原則ニ基ク通商航海條約締結ノ目的ヲ以テ成ルヘク遠ニ交渉ヲ開始スヘキコトニ決定セリ

第四條 本條約ハ「ボルトガル」語、支那語及英吉利語ヲ以テ二通ヲ作成ス解釋ニ付相違アル場合ニハ英文ノ本文ヲ以テ標準トス

第五條 本條約ハ成ルヘク遠ニ批准セラルヘク兩國政府カ互ニ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ
一千九百二十八年十二月十九日即支那共和國十七年十二月十九日南京ニ於テ作ル

王 正 廷 (印)

王 正 廷

「華盛頓諸條約ノ署名國」トハ一千九百二十一年乃至二十二年
華盛頓ニ於テ開催セラレタル軍備縮小會議ニ於テ太平洋及
極東問題ノ討議ニ直接參加シタル支那國以外ノ諸國ノ義ト
解セラルヘク候
右申述旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
一千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

支那國駐劄ボルトガル國公使

「ジョアン、アントニオ、デ、ビアンキ」閣下

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左記ノ趣旨申越相成

敬承致候

「本部長ハ本日支那國及「ボルトガル」國間ニ署名セラレ

タル條約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力ヲ發生

スルモノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ名ニ

於テ陳述スルノ光榮ヲ有シ候 右期日前ニ支那國政府ハ

「ボルトガル」國國民ニ對スル裁判權ノ回復ニ關シ「ボル

トガル」國政府ト細目協定ヲ爲スヘタ候前記ノ期日迄ニ

右協定ノ成立セサル場合ニハ「ボルトガル」國國民ハ支那國

カ治外法權ノ撤廢ニ付華盛頓諸條約ノ署名國全部ト協定

ヲ締結シタル後定ムヘキ期日ヨリ支那國ノ法令及裁判權

ニ服スヘキモノニ候尤モ右期日ハ前記諸國ノ全部ニ對シテ

適用セラルヘキモノニ有之候 「華盛頓諸條約ノ署名國」

トハ一千九百二十一年乃至二十二年華盛頓ニ於テ開催セラ

タル軍備縮小會議ニ於テ太平洋及極東問題ノ討議ニ直

接參加シタル支那國以外ノ諸國ノ義ト解セラルヘク候」

本使ハ「ボルトガル」國政府カ前記ノ陳述ニ全然同意ナルコトヲ陳述スルノ光榮ヲ有シ候

修好通商暫定條約

附屬書第一

本部長ハ一千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ
諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那共和國國民政府ニ依
リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス
附屬書第二

附屬書第三

宣 言

本部長ハ一千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ
諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那共和國國民政府ニ依
リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス
立場ニ立ツニ至リタル場合ニハ支那國政府ハ現ニ支那國人
民カ「ボルトガル」國ノ法令及規則ニ規定セラルル制限ニ從
ヒ「ボルトガル」國ノ領域ノ如何ナル部分ニ於テモ居住、通
商及財產取得ノ権利ヲ享有スル事實ニ鑑ミ支那國ニ於ケル

「ボルトガル」國國民ニ對シ其ノ法令及規則ニ規定セラルヘ

キ制限ニ服スルコトヲ條件トシテ同一ノ權利ヲ許容スヘキ
コトヲ支那共和國政府ノ名ニ於テ宣言スルノ光榮ヲ有ス

王 正 廷

附屬書第四

共同宣言

支那國領域内ニ於ケル「ボルトガル」國國民及「ボルトガル」
國領域内ニ於ケル支那國人民ハ今後支那國政府及「ボルト
ガル」國政府ニ依リ夫々正當ニ發布セラルル法令及規則ニ
規定セラルヘキ稅金又ハ課金ヲ支拂フヘキモノトス但シ右
稅金又ハ課金ハ別國ノ國民ニ依リ支拂ハル所ト異リ又ハ
之ヨリ高キモノナルコトヲ得ス

ジョアン、アントニオ、デ、ピアンキ

王 正 廷

附屬書第五

以書翰啓上致候陳者本日閣下ト本使ニ於テ署名シタル條約
第一條ニ關シ本使ハ該條カ左記ノ原則ヲ包含スルモノナリ
ト解釋セラルヘシトノ本使ノ諒解ヲ閣下ニ於テ確認セラレ
ンコトヲ要求スルノ光榮ヲ有シ候

右申造旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ

支那國駐劄「ボルトガル」國公使

王 正 廷

本部長ハ前記ノ正確ナルコトヲ確認スルノ光榮ヲ有シ候
右回答旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
ナカルヘシ

本部長ハ前記ノ正確ナルコトヲ確認スルノ光榮ヲ有シ候
右回答旁本部長ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
「ジョアン、アントニオ、デ、ピアンキ」閣下

附屬書第六

以書翰啓上致候陳者本日閣下及本部長ニ於テ署名シタル條
約及其ノ附屬書ニ關シ本部長ハ該條約並ニ宣言及交換公文
中ニ使用セラレタル「領域」ナル語ハ各締約國ノ屬地及殖民地ヲ包含ス
地ヲ包含スルモノナルコト本部長ノ諒解ナルコトヲ陳述スルノ光榮ヲ有シ候
閣下ニ於テ前記ノ正確ナルコトヲ確認セラルルヲ得ハ幸甚

ニ候

締約國ノ一方ノ領域内ニ於テ產出又ハ製造セラレタル物品
ハ他ノ一方ノ領域ニ輸入セラルルニ際シ又ハ自國ノ領域ヨ
リ他ノ一方ノ領域ニ輸出セラルルニ際シ別國ニ於テ產出又
ハ製造セラレテ別國ヨリ輸入セラルル同様ノ物品又ハ該國
ニ於テ產出又ハ製造セラレテ別國へ輸出セラルル同様ノ物
品ニ對シ夫々支拂ハル所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ何等ノ
關稅、内地課金又ハ租稅ヲ課セラルルコトナカルヘシ

右申造旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ
ジョアン、アントニオ、デ、ピアンキ
外交部長 王 正 廷閣下

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左記ノ趣旨申越相成
敬承致候

「本日閣下ト本使ニ於テ署名シタル條約第一條ニ關シ本
使ハ該條カ左記ノ原則ヲ包含スルモノナリト解釋セラレ
ヘシトノ本使ノ諒解ヲ閣下ニ於テ確認セラレシコトヲ要
求スルノ光榮ヲ有シ候
締約國ノ一方ノ領域内ニ於テ產出又ハ製造セラレタル物
品ハ他ノ一方ノ領域ニ輸入セラルルニ際シ又ハ自國ノ領
域ヨリ他ノ一方ノ領域ニ輸出セラルルニ際シ別國ニ於テ

「ジョアン、アントニオ、デ、ピアンキ」閣下
本使ハ前記ノ正確ナルコトヲ確認スルノ光榮ヲ有シ候
右回答旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百二十八年十二月十九日南京ニ於テ
ジョアン、アントニオ、デ、ピアンキ
外交部長 王 正 廷閣下

（第十二）西班牙國、支那國間ノ條約

修好通商暫定條約

千九百二十八年十二月二十七日
南京ニ於テ調印

西班牙國及支那共和國ハ幸ニ兩國間ニ存在スル友好關係ヲ
鞏固ニシ其ノ通商關係ヲ増進シ日堅固ニセントノ希望ニ均
シク促サレ修好通商條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲左ノ
如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

西班牙國皇帝陛下

支那國駐劄西班牙國特命全權公使

「ドン、フスト、ガリド、イ、シスネーロス」

支那共和國國民政府主席

支那共和國國民政府外交部長 王 正 廷

因テ各全權委員ハ會合シ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良
好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

目的ヲ以テ成ルヘク速ニ交渉ヲ開始スヘキコトニ決定セリ

第四條 本條約ハ西班牙語、支那語及英吉利語ヲ以テ二通
ヲ作成ス解釋ニ付相違アル場合ニハ英文ノ本文ヲ以テ標
準トス

第五條 本條約ハ成ルヘク速ニ批准セラルヘク兩國政府カ

互ニ批准ノ完了セラレタルコトヲ通告シタル日ヨリ實施

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ

千九百二十八年十二月二十七日即支那共和國十七年十二月
二十七日南京ニ於テ作ル

ガリド、イ、シスネーロス (印)
王 正 廷 (印)

支那國駐劄西班牙國公使

「ドン、フスト、ガリド、イ、シスネーロス」閣下

以書翰啓上致候陳者本部長ハ本日支那國及西班牙國間ニ署

名セラレタル條約第二條カ千九百三十年一月一日ヨリ效力

ヲ發生スルモノト諒解セラルヘキ旨支那共和國國民政府ノ

名ニ於テ陳述スルノ光榮ヲ有シ候
右期日前ニ支那國政府ハ西班牙國國民ニ對スル裁判權ノ回
收ニ關シ西班牙國政府ト細目協定ヲ爲スヘク候前記ノ期日

國國民ニ對スル裁判權ノ回収ニ關シ西班牙國政府ト細目協定ヲ爲スヘク候前記ノ期日迄ニ右協定ノ成立セサル場合ニハ西班牙國國民ハ支那國カ治外法權ノ撤廢ニ付華盛頓諸條約ノ署名國全部ト協定ヲ締結シタル後定ムヘキ期

諸法典及法令ノ外ニ民法及商法カ支那國國民政府ニ依リ正當ニ發布セラルヘキコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

王 正 廷

附屬書第三

宣 言

期日ハ前記諸國ノ全部ニ對シテ適用セラルヘキモノニ有之候「華盛頓諸條約ノ署名國」トハ千九百二十一年乃至二十二年華盛頓ニ於テ開催セラレタル軍備縮小會議ニ於テ太平洋及極東問題ノ討議ニ直接參加シタル支那國以外ノ諸國ノ義ト解セラルヘク候」

本使ハ西班牙國政府カ前記ノ陳述ニ全然同意ナルコトヲ陳述スルノ光榮ヲ有シ候

右回答旁本使ハ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十八年十二月二十七日南京ニ於テ

ガリド、イ、シスネーロス

外交部長 王 正 廷 閣下

附屬書第二

宣 言

本部長ハ千九百三十年一月一日又ハ夫レ以前ニ於テ現行ノ

支那國領域内ニ於ケル西班牙國臣民及西班牙國領域内ニ於

附屬書第四

共 同 宣 言

ケル支那國人民ハ今後西班牙國政府及支那國政府ニ依リ夫夫正當ニ發布セラルル法令及規則ニ規定セラルヘキ稅金又ハ課金ヲ支拂フヘキモノトス但シ右稅金又ハ課金ハ別國ノ國民ニ依リ支拂ハル所ト異リ又ハ之ヨリ高キモノナルコトヲ得ス

ガリド、イ、シスネーロス

王 正 廷

第四編 日本國、支那國間條約

修好條規

明治四年七月二十九日調印

同六年三月九日批准

大日本國ト大清國ハ古來友誼敦厚ナルヲ以テ今般一同舊好ヲ修メ益邦交ヲ固クセント欲シ

大日本國欽差全權大臣從二位大藏卿伊達

大清國欽差全權大臣辦理通商事務太子太保協辦大學士李

各奉シタル上諭ノ旨ニ遵ヒ公同會議シテ修好條規ヲ定メ以

テ雙方信守シ久遠替ラサル事ヲ期ス其議定セシ各條左ノ如

シ

第一條 此後大日本國ト大清國ハ彌和誼ヲ敦クシ天地ト共ニ窮マリ無ルヘシ又兩國ニ屬シタル邦土モ各禮ヲ以テ相待チ聊侵越スル事ナク永久安全ヲ得セシムヘシ

第二條 兩國好ヲ通セシ上ハ必ス相關切ス若シ他國ヨリ不

公及ヒ輕藐スル事有ル時其知ラセヲ爲サハ何レモ互ニ相助ケ或ハ中ニ入り程克ク取扱ヒ友誼ヲ敦クスヘシ

第三條 兩國ノ政事禁令各異ナレハ其政事ハ己國自主ノ權

ニ任スヘシ彼此ニ於テ何レモ代謀干預シテ禁シタル事ヲ取り行ハント請ヒ願フ事ヲ得ス其禁令ハ互ニ相助ケ各其商民ニ諭シ土人ヲ誘惑シ騒邊犯有ルヲ許セス

第四條 兩國秉權大臣ヲ差出シ其眷屬隨員ヲ召具シテ京師ニ在留シ或ハ長ク居留シ或ハ時々往來シ内地各處ヲ通行スル事ヲ得ヘシ其入費ハ何レモ自分ヨリ拂フヘシ其地西家宅ヲ貸借シテ大臣等ノ公館ト爲シ竝ニ行李ノ往來及ヒ飛脚ヲ仕立書狀ヲ送ル等ノ事ハ何レモ不都合ナキ様世話イタスヘシ

第五條 兩國ノ官位何レモ定品有リト雖モ職ヲ授ル事各同カラス因テ彼此ノ職掌相當スル者ハ應接及ヒ交通トモ均ク對待ノ禮ヲ用フ職卑キ者ト上官ト相見ルニハ客禮ヲ行ヒ公務ヲ辦スルニ付テハ職掌相當之官へ照會シテ其上官へ轉申シ直達スル事ヲ得ス各雙方禮式ノ出會ニハ各官位ノ名帖ヲ用フ凡兩國ヨリ差出シタル官員初テ任所ニ到着セハ印證アル書付ヲ出シ見セ假目ナキ様ノ防キソナスヘシ

第六條 此後兩國往復スル公文大清ハ漢文ヲ用ヒ大日本ハ日本文ヲ用ヒ漢譯文ヲ副フヘシ或ハ只漢文ノミツ用ヒ其便ニ從フ

第七條 兩國好ミヲ通セシ上ハ海岸ノ各港ニ於テ彼此共ニ

場所ヲ指定メ商民ノ往來貿易ヲ許スヘシ猶別ニ通商章程ヲ立テ兩國ノ商民ニ永遠遵守セシムヘシ

第八條 兩國ノ開港場ニハ彼此何レモ理事官ヲ差置キ自國商民ノ取締ヲナスヘシ凡家財産業公事訴ニ干係セシ事件ハ都テ其裁判ニ歸シ何レモ自國ノ律例ヲ按シテ糺辦スヘシ兩國商民相互ノ訴訟ニハ何レモ願書體ヲ用フ理事官

ハ先ツ理解ヲ加ヘ成丈ケ訴訟ニ及ハサル様ニスヘシ其儀能ハサル時ヘ地方官ニ掛合ヒ雙方出會シ公平ニ裁斷スヘシ尤盜賊欠落等ノ事件ハ兩國ノ地方官ヨリ召捕リ吟味取上ケ方致ス而已ニシテ官ヨリ償フ事ハナササルヘシ

第九條 兩國ノ開港場ニ若シ未タ理事官ヲ置タル時ハ其人民貿易何レモ地方官ヨリ取締リ世話スヘシ若シ罪科ヲ犯サハ本人ヲ捕テ吟味ヲ遂ケ其事情ヲ最寄開港場ノ理事官

ハ先ツ理解ヲ加ヘ成丈ケ訴訟ニ及ハサル様ニスヘシ

第十條 兩國ノ官吏商人ハ諸開港場ニ於テ何レモ其地ノ民人ヲ雇ヒ雜役手代等ニ用フル事勝手ニ爲ヘシ尤其雇主ヨリ時々取締ヲ爲シ事ニ寄セんヲ欺タ事ナカラシメ別シテ其私言ヲ個聴シテ事ヲ生セシムヘカラス若犯罪ノ者有ラハ其地方官ヨリ召捕リ糾辦スルニ任セ雇主ヨリ庇フ事ヲ

正スヘシ

第十四條 兩國ノ兵船開港場ニ往來スル事ハ自國ノ商民ヲ保護スル爲メナレハ都テ未開港場及ヒ内地ノ河湖支港ヘ乗入ル事ヲ許サス違フ者ハ引留テ罰ヲ行フヘシ尤風ニ遇ヒ難ヲ避ケルタメニ乗入りタル者ハ此例ニ在ラス

第十五條 一此後兩國若シ別國ト兵ヲ用フル事有ルニ付防禦致スヘキ各港ニ於テ布告ヲナサハ暫ク貿易並ニ船隻ノ出入ヲ禁止メ誤テ傷損ヲ受ケサラシムヘシ又平時ニ於テ大日本人ハ大清ノ開港場及ヒ最寄ノ海上大清人ハ大日本ノ開港場及ヒ最寄ノ海上ニテ何レモ不和ノ國ト互ニ争鬭搶劫スル事ヲ許サス

第十六條 兩國ノ理事官ハ何レモ貿易ヲ爲ス事ヲ得ス亦條約無キ國ノ理事官ヲ兼勤スル事ヲ許サス若シ事務ノ計ヒ

第十一條 兩國ノ商民諸開港場ニテ彼此往來スルニ付テハ互ニ友愛スヘシ刀劍類ヲ携帶スル事ヲ得ス違フ者ハ罰ヲ行ヒ刀劍ハ官ニ取上クヘシ又何レモ其本分ヲ守リ永住暫居ノ差別無ク必ス自國理事官ノ支配ニ從フヘシ衣冠ヲ替へ改メ其地ノ人別ニ入り官途ニ就キ紛ヘシキ儀有ル事ヲ許サス

第十二條 此國ノ人民此國ノ法度ヲ犯セシ事有テ彼國ノ役所商船會社等ノ内ニ隠い忍ヒ或ハ彼國各處ニ遁ケ潛ミ居ル者ヲ此國ノ官ヨリ查明シテ掛合越サハ彼國ノ官ニテ早速召捕ヘ見通ス事ヲ得ス囚人ヲ引送ル時ヘ途中衣食ヲ與ヘ凌虐スヘカラス

第十三條 兩國ノ人民若シ開港場ニ於テ兇徒ヲ語合盜賊惡事ヲ爲シ或ハ内地ニ潜ミ入り火ヲ附ケ人ヲ殺シ劫奪ヲ爲ス者有ラハ各港ニテハ地方官ヨリ嚴ク捕ヘ直ニ其次第ア理事官ヘ知ラスヘシ若シ兇器ヲ用ヒ手向ヒセヘ何レニ於テモ格殺シテ論無カルヘシ併シ之ヲ殺セシ事情ヘ理事官ト出會シテ一同ニ查驗スヘシ若シ其事内地ニ發リテ理事官自ラ赴キ查驗スル事届キカネル時ヘ其地方官ヨリ實在ノ情由ヲ理事官ニ照會シテ查照セシムヘシ尤縛シテ取り

方衆人ノ心ニ協ハサル實據有ラヘ彼此何レモ書面ヲ以テ秉權大臣ニ掛合ヒ查明シテ引取ラシムヘシ一人寧テ破ルニ因テ兩國ノ友誼ヲ損傷スルニ至ラシメス

第十七條 兩國ノ船印ハ各定式アリ萬一彼國ノ船印ヲ假冒シテ私ニ不法ノ事ヲ爲サハ其船並ニ荷物トモ取上クヘシ若シ其船印官員ヨリ波シタル者ナラハ其筋ニ申立官ヲ罷メシムヘシ又兩國ノ書籍ハ彼此通習ハント頗ヘハ互ニ賣買スル事ヲ許スヘシ

第十八條 兩國議定セシ條規ハ何レモ預メ防範ヲ爲シ偶撫障ヲ生スルヲ免レシメ以テ講和修好ノ道ヲ盡ス所ナリ是ニ因テ兩國欽差全權大臣證據ノ爲メ先ツ花押調印ヲナシ置キ兩國御筆ノ批准相濟ミ互ニ取替ヘセシ後ニ即チ版刻シテ各處ニ通行シ彼此ノ官民ニ普ク遵守セシメ永ク以テ好ミヲ爲スヘシ

明治四年辛未七月廿九日
同治十年辛未七月廿九日

通商航海條約並議定書

明治二十九年七月二十一日北京
ニ於テ調印

同年十月二十日北京ニ於テ批准
書交換

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ間ニ於テ調印セラレタル條約第六條ノ規定ニ依リ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決セリ因テ大日本國皇帝陛下ハ北京駐劄特命全權公使正四位勳一等男爵林董ヲ大清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書鴻臚寺左侍郎張蔭桓ヲ各其ノ全權大臣ニ任命シタルヲ以テ兩國ノ全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 大日本國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間茲ニ兩國臣民ノ間ニ永遠無窮ノ平和及親睦アルヘシ而シテ兩國臣民ハ各々兩締盟國ノ一方ニ於テ其ノ身體及財產ニ對シ等シク完全ナル保護ヲ享有スヘシ

第二條 大日本國皇帝陛下ハ便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ清國

北京ニ駐劄セシムルコトヲ得大清國皇帝陛下モ亦便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ日本國東京ニ駐劄セシムルコトヲ得右駐劄外交官ハ各々國際公法ニ因リ之ニ附與スル一切ノ權利、特權及免除ヲ享有シ且總テ最惠國ノ同様ノ外交官ニ附與スル所ノ待遇ヲ受ケルコトヲ得其ノ身體、家族、隨員、衙署、居館及往復書信ハ犯スヘカラサルモノトス右外交官ハ毫モ障礙セラルコトナク其ノ役員、使丁、通譯人、僕婢及從者ヲ隨意ニ選用スヘシ

第三條 大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲メニ現ニ開カレ若ハ將來開カルヘキ清國ノ港市ノ内日本帝國ノ利害ニ心要ナリト認ムル場所ニ總領事、領事、副領事及代理事ヲ駐在セシムルコトヲ得

右領事官ハ清國官吏ヨリ相當ノ禮遇ヲ受ケ且最惠國ノ領事官ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキモノトス裁判管轄權、特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

大清國皇帝陛下モ亦同シク日本國內ニ於テ他國ノ領事官

カ現ニ駐在シ若ハ將來駐在スヘキ場所ニ總領事、領事、副領事及代理事ヲ駐在セシムルコトヲ得而シテ右領事官ハ日本國ニ在ル清國臣民及財產ニ對スル日本帝國裁判所ノ裁判管轄權ニ屬スル事項ヲ除クノ外通常領事官ニ附與スル權利及特典ヲ享有スヘシ

第四條 日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲メ開キ又ハ將來開タヘキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ、住居シ、商工業、製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ從事シ且其ノ商品及携帶品ヲ輸載シ前記諸開港地ノ間ア隨意ニ往來スヘク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲メ既ニ選定シ若ハ將來選定セラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ貸借賣買シ地所ヲ貸借シ寺院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

第五條 日本國船舶ハ現ニ立寄港ナル安慶、大通、湖口、武穴、陸溪口及吳淞並ニ将来立寄港トセラルヘキ總テノ場所ニ於テ外國貿易ニ關スル現行章程ニ從ヒ旅客商品ヲ積卸セシムル爲メ之ニ寄港スルコトヲ得

第六條 日本國臣民ハ自國領事ヨリ下附シ地方官ノ副署シタル旅券ヲ持帶スルトキハ游歷又ハ商用ノ爲メ清國內地ノ

各部ニ旅行スルコトヲ擇而シテ該旅券ハ旅行地方ニ於テ検査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキモノトス該旅券ニ不正ノ點ナキニ於テハ持帶者ハ進行ヲ許可セラレ且其ノ旅行用ノ爲メ又ハ持帶品商品運搬ノ爲メ人夫、畜類、車輛、船隻ヲ雇入ルルニ故障アルヘカラス若シ旅行者ニシテ旅券ヲ持帶セス又ハ法律ヲ犯ストキハ之ヲ處分スル爲メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ但シ其ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ決シテ之ヲ虐待スヘカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ清曆十三箇月間效力ヲ有スヘシ日本國臣民旅券ヲ持帶セスシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セサル罰金ニ處スヘシ尤モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日間ヲ限トシ旅券ヲ持帶セスシテ游歷スルコトヲ得但シ本條ノ規定ハ之ヲ船舶乗組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得ス

第七條 清國ノ開港地ニ居住スル日本國臣民ハ清國臣民ヲ雇入レ總テ正當ノ業務ニ之ヲ使用スルコトヲ得但シ清國政府又ハ官吏ニ於テ之ヲ制限シ或ハ妨礙スルコトヲ得ス

第八條 日本國臣民ハ荷物又ハ旅客運搬ノ爲メ一切ノ艤隻ヲ貨借スルコトヲ得而シテ之カ爲メ拂フヘキ金額ハ貨借

人相互ノ間ニ於テ之ヲ定メ清國政府又ハ官吏之ニ干涉スルコトヲ得ス。艇數ニ對シ制限ヲ置クヘカラス又ハ右艇隻ニ關シ若ハ貨物運搬ニ從事スル人夫ニ關シ何人ニモ專業免許ヲ附與スルコトヲ得ス而シテ右艇隻ヲ以テ密商ニ從事スルモノハ法ニ照シ之ヲ處罰スヘシ。

第九條 清國ト泰西諸國トノ間ニ實施スル稅目及稅則ハ日本國臣民カ清國へ輸入シ若ハ日本國ヨリ清國へ輸入シ又ハ日本國臣民カ清國ヨリ輸出シ若ハ清國ヨリ日本國へ輸出スル際一切ノ物品ニ適用スヘシ。清國ト泰西諸國トノ間ニ存在スル稅目及稅則ニ於テ特ニ輸入若ハ輸出ヲ制限シ若ハ禁止セサル物品へ規定ノ輸入稅若ハ輸出稅ヲ拂フノミニテ自由ニ清國へ輸入シ若ハ清國ヨリ輸出スルコトヲ得ヘシ但シ日本國臣民ハ何等ノ場合ニ於テモ最惠國臣民若ハ人民カ清國ニ於テ現ニ納メ若ハ將來納ムヘキ輸出入稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ納稅ヲ要セラル。コトナカルヘシ又日本國ヨリ清國へ輸入シ或ハ清國ヨリ日本國へ輸出スル一切ノ物品ハ其ノ輸出入ニ際シ最惠國ヨリ輸入シ或ハ之へ輸出スル同様ノ物品ニ對シ清國ニ於テ現ニ課セラレ若ハ將來課セラルヘキモノト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラル。コトナカルヘシ。

月ノ期限内ニ現ニ外國ニ輸出セラレタル場合ニ限ル

日本國臣民カ清國ノ開港地ニ於テ買入レタル一切ノ清國生産物及物品ニシテ海外輸出ヲ禁セラレサルモノハ輸出ノ際單ニ輸出稅ヲ納ムル外ハ一切ノ内地稅、賦課金、手數料、釐金等ヲ免除セラルヘシ。日本國臣民カ清國各地ニ於テ輸出ノ爲メ買入レタル一切ノ物品モ亦現行章程ニ從ヒ各開港間ニ運搬スルヲ得ルモノトス。

第十三條 商品ニシテ其ノ出所外國ニ屬スルコト僞ナク且之ニ對シ已ニ輸入稅ヲ完納シタルトキハ其ノ輸入ノ日ヨリ三箇年内何時モ日本國臣民ニ於テ何等ノ輸出稅ヲ納ムルコトナクシテ之ヲ清國ヨリ何レノ外國ヘモ輸出スルヲ得又該再輸出者ハ已ニ右商品ニ對シテ納メラレタル輸入稅額ニ向テ清國稅關ヨリ稅金拂戻證書ヲ受タヘシ但シ該商品ハ原荷作ノ儘完全ニ保存セラレ異動ナキヲ要ス。右拂戻證書ハ其ノ所有者ノ望ニ因リ清國稅關官吏ニ於テ現金ヲ以テ之ヲ償辨スルヲ得ヘキモノトス。

第十四條 清國政府ハ其ノ諸開港地ニ於テ貯蔵倉庫ヲ設タルコトニ同意ス。本件ニ關スル規則ハ追テ之ヲ設クヘシ。

第十五條 日本國ノ商船ニシテ噸數百五十噸以上ノモノハ清國ノ開港ニ入航スルニ當リ其ノ登記噸數一噸ニ付清銀

通商航海條約並議定書

第十條 日本國臣民カ清國へ輸入シ或ハ日本國ヨリ清國へ輸入シタル一切ノ物品ハ現行章程ニ從ヒ開港場ト開港場ノ間ヲ運搬中其ノ所有者ノ國籍或ハ之ヲ運搬スル運具船舶ノ國籍如何ニ拘ヘラス之ニ對シ全ク各種ノ稅金、賦課金、手數料、釐金等ヲ取立ツヘカラス。

第十一條 日本國臣民ニシテ輸入物品ヲ清國內地ノ市場ニ運搬セムト欲スルモノハ其ノ物品ノ有稅品ナルトキハ輸入稅ノ二分ノ一、無稅品ナルトキハ從價二分半ニ當ル。抵代稅ヲ拂ヒ以テ其ノ物品ニ對スル一切ノ通過稅ノ免除ヲ受クルコト其ノ勝手タルヘシ而シテ右抵代稅ヲ拂ヒタルトキハ該物品ニ對シ一切ノ内地稅ヲ免除スル爲メ證書ヲ發附スヘキモノトス。

但シ本條ハ輸入阿片ニヘ適用セサルコトト知ルヘシ。

第十二條 清國ニ在ル日本國臣民カ清國開港外ノ地ニ於テ買入レタル一切ノ清國生産物及物品ニシテ輸出セラレムトスルモノハ前條ニ記載シタル稅率ニ依リ輸入稅ノ代リニ輸出稅ヲ某處トシテ算出シタル抵代稅ヲ拂ヒタル上其ノ輸出ニ際シ單ニ輸出稅ヲ拂フ外ハ清國各地ニ於テ各種ノ稅金、賦課金、手數料、釐金等ヲ免セラルヘシ但シ右ハ前記ノ生産物及物品ニシテ通過稅仕拂ノ日ヨリ十二箇

四錢ノ割ヲ以テ噸稅ヲ課セラルヘシ。噸數百五十噸及其ノ以下ノモノハ登記噸數一噸ニ付一錢ノ割トス。然レトモ右船舶ニシテ其ノ積荷ニ異動ナク入港後四十八時間以内ニ出港スルモノハ噸稅ヲ免除セラルヘシ。

日本國ノ船舶前記ノ噸稅ヲ納メタル上ハ該稅ヲ納メタル港口出發ノ日ヨリ向フ四箇月間ハ清國ノ何レノ開港或ハ立寄港ニ於テモ噸稅ヲ免除セラルヘシ但シ日本國ノ船舶ハ清國ニ於テ現ニ修繕ヲ加ヘ居ル間ハ噸稅ヲ納ムルヲ要セス。

清國ノ何レノ開港間ニ於テ旅客、手荷物、書束、無稅品運搬ノ爲メ日本國臣民ノ使用スル小船及艇隻ハ噸稅ヲ納ムルコトナカルヘシ尤モ其ノ運搬ノ時ニ當リ稅金ヲ課セラルヘキ商品ヲ運搬スル所ノ小船及荷舟ハ總テ一噸ニ付一錢ノ割ヲ以テ四箇月毎ニ一回噸稅ヲ納ムヘシ。

日本國ノ船舶及艇隻ニ對シテハ噸稅ノ外別ニ手數料或ハ賦金ヲ課スルコトナカルヘシ但シ日本國ノ船舶及艇隻ハ最惠國ノ船舶及艇隻ノ噸稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ

噸稅ヲ納ムルコトナシト知ルヘシ。

第十六條 清國ノ開港ニ來航スル日本國ノ商船ハ其ノ入港ノ権隨意ニ水先案内者ヲ雇入ル。コトヲ得談商船體テ正

當ノ諸稅皆納ノ上出發セムトスル時ハ出港ノ際ニモ亦水先案内者ヲ使用スルコトヲ得

第十七條 日本國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ最寄ノ何レノ清國港口ニモ入港スルコトヲ得尤モ其ノ船舶ノ修繕ヲ遂ル爲メ陸揚シタル物品ニ對シテハ諸稅若ハ順稅ヲ拂フコトナカルヘシ

但シ該物品ハ稅關吏ノ監督ニ屬スルモノトス右等ノ船舶清國沿岸ニ於テ淺灘ニ乘揚ケ又ハ難破シタルトキハ清國官吏ハ直チニ其ノ乗客及乗組員ヲ救助シ該船舶並ニ其ノ積荷ヲ安全ナラシムルノ措置ヲ施スヘシ而シテ救助シタル人々ニハ想當然待遇ヲ與ヘ必要ノ場合ニハ最寄ノ領事館マテ迄届クヘシ

清國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ最寄ノ日本港口ニ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ該船舶ハ日本官吏ヨリ同一ノ待遇ヲ享有スヘシ

第十八條 諸開港地ニ於ケル清國官吏ハ詐僞又ハ密商ノ爲メ收入ニ減少ヲ來タササル様其ノ必要ナリト認ムル措置ヲ施スヘシ

第十九條 日本國ノ船舶清國ノ強盜又ハ海賊ノ掠奪ニ遇フ

ス又ハ詐僞逃亡スルトキハ清國官吏之ヲ逮捕シ其ノ負債ヲ償還セシムルコトヲ務ムヘシ日本國官吏ニ於テモ日本國臣民カ清國臣民ニ對シテ詐僞逃亡シ又ハ其ノ負債ヲ償辨セサルモノハ處分スルコトヲ務ムヘシ

第二十四條 清國ニ在ル日本人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辨セスシテ詐僞逃亡シタル者清國ノ内地ニ遁レ清國臣民ノ住居若ハ清國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領事ヨリ請求次第日本國官吏ニ之ヲ引渡スヘシ

又清國ニ在ル清國人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辨セスシテ詐僞逃亡シタル者清國ニ在ル日本國臣民ノ住居若ハ清國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領海ニ於ケル日本國官吏へ請求次第之ヲ引渡スヘシ

第二十五條 日本國ノ政府及臣民ハ其ノ現在效力ヲ有スル日清間條約諸條款ニ據り得タル一切ノ特權、免除及利益ヲ享有スルコトヲ更ニ茲ニ確定ス

且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇帝陛下ヨリ他國ノ政府又ハ臣民ニ現ニ附與シ又ハ將來附與スヘキ一切ノ特權、免除及利益ヲ享有スヘキコトヲ特ニ茲ニ規定ス

第二十六條 締盟國ノ一方ハ本條約批准交換ノ日ヨリ十箇年ノ終ニ於テ稅目及本條約ノ通商ニ關スル條款ノ改正ア

トキハ該強盜海賊ヲ逮捕處罰シ其ノ贋品ヲ取戻シ之ヲ其ノ持主ニ還付スルコトヲ務ムルハ清國官吏ノ職務タルヘシ管轄權ハ當該日本國官吏ニ專屬ス日本國臣民或ヘ一切ノ他國臣民又ハ人民ヨリ日本國臣民竝ニ其ノ財產ニ係ル訴訟ハ總テ清國官吏ノ干渉ヲ受クルコトナク右官吏ニ於テ審理判決スヘシ

第二十一條 清國官吏又ハ臣民カ清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ又ハ其ノ財產ニ關シ民事訴訟ヲ起ストキヘ日本國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ

清國臣民ニ對シ又ハ其ノ財產ニ關シ清國ニ在ル日本國官吏或ハ臣民ヨリ起ス所ノ民事訴訟ハ總テ清國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ

第二十二條 清國ニ於テ犯罪ノ被告トナリタル日本國臣民ハ日本國ノ法律ニ依リ日本國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ

清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ犯罪ノ被告トナリタル清國臣民ハ清國ノ法律ニ依リ清國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ

第二十三條 清國臣民カ日本國臣民ニ對シテ負債ヲ償辨セ

要求スルコトヲ得然レトモ若シ最初十箇年ノ終ヨリ起算シ六箇月以内ニ兩締盟國ノ何レヨリモ右要求ヲ爲サス改正ヲ行ハサルトキハ本條約並ニ稅目ハ前十箇年ノ終ヨリ起算シ更ニ十箇年間其ノ儘效力ヲ有スヘシ而シテ其ノ後各十箇年ノ終ニ於ケルモ亦同様タルヘシ

第二十七條 締盟國ハ本條約ノ效力ヲ完全ナラシムルニ必ニ至ル迄ハ現ニ清國ト泰西諸國トノ間ニ存スル取極及章程ニシテ其ノ本條約ノ規定ニ矛盾セスシテ適用セラレ得ル限ハ締盟國ニ於テ之ヲ遵守スヘキモノトス

第二十八條 本條約ハ日本文漢文及英文ニ調印スヘシ然レトモ將來議論ヲ防ク爲メ締盟國ノ全權大臣ハ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ其ノ異ナル點ハ英文本文ニ依テ之ヲ決裁スヘキコトヲ協議決定セリ

第二十九條 本條約ヘ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ之ヲ批准セラルヘク而シテ其ノ批准書ハ本條約調印ノ日ヨリ三箇月以内ニ可成速ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ

明治二十九年七月二十一日即光緒二十二年六月十一日北京
ニ於テ作ル

大日本帝國北京駐劄特命全權
公使正四位勳一等男爵 林 董(記名)印

大清帝國欽差全權大臣總理各國
事務大臣尙書衙門部左侍郎 張 蔭 植(記名)印

議定書

明治二十九年十月十九日北京ニ
於テ調印

大日本國特命全權公使正四位勳一等男爵林董ハ大清欽命總
理各國事務大臣ト左ノ四箇條ヲ議定ス

第一條 新開通商市港場ニ日本專有ノ居留地ヲ置クコトヲ
妥定シ道路管轄及地方警察ノ權ハ日本領事ニ專屬スルモノ
ノトス

第二條 光緒二十二年八月初三日上海稅關ヨリ發布セシ洋
商蘇杭滬三處通商試辦章程内其ノ汽船及倉庫又ハ所有ノ
船隻ニ關スル事ハ日本ト妥商シテ定ムヘシ之ヲ商定スル
迄ヘ適用シ得ヘキ限ヘ長江章程ヲ施行スルモノトス

第三條 日本政府ハ清國政府カ清國ニ於テ日本臣民ノ製造

光緒二十二年九月十三日	林 董
	敬 譲
	張 蔭 植

セル物品ニ對シ便宜酌量シテ課稅ヲナスコトヲ允スヘシ
但シ其稅ハ清國臣民カ納ムヘキ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ
多額ナルコトヲ得ス
清國政府ハ日本政府ヨリ請求ノ上ハ早速上海天津廈門漢
口等處ニ日本專有ノ居留地ヲ設クルコトヲ允スヘシ
第四條 條約ニ依リ凡テ日本國軍隊占領地ノ經界線ヲ距ル
コト日本里數五里此清國里數大約四十里ノ地内ニハ清國
軍隊ノ之ニ近ツキ若ハ之ヲ占領スルヲ許スヘカラサルコ
トヲ山東巡撫ニ電達スヘシ

右日本文及漢文各二通ヲ作り對照シテ記名調印シ雙方其各
一通ヲ執テ證據トス

明治二十九年十月十九日

追加通商航海條約並附 屬書

明治三十六年十月八日上海ニ於
テ調印

明治三十七年一月十一日北京ニ
於テ批准書交換

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ明治三十四年九月七
日即光緒二十七年七月二十五日北京ニ於テ調印セラレタル
最終議定書第十一條ノ規定ニ充分ノ效力ヲ與ヘムカ爲メ日
清兩國間ノ通商關係ヲ簡易ニシ且増進セシムルヲ目的トシ
タル追加通商航海條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲メニ大
日本國皇帝陛下ハ公使館一等書記官從五位勳五等日置益謙
領事正六位勳五等小田切萬壽之助ヲ大清國皇帝陛下ハ工部
尙書呂海寰太子少保前工部左侍郎盛宣懷商部左侍郎伍廷芳
ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委
任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ條項ヲ協議決
定セリ

第一條 清國ハ其ノ財政制度ヲ改正スル目的ヲ有シ而シテ
釐金制度ノ全廢ニ依リテ生スヘキ缺損ノ一部ヲ填補スル

追加通商航海條約並附屬書

爲メ海關又ハ内地及國境ノ稅關ヲ通過スル各種貨物ニ對
シ關稅ノ外ニ附加稅ヲ徵收スルコトヲ提議シタルヲ以テ
日本國ハ清國力各條約國ト協議ノ上決定スルモノト同半
ノ附加稅ヲ支拂フコトヲ承諾ス

清國ノ徵收スル生產稅消費稅機械製造品稅又內國產鴉片
及鹽ノ稅ニ關シ日本國ハ各條約國カ清國ト協議決定スヘ
キ同一ノ取極ニ依ルコトヲ承諾ス

但シ本條ノ爲メ日本國ノ貿易權利及特權ハ他國ノ貿易權
利及特權ニ比シ何等不利簽ノ地位ニ置カルルコトナカル
ヘキコト勿論タルヘシ

第二條 清國政府ハ日本國汽船所有者カ自己ノ費用ヲ以テ
揚子江宜昌重慶間ノ急流曳上セノ爲メニ設備ヲ爲スコト
ヲ承諾ス然レトモ右ヘ四川湖南湖北各省人民ノ利害ニ關
スル處アルヲ以テ其ノ設置前清國海關ノ認可ヲ得ルコト
ヲ要ス

右設備ハ汽船及清國形船舶共ニ之ヲ使用スルコトヲ得ヘ
キモノニシテ水路又ハ清國形船舶ノ自由航行者ハ沿岸道
路人民ノ交通ヲ妨ケルコトヲ得ス右設備ニ關シテヘ清國
海關ニ於テ制定スヘキ特別規則ニ從フヘシ

第三條 清國政府ハ内河航行ニ過スル各種ノ日本國汽船カ

清國海關ニ届出テノ上内地水路汽船航通規則及同追加規則ニ依リ貿易ノ目的ヲ以テ清國開港場ヨリ其ノ届出テル内地ニ航行スルコトヲ承諾ス

第四條 清國臣民ニシテ日本國臣民ト共同シテ正當ナル目的ヲ以テ組合又ハ會社ヲ組織スル場合ニハ契約又ハ覺書竝定款及右ニ基キ作リタル細則ニ據り右組合及會社ノ各員ト共ニ公平ニ損益ヲ分ツモノトス又右清國臣民ハ自ラ承認シ且日本國裁判所ノ解釋ニ從フヘキ該契約又ハ覺書竝定款及右ニ基キ作リタル細則ニ定メタル義務ヲ履行スヘキモノトス若清國臣民ニシテ斯ク定メタル處ノ義務ヲ履行セサルカ爲メ訴訟ヲ提起セラレタルトキハ清國裁判所ハ直チニ右義務ノ履行ヲ強制スヘシ

日本國臣民ニシテ清國臣民ト共同シテ組合又ハ會社ヲ組織スル場合ニハ契約又ハ覺書竝定款若ハ之ニ基キ作リタル細則ニ據り公平ニ損益ヲ分ツヘシ若日本國臣民カ契約又ハ覺書竝定款若ハ之ニ基キ作リタル細則ニ定メタル處ノ義務ヲ履行セサルトキハ日本國裁判所モ亦右同様直チニ義務ヲ履行ヲ強制スルコト勿論タルヘシ

第五條 清國政府ハ清國臣民カ日本國臣民ノ有スル登録済商標ヲ侵害スルヲ禁過スル爲メ必要ナル規則ヲ設ケ且誠

實ニ之ヲ執行スヘキコトヲ約ス

清國政府ハ又清國語ヲ以テ編製シ日特ニ清國人ノ使用ニ供スル爲メ作製セラレタル書籍冊子地圖及海圖ニ關シ日本國臣民ノ有スル登錄済版權ヲ保護スル爲メ必要ナル規則ヲ制定スヘキコトヲ約ス

清國政府ハ登錄局ヲ設置シ商標及版權保護ノ爲メ今後同國政府ニ於テ制定スヘキ規則ノ定ムル所ニ從ヒ正當ニ登錄セラレタル清國商標及版權ハ日本國ニ於ケル侵害ニ對シ同様ノ保護ヲ求ムル外國商標及版權ノ登錄ヲ爲スヘシ

日本國法律規則ノ定ムル所ニ從ヒ正當ニ登錄セラレタル清國商標及版權ハ日本國ニ於ケル侵害ニ對シ同様ノ保護ヲ受タルコト勿論タルヘシ

本條ハ清國ノ安寧ヲ害セムトスル公刊物ノ著作者、所有主若ハ販賣人タル日本國臣民又ハ清國臣民ヲ法律ノ正當ナル通行ニ對シ庇護スルモノト解スヘカラス

第六條 清國政府ハ成ルヘク速ニ自ラ通チ全國一定ノ貨幣制度ヲ創設シ全國一定ノ流通貨幣ヲ設備スヘキコトヲ約ス右流通貨幣ハ清國內ニ於テ日清兩國臣民均シク法貨トシテ自由ニ一切ノ租稅、賦課及其ノ他ノ債務ノ辨済ニ使用スルコトヲ得ヘシ但シ關稅ハ海關兩ヲ基礎トシ計算シテ支拂フコト勿論タルヘシ

第七條 清國各省ニ於テ商業者及一般人民カ普通及商業ノ爲メニ使用スル度量衡ハ區々一定セス且政府ノ定メタル

本位ニ達ヒ清國及外國商人ノ貿易ニ障礙アリ是ヲ以テ清國各省ノ總督巡撫ハ其ノ時ノ狀勢ヲ詳查シ會同協議シテ一定ノ本位ヲ商定シ上奏ノ上之ヲ採用シ全國官民ノ一切貿易ニ使用セシメ先ツ開市場ヨリ實施シ漸次内地ニ及ホスヘキコトヲ約ス若新定ノ度量衡ト現行ノ度量衡トノ間ニ差異アル時ハ其ノ差異ノ額ニ應シ増減ノ上公平ニ算定スヘシ

切ノ特權免除及利益ヲ自由且完全ニ享受スヘキコトヲ明ニ茲ニ規定ス

日本國政府ハ日本國ニ在ル清國官吏及臣民ニ對シ帝國法律規則ノ許ス限り成ルヘク優遇ヲ與フルコトニ努ムヘシ第十條 兩締盟國ハ直隸省ニ駐屯スル外國軍隊及公使館護衛兵ノ總テ撤退シタル場合ニ於テ清國ハ直チニ自ラ通チ外國人ノ居住及貿易ノ爲メ北京市内ノ一地區ヲ開クコト並之ニ關スル規則ハ其ノ時ニ於テ雙方協議ノ上決定スヘキコトヲ約ス

第八條 光緒二十四年五月ノ内地水路汽船航通規則及同年七月ノ追加規則ハ實行上不便ノ箇處アルヲ以テ清國政府ハ之ニ修正ヲ加ヘ本條約ニ右新規則ヲ添付スヘキコトヲ約ス此等ノ規則ハ相互ノ同意ニ依リ變改セラルルマテハ其ノ效力ヲ有スルモノトス

第九條 日清兩國間ニ現ニ存在スル凡テノ條約及約定ノ規定ハ本條約ニ依テ改正又ハ廢止セラレサル限り茲ニ其ノ效力ヲ確認ス又日本國ノ政府官吏臣民通商航海運漕工業及一切ノ財產ハ大清國皇帝陛下又ハ清國政府又ハ清國諸省若ハ地方官衙ヨリ他國ノ政府官吏臣民通商航海運漕工業又ハ財產ニ既ニ附與セラレ又ハ將來附與セラルヘキ一

政府協議ノ上之ヲ定ムヘシ

第十一條 清國政府ハ其ノ司法制度ヲ改正シテ日本國及西洋各國ノ制度ニ適合セシムルコトヲ熱望スルヲ以テ日本國ハ右改正ニ對シ一切ノ援助ヲ與フヘキコトヲ約シ且清國法律ノ狀態其ノ施行ノ設備及其ノ他ノ要件ニシテ日本國力満足ヲ表スルトキハ其ノ治外法權ヲ撤去スルニ躊躇セサルヘシ

第十二條 本條約ハ日本文漢文及英文ニテ調印スヘシ然レトモ將來ノ紛議ヲ避クル爲メ兩締盟國全體委員ハ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ノ相違アル場合ニハ其ノ相違ノ點ハ英文本文ニ照ラシテ之ヲ決定スヘキコトヲ約ス

第十三條 本條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下之ヲ批准セラルヘク而シテ其ノ批准書ハ本日ヨリ六箇月以内ニ成ルヘク速ニ北京ニ於テ交換スヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本條約ニ署名調印スルモノナリ

明治三十六年十月八日即

光緒二十九年八月十八日上海ニ於テ之ヲ作ル

大日本國條約改訂委員

公使館一等書記官

從五位勳五等

總領事正五位

等 小田切萬壽之助 (印)

監印

六位

大清國條約改訂委員

太子少保前盛宣懷

工部左侍郎伍廷芳

關防

同上附屬第一號

追加内地水路汽船航通規則

第一條 日本國汽船所有者ハ水路沿岸ニ於テ二十五年ヲ超エサル期間清國臣民ヨリ倉庫及埠頭ヲ貨借スルコト自由ニシテ期間滿了ノ時ハ雙方商定ノ條件ヲ以テ之ヲ繼續スルコト隨意タルヘシ日本國商人ニシテ滿足ナル條件ヲ以テ清國臣民ヨリ倉庫及埠頭ヲ貨借スルコト能ハサルトキハ地方官吏ハ總督巡撫又ハ商務大臣ト協議ノ上前記ノ如ク貨借ヲ繼續シ得ルノ條件ヲ以テ公平ナル時價ニテ貸渡スヘキ倉庫及埠頭ヲ設備スルコトヲ取計フヘシ

第二條 墟頭ハ内地水路ヲ阻礙セス又ハ航行ニ妨ナキ位置ニ限り最近地方ノ海關稅務司ノ認可ヲ得テ之ヲ築造スルコトヲ得但シ右認可ハ故ナク之ヲ拒ムコトヲ得ス

第三條 日本國商人ハ右倉庫及埠頭ニ對シ其ノ附近ニ於テ

同様ノ財產ヲ所有スル清國人ト同様ニ諸稅及賦課ヲ納付スヘキモノトス日本國商人ハ内地運漕業ニ從事スル汽船

ノ寄港地ニ於テ前記ノ如ク貨借セル倉庫ニ居住シテ業務ニ從事セシムル代理人又ハ雇員ニハ清國人ノミツ使用スヘキモノトス但シ日本國商人ハ其ノ事務觀察ノ爲メ隨時自ラ該地ニ出張スルコトヲ得清國臣民ニ對スル清國ノ現存管轄權ハ本項ノ爲メ何等減損又ハ妨礙セラレサルモノトス

第四條 清國ノ内地水路ヲ航行スル汽船ハ沿岸又ハ其ノ上ニ於ケル建設物ヲ毀損シ因テ以テ沿岸所有主ニ及ホシタル損失竝該毀損ノ爲メニ生シタル損失ニ對シ賠償ノ責アリモノトス

若清國ニ於テ小汽船ノ某淺水水路ヲ使用スルコト沿岸ヲ傷害シ接近地ニ損害ヲ及ホスノ處アル爲メ之ヲ禁止セムト欲スル場合ニ其ノ交渉ヲ受ケタル日本國官吏ハ其ノ故障ノ確實ナルヲ認メタルトキハ日本國小汽船ノ該水路使用ヲ禁止スヘキモノトス但シ清國小汽船モ亦均シク其ノ使用ヲ禁止セラルコトヲ要ス

外國小汽船及清國小汽船ハ現時内地水路ニ設置セル堰閘ノ工事ヲ傷害シ因テ以テ地方人民ノ用水ニ損害ヲ及ホスヘキ處アル箇所ニ於テハ之ヲ通過スルコトヲ禁ス

キ見込アルトキニ限り開放セラルヘシ。

從來汽船ノ往復セシコトナキ水路ニ其ノ航通ヲ開カムト
スル場合ニ於テハ先ツ最近開港所在稅務司ニ其ノ旨ヲ申
出テ該稅務司ハ之ヲ商務大臣ニ通牒シ同大臣ハ該地方ノ
總督又ハ巡撫ト協同シテ本件ニ關スル總テノ情狀ヲ詳査
ノ上直チニ許可ヲ與フヘキモノトス。

本規則並光緒二十四年五月及七月ノ各規則ハ今後必要ニ
應シ雙方ノ同意ヲ以テ改正スルコトヲ得ヘシ
明治三十六年十月八日即

光緒二十九年八月十八日上海ニ於テ之ヲ作ル

第八條 登錄汽船ハ一港内ニ於テ又ハ開港ヨリ他ノ開港ヘ
又ハ開港ヨリ内地へ及内地ヨリ右開港へ往復スルコトヲ
得又該船ハ海關へ正式ノ届書ヲ差出シタル上航行ノ途中
通過スル場所ニシテ貿易地ト認メラレタル所ニ於テ乗客
又ハ荷物ヲ陸揚又ハ搭載スルコトヲ得但シ清國政府ノ承
諾ヲ得タル場合ヲ除クノ外專ラ内地間ノミ往復スルコト
ヲ得ス

第九條 荷船又ハ客船ハ汽船ニテ曳タコトヲ得曳カレ行ク
船舶ノ舵手及乘組人ハ清國人ニ限ルヘシ總テ船舶ハ其ノ
所有者ノ何人タルヲ問ハス内地へ向ケ航行スルニ先チ登
録ヲ受クルコトヲ要ス

第十條 本規則ハ光緒二十四年五月及七月發布ノ内地水路
汽船航通規則ノ追加ニシテ右五月及七月ノ規則ニシテ今
回協定ノ規則ニ依リ改メラレサル條項ハ全然有效トス

帝國汽船ノ清國內河航行ニ關
スル帝國條約改訂委員ト清國
條約改訂委員間ノ交換公文
明治三十六年十月八日上海ニ於テ
光緒二十九年八月十八日上海ニ於テ

同上附屬第一號及第三號

呂 海 賽 盛 宣 懷 小田切萬壽之助 益 (印)
伍 廷 芳 開防

來 輸

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本條約第三條ニ據レ
ハ内河航行ニ適スル日本國各種汽船ヘ其ノ大小ヲ論セス總
テ該規則ニ從ヒ必要ナル證書ヲ受ケタル上内地諸港ニ往復ス
ルコトヲ得ヘタ清國政府ハ如何ナル場合ト據此等汽船ノ内
地航行ヲ阻礙禁止スルヲ得サル旨將來ノ誤解ヲ避タル目的
ヲ以テ御申越ノ趣致了承候本委員等會テ貴委員等ト本條ヲ
商議スルニ際シ貴委員等ヨリ仰手交相成タル日本國汽船目
錄ニ據レハ山陽丸、九十九丸、丸日向丸、丸浦戸丸、寧靜丸、平安丸、太閤
丸、吉野丸、明光丸、福壽丸、駿川丸、永田丸、共同丸、蓬萊丸、貫效丸、瓊
港丸、錦龍丸、全慶丸、康平丸等ハ其ノ載量百貳拾噸乃至四百拾
噸ニシテ内地水路汽船航通規則ニ依リ必要ノ證書ヲ得テ以テ
從來芝罘及瀋陽ノ内地諸港ニ往復スルコトヲ許可セラレ其
ノ形狀載量ノ故ヲ以テ航行ヲ禁止セラレタルコトナカリシ
趣ニ有之候ニ付副總稅務司ヲシテ各關ニ於ケル記錄ヲ取調
ヘシメ候處事實御申越ノ通り相違スル所無之旨回報致候
今茲ニ本件ニ付御照會ニ接シ候ニ付外務部ニ對シ前陳ノ事
候此段拜答得貴意候 敬具

明治三十六年十月八日
大日本國條約改訂委員 小田切萬壽之助 (印)
呂 海 賽 盛 宣 懹
伍 延 芳 開下 日 益 (印)

大清國條約改訂委員

光緒二十九年八月十八日

大清國條約改訂委員

伍 廷 芳
盛 宣 懷
呂 海 蔡 開防

大日本國條約改訂委員

日 置 益 開下
小田切萬壽之助 開下

明治三十六年十月八日

大日本國條約改訂委員

小田切萬壽之助 (印)

日 置 益 (印)

同上附屬第四號及第五號

清國內地水路汽船航通追加規則第九條ノ稅金及釐金徵收吏員任命ニ關スル規定實行ニ係ル同上委員間ノ公換公文

明治三十六年十月八日 上海ニ於テ
光緒二十九年八月十八日 上海ニ於テ

往 輸

以書翰致啓上候陳者光緒二十四年七月發布ノ内地水路汽船航通追加規則第九條ノ稅金及釐金徵收

員任命ニ關スル規定實行ニ係ル同上委員間ノ公換公文

大清國條約改訂委員
呂 海 蔡 開下
盛 宣 懹 開下
伍 廷 芳 開下大日本國條約改訂委員
日 置 益 (印)

小田切萬壽之助 (印)

以書翰致啓上候陳者本日附貴輪ヲ以テ「光緒二十四年七月發布ノ内地水路汽船航通追加規則第九條ノ稅金及釐金徵收員任命ニ關スル規定ハ未タ盡ク實行セラレサル所有之右ハ緊要ノ事項ニ付貴國政府ヨリ各省ニ對シ右規定ヲ嚴正ニ施行スル様重キテ御調達相成候様致度」旨御照會ノ趣致領悉候右ニ關シテハ本委員等ヨリ當該官廳ニ對シ相當

來 輪

ノ處置ヲナス様照會致置候間右様御承知相成度此段拜答得
貴意候 敬具

光緒二十九年八月十八日

大清國條約改訂委員

伍 延 芳
盛 宣 懹
呂 海 蔡 開下
國防

大日本國條約改訂委員

日 置 益 開下
小田切萬壽之助 開下

同上附屬第六號及第七號

北京開市ニ關スル同上委員間

光緒二十九年八月十八日 上海ニ於テ

明治三十六年十月八日 上海ニ於テ

ノ交換公文

以書翰致啓上候陳者北京ニ各國人民ノ居住及營業ノ場處ヲ設置スルコトニ關スル本條約第十條ノ規定ニ據レハ各國公

追加通商航海條約並附屬書

ク協定シ置クコトノ雙方ニ利益アルヲ認メ茲ニ貴委員等ノ
考量ヲ煩シ且御同アランコトヲ希望シ併セテ何分ノ貴答
ア煩シ度此段御照會得貴意候 敬具

光緒二十九年八月十八日

大清國條約改訂委員

伍 延 芳
昌 海 懷 聲
關 防

大日本國條約改訂委員

日 置 益 閣 下

小田切萬壽之助 閣 下

往 輪

以書翰致啓上候陳者本日附貴輪接收「北京ニ各國人民ノ居住及營業ノ場處ヲ設置スルコトニ關スル本條約第十條ノ規定ニ據レハ各國公使館護衛兵及通路護衛兵ニシテ全然撤回セラレタル場合ニ於テハ北京ニ在テ内城ノ外ニ於テ貴我雙方ニ都合好ク日故障ナキ場所ヲ擇ヒ各國商人居住營業ノ場處ニ充ツヘキ旨定メラレ候而シテ其ノ境界内ニ於テハ各國商民ノ土地ヲ租借シ家屋倉庫ヲ建造シ營業ノ場處ヲ開設ス

ルヲ許スヘク候尤モ清國人民ノ私有ニ屬スル家屋及土地ノ租借ニ關シテハ其ノ所有者ニ於テ貸貸ノ希望ヲ有スルヲ要シ且其ノ契約ハ抑制強迫ヲ用フルコトナク公平ニ協定セラルヘキモノニ有之候右場處内ノ道路桥梁ハ清國官廳ニ於チ之ヲ管轄經理シ該處ニ居住スル外國人ハ清國住民ト同シ其ノ地方及警察規則ヲ遵守スヘク清國官廳ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ自ラ地方役場及警察ヲ設ケルコトヲ得サル儀ニ有之右各國人民居住及營業ノ場處開力日其ノ境界劃定セラル上ハ從來城内外ニ散在セル外國人ハ都テ該場處内ニ移居スルコトヲ要シ處々ニ散住シテ以テ清國官廳ノ必要ナル取締ニ不便ナラシムルヲ得サル次第ニ有之候右外國人所屬ノ土地家屋ハ公平ニ其ノ價格ヲ協定シ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ支拂ヒ又其ノ移轉期限ハ其ノ時ニ於テ決定セラルヘシ而シテ其ノ期限内ニ移轉セサルモノハ何等賠償ヲ要求スルノ權ナカルヘク候本委員等ハ將來不必要ナル交渉ヲ避ケムカ為メ前記ノ如ク協定シ置クコトノ雙方ニ利益アルヲ認メ茲ニ貴委員等ノ考量ヲ煩シ且御同意アラムコトヲ希望スル旨」御照會ノ趣致閱悉候右貴翰ニ記載セラリタル各項ハ大體ニ於テ御同意致シ差支無之候得共之ニ關スル詳細ノ規定ハ其ノ時ニ於テ本條約第十條ノ規定ニ從ヒ協議ノ上滿足

ニ取極可申候尤モ右諸規則ト清國及各外國間ニ協定セラルヘキ諸規則トノ間ニ本邦ノ不利ニ歸スルカ如キ差別ナカルヘキハ勿論ノ儀ニ有之候此段拜答得貴意候 敬具

明治三十六年十月八日

大日本國條約改訂委員

小田切萬壽之助 (印)

日 置

益 閣 下

大清國條約改訂委員

呂 海 賞 閣 下
盛 宜 懷 閣 下
伍 延 芳 閣 下

大連海關設置及內水汽船航行ニ關スル協定

明治四十年五月三十日北京ニ

於テ調印

同年六月十一日告示

日本國特命全權公使 林 樹 助
日本國總稅務司 サー、ロバート、ヘート
千九百七年五月三十日北京ニ於テ署名調印ス

日本國及清國政府ハ大連ニ清國海關ヲ設置スルコトヲ協定

大連海關設置及內水汽船航行ニ關スル協定

大連海關設置及內水汽船航行ニ關スル協定

六三六

(甲) 大連海關設置ニ關スル協定

- (一) 大連海關長ハ日本ノ國籍ヲ有スル者タルヘシ該海關長新任ノ場合ニハ總稅務司ハ在北京日本國公使館ト協商ヲ遂クヘシ
- (二) 大連海關ノ職員ハ通則トシテ日本ノ國籍ヲ有スルモノタルヘシ但シ俄ニ缺員ヲ生スルカ若ハ臨時必要アル場合ニハ假ニ他ノ國籍ニ屬スル職員ヲ大連ニ派遣スルコトヲ得
- (三) 大連海關長ノ更迭ハ豫メ總稅務司ヨリ關東都督ニ通告スヘシ
- (四) 大連海關ト日本國官署及日本國商人トノ往復ハ總テ日本文ヲ以テスヘシ
但シ大連ニ來住スル他ノ國籍所屬ノ商人ハ英文若ハ清國文ヲ以テ通信スルモ妨ナシ
- (五) 海路大連ニ輸入スル商品ニハ輸入稅ヲ課セス日本國租借地境界ヲ越エ清國內地ニ至ル各種ノ商品及產物ハ海關ニ於テ現行條約ニ從ヒ輸入稅ヲ課スヘシ日本官憲ハ海關ノ許可證又ハ通關證ヲ有セサル商品ノ日本國租借地境界通過ヲ防過スルニ就キ成ルヘク援助ヲ與フル爲適當ノ處置ヲ採ルコトヲ承諾ス
- シテ大連ヨリ清國以外ノ地ニ再輸出セラルトキハ檢出稅ヲ納ムルヲ要セス
- (十) 清國ノ商品又ハ產物ニシテ清國條約港ヨリ大連ニ船積セラレ同所ヨリ更ニ清國以外ノ場所へ船積セラルニ際シ右條約港ニ於ケル輸出稅納入濟ノ證據書類ヲ提出スルトキハ輸出稅ヲ納ムルヲ要セス
- (十一) 大連海關ハ噸稅燈臺稅及港稅ノ徵收若ハ管理ニ干與セサルモノトス
- (十二) 清國條約港ニ於ケル現行關稅率ハ大連海關ニ於テモ均シク之ヲ適用スヘシ
- (十三) 日本國政府ハ大連ニ於テ該海關ノ爲其ノ事務所及職員宿舍建築用ニ供スル充分ノ地所(適當ノ庭園、厩竈儀倉用共)ヲ備ヘ置クヘキコトニ同意ス
右地所賣渡若ハ貨渡ノ金額ハ同地ニ於テ雙方合意ヲ以テ定ムヘキモノトス
- (十四) 稅關長及職員ハ陪審人若ハ陪席判事タリ又ハ其ノ他何等體役ニ從事スルノ責任ナキモノトス
- (十五) 前記大連海關ハ又大連ヨリ清國内地ニ輸出シ並同内地ヨリ大連ニ輸入スル商品ニ對シ通過免狀ノ發給ヲ專掌シ且同海關ハ清國ノ條約港ニ於テ謂ユル清國海關專掌
- 大連海關設置及內水汽船航行ニ關スル協定

(六)

- 清國內地ヨリ日本國租借地ニ來リタル清國商品及產物ニシテ大連ヨリ他所ヘ船積セラルトキハ現行條約ニ依リ輸出稅ヲ納ムヘシ日本國租借地ノ產物及該產物ヨリ製造セル商品若ハ海路同租借地ヘ輸入セル商品若ハ產物ハ輸出稅ヲ納ムルヲ要セス日本國租借地内ニ於テ清國內地ヨリ來ル原料ヲ以テ製造シタル物品ニ對シテ納ムヘキ稅ハ廬州灣ニ於ケル獨逸國租借地ニ於テ同一事情ノ物品ニ對シ現ニ納ムルモノト同一タルヘシ
- (七) 清國ノ條約港ヨリ大連ヘ來ル清國商品若ハ產物ヘ日本國租借地内ニ在ル限り納稅ヲ要セスト雖モ右商品若ハ產物ニシテ日本國租借地境界ヲ越エ清國內地ニ入ル場合ニハ現行條約ニ從ヒ納稅スヘシ
- (八) 大連ヨリ船積セラレ隨テ輸出稅ヲ納メタル清國商品ニハ領收證ヲ下付シ清國條約港ニ於テ陸揚ノ際右領收證ヲ差出シ現行條約ニ從ヒ沿岸貿易稅ヲ納ムヘシ
- (九) 日本國及其ノ他清國以外ノ商品ニシテ清國ノ條約港ヨリ大連ヘ船積セラル場合ニハ該條約港ニ於テ納ムタル輸入稅ハ條約ノ規定ニ從ヒ拂戻ツ受クヘシ右商品ハ大連ニ輸入セラルモ日本國租借地ノ境界ヲ越エ清國內地ニ入ラサル限り何等ノ納稅ヲ要セス又右商品ニ

- (十六) 第十五條ニ記載ノ通過免狀ニ對シテハ現行條約ニ依ル稅率即チ輸出稅若ハ輸入稅ノ半額ヲ大連海關ニ於テ徵收スヘシ
- (十七) 海關規則ニ對シ商人ノ行ヒタル詐僞又ハ犯則ノ場合ニ於ケル處分手續ハ今後別約ヲ以テ之ヲ定ムヘシト雖モ大體ノ主義ニ於テ總テ司法上ノ手續ハ日本國法術ニ屬スヘキモノトス
- (十八) 日本國租借地ニ於ケル商業ノ發達ニ伴ヒ現ニ豫知スヘカラサル必要ノ生スルコトアルヘキヲ慮リ本協定ハ暫定ニ屬スルモノトシ當事者雙方ハ本協定實行上ニ生スルコトアルヘキ不便ヲ除クカ爲必要アル毎ニ速ニ修正ヲ提議スヘキコトヲ約ス

(乙) 内水汽船航行ニ關スル協定

- (一) 清國海關ハ正式ニ大連ニ於テ其ノ職務ヲ執行スルコトヲ認可セラレタルヲ以テ内水航行免狀ヲ發給スルコトヲ得内水航行免許ヲ受ケタル汽船ハ一般ニ千八百九十八年七月並同年九月ノ規則及千九百三年十月ノ追加規則ニ依ルヘキモノナリト雖モ尙特ニ左記ノ規定ニ遵

スヘキモノトス

(二) 内水ヲ往復セントスル汽船ハ内外國何れニ屬スルヲ問ハス其ノ船籍證書ヲ海關ニ寄託シ願書ヲ出シテ引換ニ内水航行免狀ヲ受クヘシ該免狀ハ一箇年間效力ヲ有スルモノニシテ其ノ初度發給ノ手數料ヲ十兩トシ爾後年々書換ノ都度二兩ヲ納メ噸稅ハ四箇月毎ニ納入スヘキモノトス

(三) 右免狀ヲ得タル汽船ハ規定ニ從ヒ(一)大連ヨリ内地ノ一箇所若ハ數箇所ニ往復スルコト(二)大連ヨリ内地ニ赴キ更ニ條約港ニ至リ再内地ヲ經大連ニ歸航スルコトヲ得是等ノ汽船ハ地方ノ海關若ハ收稅所ニ成規ノ報告ヲ爲シ地方ノ關稅及諸稅ヲ納ムルトキハ總テ航行中ニ通過スル認可貿易場ニ於テ積荷若ハ乗客ヲ陸揚シ又ハ搭載スルコトヲ得但シ特別ノ許可ナクシテ專ラ内地ノ各所間ノミヲ往復スルコトヲ得ス内地航行中他ノ條約港ニ寄航スルトキハ成規ニ從ヒ同地海關ニ報告シ一

(四) 免許ヲ得タル汽船ハ大連發著ノ都度大連海關ニ出港シタル場所又ハ寄港スヘキ場所ヲ報告シ規定ノ關稅ヲ

【参考】 日支通商條約廢棄ニ關スル往復 文書

(昭和四年五月一日公表)

日本帝國公使ハ日支通商航海條約ニ關スル昭和三年八月十

四日附國民政府外交部覺書ニ對シ帝國政府ノ調合ニ基キ左記ノ通國民政府ニ回答スルノ光榮ヲ有ス

(一) 國民政府ハ專ラ日支通商航海條約第二十六條支那本文ヲ引用シテ該條項ノ意味ハ十年ノ期間滿了後六箇月内ニ若シ執りカ一方ノ提議ニ依リ改訂ヲ聲明シ且既ニ改訂ノ商議ヲ實行シタル場合ハ該條約ハ再ヒ其ノ效力ヲ延長セサルノ趣旨ナリト爲シ尙北京政府時代ニ於テ大正十五年十月二十日附公文ヲ以テ日支通商航海條約ノ改訂ヲ申出テ同時ニ條約ニ規定スル六箇月間ニ新條約完成セサル場合ニハ其ノ當然有シ得ヘキ権利ヲ留保スル旨ヲ主張スル處、第二十六條ノ解釋ニ付テハ客年七月三十一日附日本公使館ノ覺書ニ於テ陳述シタルカ如ク該條項ノ日本文本文ニ照シ十年ノ終ヨリ起算シ六箇月以内ニ改正商議ヲ完了セサルトキハ條約並稅目ハ當然十箇年間效力ヲ存續スヘキコト明白ナリトス、帝國政府ハ斯ノ如キ明瞭ナル規定ニ對シテ解釋ノ相違ヲ見ルヲ遺憾トスル次第ナル力萬一日本本文ト支那文本トノ間に解釋ヲ異ニスルコトアリトスルモ同條約第二十八條ニ於テ右ノ如キ場合ニハ英文

納ムヘキモノトス阿片及禁制品ハ之ヲ輸入シ又ハ輸出スヘカラス若シ之ヲ輸入シ又ハ輸出シタルトキハ該物品ヲ沒收シ並該汽船ニ對シ五百弗ノ罰金ヲ課ス再犯スルモノハ内水航行免狀及其ノ特權ヲ撤消スヘシ

(五) 日本國官憲ハ大連海關ヲ援助シ密輸入殊ニ阿片及禁制品ノ密輸入ヲ禁止スヘシ

(六) 大連及内地諸港間ニ於ケル清國閉囊郵便物ノ遞送ハ無料タルヘシ日本國租借地以外ニ於ケル清國郵便局發著ノ清國閉囊郵便物ニシテ同租借地ヲ經由スルモノノ遞送ニ關シテハ郵政廳ニ於テ適當ノ方法ヲ協定スヘシ

(七) 内水汽船航行ニ關スル協定ハ日本國租借地以外ノ内水ニ往復スル汽船ニ限り適用セラルヘキモノトス

得ルコトトナリ延テ國際法ノ根柢ニ動搖ヲ來スニ至ル

ヘク之ヲ先例ニ徵スルモ未タ嘗テ本原則ノ適用ヲ認メタルモノナシ、且日支條約ニ於テ特ニ條約ノ效力ニ關

スル條項ヲ設ケタルハ情勢ノ變遷ヲ豫想スルト同時ニ情勢ノ變遷力當然條約ヲ無効トスルモノニ非サルコト

ヲ明ニシタルモノナリ

(三) 之ヲ要スルニ帝國政府ハ日支通商航海條約廢棄問題ニ對スル從來ノ主張ヲ在タル能ハサルコト前述ノ通ナルモ仙方速ニ日支間現行通商航海條約ノ改訂ヲ爲シ以テ兩國間親善ヲ圖ルノ本旨ニ副ハムトスル國民政府ノ要望ニ對シテハ飽ク迄同情的考慮ヲ寄ムモノニ非斯疎ニ其ノ穩健ナル建設の大業ヲ一日モ速ニ完成シ内ニ和平外ニ日支國交敦厚ノ實ヲ擧ケムコトヲ最モ切ナルモノアリ、故ニ若シ國民政府ニ於テ日支兩國友好善隣ノ關係ヲ顧慮シ新條約ノ完全ニ成立スル迄現行條約ノ條項ニ依リ兩國ノ關係ヲ律セムトスル誠意ヲ披瀝シ現行條約改訂ノ提議ヲ爲スニ於テハ帝國政府ハ右國民政府ノ提議ニ應シ其ノ適當ト認ムル改訂ノ交渉ヲ開始スルコトニ付充分ナル誠意ト同情トヲ有スルコトヲ特ニ聲明ス

中華民國十八年四月二十七日
國民政府外交部
中華民國十八年四月二十七日
國民政府外交部
接受シ御來示ノ各節篤ト了承セリ
中日通商航海條約條文ノ解釋ニ關スル國民政府ノ見解及一切ノ主張ハ既ニ十七年八月十四日附貴公使宛本部長覺書ニ於テ詳晰ニ申述セルヲ以テ該條約ノ效力問題ハ尙前述ノ如ク極メテ明瞭ニシテ贅述スルノ要ナシ、本問題ニ關スル法理上ノ爭執ハ既ニ貴我ノ諒解アルヲ以テ措テ之ヲ論セス、故ニ國民政府ハ至誠ヲ以テ直ニ協議ヲ開始スルコトトスク茲ニ最短期間ニ平等及主權互尊ヲ原則トシ新條約ヲ締結セムコトヲ切望シ併セテ日ヲ期シテ促進セシメラレムコトヲ望ム

日本帝國公使館覺書ヲ

覺書課文

在支那

日本帝國公使館

【参考】

支那ニ本店ヲ設クル日本會社ノ
資本ニ關スル法律案

(大正十二年三月三十日)
法律第三十七號

臺灣事件交換條約及附屬議定書

明治七年十月三十一日

十六日貴族院ヲ通過シ公布實施セラレタルモノナリ

交換條款

支那ニ於テ營業ヲ爲スワ主タル目的トスル會社カ本店ヲ支那ニ設クルトキハ支那ニ流通スル銀貨幣ヲ以テ資本ノ額ヲ定ムルコトヲ得前項ノ規定ニ依リ資本ノ額ヲ定ムル會社カ株式會社又ハ株式合資會社ナルトキハ株式ノ額ハ海關兩二十五兩ニ相當スル額ヲ下ルコトヲ得ス但シ一時ニ株式ノ全額ヲ拂込ムヘキ場合ニ限り海關兩十兩ニ相當スル額マテニ之ヲ下スコトヲ得

(附則)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十二年八月勅令第三六三號ヲ以テ同年八月十五日ヨリ施行)

(備考)日本政府ハ大正十二年三月十四日本法律案ヲ衆議院ニ上程シ同二十日同院ニ於テ可決、次テ同年三月二

臺灣事件交換條約及附屬議定書

テ清國ハ認メテ不可トナサス
二、前次過害難民ノ家ハ總テ清國ニ於テ撫恤ノ資ヲ給ス、

日本力該處ニアリテ道路ヲ建設シ又家屋ヲ建造セルモノ等ハ清國ニ於テ自ラ留用ヲ欲スルモノハ先づ議定シ

テ銀兩ヲ籌補スヘク別ニ議辦ノ證アリ
三、本事件ニ關スル兩國一切ノ來往公文ハ彼此撤回シ今後之レニ關シ論スル處ナカルヘク該處生蕃ニ至リテハ清國自ラ法ヲ設ケテ取締リ以テ將來永ク船客ノ兇害ヲ受クルコトナキ様ニスヘシ

同治十三年九月二十六日

明治七年十月三十一日

衙門諸大臣 花押

大久保大臣 花押

附屬議定書

大清欽命總理各國事務和碩恭親王（以下衙門諸大臣九人連名）大日本全權辦理大臣參議兼內務卿大久保ト憑單ヲ識スル事ノ爲ニ臺蕃ノ一事現在既ニ英國威大臣ヲ經テ兩國議明シ茲ニ本日互ニ辦法ヲ立テ條約ニ調印セリ日本國從前ノ被害蘇民ノ家ニ對シテハ清國ヨリ先ツ撫恤銀十萬兩ヲ給スヘ

シ又日本撤兵後臺地ニ在リテ其修建シタル道路家屋等ニシテ清國カ之ヲ保存シテ自ラ使用セント欲スルモノノ代價トシテ銀四十萬兩ヲ給スヘク亦議定ヲ經タリ日本ノ明治七年十二月二十日則清國ノ同治十三年十一月十二日ヲ以テ日本國ノ全部撤兵ノ期トナシ期ヲ愈ルヲ得ス又清國ヨリノ賠償金モ同日迄ニ全部支拂フヘク亦期ヲ愈ルヲ得ス日本國ノ兵未タ全部撤退セサル時ハ清國議ノ賠償金亦全數ヲ支拂ハス此ニ契約書ヲ作成シ各一紙ヲ執ツテ證トナス

同治十三年九月二十六日

明治七年十月三十一日

(花押 同前)

天津條約並附屬公文

明治十八年四月十八日

大日本國特派全權大使參議兼宮内卿
勵一等伯爵 伊藤
大清國特派全權大使太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣

附屬公文

李鴻章

各奉スル所ノ諭旨ニ遵ヒ公同會議シ專條ヲ訂立シ以テ和諧ヲ敦クス有ユル約款左ニ載列ス

一、議定ス中國朝鮮ニ駐禁スルノ兵ヲ撤シ日本國朝鮮ニ在リテ使館ヲ護衛スルノ兵辦ヲ撤ス畫押蓋印ノ日ヨリ起り四ヶ月ヲ以テ期トシ限内ニ各數ヲ盡シテ撤回スルヲ行ヒ以テ兩國滋端ノ虞アルコトヲ免カル中國ノ兵ハ馬山浦ヨリ撤去シ日本國ノ兵ハ仁川港ヨリ撤去ス

一、兩國均シク允ス朝鮮國王ニ勸メ兵士ヲ數練シ以テ自ラ治安ヲ護スルニ足ラシム又朝鮮國王ニ由リ他ノ外國ノ武辦一人或ハ數人ヲ選備シ委ヌルニ數演ノ事ヲ以テ斯嗣後日本兩國均シク員ヲ派シ朝鮮ニ在リテ數練スルコト勿ラシ

一、將來朝鮮國若シ變亂重大ノ事件アリテ日本兩國或ハ一國兵ヲ派スルヲ要スルトキハ應ニ先々互ニ行文知照ス可シソノ事定マルニ及シテハ仍即チ撤回シ再ヒ留防セス

大日本國明治十八年四月十八日

伊藤博文

大清國光緒十一年三月初四日

休 戰 條 約

明治二十八年三月三十日下ノ闕
ニ於テ調印

大日本國皇帝陛下ハ今回不慮ノ變事ノ爲メ媾和談判ノ進行ヲ妨碍セシワ以テ茲ニ一時休戦ヲ承諾スヘキコトヲ其ノ全權辦理大臣ニ命セラレタリ因テ大日本帝國皇帝陛下ノ全權辦理大臣内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文全權辦理大臣外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光及大清國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯爵李鴻章ハ左ノ休戦定約ヲ訂結セリ

第一條 日清兩帝國政府ハ奉天省直隸省山東省地方ニ在テ下ニ記スル所ノ條項ニ從ヒ兩國陸海軍ノ休戦ヲ約ス
第二條 本定約ノ効力ニ依テ休戦スヘキ軍隊ハ實際交戦ヲ停止スル時ニ當リテ各其ノ屯駐スル所ノ場處ヲ保持スルノ権利ヲ有スヘシ但シ本定約ノ期限内ハ如何ナル場合タリトモ前記ノ場處以外ニ逃出スルコトナカルヘキモノトス

第三條 日清兩帝國政府ハ本定約ノ存スル間ハ攻守ノ執レタ間ハス各其ノ對陣ノ方面ニ於テ進撃ノ備ヲ加ヘ或ハ援

兵ヲ派シ其ノ他一切戰闘力ヲ増加セサルヘキコトヲ約ス
然レトモ現ニ戰地ニ於テ戰闘ニ從事スヘキ軍隊ヲ増加スルノ目的ニ非サル以上ハ兩帝國政府ニ於テ新タニ兵員ヲ配置運送スルコトヲ妨ケセルモノトス

第四條 海上ニ於ケル兵員軍需及其ノ他一切戰時禁制品ノ運送ハ戰時常規ニ依リ捕獲セラルコトアルヘキモノトス第五條 日清兩帝國政府ハ本定約調印ノ日ヨリ二十一日間ヲ限り休戦ヲ實行スルモノトス尤兩國軍隊ノ屯駐スル場處ニシテ電信ノ通セサル處ヘハ敏速ノ方法ヲ以テ休戦ノ命令ヲ發スヘシ而シテ兩國軍隊司令官ニテ右命令ヲ受ケタルトキハ互ニ其ノ趣ヲ通知シ休戦ノ措置ヲ爲スヘキモノトス

第六條 本定約ハ別ニ五ニ通知ヲ要セス明治二十八年四月二十日即光緒二十一年三月二十六日ノ正午ニ於テ終了スヘシ而シテ若右期限内ニ於テ媾和談判不調ナルトキハ本定約ハ同時ニ終了スルモノトス
右證據トシテ日清兩帝國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年三月三十日即光緒二十一年三月五日下ノ闕ニ於テ作ル

大日本帝國全權辦理大臣 伊藤博文（印）
内閣總理大臣從二位勳一等伯爵
大日本帝國全權辦理大臣 外務大臣從二位勳一等子爵 陸奥宗光（印）
大清帝國欽差頭等全權大臣 太子太傅文華殿大學士北洋大臣 直隸總督一等肅毅伯爵 李鴻章（印）

休戦延期條約

明治二十八年四月十七日下ノ闕
ニ於テ調印

下ニ記名スル大日本國皇帝陛下ノ全權辦理大臣内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文及全權辦理大臣外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光及大清國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯爵李鴻章全權大臣二品頂戴前出使大臣李經方ハ媾和條約ヲ締結シタルヲ以テ釋カニ該條約ノ批准ヲ交換スルコトヲ得ル爲メ左ノ個條ニ同意シ之ニ記名調印スルモノナリ

休戦延期條約

媾和條約並議定書及媾和別約

明治二十八年四月十七日下ノ關
ニ於テ調印

同年五月八日芝罘ニ於テ批准書
交換

媾和條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ媾和條約ヲ締結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勵一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勵一等子爵陸奥宗光ヲ大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章二品頂戴前出使大臣李經方ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條 清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國

命後一箇年以内ニ之ヲ終了スヘシ

但シ該境界劃定委員ニ於テ更定スル所アルニ當リテ其ノ更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ認可スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ維持スヘシ

第四條 清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀二億兩ヲ日本國ニ支拂フヘキコトヲ約ス右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ毎回五千萬兩ヲ支拂フヘシ而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六箇月以内ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二箇月以内ニ於テスヘシ殘リノ金額ハ六箇年賦ニ分チ其ノ第一次ハ本約批准交換後二箇年以内ニ其ノ第二次ハ本約批准交換後三箇年以内ニ其ノ第三次ハ本約批准交換後四箇年以内ニ其ノ第四次ハ本約批准交換後五箇年以内ニ其ノ第五次ハ本約批准交換後六箇年以内ニ其ノ第六次ハ本約批准交換後七箇年以内ニ支拂フヘシ又初回拂込ノ期日ヨリ以後未タ拂込ヲ了ラサル額ニ對シテハ毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フヘキモノトス

但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ全額或ハ其ノ幾分又前以テ一時ニ支拂フコトヲ得ヘシ如シ本約批准交換後三箇年以内ニ該賠償金ノ總額ヲ皆済スルトキハ總チ利子ヲ免除スヘシ若夫迄ニ二箇年半若ハ更ニ短期ノ利子ヲ拂込

ニ對スル貢獻、典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條 清國ハ左記ノ土地ノ主權並ニ該地方ニ在ル城壘、兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス
一、左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城、海城、營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル處ハ該河ノ中央ヲ以テ經界トスルコトト知ルヘシ

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼

第三條 前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實地ニ就テ確定スル所アルヘキモノトス而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任スヘシ

該境界劃定委員ハ成ルハク速ニ其ノ任務ニ從事シ其ノ任

ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スヘシ
第五條 日本國へ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スルモノハ自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ヘシ其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二箇年間ヲ猶豫スヘシ但シ右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ日本國臣民ト視爲スコトアルヘシ
日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各一名以上ノ委員ヲ臺灣省へ派遣シ該省ノ受渡ヲ爲スヘシ而シテ本約批准交換後二箇月以内ニ右受渡ヲ完了スヘシ
第六條 日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シケレハ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎トナスヘシ又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏商業航海陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フヘシ
清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六箇月ノ後有效ノモノトス

第一清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ
外ニ日本國臣民ノ商業住居工業及製造業ノ爲メニ左ノ
市港ヲ開クヘシ但シ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハル
ル所ト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スヘ
キモノトス

一湖北省荊州府沙市

二四川省重慶府

三江蘇省蘇州府

四浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領
事官ヲ置クノ權利アルモノトス

第二旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場
所ニ迄擴張スヘシ

一揚子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル

二上海ヨリ吳淞江及運河ニ入り蘇州杭州ニ至ル

日清兩國ニ於テ新章程ヲ妥定スル迄ハ前記航路ニ關シ
適用シ得ヘキ限ハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル
現行章程ヲ施行スヘシ

第三日本國臣民カ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ
又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ右

購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ稅金取立金ヲ毛
納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權利ヲ有スヘシ
第四日本國臣民ハ清國各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種
ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ヘク又所定ノ輸入稅ヲ拂
フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ニ輸入スルコト
ヲ得ヘシ

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各
種ノ内國運送稅内地稅賦課金取立金ニ關シ又清國內地
ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民カ清國ヘ輸入
シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ日同一ノ特典免除ヲ享
有スヘキモノトス

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スヘ
キモノトス

第七條 現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批
准交換後三箇月内ニ於テ斯ヘシ但シ次條ニ載スル所ノ規
定ニ從フヘキモノトス

第八條 清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ
日本國軍隊ノ一時山東省威海衛ヲ占領スルコトヲ承諾ス
而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下
關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣 内閣總理大臣從二位勳一等伯爵 伊藤博文（印）

大日本帝國全權辦理大臣 外務大臣從二位勳一等子爵 隆慶宗光（印）

大清帝國欽差頭等全權大臣 子太傅文華殿大學士北洋大臣 李鴻章（印）

大清帝國欽差全權大臣 直隸總督一等肅毅伯 李經方（印）

（備考）附屬地圖略

議定書

了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國
政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極
ヲ立チ清國海關稅ヲ以テ抵當トナスコトヲ承諾スルニ於
テハ日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場處ヨリ撤回スヘシ若又
之ニ關シ充分適當ナル取極立タサル場合ニハ該賠償金ノ
最終回ノ拂込ヲ終リタル時ニ非サレハ撤回セサルヘシ尤
通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非サレハ軍隊ノ
撤回ヲ行ハサルモノト承知スヘシ

第九條 本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘
虜ヲ還附スヘシ而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレ
タル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セサルヘキコトヲ約ス
日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪者ト認メラレタ
ルモノハ清國ニ於テ直チニ解放スヘキコトヲ約シ清國ハ
又交戰中日本國軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ
對シ如何ナル處刑ヲモ爲サヌ又之ヲ爲サシメサルコトヲ
約ス

第十條 本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スヘシ

第十一條 本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於
テ批准セラルヘク而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八
年五月八日即光緒二十一年四月十四日ニ交換セラルヘシ

大日本國皇帝陛下ノ政府及大清國皇帝陛下ノ政府ハ本日調
印シタル媾和條約中ノ意義ニ付將來誤解ヲ生スルコトヲ避
ケムト欲スル目的ヲ以テ雙方ノ全權大臣ハ左ノ約定ニ同意
セリ

第一、本日調印セシ媾和條約ニ附スル所ノ英譯文ハ該條
約ノ日本文本及漢文本文ト同一ノ意義ヲ有スルモノ

タルコトヲ約ス

第二、若該條約ノ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ

異ニシタルトキハ前記英譯文ニ依テ決裁スヘキコトヲ
約ス

第三、左ニ記名スル所ノ全權大臣ハ本議定書ハ本日調印シタル媾和條約ト同時ニ各兩帝國政府ニ提供シ而シテ該條約批准セラルトキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セシテ亦兩帝國政府ノ可認セシモノト看做スヘキコトヲ約ス

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ

關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣 伊藤博文（印）

大日本帝國全權辦理大臣 陸奧宗光（印）

大清帝國欽差頭等全權大臣 李鴻章（印）

太子太傅文華殿大學士北洋大臣 直隸總督一等肅毅伯 李鴻章（印）

大清帝國欽差全權大臣 李經方（印）

大清帝國欽差全權大臣 李鴻章（印）

大清帝國欽差全權大臣 李鴻章（印）

同一ノ效力ヲ有スルモノトス

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ

關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣 伊藤博文（印）

大日本帝國全權辦理大臣 陸奧宗光（印）

大日本帝國全權辦理大臣 陸奧宗光（印）

大清帝國欽差頭等全權大臣 李鴻章（印）

大清帝國欽差全權大臣 李鴻章（印）

大清帝國欽差全權大臣 李鴻章（印）

臺灣受渡二關スル公文

明治二十八年六月二日基隆ニ於

テ調印

大日本帝國全權委員臺灣總督 樂資山紀（印）
海軍大將從二位勳一等子爵

大清帝國欽差全權委員 李經方（印）
二品頂戴前出使大臣

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ下ノ關媾和條約第五條第二項ノ規定ニ依リテ臺灣省ヲ受渡スル爲メニ大日本國

臺灣受渡ニ關スル公文

媾和別約

第一條 本日調印シタル媾和條約第八條ノ規定ニ依リテ

時威海衛ヲ占領スヘキ日本國軍隊ハ一旅團ヲ超過セサル

ヘシ而シテ該條約批准交換ノ日より清國ハ毎年右一時占領ニ關スル費用ノ四分ノ一庫平銀五十萬兩ヲ支拂フヘシ

第二條 威海衛ニ於ケル一時占領地ハ劉公島及威海衛海ノ全沿岸ヨリ日本里數五里ノ地ヲ以テ其ノ區域トナスヘシ

右一時占領地ノ經界線ヲ距ル日本里數五里ノ地内ニアリテハ何レノ處タリトモ清國軍隊ノ之ニ近ツキ若ハ占領スルコトヲ許ササルヘシ

第三條 一時占領地ノ行政事務ハ仍ホ清國官吏ノ管理ニ歸スルモノトス但シ清國官吏ハ常ニ日本國占領軍司令官力其ノ軍隊ノ健康安全紀律ニ關シ又ハ之力維持配置上ニ付必要ト認め發スル所ノ命令ニ服従スヘキ義務アルモノトス

一時占領地内ニ於テ犯シタル一切ノ軍事上ノ罪科ハ日本國軍務官ノ裁判管轄ニ屬スルモノトス

此ノ別約ハ本日調印シタル媾和條約中ニ悉ク記入シタルトス

日清兩帝國全權委員ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ締結ノ媾和條約第二條ニ依リ清國ヨリ永遠日本國へ割與シタル臺灣全島及其附屬諸島並ニ澎湖列島即英國グリーンウイッチ東經百九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル城邑兵器製造所及官有物ノ受渡ヲ完了セリ

右證據トシテ兩帝國全權委員ハ茲ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年六月二日即光緒二十一年五月初十日基隆ニ於テ二通ヲ作ル

臺灣全島及其附屬諸島並ニ澎湖列島ニ在ル城邑兵器製造所及官有物目錄

一、臺灣全島及澎湖列島ノ各開港場並ニ各府廳縣ニ在ル

城壘兵器製造所及官有物

一、臺灣ヨリ福建ニ至ル海底電線ノ處理ニ關シテハ後日
日清兩國政府ニ於テ商議決定スヘシ

奉天半島還附條約並議定書

明治二十八年十一月八日北京

ニ於テ調印

同年同月二十九日北京ニ於テ

批准書交換

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ日本國ヨリ奉天省南部ノ地還附スル爲メニ條約ヲ締結スルコトニ
部ノ地一切ヲ清國ニ還附スル爲メニ條約ヲ締結スルコトニ
決シ之カ爲メ大日本國皇帝陛下ハ北京駐劄特命全權公使正
四位勳一等男爵林董ヲ大清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣太子
太傅文華殿大學士一等肅毅伯李鴻章ヲ各其ノ全權大臣ニ任
命シタリ因テ兩國全權大臣ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ其

第五條 本條約ハ日本文漢文英文ニテ各二通ヲ作ル而シテ
此ノ三本文ハ總テ同一ノ意義ヲ有スト雖モ若日本文ト漢
文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ英文ニ依テ決裁スヘ
キモノトス

第六條 本條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於
テ批准セラルヘク而シテ其ノ批准書ハ本條約調印ノ日ヨ
リ三週間以内ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ

右證據トシテ兩國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年十一月八日即光緒二十一年九月二十二日北京

ニ於テ作ル

林 董（印）
李 鴻 章（印）

【參考】

奉天半島還附ニ關スル露佛獨三
國ノ勸告覺書並帝國ノ回答附宣

露佛獨三國・勸告覺書
(明治二十八年四月二十三日受領)

本日調印シタル奉天半島還附ニ關スル日清兩國間條約中或
ル條款ヲ實施ニ至ラシムルコトニ付萬一遲延ノ生セムコトヲ豫防セムカ
ノ政府及大清國皇帝陛下ノ政府ハ前記條約中諸條款ヲ實施
ニ至ラシムルコトニ付萬一遲延ノ生セムコトヲ豫防セムカ
爲メ各其ノ全權大臣ヲ經テ左ノ條款ニ同意シタリ

奉天半島還附ニ關スル露佛獨三國ノ勸告並帝國ノ回答附宣

ノ善良妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 日本國ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年

三月二十三日締結ノ下ノ開條約第二條ニ因リ清國ヨリ日本國へ讓與シタル奉天省南部ノ地方即鴨綠江口ヨリ安平河口ニ至リ鳳凰城海城及營口ニ亘ル以南ノ各城市及遼東

灣東岸並ニ黃海北岸ニ在リテ奉天省ニ屬スル諸島嶼ノ主權ヲ舉ケ本條約第三條ノ規定ニ依リ日本國軍隊カ總テ撤退スル時該地方ニ現在スル城壘兵器製造所及官有物ト共ニ永遠清國ニ還附ス因リテ下ノ開條約第三條及同條約中陸路交通及貿易ヲ律スル爲メ一ノ條約ヲ締結スヘシトノ規定ハ之ヲ取消ス

第二條 清國政府ハ奉天省南部ノ地還附ノ報酬トシテ庫平銀三千萬兩ヲ明治二十八年十一月十六日即光緒二十一年九月三十日迄ニ日本國政府ヘ拂入ルコトヲ約ス

第三條 本條約第二條ニ規定シタル報償金庫平銀三千萬兩ヲ清國ヨリ日本國ヘ拂入レタルトキハ其ノ日ヨリ三箇月以内ニ還附地ヨリ日本國軍隊ヲ總テ撤退スヘシ

第四條 清國ハ日本國軍隊還附地占領中之ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民アルモ之ヲ處罰シ若ハ處罰セシメサルコトヲ約ス

日本清兩國政府ハ本議定書ノ日附ヨリ五日間以内ニ各其ノ全權大臣タル下名ヲ經テ前記條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ノ允准ヲ受ケタル旨ヲ互ニ通知スヘシ然ル上ハ前記條約ノ全部ハ實際其ノ批准交換ヲ了ヘタルト同様ニ充分ノ效力ヲ有スルモノトス

右證據トシテ兩國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年十一月八日即光緒二十一年九月二十二日北京

ニ於テ作ル

林 董（印）
李 鴻 章（印）

露國皇帝陛下ノ政府ハ日本ヨリ清國ニ向テ求メタル媾和條件ヲ査閱スルニ其要求ニ係ル遼東半島ヲ日本ニテ所有スルコトハ當ニ清國ノ都ヲ危フスルノミナラス之ト同時ニ朝鮮國ノ獨立ヲ有名無實トナスモノニシテ右ハ將來永ク極東永久ノ平和ニ對シ障害ヲ與フルモノト認ム隨テ露國政府ハ日本國皇帝陛下ノ政府ニ向テ重テ其誠實ナル友誼ヲ表センカ爲メ茲ニ日本國政府ニ勸告スルニ遼東半島ヲ確然領有スルコトヲ放棄スヘキコトヲ以テス

(ロ) 佛國公使ヨリノ勸告

佛蘭西共和國政府ノ意見ニテハ遼東半島ヲ領有スルコトハ清國ノ都ヲ危フシ朝鮮國ノ獨立ヲ有名無實ニ歸セシメ且ツ永ク極東ノ平和ニ對シ障害ヲ與フルモノナリトス佛蘭西共和國政府ハ重テ茲ニ日本帝國政府ニ對スル友情ヲ彰表セント欲スルカ故ニ帝國政府ニ向テ該半島ヲ確然所有スルコトヲ放棄アリ度旨友誼上ノ勸告ヲ與フルコトハ佛國政府ノ義務ナリト思考ス

(ハ) 獨國公使ヨリノ勸告

本國政府ノ訓令ニ從テ左ノ宣言ヲ致シマス
獨逸國政府カ日清媾和ノ條件ヲ見レハ貴國ヨリ請求シタル遼東ノ所有ハ清國ノ都府ヲシテ何時迄モ不安全ノ位地ニ置

キ日朝鮮ノ獨立ヲモ水泡ニ屬サセ依テ東洋平和ノ永續ノ妨ケニナルコトアルト認メナケレハナリマセタ夫故ニ貴國政府カ遼東ノ永久ナル所有ヲ斷念ナサル様ニ本國政府カ御勸告致シマス
此宣言ニ付キマシテ次キノコトヲ申上ル様ニ云ヒ付ケラレマシタ
現今日清事件ノ最初ヨリ本國政府カ貴國ニ對シテ其懇親ナル心ノ證據ヲ顯ハシタルハ唯一度ノ事テナイト存シテ居リマス御承知ノ通リニ昨年十月七日ニモ英國政府カ歐洲各國ニ日清事件ニ干涉スルコトヲ申込ンダカ其節獨逸國カ日本國ニ對シテノ懇駕ニ依テ干涉ヲ斷リマシタ夫カラ又當年三月八日ヲ以テ本國政府ノ命令ニ從テ貴國政府カ尊多ノ請求ヲ爲サラナイテ成ルヘク早ク媾和ヲ結フ様ニ御勸告致シマシタ其時ニ申上ケマシタノハ歐洲ノ諸國カ清國ノ願ヒニ應シテ干渉致スカモ計ラレマセタト云フコトニ依テ日本國ハ若シ豈多ノ請求ヲセスシテ早速媾和條約ヲ締結ナサルナラ却テ其方カ利益カ有ルテアロウト云フコトテコサイマシタ夫レニ續テ日本國若シ大陸ノ土地ノ譲與ヲ要求スレハ之レハ最モ干渉ヲ惹起スヘキ要求テアルタロウト申述マシテモ貴國テハ此ノ利己心ナキ勸告ニ應シマセシテコサ

イマシタ
現在ノ日清媾和ノ條件ハ全ク度ニ過キテ歐洲諸國ノ利益上ニモ害

ニト竝ニ譬擬分カハ少ナシト雖モ亦獨逸國ノ利益上ニモ害カアルト認マス夫レ故ニ現今ハ本國皇帝陛下ノ政府モ俱ニ抗議ヲ提出シナケレハナリマセバ、必要カアル場合ニハ其抗議ヲシテ有效ニナラシメルコトモアリマシヨウ三國ニ對スル戰ハ所詮日本國ニ望ミノナイコトテアルカ故ニ貴國對スル戰ハ所詮日本國ニ望ミノナイコトナクシテ此事件ニ付キマシテハ讓ルコトカ出來ナイコトハナカロウト存シテ居リマス尙ホ日本國政府カ名譽ヲ失フコトナクシテ今ノ地位ヨリ退ソクコトノ途ヲ講スル爲メニ「コンフェレンス」ヲ開ク等ノコトヲ望マルレハ其旨ヲ電報ニテ本國政府へ送レト云フ内調ヲモ受ケテ居リマス

在日本獨國公使ヨリ提出セシ墨書ニ對スル回答

(明治二十八年四月三十日京都發)
(在外日本公使ヲシテ各國政府ニ)
提出セシム

宣 言

明治二十八年七月十九日東京

日本帝國政府ハ露國皇帝陛下ノ特命全權公使閣下カ其本國
佛蘭西共和國公使ヨリ提出セシ墨書ニ對スル其ノ

奉天半島還附ニ關スル露佛獨三國ノ勸告並帝國ノ回答附宣言

帝國政府ニ於テハ遼東半島ニ關スル未決問題ヲ可成丈ケ速ニ辦理スルコト關係諸國ニ取テ利益ナルヘシト認メ且三國政府ニ於テ平生懷ク所ノ友情ヲ顧ミ之ニ向テ重テ其ノ尊重スヘキ帝國政府ノ和衷ノ意ヲ證明セント欲スルヲ以テ帝國政府ニ於テ不日直接ニ清國ト成シ遂ケントスル談判ヲ開クニ先チ左ノ宣言ヲ爲ス

第一、奉天半島ノ永久所有權ヲ拠棄スルノ報酬トシテ日本國ヨリ清國ニ對シ要求セントスル償金額ヲ定ムルニ

當リ帝國政府ニ於テハ今放棄セントスル土地ノ實價ニ等シキ金額ヲ辨償セシメントセハ清國目下ノ内情ニ於テ頗ル困難ヲ感スヘシト慮リタルヲ以テ帝國政府ハ清國ノ財政ヲ酌量シ大ニ其正當ナル要求ヲ減却シ追加償金ノ額ヲ庫平銀五千萬兩ト定メタリ

第二、帝國政府ハ奉天半島全然撤兵ノ第一著手トシテ追加償金庫平銀五千萬兩ヲ拂ヒ且ツ下ノ關條約ニ規定シタル軍費賠償金第一回ノ拂込ヲ了リタル時ハ其占領軍除ヲ金州半島境界内ニ撤回スヘシ又右軍費賠償金ノ第二回拂込ヲ了リ且ツ下ノ關條約ヲ以テ速カニ締結スルコトヲ規定セラレタル通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタルトキハ全然奉天半島ノ撤兵ヲ爲スヘシ

滿洲ニ關スル條約並附屬協定

明治三十八年十二月二十二日

北京ニ於テ調印

明治三十九年一月二十三日北

京ニ於テ批准書交換

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ均シク明治三十八年九月五日即光緒三十一年八月七日訓印セラレタル日露兩國講和條約ヨリ生スル共同關係ノ事項ヲ協定セムコトヲ欲シ右ノ目的ヲ以テ條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲メニ大日

日北京ニ於テ之ヲ作ル

大日本帝國特派全權大使 小村壽太郎 (印)

外務大臣從三位勳二等男爵 (印)

大日本帝國特命全權公使 内田 康哉 (印)

從四位勳二等 内田 康哉 (印)

大清國欽差全權大臣軍機大臣 署鴻臚 (印)

軍機大臣總理外務部事務 廣親王 (印)

大清國欽差全權大臣軍機大臣 署鴻臚 (印)

外務部尙書會辦大臣 廣親王 (印)

太子少保直隸總督 袁世凱 (印)

ノ居住及貿易ノ爲メ自ラ逃ミテ滿洲ニ於ケル左ノ都市ヲ

開クヘキコトヲ約ス

盛京省 鳳凰城 遼陽 新民屯 鐵嶺 通江子

法庫門

右證據トシテ兩國全權委員ハ日本文及漢文ヲ以テ作ラレタ

ル各二通ノ本條約ニ署名調印スルモノナリ

明治三十八年十二月二十二日即光緒三十一年十一月二十六

第三、帝國政府ハ三國政府ノ請求ヲ酌量シ且ツ一般ノ國際通商ノ利害ヲ慮リ左ノ如ク宣言ス

帝國政府ハ臺灣海峽ヲ以テ全ク各國公共ノ航路ト認メ隨テ該海峽ハ獨リ日本國ノ專有又ハ管轄ニ屬スルモノニ非ラスト宣言ス

帝國政府ハ臺灣及澎湖島ヲ他國ニ讓與セサルコトヲ約ス

吉林省 長春(寬城子) 吉林 哈爾濱 寧古塔 瑶春 三姓

黑龍江省 齊齊哈爾 海拉爾 愛珲 滿洲里

第二條 清國政府ハ滿洲ニ於ケル日露兩國軍隊竝鐵道守備兵ノ成ルヘク速ニ撤退セラレムコトヲ切望スル旨ヲ言明シタルニ因リ日本國政府ハ清國政府ノ希望ニ應セムコトヲ欲シ若シ露國ニ於テ其ノ鐵道守備兵ノ撤退ヲ承諾スルカ或ハ清露兩國間ニ別ニ適當ノ方法ヲ協定シタル時ハ日本國政府モ同様ニ照辦スヘキコトヲ承諾ス若シ滿洲地方平靖ニ歸シ外國人ノ生命財産ヲ清國自ラ完全ニ保護シ得ルニ至リタル時ハ日本國モ亦露國ト同時ニ鐵道守備兵ヲ撤退スヘシ

第三條 日本國政府ハ滿洲ニ於テ撤兵ヲ了シタル地方ハ直チニ之ヲ清國政府ニ通知スヘク清國政府ハ日露講和條約追加約款ニ規定セル撤兵期限内ト雖既ニ上記ノ如ク撤兵完了ノ通知ヲ得タル各地方ニハ自ラ其ノ安寧秩序ヲ維持スル爲必要ノ軍隊ヲ派遣スルコトヲ得ルモノトス日本國軍隊ノ未タ撤退セサル地方ニ於テ若シ土匪ノ村落ヲ擾害スルコトアル時ハ清國地方官モ亦相當ノ兵隊ヲ派遣シ之ヲ勦捕スルコトヲ得但シ日本國軍隊駐屯地界ヨリ二十二箇年ヲ以テ改良工事完成ノ期限トス)十五箇年ヲ以テ期限ト爲シ即光緒四十九年ニ至リテ止ム右期限ニ至ラハ雙方ニ於テ他國ノ評價人一名ヲ選ミ該鐵道ノ各物件ヲ評價セシメテ清國ニ賣渡スヘシ其ノ賣渡前ニ在リテ清國政府ノ軍隊並兵器糧食ヲ輸送スル場合ニハ東清鐵道條約ニ準據シテ取扱フヘク又該鐵道改良ノ方法ニ至テい日本國ノ經營擔當者ニ於テ清國ヨリ特派スル委員ト切實ニ商議スヘキモノトス該鐵道ニ關スル事務ハ東清鐵道條約ニ準

第四條 日本國政府ハ軍事上ノ必要ニヨリ滿洲ニ於テ占領又ハ收用セル清國公私財產ハ撤兵ノ際悉ク清國官民ニ還附シ又不用ニ歸スルモノハ撤兵前ト雖之ヲ還附スルコトヲ承諾ス

第五條 清國政府ハ滿洲ニ於ケル日本軍戰死者ノ墳墓及忠魂碑所在地ヲ完全ニ保護スル爲メ總テ必要ノ處置ヲ執ルヘキコトヲ約ス

第六條 清國政府ハ安東縣奉天間ニ敷設セル軍用鐵道ヲ日本國政府ニ於テ各國商工業ノ貨物運搬用ニ改メ引續キ經營スルコトヲ承諾ス該鐵道ハ改良工事完成ノ日ヨリ起算シ(但シ軍隊送還ノ爲メ逕延スヘキ期間十二箇月ヲ除キ二箇年ヲ以テ改良工事完成ノ期限トス)十五箇年ヲ以テ

シ清國政府ヨリ委員ヲ派シ查察經理セシムヘク又該鐵道ニ由リ清國公私貨物ヲ運搬スル運賃ニ關シテハ別ニ詳細ナル規程ヲ設クヘキモノトス

第七條 日清兩國政府ハ交通及運輸ヲ增進シ且之ヲ便易ナラシムルノ目的ヲ以テ南滿洲鐵道ト清國各鐵道トノ接續

第八條 清國政府ハ南滿洲鐵道ニ要スル諸般ノ材料ニ對シ各種ノ稅金及釐金ヲ免スヘキコトヲ承諾ス

第九條 盛京省内ニ於テ既ニ通商場ヲ開設シタル營口及通商場トナスヘク約定シアルモ未タ開カレサル安東縣並奉天府各地方ニ於テ日本居留地ヲ劃定スル方法ハ日清兩國官吏ニ於テ別ニ協議決定スヘシ

第十條 清國政府ハ日清合同材木會社ヲ設立シ鴨綠江右岸地方ニ於テ森林伐採ニ從事スルコト其ノ地區ノ廣狹年限ノ長短及會社設立ノ方法並合同經營ニ關スル一切ノ章程ハ別ニ詳細ナル約束ヲ取極ムヘキコトヲ承諾ス日清兩國株主ノ利權ハ均等分配ヲ期スヘシ

第十一條 滿韓國境貿易ニ關シテハ相互ニ最惠國ノ待遇ヲ與フヘキモノトス

第十二條 日清兩國政府ハ本日調印シタル條約及附屬協約

【参考】

滿洲ニ關スル條約附屬秘密議定書
(千九百五年十二月二十二日)

(「マクマレー」條約集)
第一卷五五四頁記載)

千九百五年十二月二十二日ノ日清條約ニ關スル
所謂秘密議定書概要

日本國ト清國トノ全權委員間ニ最近開催セラレタル滿洲ニ
關スル會議ノ議定書ハ清國政府ノ希望ヲ尊重シ嚴秘ニ附ス
ヘキモ唯該協約ノ實施的取極ノ性質ヲ有スル部分ニ就キ概
要ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一條 長春吉林間ノ鐵道ハ清國自ラ資金ヲ調達シテ敷設
スヘク但シ清國ハ資金ノ不足額ヲ日本國ヨリ借入ルルコ
トヲ承諾ス其ノ金額ハ所要資金總額ノ約半額ナリトス借
款契約ハ北清帝國鐵道局(山海關内外鐵道局)ト英清組合
トノ借款契約ニ準シ逕済ナク參照商訂セラルヘシ借款ノ
期限ハ二十五箇年トシ年賦償還セラルヘキモノトス

第二條 奉天新民屯間ニ日本國カ敷設シタル軍用鐵道ハ兩
國政府ノ任命シタル委員ニ於テ公平ニ代價ヲ協定シ清國

エルノ意ヲ露國ニ通牒シ露國カ之ヲ承諾スルニ於テハ該
商議ニ參加スヘシ

第六條 本鐵道附屬ノ奉天省ニ於ケル鐵山ニ關シテハ既ニ
探掘中ニ屬スルト否トニ拘ラス公平且詳細ナル章程ヲ取
極メ以テ相互遵守ニ便ナラシムヘシ

第七條 接續業務ニ關スル事項及奉天省ニ於ケル電信線及
旅順煙臺間ノ海底電信線ニ關スル一般關係事項ハ隨時必
要ニ從ヒ兩國協議シテ處理スヘシ

第八條 滿洲ニ於テ開放セラルヘキ場所ニ關スル規程ハ清
國自ラ作成スヘシ但シ北京駐在日本公使ト豫メ協議スル
コトヲ要ス

第九條 (日本船舶ノ)松花江航行ニ關シ露國側ニ於テ何等
異議ノ申立ナキトキハ清國ヘ商議ノ上該航行ヲ承諾スヘ
シ

第十條 清國全權委員ハ日露兩國軍隊ノ滿洲撤退後清國ニ
於テ直ニ其ノ主權ニ基キ該地方ニ於ケル平和ヲ保障スヘ
キ充分ナル行政手段ヲ講シ且利ヲ興シ弊ヲ除キ着實ニ秩
序ノ恢復ニ努メ以テ該地域ノ居住者タル清國人及外國人
ハ等シク清國政府ノ完全ナル保護ノ下ニ生命及財業ノ安

全ヲ享有シ得ヘキコトヲ聲明ス秩序回復ニ關シテハ清國

ニ賣渡サルヘン清國ハ之ヲ改築シ自營鐵道ト爲シ又遼河
以東線ニ要スル資金ノ半額ヲ日本ノ財團ヨリ借入レ十八
年ヲ以テ年賦完済ノ期トシ且其ノ借款契約ヘ北清帝國鐵
道局(山海關内外鐵道局)ト英清組合トノ借款契約ニ準シ
參酌商訂セラルヘキモノナルコトヲ約ス
其ノ他各地ニ於ケル軍用鐵道ハ當該地方ノ撤兵ト同時ニ
除去セラルヘキモノトス

第三條 清國政府ハ南滿洲鐵道ノ利益ヲ保護スルノ目的ヲ
以テ該鐵道回収以前ニ該鐵道ニ近ク若ハ之ト併行シ該鐵
道ノ利益ヲ害スル虞アル他ノ鐵道ノ本線又ハ支線ヲ敷設
セサルヘキコトヲ約ス

第四條 清國ハ露國ヲシテ露國カ滿洲北部ニ於テ引領キ所
有スル鐵道ニ關スル露清條約ヲ忠實ニ履行セシムル爲充
分ナル措置ヲ執ルヘク且露國ニシテ該條約ノ規程ニ違反
スル行爲アル場合ハ如斯行動ヲ完全ニ矯正セシムル爲嚴
重申入ルヘキコトヲ聲明ス

第五條 將來(日露講和條約第八條ノ規定ニ基キ)日露兩國
ニ於テ接壤鐵道業務ヲ規定センカ爲商議開始セラルル場
合ハ日本國ハ豫メ清國ニ通知スルコトヲ要ス清國ハ此ノ
場合自國ノ派遣スヘキ委員ヲ經テ該商議ニ加ハラント紙

政府自ラ適宜ノ措置ヲ講スヘキモノトス

第十一條 清國ト日本國トハ素ヨリ親善友好的關係ニアリ
日露兩國ハ不幸ニシテ戰端ヲ開キ清國領土ニ於テ交戦ス
ルニ至リタルモ今ヤ既ニ平和再興シ滿洲ニ於テハ戰爭熄
ムニ至リ而シテ日本軍隊ハ撤退前ニ於テ軍事占領ニ依
ル權利ヲ行使シ得ヘキハ否認シ得サル所ナリト雖清國政
府ハ近來滿洲ニ於ケル日本臣民ニシテ支那地方官憲ノ行
政ニ干涉シ又ハ清國ノ公私財產ヲ毀損スル者アル旨茲ニ
聲明ス

日本國全權委員ハ若シ果シテ軍事上ノ必要ヲ超エテ如斯
干涉及毀損行ハレタリトセハ至當ノ行爲ニ非スト思惟ス
ルヲ以テ前記清國政府聲明ノ主旨ヲ日本國政府ニ轉達シ
以テ奉天省ニアル日本臣民ヲ取締り又兩國間ノ友好關係
ア增進シ且又軍事必要以外ニ於テ將來再ヒ清國ノ行政ニ
干涉シ又ハ公私財產ヲ毀損スル者アルヲ防止スル爲政府
ニ於テ相當ノ處置ヲ執ラシムヘシ

第十二條 軍事上必要ナクシテ日本臣民ニ依リ故意ニ破損
若ハ使用セラレタル清國ノ公私各種ノ財產ニ對シテヘ兩
國政府ニ於テ夫々調査ノ上公平ニ賠償ヲ爲ス處アルヘシ

第十三條 支那地方官憲カ未タ日本軍隊ノ完全ニ撤去セラ

レサル地方ニ土匪討伐ノ目的ヲ以テ軍隊ヲ派遣セントス
ル場合ニハ必ス豫メ該地駐屯ノ日本軍司令官ト協議シ以
テ誤解ヲ免レシムヘシ

第十四條 日本國全權委員ハ長春ト旅順及大連租借地ノ境

界線トノ間ニ駐屯セル鐵道守備隊カ撤退以前ニ於テ故ナ
ク清國ノ地方行政ニ干渉シ又ハ許可ナクシテ鐵道地帶外
ニ出ツルヲ許ササルヘキコトヲ聲明ス

第十五條 管口ニ駐在スヘキ清國地方官憲ハ日本軍隊ノ撤 退以前ト雖該地ニ入り公務ヲ處辦スルコトヲ許ササルヘシ 其ノ赴任ノ期日ハ本條約確定ノ後北京駐在日本公使ト外 務部ト協議シ成ルヘク速ニ決定セラルヘキモノトス該地 ニハ尙多數ノ日本軍隊アルヲ以テ檢疫及防疫規則ヲ兩國 官憲ニ於テ互ニ協議制定シ以テ疫病ノ傳染ヲ免レシムヘ シ

第十六條 管口海關收入ハ横濱正金銀行ニ保管シ撤兵ノ際 清國官憲ニ交付セラルモノトス管口常關ノ收入及其ノ 他各地ノ稅收ハ地方經費ニ充テラルヘク其ノ收支計算書 ハ撤兵ノ際支那地方官憲ニ引渡サルヘキモノトス

【参考】 滿洲ニ關スル條約交渉會議錄中 ノ日支諒解事項

滿洲ニ關スル條約ハ明治三十八年十一月二十七日ヨリ日支
兩全權間ニ交渉ヲ開始シ同年十二月二十二日漸々調印ノ運
ニ至レルカ同交渉會議錄中ニハ帝國ノ滿洲ニ於ケル重要ナ
ル地位ヲ支那側ニ於テ諒解確認セル記錄渺ナカラス右ノ内
特ニ主要ナル點ヲ掲ケンニ最初帝國政府ハ交渉開始日頃ニ
當リ遣回ノ交渉ノ主眼トスル所ハ

一、清國政府ハ滿洲ニ於ケル其ノ施政ヲ改善シ列國臣民
ノ生命ヲ安全ニ保護スルト共ニ將來同地方ヲシテ再ヒ
國際紛争ノ禍因タラシメサルコト

二、滿洲ニ於ケル貿易ヲ發達セシメ以テ清國ハ勿論列國
ヲシテ共存共榮ノ福利ヲ圖ルヘキコト
三、日露戰爭ノ結果露國カ日本ニ讓與シタル一切ノ權利
特權ハ清國政府ニ於テモ之ヲ確認スルコト
ヲ期スルニアリト説明シ左記ノ如キ要求條項九箇條ヲ提出
シ帝國政府ノ協力ニ待ツヘキ必要アルコトヲ主張セリ
第一 日露講和條約第三條ニ依リ日露兩國軍隊カ滿洲ニ

リ撤退スルヲ待ツテ清國政府ハ直ニ同地方ニ居住スル 各國人ノ治安秩序ヲ維持スルニ足ルヘキ様其ノ行政機 關ヲ設定スルコト

第二 清國政府ハ滿洲ニ於ケル善政ヲ確立シ列國居留民 ノ生命財産ニ對シ適當且ツ有效ナル保護ヲ與フル爲メ 滿洲ノ施政改善ニ着手スヘキコト

第三 日本政府ハ將來清國政府ノ施政力改善セラレ滿洲 ニ於ケル外國人ノ生命財產及企業ヲ完全ニ保護シ得ル コトヲ確認スルニ至ラハ露國ト同時ニ鐵道守備兵ヲ撤 退スヘキコト

第四 清國政府ハ如何ナル主義ヲ以テスルモ日本政府ノ 同意ヲ得シテ滿洲ノ一部タリトモ外國ニ割譲シ又ハ 外國ノ占領ヲ許容承認セサルコト

第五 清國政府ハ日本政府ノ特ニ指示シタル滿洲内地ノ 左記都市ヲ開放スルコト(都市名省略)

第六 清國政府ハ日露戰爭ノ結果トシテ露國政府ヨリ日本 本政府ニ讓與セル滿洲ニ於ケル租借地、鐵道其ノ他一切ノ權利特權ヲ承認スルコト

第七 清國政府ハ安奉軍用鐵道ヲ改築シ引續キ日本ノ經 營ヲ承認スルコト(細目省略)

標意味ノ會議錄ニ記入スルコト」ヲ承認シ茲ニ日本政府カ
滿洲ニ關スル條約締結ノ目的ハ完全ニ達成セラレ所謂北京
條約ノ成立ヲ見タル次第ナリ

有之候ニ付右ノ次第義ニ面陳ニ及ヒ置キタルカ更ニ茲ニ貴
王大臣ニ致照會候間何分ノ御回答ヲ得度此段照會得貴意候
敬具

明治三十一年四月二十二日

福建不割讓ニ關スル交換公文

來翰

明治三十一年四月二十二日

北京ニ於テ

往翰

以書翰致啓上候陳者日本國政府ハ深ク清國政府近來ノ窮況
ヲ軽念シ義ニ咸海衛撤兵ノ聲明ヲ爲セルモ素ヨリ意外ノ事
端發生シ累々清國ニ加ヘンコトヲ慮リタルカ爲メニ外ナラ
ス亦以テ日本國眞意ノ存スル所ヲ明カニスルニ足ルヘク將
又日本國政府ハ實際ノ情況ヲ明察シ利害ノ及フ所ヲ考慮ス
ルトキハ之ヲ不問ニ付スル能ハサルモノアリ宜シク早キニ
及シテ妥當ノ方法ヲ講セサルヘカラス就テハ清國政府ニ於
テ福建省内ノ各地ヲ他國ニ讓與若クハ貸與セサルヘキコト
ヲ聲明セラレンコトヲ申入ルヘキ旨帝國外務大臣ヨリ電訓

以書翰致啓上候陳者光緒二十四年閏三月二日付貴翰ヲ以テ
日本國政府ハ深ク清國政府近來ノ窮況ヲ軽念シ義ニ咸海衛
撤兵ノ聲明ヲ爲セルモ素ヨリ意外ノ事端發生シ累々清國ニ
加ヘンコトヲ慮リタルカ爲メニ外ナラス亦以テ日本國眞意
ノ存スル所ヲ明カニスルニ足ルヘク將又日本國政府ハ實際
ノ情況ヲ明察シ利害ノ及フ所ヲ考慮スルトキハ之ヲ不問ニ
付スル能ハサルモノアリ宜シク早キニ及シテ妥當ノ方法ヲ
講セサルヘカラス就テハ清國政府ニ於テ福建省内ノ各地ヲ
他國ニ讓與若クハ貸與セサルヘキコトヲ聲明セラレンコト
ヲ申入ルヘキ旨日本國外務大臣ヨリ電訓ニ接シタルニ付義
ニ面陳ニ及ヒ置キタルカ更ニ茲ニ照會シ何分ノ回答ヲ得度
趣御照會相成候處本衙門按スルニ福建省内及沿海一帶ハ均
シク中國ノ要地ニ屬スルヲ以テ何レノ國タルヲ論セス中國
ハ斷シテ之ヲ讓與又ハ貸與セサルヘシ依テ茲ニ貴公使ニ及

回答候間右貴國政府ニ御轉達相成度此段回答得貴意候敬具

光緒二十四年閏三月初四日

【参考】

議決セルニ付政府ニ於テ右ノ通り公布施行アリタシ云々ト
アリ查スルニ沿海各地ハ國防ノ大計ニ關係ス速ニ審議措置
ヲ施スヘキモノナリ該院ノ建議ハ洵ニ識慮遠大ニシテ特ニ
宣布ヲ加フヘシ即チ今後中國ノ有ニル沿海港口灣岸島嶼ハ
何國タルニ論ナク一切租借又ハ讓與ヲ許サス且該軍海軍ノ
兩部及沿海ノ官吏ニ命シ務メテ責任ヲ負ヒ十分籌防ヲ加ヘ
以テ國權ヲ鞏固ニスルノ至意ヲ體スヘシ茲ニ貴公使ニ及

支那沿海港灣島嶼不割讓ニ關ス
ル大總統申令

(民國四年五月十三日)

支那國領土不割讓又ハ不租貸ニ
關スル支那國ノ宣言

(千九百二十一年二月四日
會議第六回總會ニ於テ)

支那國ハ其ノ領土又ハ沿岸ノ何レノ部分ヲモ他國ニ割讓シ
又ハ租賃セサルノ保證ヲ與フルノ準備ヲ有ス

參政院ノ上申ニ依レハ前清ノ末葉國勢衰頹海疆多事沿海ノ
要塞或ハ事ニ因テ外國ニ讓與シ或ハ外國ノ租借スル所トナ
リ以テ險要淪陷シ軍備據ル所ナク庶民枕ヲ安シスルヲ得ス
險ヲ設ケ國ヲ謹ルノ趣旨ト大ニ相背馳ス茲ニ建議シ過
去ノ失敗ニ鑑ミ將來ノ謀ノ爲ニ陸海軍及沿海ノ當局官吏ニ
命シ海防ニ注意セシメ以テ沿海ノ居民ヲシテ居ニ安シシ業
ヲ樂マシメ同時ニ今後中國ノ有ニル沿海港口灣岸島嶼ハ何
國ヲ論セス一切租借又ハ讓與ヲ許ササルコトヲ天下ニ宣告
シ務メテ本國々防ヲ鞏固ニシ共ニ國際平和ノ福ヲ享ケシメ
ハ全國幸甚シ茲ニ五月十二日ノ大會ニ於テ討議シ全員一致

支那沿海港灣島嶼不割讓ニ關スル大總統申令
支那國領土不割讓又ハ不租賃ニ關スル支那國ノ宣言

【参考】

福建省財政廳借款契約

(大正七年十二月二十一日)
福建財政廳及福建銀行對臺灣銀行

借款延期契約書

福建銀行カ從來營業資金トシテ福建財政廳振出ノ期票ヲ差入レ株式會社臺灣銀行ヨリ借入レ居ル左記借款

日本金十五萬圓也

大正七年十月五日期日

同 七萬八千六十二圓

五十錢

十萬圓也

同 同

十月十一日期日

五萬六千五百圓也

同 同

十月二十三日期日

七萬圓也

同 同

十一月七日期日

七萬五千圓也

同 同

十一月十三日期日

七萬八千六十二圓

同 同

五十錢

同 同

同 同

十二月三十一日期日

以上合計日本金六十八萬二千六百二十五圓也

期日大正八年五月末日	日本金四萬二千六百二十	同 同	六月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	七月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	八月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	九月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	十月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	十一月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	十二月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	大正九年一月末日	同 四萬圓也
同 同	日本金四萬圓也	同 同	二月末日	同 四萬圓也

第七條	本借款ノ元利金ノ期日到来スルモノ甲カ債務ヲ履行セサルトキハ乙ハ擔保權ヲ行使スヘタ人ヲ派遣シ所定ノ擔保機關ニ對シ第一ニ優先シテ督收シ以テ借款元利金及諸費用ノ辨済ニ充當スルコトヲ得之ニ要スル費用ハ乙ノ計算ニ依リ一切甲ノ負擔トス	コトヲ得ス
第八條	第五條記載ノ擔保權ヲ乙以外ノ第三者ニ提供スルコトヲ得ス	
第九條	本借款ノ擔保價格減少シ乙カ不充分ト認メタルトキ又ハ擔保ノ一部若シクハ全部ノ滅失ソ来シタルトキハ其ノ事由ノ如何ニ拘ハラス甲ハ新規ニ乙ノ満足スル擔保ヲ提供スルモノトス	
第十條	本契約書ハ日本文ニ翻譯シテ附證トナシ若シ將來文言ノ解釋ニ就キ疑義ヲ生シタルトキハ特ニ日文翻譯附證ニ據ルモノトス	
第十一條	本契約書ハ當事者雙方記名調印ヲシタルトキ初メテ效力ヲ生ス	
第十二條	本契約書ハ福建省長ノ承認及日本帝國領事ノ見證ヲ受ケ當事者各一通ヲ保有スルモノナリ	
連帶債務者	福建財政廳廳長	費 誠 楷
連帶債務者	福建銀行督辦	費 誠 楷

第三條	自今福建全省ノ茶稅收入ハ一切之ヲ本借款ノ辨済ニ充當スルモノトス依テ福建財政廳ハ福建銀行ヲ督征員ニ任命シ督征員ニ於テ收入シタル茶稅金ハ收入ノ都度之ヲ乙ニ預ケ入ルモノトス
第四條	本借款ノ利息割合八月一分即チ日本金百圓ニ付き毎月日本金一圓トス
第五條	本借款ハ福建全省ノ茶稅收入ヲ以テ擔保トス
第六條	本借款ハ返済期日第一期ヨリ第十七期ニ至ル間ニ於テ若シ完済シ得サルトキハ福建財政廳ハ乙ノ相當ト認ム
第七條	福建省下ノ數箇所ノ鹽金局收入ヲ増擔保ニ提供スルモノトス

第十條 本契約書ハ當事者雙方記名調印ヲシタルトキ

第十一條 本契約書ハ日本文ニ翻譯シテ附證トナシ若シ將來文言ノ解釋ニ就キ疑義ヲ生シタルトキハ特ニ日文翻譯附證ニ據ルモノトス

第十二條 本契約書ハ福建省長ノ承認及日本帝國領事ノ見證ヲ受ケ當事者各一通ヲ保有スルモノナリ

連帶債務者 福建財政廳廳長 費
誠
楷

連帶債務者 福建銀行督辦 費
誠
楷

連帶債務者 福建銀行 總理 劉友敏
債權者 支店支配人 宮澤壽男

中華民國七年十二月二十一日

【参考】

福建省財政廳借款改訂契約

(大正八年十二月二十日)
(福建財政廳對臺灣銀行)

契約書

民國七年十二月二十一日附テ以テ福建財政廳及福建銀行ヲ連帶債務者(以下單ニ乙ト稱ス)トシ、株式會社臺灣銀行ヲ債權者(以下單ニ甲ト稱ス)トシテ兩者ノ間ニ締結シタル日本金六十八萬二千六百二十五圓借款延期契約(以下單ニ借款契約ト稱ス)ニ關シ更ニ契約ヲ締結スルコト左ノ如シ。

第一條 乙ハ甲ノ申出ニ由リ借款契約第二條中ノ大正八年十月末日ヨリ大正九年三月末日迄ニ辨済スヘキ元金日本金二十四萬圓ヲ大正九年三月末日迄猶豫スルモノトス。

依テ甲ハ借款契約第二條ノ期票及月賦額ニ拘泥セス大正九年四月以降毎月元金日本金八萬圓以上ヲ乙ニ返済シ同月内ニ支拂實行ノ上ハ以後利息每月一分ノ割ニテ計算スルシ責任ヲ免ルルコトヲ得サルモノトス。

第二條 本契約ニヨリ甲ハ乙ニ對シ借款契約ヲ履行セナリシ責任ヲ免ルルコトヲ得サルモノトス。

第三條 借款契約第四條ヲ左ノ通り變更ス。

本契約ノ利息割合ハ大正八年十一月ヨリ大正九年四月至ル六箇月間ヘ月一分五厘即日本金百圓ニ付毎月日本金一圓五十錢トシ大正九年五月以降ハ月一分即日本金百圓ニ付毎月一圓トス。

大正八年十一月一日ヨリ大正九年四月三十日ニ至ル利息ハ即時計算ノ上大正八年十一月中ニ甲ヨリ一次ニ乙ニ支拂フモノトス大正九年五月以降ノ利息ハ毎月第一日ニ當該月分ヲ甲ヨリ一次ニ乙ニ支拂フモノトス。

第四條 本契約ノ條項ニ抵觸セサル限り借款契約ハ完全有効トナス。

第五條 本契約書ハ支那文及日本文ニテ調製シ解釋ハ日本文ニ據ルモノトス。

第六條 借款契約ハ甲ニ於テ本契約調印ノ日ヨリ二箇月以内ニ民國中央政府ノ承認ヲ受ケタル上甲ハ之ヲ證スヘキ公文書ヲ乙ニ交付スルモノトス。

第七條 本契約書ハ福建省長ノ承認及日本帝國總領事ノ見證ヲ受ケ支那文及日本文共當事者各一通ヲ保有スルモノナリ。

連帶債務者 福建財政廳長 費穎楷
連帶債務者 福建銀行 總理 劉友敏
連帶債務者 支店支配人 宮澤壽男
中華民國八年十二月二十日

追加契約書

民國七年十二月二十一日福建財政廳ト臺灣銀行ト締結セル借款契約ノ辨済殘高現在遲滯ノ元金日貸金四十八萬圓ハ原契約第六條ノ規定ニ依リ擔保ヲ増加シ雙方別ニ追加契約ヲ締結スルコト左ノ如シ。

第一條 選擇中ノ借款日貨金四十八萬圓ハ民國九年八月二十六日付福建財政廳公文ニ基キ民國九年九月ヨリ毎月利息ヲ完納スル外日貸金二萬圓也ヲ償還スル管ナルモ目下財政窘迫シ及茶期經過茶稅收入無之タメ償還困難ナルニ依リ特ニ別ニ竹崎、沙埕、洋口ノ各鹽金局ヲ指定シテ其徵收稅金ヲ以テ增加擔保ト爲シ返済ニ充當ス。

第七條 本契约ニ規定セサルコトハ總テ民國七年十二月二十一日付借款原契約並ニ民國八年十二月二十日付借款延期契約ニ據ルモノトス

第八條 本契约書ハ支那文及日本文ニテ作成シ解釋ハ日本文ニ據ルモノトス

第九條 借款契約ハ福建財政廳長ニ於テ本契约調印ノ日ヨリ二箇月以内ニ民國中央政府ノ承認ヲ受ケタル上福建財政廳長ハ之ヲ證ス可キ公文書ヲ債權者福州臺灣銀行支店長ニ交付スルモノトス

第十條 本契约書ハ福建省長ノ承認及日本帝國福州總領事ノ見證ヲ受ケ支那文及日本文共當事者各一通ヲ保有シ以テ證據トナス

第十一條 本契约ハ雙方署名捺印シタル日ヨリ效力ヲ生スルモノトス

大正九年十一月三十日

連帶債務者	福建財政廳長	費 輝	楷
連帶債務者	福建銀行督辦	費 輝	楷
連帶債務者	福建銀行總理	劉 友 敏	
債 權 者	株式會社臺灣銀行福州支店支配人		

省茶稅收入ヲ擔保トシテ乙ニ提供スルモノトス

但シ茶稅ニ關シテハ民國七年十二月二十一日訂約ノ福建財政廳對臺灣銀行ノ擔保權優先ヲ承認スルモノトス

第六條 前記諸稅收入ハ之ヲ隨時市價ニ依リ日本金ニ換算シ臺灣銀行福州支店へ貯存シ毎年一月及七月ノ兩期ニ分テ計算シ本契约ニ依ル元利金ヲ償還シ更ニ剩餘金アルトキハ之ヲ甲ニ交付ス

但シ前記ノ諸稅金收入ヲ以テ本契约ニ依ル元利金ヲ償還スルコト能ハサル場合ハ乙ノ要求ニ應シ甲ハ更ニ增加擔保ヲ乙ニ提供スルモノトス

第七條 甲ハ本契约締結當時ニ於テ前記ノ租稅收入ヲ擔保トセル債権他ニ存セアルコトヲ明白ニシ且ツ本契约有效期間内ニ於テ前條租稅收入ヲ擔保トシテ他ヨリ借款セントスルトキハ豫メ乙ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

第八條 本契约有效期間内ニ若シ前條ノ各擔保諸稅收入ニ變化減少アルカ又ハ金銀比價ニ著シキ變化アル場合ハ乙ノ要求ニ應シ甲ハ何時ニテモ之ニ代ルヘキ相當ノ擔保品ヲ提供スヘシ

第九條 本契约ノ交付、償還及利子ノ支拂其他總テノ授受ハ中華民國福州ニ於テ之ヲ爲スモノトス

福建省政府整理借款契约

【参考】

福建省政府整理借款契约

(大正十年八月一日
福建省政府對林熊祥)

中華民國福建省政府(以下甲ト稱ス)ハ林熊祥氏及其他ヨリ借入シタル各種借款ヲ償還シ且ツ實業ヲ獎勵スル爲メ更ニリ二箇月以内ニ民國中央政府ノ承認ヲ受ケタル上福建財政廳長ハ之ヲ證ス可キ公文書ヲ債權者福州臺灣銀行支店林熊祥氏(以下乙ト稱ス)ヨリ日本金二百萬圓也ノ借款ヲ爲スニ當リ兩者ノ間左ノ條項ヲ締約ス

第一條 本借款金額日本金二百萬圓也

第二條 本借款契約成立ノ日ニ甲ハ民國八年四月二十六日ヨリ歷來乙ト締結セル各契約ニ依ル借款全部ヲ償還スルモノトス

第三條 本借款期限ハ本契约調印ノ日ヨリ大正十五年八月一日即チ中華民國十四年八月一日マテ五箇年以内ニ於テ元利共ニ年賦ヲ以テ償還スルモノトス

第四條 本借款ノ利子ハ毎月一分二厘即チ日本金一百圓ニ付金一圓二十錢ノ割合ヲ以テ支拂フモノトス

第五條 甲ハ本借款元利償還ニ對スル擔保トシテ閩侯縣土酒捐及竹崎閩安水口延平ノ諸釐局征款ノ二項並ニ福建全

第十條 甲ハ本契约調印後中華民國政府財政部ノ認可ヲ得ヘシ

第十一條 本契约ハ日華兩文ヲ以テ各三通ヲ作成調印シ甲乙及中華民國政府ニ於テ各一通ヲ保有スルモノトス

本契约ニ關シ解釋上疑義ヲ生シタルトキハ日本文契約書ニ依ルモノトス

中華民國福建省

(署名)

督軍兼省長	李 厚 基	(印)
財政廳長	費 輝	楷 楷 (印)
債 權 者	林 熊 祥	(印)

中華民國十年八月一日

日本帝國大正十年八月一日

附屬契約

第一條 借款交付期 中華民國財政部ヨリ原契約認可書接到
中華民國十年八月一日即チ大正十年八月一日福建省政府
(以下甲ト稱ス)ト林熊祥氏(以下乙ト稱ス)トノ締結シタル日本金二百萬圓也ノ借款契約ニ關シ更ニ左ノ條項ヲ附屬締約ス

ノ日ヨリ二箇月以内ニ乙ハ甲ニ本借款額ノ全部ヲ交付ス
第二條元利償還手續 原約第六條ニ依り擔保諸稅收入金ヲ
臺灣銀行へ貯存スルニ當リ乙ハ右諸稅徵收代表ヲ指定ス
ル事ヲ得ヘク該代表ノ俸給及之ニ關スル諸經費ハ福建財
政廳ノ負擔トス

第三條償還年賦額 原約第三條ニ依リ甲ハ毎年利息ヲ納ム
ル外ニ元金四十萬圓也ヲ償還スヘシ

中華民國福建省

督軍兼省長 李厚基（印）
財政廳廳長 費毓楷（印）
債權者林熊祥（印）

中華民國十年八月一日
日本帝國大正十年八月一日

新奉及吉長鐵道ニ關スル協約

明治四十年四月十五日北京
ニ於テ調印

大日本國特命全權公使林權助、大清國欽命外務部大臣那樹、
羅鴻謹、唐紹儀、各本國政府ノ委任ヲ奉シ協定スル所ノ條款
左ノ如シ

第一條 清國政府ハ日本國ノ敷設セル新民府ヨリ奉天府ニ
至ル鐵道ヲ買收スルニ付テハ議定ノ賣價日貨金壹百六十
六萬圓ヲ天津ニ於テ正金銀行ニ拂込ムヘシ清國政府ハ右
鐵道ヲ改メテ自營鐵道ト爲シ遼河以東ニ要スル資金ハ南
滿洲鐵道會社ヨリ其一半ヲ借入ルルコトヲ承諾ス

第二條 清國政府ハ吉林府ヨリ長春府ニ至ル鐵道ヲ自營ス
ルニ付テハ之ニ要スル資金ノ半額モ亦前記會社ヨリ借入
ルルコトヲ承諾ス

第三條 第一條及第二條ニ掲タル借款ノ條件ハ還清期限ヲ
除クノ外凡ア山海關内外鐵道ノ借款契約ヲ仿照シテ辦理
ス其主要事項左記ノ如シ鐵道事務ノ一切ノ章程ハ山海關內
外鐵道總局ノ現在ノ辦法ヲ按照シテ辦理スヘキモノトス
甲 借款還清期限ハ新奉鐵道遼河以東ニ關シテハ十八箇
年吉長鐵道ハ二十五箇年ト定メ期限滿了以前共ニ全部
還清ヲ行フヲ得ス

乙 新奉鐵道河以東ノ鐵道ニ對スル南滿洲鐵道會社ノ借
款ハ該段ノ鐵道財產及收入ヲ以テ擔保トナス

吉長鐵路局自籌ノ商股及南滿洲鐵道會社ヨリノ借款ハ
共ニ該鐵道財產及收入ヲ以テ擔保トナス
清國政府ハ借款未濟以前ニ於テハ上記ノ鐵道財產及收
入ヲ以テ他ノ借款ノ擔保ト爲スヲ得ス
清國政府ハ借款期限中遼河以東ノ鐵道及吉長鐵道建物
工場車輛用地動產等ヲ善良ニ經理シ且隨時車輛ヲ増添
シ運輸ノ需要ニ應スルニ努ムヘシ將來吉長鐵道ニ在テ
支線ヲ添設シ或ハ該鐵道ヲ延長スル場合ニハ其建造ノ
コトハ清國政府ノ自辨ニ歸スヘク若シ資金ニ不足アル
トキハ會社ニ向テ借入ヲ申込ムヘシ上記以外ニ清國力
自己ノ借款ニテ他ニ鐵道ヲ敷設スル場合ニハ南滿洲鐵
道會社より關涉スル所ナシ

丙 借款ノ元利ハ共ニ清國政府ニ於テ保障ス若シ利子元
金ノ支拂期ニ至リ約ノ如クナラサルトキハ會社ノ通知
ニ依リ清國政府ヨリ須要ノ額ヲ按シテ會社ニ代還スヘ
ク萬一右通知ノ後ニ於テ清國政府ニ於テ支拂延滞ニ屬
スル元利ヲ籌還スル能ハサル場合ニハ上記ノ鐵道及一
切ノ財產ハ右元利支拂済ニ至ルマテ會社ニ引渡シテ代
テ經營ヲ行ヘシム但シ不足ノ元利少額ナルトキハ三箇
月ヲ逾ヘサル範圍ニ於テ猶豫ヲ與フルヲ得

リ別ニ委員ヲ派シテ商訂スヘシ
第六條 第一條及第二條ニ掲タル借款ノ實收價格ハ清國力

最近他國ヨリ爲シタル借款ニ照シ公平ニ酌定スヘキモノ
トス

第七條 新奉鐵道ハ賣價拂込後一箇月ヲ期トシテ清國鐵道
局派遣ノ委員ニ引渡サルヘシ

明治四十年四月十五日

光緒三十三年三月初三日

林 権 助 (印)
那 桐 (畫押)

瞿 鴻 祖 (畫押)
唐 紹 儀 (畫押)

(備考)右新奉及吉長鐵道ニ關スル協約及續約中吉長鐵道
ニ關スル部分ノ條項ハ大正六年十月十二日吉長鐵道借
款契約成立ノ結果同日ヨリ效力消滅セリ

第一條 清國政府ハ新奉及吉長鐵道ニ關スル協約(以下單
ニ協約ト稱ス)第一條及第二條ノ規定ニ依リ京奉鐵道遼
河以東ニ要スル資金ノ半額日本貨幣三十二萬圓並吉長鐵
道新設ニ要スル資金ノ半額日本貨幣二百十五萬圓ヲ南滿
洲鐵道會社ヨリ借入ルルモノトス

第二條 借款ノ利率ハ年五分トス

第三條 借款ノ實收價格ハ協約第六條ノ規定ニ依リ百ニ付
ス

九十三トス

第四條 清國政府ハ協約第三條ノ規定ニ依リ借款期限中京
奉鐵道遼河以東線ノ技師長ニ日本人ヲ用ウヘシ而シテ其
ノ初ニ於テハ現ニ京奉鐵道ニ在職スル日本人技師ヲシテ
之ニ當ラシム其ノ職務ニ關シテハ總テ現在ノ辦法ニ照ラ
シ京奉鐵路總辦並技師長ノ管轄ヲ受クヘキモノトス將來
之ヲ交迭スルノ必要生シタルトキハ協約ノ規定ニ依リ南
滿洲鐵道會社ト協議ノ上之ヲ行ヒ其ノ職務ニ關シテハ同
ク前記ノ辦法ニ依ルヘキモノトス

第五條 清國政府ハ京奉鐵道遼河以東線ノ會計事務ヲ別ニ
區分スルコト困難ナリト爲スヲ以テ日本國政府ハ同線ニ
會計主任トシテ日本人ヲ用ウルヲ要セサルコトヲ承諾シ
借款ニ對スル每年ノ元利償還額ノ月割額ヲ以テ遼河以東
線ノ毎月純收入額ト看做シ毎月ノ初日ニ於テ清國政府ヨ
リ之ヲ南滿洲鐵道會社ノ指定スル清國ニ在ル日本國銀行
ニ預入レ元利償還ノ各時期ニ至リ其ノ仕拂ニ充ツルコト
ニ同意ス而シテ右元利償還ノ方法並銀行預入金ノ利率等
ニ關シテハ借款契約取極ノ際協定スヘシ

清國政府ハ京奉鐵道全線ノ月末收支假計算書並年末收
支決算英文報告書ヲ南滿洲鐵道會社ニ提示スヘキモノト

新奉及吉長鐵道ニ關スル續約

新奉及吉長鐵道ニ關ス ル續約

明治四十一年十一月十二日北京

ニ於テ調印

同 年同月十五日承認
同 年同月二十七日告示

林 権 助 (印)
那 桐 (畫押)

瞿 鴻 祖 (畫押)
唐 紹 儀 (畫押)

日清兩國政府ハ明治四十年四月十五日即チ光緒三十三年三
月三日締結セル新奉及吉長鐵道ニ關スル協約第四條ノ規定
ニ基キ兩國當事者間ニ於テ該鐵道ノ借款契約ヲ訂立スルニ
先チ協約ノ取極事項ヲ補足スルノ必要アルヲ認メ各下名ハ
各命ヲ受ケ之カ續約ヲ議定スルコト左ノ如シ

第一條 清國政府ハ新奉及吉長鐵道ニ關スル協約(以下單
ニ協約ト稱ス)第一條及第二條ノ規定ニ依リ京奉鐵道遼
河以東ニ要スル資金ノ半額日本貨幣三十二萬圓並吉長鐵
道新設ニ要スル資金ノ半額日本貨幣二百十五萬圓ヲ南滿
洲鐵道會社ヨリ借入ルルモノトス

第二條 借款ノ利率ハ年五分トス

第三條 借款ノ實收價格ハ協約第六條ノ規定ニ依リ百ニ付
ス

第七條 借款ニ關スル細目ノ取極ハ協約及本續約ノ規定ニ
定ニ依リ日本人ヲ用ウヘシ其ノ任用方法ハ技師長ハ清國
政府ヨリ適當ノ人物ヲ選ヒ南滿洲鐵道會社ト協議ノ上清
國政府之ヲ任命シ會計主任ハ南滿洲鐵道會社ヨリ推舉シ
清國政府ト協議ノ上清國政府之ヲ任命スルモノトス其ノ
交迭ヲ要スル場合ニ於テハ協約ノ規定ニ依リ南滿洲鐵道
會社ト協議ノ上同ク前記ノ手續ニ依リ任命ヲ行フモノト
ス

明治四十一年十一月十九日 北京ニ於テ

公使館一等書記官 阿部 守太郎 (印)
郵傳部鐵路總局局長 梁 士 論 (印)

吉會鐵道借款豫備契約

大正七年六月十八日
(民國七年六月十八日)
(一千九百十八年六月十八日)

中華民國政府(以下甲ト稱ス)ハ中華民國吉林省吉林ヨリ延

吉南境ヲ經圖們江ニ至リ會寧ニ聯絡スル鐵道ノ建設スル爲

大日本帝國株式會社日本興業銀行、株式會社臺灣銀行及朝鮮銀行ノ三行(以下乙ト稱ス)トノ間ニ借款契約ノ締結ヲ目的トシテ左ノ豫備契約ヲ作成ス

第一條 甲ハ速ニ本鐵道ノ建設費其ノ他一切ノ必要ナル費用ヲ定メ乙ノ同意ヲ求ムヘシ

乙ハ前項ニヨリ確定シタル金額ニ相當スル五分利付中華

民國政府金貸公債ヲ甲ノ爲ニ發行スルモノトス

第二條 本公債ノ期限ハ四十箇年トシ元金ノ償還ハ公債發行ノ日ヨリ起算シ第十年目ヨリ之ヲ開始シ年賦償還ノ

方法ニ依ルモノトス

第三條 甲ハ吉會鐵道借款本契約成立ト共ニ必ス直ニ本鐵道ノ建設ニ着手シ速成ヲ圖ルモノトス

第四條 甲ハ大日本帝國朝鮮總督府鐵道局ト共同シ圖們江鐵橋ヲ建設シ該建設費ノ半額ヲ負擔スルモノトス
本鐵道ト朝鮮鐵道トノ運輸聯絡ニ就テハ兩鐵道運輸發達ト圓滿ナル聯絡ヲ期スルノ趣旨ヲ體シ別ニ之ヲ協定スルモノトス

第五條 甲ハ本公債ノ元利支拂ニ對スル擔保トシテ左ノ通

大日本帝國株式會社日本興業銀行、株式會社臺灣銀行及朝鮮銀行ノ三行(以下乙ト稱ス)トノ間ニ借款契約ノ締結ヲ目的トシテ左ノ豫備契約ヲ作成ス

第六條 本公債ノ手取金ハ中華民國四年十二月十七日甲ト

横濱正金銀行トノ間ニ締結シタル四鄉鐵道借款契約規定ニ比シ成ルヘク甲ノ有利ニ定ムルモノトス

第七條 前各條ニ規定ナキ條件ニ就テハ光緒三十三年十二月十日締結セラレタル津浦鐵道借款契約ニ準シ甲ハ乙ト

協議決定スルモノトス

第八條 吉會鐵道借款本契約ハ本豫備契約ヲ基礎トシ其ノ成立ノ日ヨリ六箇月以内ニ之ヲ締結スルモノトス

中華民國政府交通總長 曹汝霖(印)
中華民國政府財政總長 曹汝霖(印)

日本帝國株式會社日本興業銀行
總裁 土方久徵代理 古川季秀(印)

吉敦鐵道建造請負契約

大正十四年十月二十四日調印

トス

第十三條 甲ハ吉會鐵道借款本契約成立ノ後本公債募集ニ依リ得タル資金ヲ以テ優先ニ且遲滯ナク本前貨金ヲ返済スルモノトス

第十四條 本前貨金ノ交付、返済及利子ノ支拂其ノ仙總テノ受渡ハ日本東京ニ於テ之ヲ爲スモノトス

本豫備契約書ヘ日華兩文ヲ以テ各二通ヲ作成調印シ甲乙互ニ各一通ヲ保有スルモノトス若シ本豫備契約ニ關シ解釋上疑義ヲ生シタルトキハ日本文契約書ニヨリ解釋スルモノトス

大日本帝國大正七年六月十八日

中華民國七年六月十八日

吉敦鐵道建造請負契約

六七八

雙方協定ノ上之ノ增減ヲ爲スコトヲ得
本鐵道ノ建造各工事及車輛設備一切ニ必要ナル費用ハ會
社ニ於テ之ヲ準備シ局長ノ要求ニ應シテ會社ヨリ隨時之
ヲ立替フヘシ

前項ノ立替金ニハ各分段ノ工事完成検收ヲ了ヘタル日ヨ
リ完済ニ至ル迄年利九分即チ金百圓ニ對シ金九圓ノ割合
ニテ利息ヲ附スヘシ

第三條 局長ハ常ニ局所ニ駐在シ本鐵道一切ノ事務ヲ管理
スヘク本鐵道ノ建造各工事ハ何レモ局長ノ承認ヲ經タル
後之ヲ施行スヘシ

局長ハ工事期間中會社内ニ於テ工事ニ精通セル日本人一
名ヲ聘傭シテ之ヲ技師長ト爲スヘシ全線工事完成ノ後ハ
退職ス

技師長ハ局長ノ命ヲ承ケ本鐵道ノ設計豫算及建造ニ關ス
ル事務ヲ處理スヘク且本鐵道ニ關スル收支ニ就キ一切ノ
書類ニ局長ト連署スヘシ

技師長ノ聘傭契約ハ局長及會社之ヲ協定シ交通部ノ認可
ヲ經テ局長之ヲ締結ス

技師長ハ職務ノ執行ニ必要アルトキハ局長ニ請求シ酌定

ノ上日本人數名ヲ採用スルコトヲ得

ヘク其ノ運輸收入ハ鐵道局ニ歸ス

本鐵道全線ノ運輸ヲ開始シタルトキハ局長ハ會社ヨリ立
替金完済ニ至ル迄會社内ニ於テ會計事務ニ精通セル日本
人一名ヲ聘傭シ之ヲ會計主任ト爲スヘシ

會計主任ハ局長ノ命ヲ承ケ專ラ會計事務ヲ掌り其ノ記帳
方法ハ國有鐵道會計規則ニ準據スヘク一切ノ收支書類ニ
局長ト連署スヘシ

會計主任ノ聘傭契約ハ局長ニ於テ締結ノ上交通部ノ認可
ヲ求ムヘシ但シ不適當ナルトキハ局長ニ於テ隨時之ヲ解
僱スルコトヲ得ヘク其ノ改訂契約ノ手續亦同シ
本鐵道ノ營業收入ハ總テ中華民國貨幣ヲ用ヒ中日兩國ノ
確實ナル銀行ニ分割預入スヘク各銀行當時ノ利率ニ依リ
利息ヲ附スヘシ

會計主任ハ職務ノ執行ニ必要アルトキハ局長ニ請求シ酌
定ノ上日本人數名ヲ採用スルコトヲ得

第七條 本鐵道全線ノ工事完成シ局長ニ於テ其ノ檢收ヲ了
ヘ交通部ニ報告シタルトキハ總長ハ會社ヨリ立替ノ本鐵
道建造費用ヲ會社ニ支拂フヘシ若シ全線ノ檢收ヲ了リタ
ル後一箇年フ經過スルモ其ノ全部又ハ一部ノ支拂ヲ爲サ

サルトキハ總長ニ於テ會社ト協議シテ期限ヲ延長スルコ

第四條 局長ハ本契約調印後工事開始土地買收及材料物品
ノ購買ニ關スル準備ヲ爲シ所要金額ハ局長ヨリ技師長連
帶ノ上會社ニ申出テ會社ハ之ニ應シ隨時其ノ支出ヲ爲ス
ヘシ

本鐵道所要ノ材料及物品等ヲ購買スル場合ハ技師長ヨリ
其ノ見積書ヲ局長ニ提出シ承認ヲ得タル上入札又ハ指定
ノ方法ニ依リ一般市場ニ就キ價格低廉ニシテ品質最良ナ
ルモノヲ購買スヘシ若シ支那產材料及製品ノ品質及價格
カ日本品又ハ他ノ外國品ト同一ナルトキハ支那產業獎勵
ノ爲最先ニ之ヲ購買スヘシ本鐵道所要ノ外國材料ヘ前項
ノ手續及辦法ニ依リ局長ハ會社ト協議シテ之ヲ購買スヘ
シ本鐵道ノ建造請負工事ノ施行ハ請負ニ附スルモノトシ
成ルヘク多數ノ中國人ヲ選フモナトス

材料及物品ノ購買工事ノ請負並材料及工事ノ検査等ニ關
スル事務ヲ處理スヘク且本鐵道ニ關スル收支ニ就キ一切ノ
書類ニ局長ト連署スヘシ

第五條 局長ハ本鐵道ノ建造工事ヲ保護シ安寧秩序ヲ維持
スル手續ハ總テ國有鐵道通則ニ依リ之ヲ取扱フヘシ

第六條 局長ハ各分段ノ檢收ヲ了リタルトキハ速ニ其ノ運
輸ヲ開始シ國有鐵道通則ニ從ヒテ全權ヲ以テ之ヲ經營ス

トヲ得但シ何時ニテモ資金ヲ準備シ回収ヲ爲スコトヲ得
前項ノ立替金元利ニ對シテ現在及將來ニ於テ本鐵道ニ屬
スル一切ノ動產及不動產茲其ノ收入ヲ以テ第一位ノ擔保
ト爲ス

前項ノ擔保ハ之ヲ本契約以外ノ債務ノ擔保ト爲スコトヲ
得ス

第八條 會社カ本契約ニ依リ享有スル權利ノ全部又ハ一部
ヲ他ニ讓渡セントスルトキハ總長ノ承認ヲ受クヘシ

第九條 本鐵道ノ工事完成シ運輸ヲ開始シタルトキハ吉長
鐵道ト共同經營、ノ必要アルヲ以テ總長ハ本鐵道ノ工事完
成以前ニ會社ト之ヲ商議スヘシ、

本契約ハ調印ノ日ヨリ其ノ效力ヲ生シ第七條記載ノ會社
立替金ヲ完済シタル時ニ其ノ效力ヲ失フ

第十條 本契約ハ日本文及支那文ヲ以テ各二通ヲ作製シ總
長及會社各一通ヲ保存ス本契約ノ解釋ニ關シ疑義ヲ生シ
タルトキハ日本文及支那文ヲ以テ之ヲ決ス

中華民國十四年十月二十四日

中華民國政府

交通總長 葉恭緝

南滿洲鐵道株式會社代表
理事 松岡洋右

天圖鐵道敷設契約

大正十一年十一月八日調印

改定中日官商合辦天圖輕便鐵路 公司合同

民國七年三月十六日華商代表文祿ト日商飯田延太郎ト議定シ中日兩國雙方ヨリ出資ノ上合辦ニテ天寶山ヨリ圖們江岸ニ至ル輕便鐵道ヲ建造スル爲メ契約ヲ締結シ已ニ交通部ノ批准ヲ得タルモ紛議ヲ發生シタルヲ以テ此懸案ヲ解決セんカ爲メニ該契約ニ根據シ吉林省公署(以下省公署ト稱ス)ハ日商株主代表飯田延太郎(以下日商ト稱ス)ト合辦契約ヲ改定スルコト左ノ如シ

第一條 本鐵道ヲ吉林省天圖輕便鐵路股份公司ト稱ス
本公司ヲ延吉龍井村ニ設置ス

前項本公司ノ設置及章程等ハ省公署ヨリ中央政府ニ上申

シ許可ヲ得タル後實施スルモノトス
第二條 本鐵道線路ハ天寶山ヨリ老頭溝、銅佛寺、延吉龍井村ヲ經過シ圖們江ノ左岸ニ至ル線路ヲ幹線トス總延長六十六英里餘又朝陽川ヨリ布爾哈圖河ノ右岸ニ至ル線路ヲ支線トス總延長六英里餘トス
本鐵道ハ將來交通ノ連絡及地方ノ利益開發ノ爲メ省公署ニ於テ本鐵道ノ延長ヲ必要ト認メタル時ハ中國政府ニ稟請シ許可ヲ得タル上増資延長及支線ヲ設タル事ヲ得

第四條 公司ハ第二條記載スル所ノ線路ヲ建造スルヲ以テ目的トス資本總額ヲ四百萬圓ト決定シ吉林省公署其半數ヲ出資シ(即チ株式ノ半數ヲ引受ク)其餘ノ半數ハ日商ヨリ日本方面ニ向ウテ募集スルモノトス株式金額及株式ハ公司ニ於テ株券ヲ發行スル時之ヲ決定スルモノトス
前項省公署引受株ニ對スル資金ヲ省公署ニ於テ一時募集スル能ハサル時ハ日商ヨリ之ヲ立替ヘ以テ工事着手ニ便ス此項立替資本金ノ利息ハ年六分(百分之六)トス該立替金及利息ハ將來營業上ノ利益ニシテ省公署每年ノ所得中ヨリ之ヲ控除ス

第五條 本公司營業年限ハ中華民國七年三月十六日ヨリ三十年ヲ以テ滿期トス滿期以前ト雖モ中國政府ハ隨時公公平ナル價額ヲ以テ本鐵道ヲ買收スル事ヲ得
前項買收價額ニ關シ若シ雙方ノ意見同シカラサル時ハ第三者ノ公平ナル評價ヲ以テ標準ト爲ス
但シ其時未償還ノ款項アレハ省公署之ヲ完済ス

第六條 省公署ハ本公司ヲ督理及保護スルカ爲メ延吉行政長官ヲ督辦ニ任シ該公司全般ノ經營事務ヲ督理ス各官廳ニ對スル接洽事件ハ均シク督辦ヲ經由シテ之ヲ行フ省公署ハ日商ト共ニ中日各三人ヲ指定シ董事トナス該董事中ヨリ總辦二人ヲ指定シ中日各一人トス
本公司一切ノ事務ハ兩總辦之ヲ主管シ督辦ニ稟申シテ公司重要職員ヲ任免ス
本公司營業技術會計等ノ重要事項ハ兩總辦協議決定後督辦ニ稟申シ其記名調印ヲ經タル上之ヲ施行ス
第七條 本公司ニ於テ重大事件ト認ムル事項ハ兩總辦ヨリ督辦ニ商議シ茲ニ董事會議ニ附シ全會一致ノ上之ヲ實行スルモノトス
若シ全會一致セサル時ハ兩總辦督辦ト合議ノ上之ヲ決定ス董事會議規則及權限ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 凡ソ公司一切ノ出入款項ニ關シテハ兩總辦其責ニ任ス
本公司出入款項ニ關シテハ督辦ハ其何時タルヲ論セス兩總辦ト會同シ會計簿冊及款項ヲ検査スル事ヲ得
第九條 鐵道一切ノ收支ハ均シク中國貨幣ヲ用ヒ所在地ニ於ケル吉林官銀號ニ預金ス其預金及引出方法ハ別ニ之ヲ定ム
第十條 公司一切ノ記賬方法ハ頃々交通部訂定スル所ノ會計則例ニ準據シテ之ヲ辦理シ均シク銀本位ヲ以テス
第十一條 凡ソ督辦及董事以下ノ俸給手當等ノ事項ハ董事會議ニ於テ規定ス
第十二條 本公司ノ決算ハ毎年六月及十二月ニ於テ各種ノ表冊ヲ作製シ省公署ニ報告ス
天寶山銀鋼鐵公司ハ本鐵道完成後開辦スル時ニ於テ報效金トシテ第一年度及第二年度ハ國幣一萬五千圓、第三年度ヨリ毎年國幣二萬五千圓ヲ吉林省公署公益費トシテ寄附スヘシ此項ノ公益費ハ省公署自ラ之ヲ處理ス
將來天寶山鐵務發達スル時ハ再ヒ商議ノ上增加ス

第十三條 本鐵道用地ハ總テ督辦ニ於テ租用及管理ス
凡ソ鐵路經過スル所ノ官地モ亦民地ニ照シ地代ヲ支拂ヒ

租用ス

第十四條 本鐵道用地ヲ保護シ線路ヲ維持スル爲メニ省公署ヨリ派遣スル中國警察官ハ總テ督辦之ヲ節制ス公司ハ唯營業費ノ内ヨリ巡警隊ノ俸給ヲ支拂フニ止マリ自ラ管理ヲ行フ事ヲ得ス

第十五條 本公司ハ中國政府各鐵道關係法令及各章程ヲ一律遵守スヘシ

本鐵道ヨリ政府ニ報告スヘキ事及政府ヨリ派員調査ヲ爲ス時ハ公司ハ充分親切ニ之ヲ行フヘシ

本鐵道各種ノ章程及條規ハ成法ニ準據スルモノヲ除キ須ク督辦ヨリ省公署ニ呈請シ或ハ中央政府ノ核準ヲ得ヘキモノトス

第十六條 職員ハ兩總辦商議ノ上督辦ニ稟申シ中日兩國人ヲ平均ニ選用ス其總務處長、車務處長ハ中國人ヲ用ヒ工務處長、會計處長ハ日本人ヲ用フ

第十七條 公司各職員ニシテ左記各項ニ該當スルモノハ督辦ヨリ免職ス

一、任ニ勝ヘサル者

二、操行不謹慎ナル者

三、命令ヲ違奉セサル者

ヨリ發給ス

但シ公司ハ須ク特別ニ優待スヘシ

第二十三條 本契約締結ノ後省公署ヨリ交通部ニ稟請シ其許可ヲ得タル後效力ヲ發生ス其場合民國七年三月十六日文祿ト飯田延太郎ト締結シタル合意ニシテ既ニ交通部ノ批准ヲ經タルモノハ無效トス

第二十四條 本合同ハ吉林省公署及日商株主代表人飯田延太郎各一通ヲ所持スルノ外吉林交涉署、在吉林日本總領事館、在奉天日本總領事館ニ各一通ヲ届出テ置キ以テ證憑トス

中華民國十一年十一月八日
日本帝國大正十一年十一月八日

吉林省公署代表蔡運升
大日本帝國駐奉天總領事赤塚正助
日商株主代表飯田延太郎代理人野口多内

圖們江架橋協定

一、圖們江橋梁ハ日支兩國政府ノ共有ニ係リ該橋中間ヲ界

トシ兩國ニ於テ各管理ス

二、橋梁建築ニ要スル土地ハ日支兩國政府各無償提供ス但

四、法紀ニ違反スル者
五、長官ヲ侮慢スル者

第十八條 本鐵道保線及運轉ニ要スル機械材料ノ中國產出ノモノニシテ外國品ニ比シ品質價額相同シキ時ハ先づ中國品ヲ購用ス

前項保線及運轉ニ要スル機械材料ヲ購入スル時ハ其中國品タルト外國品タルトヲ論セス先づ品目價額表ヲ作製シ兩總辦ノ許可ヲ得タル後ニ非サレハ購入スル事ヲ得ス

第十九條 中國軍隊或ハ軍需品ハ最先ニ運送スヘシ其運輸辦法ハ中國各鐵道ノ章程ニ從ヒテ辦理スヘシ並ニ將來規定セラルヘキ運賃表ノ五割引ニテ計算スヘシ若シ地方四年ニ遇ヒ賄惱ノ爲メノ糧食及物品ヲ運輸スル時ハ公司ハ運賃ヲ事情ニ應シ減免スヘシ

第二十條 本鐵道及鐵道用地内ノ警察行政司法課稅等ノ權ハ完全ニ中國政府ニ屬ス

第二十一條 本公司ハ雙方株主ノ同意及中國政府ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本公司一切ノ財產及權利ノ讓渡及抵當權設定等ノ行爲ヲ爲ス事ヲ得ス

第二十二條 本鐵道ヲ保護スルニ當リ若シ中國國家或ハ本省軍隊ヲ使用スル時ハ軍餉ノ俸給等ハ中國政府或ハ本省

シ民有地ナル時ハ相當價格ヲ以テ買收スヘシ

三、橋梁ノ建設ハ間島總領事及延吉道尹ニ於テ適當ト認メタル技師ニ委託設計シ確實ナル工事請負者ヲ選擇シ入札ニ附シ該技師ヲシテ監督完成セシム

四、本橋架設費ハ日本金三十萬圓以内トシ日支兩方各其半額ヲ負擔ス

五、橋梁ノ構造ハ堅牢ヲ旨トシ橋臺橋脚共ニ鐵筋混凝土ニテ築造シ橋桁ハ鋼鉄ヲ以テ架設ス

六、本橋建設後ニ於ケル警察ノ取締、稅關ノ検査、橋梁ノ管理及維持修理費ニ關スル細目ハ別ニ之ヲ規定ス

七、本橋ノ建設ハ素ト通行者ノ往復、貨物ノ運輸ヲ便利ナラシムルヲ目的トス著シ天國圖們兩鐵路公司ニ於テ運輸聯絡ノ爲メ通行ヲ求ムル時ハ雙方情形ノ酌議シ許可スルコトヲ得

八、本橋架設ニ關シ若シ不備ノ事項アラハ間島總領事及延吉道尹隨時協議ス

大正十五年六月九日

中華十五年六月九日
間島駐在日本總領事鈴木要太郎（印）
兼吉林延吉交涉員延吉道尹陶彬（印）

國們江架橋協定第七項ニ關スル日本側照會

以書翰致啓上候陳者國們江架橋協定第七項ニ於テ若シ國們天國兩鐵道公司ニ於テ運輸聯絡ノ爲メ通行ヲ求ムル時ハ雙方情形ヲ酌議シ許可スルコトヲ得ト規定シアル處右兩鐵道ノ本件橋梁上ニ於ケル通行聯絡ニ關シテハ義ニ吉林省長ト在吉林日本總領事トノ間ニ公文往復ノ次第モアルニ付兩鐵道公司ハ此際新ニ許可ヲ受タル手續ヲ要セシテ右通行聯絡ヲ爲シ得ルコトニ致度候條御承知相成度此段照會得貴意候敬具

大正十五年六月九日

間島駐在日本總領事 鈴木 要太郎
榮延吉交涉員吉林延吉道道尹 陶 檻殿

(備考)右ニ對スル支那側ノ查照文書略ス

國們、天國兩鐵道暫行聯運辦法

一、天國鐵道ヨリ朝鮮ニ赴ク旅客及手荷物並ニ貨物列車ハ國們江岸驛ニ到着シタル時ハ通關手續ヲ經タル後朝鮮側上三峰驛ニ赴キ停車シ再ヒ朝鮮稅關ノ検査納稅ヲ了シタ

六、以上ノ辦法ハ聯絡協定成立以前ノ暫行辦法ナルヲ以テ聯絡協定成立シタル時ハ其效力ヲ失フモノトス
七、聯絡協定ニ依リ直通シ得ルヤ否ハ其時期ニ於テ規定シ暫行辦法ヲ根據トシテ標準ト爲スヲ得サルコトヲ茲ニ併セテ聲明ス

鴨綠江日清合同材木會社章程

明治四十一年五月十四日北京ニ

於テ調印

同年同月二十八日告示

大日本國特命全權公使男爵林權助大清國外務部會辦大臣那桐各本國政府ノ委任ヲ奉シ明治三十八年十二月二十二日即光緒三十一年十一月二十六日締結セル滿洲ニ關スル日清條約附屬協約第十條ノ規定ニ基キ日清合同材木會社ノ章程ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一條 鴨綠江右岸朝鮮山ヨリ二十四道溝ニ至ル間該江面ヲ距ル六十清里内ヲ劃定シテ界ト爲シヘ奉天ヨリ委員ヲ

鴨綠江日清合同材木會社章程

ル上同驛ヨリ國們鐵道ニ乘換ヲ爲スモノトス但シ重量貨物積載貨車ハ一車扱ナルト小口扱ナルトニ論ナク該貨車ヲ國們ノ機關車ニ聯結シ會寧ニ赴クモノトス

二、國們鐵道ヨリ支那側ニ赴ク旅客及手荷物並ニ貨物列車ハ上三峰驛ニ到着シタル時ハ通關手續ヲ經タル後支那側ノ開山屯江岸驛ニ赴キ停車シ再ヒ支那稅關ノ檢查納稅ヲ了シタル上旅客及手荷物ハ同驛ヨリ天國鐵道ニ乗換ヲ爲スモノトス但シ重量貨物積載貨車ハ一車扱ナルト小口扱ナルトニ論ナク該貨車ヲ天國ノ機關車ニ聯結シ沿線ニ赴クモノトス

三、天國、國們兩鐵道ノ機關車、客車及從業員ハ天國側ヘ國們ノ上三峰驛ヲ以テ終止シ國們側ハ天國ノ開山屯江岸驛ヲ以テ終止シ相互侵越スルコトヲ得ス

四、天國、國們兩鐵道ノ各驛ニ於テハ都テ旅客及貨物ノ聯絡業務ヲ取扱フモノトス但シ國們ノ上三峰、關儀間ニ於

ケル貨物聯絡ハ暫時取扱ヲ爲サセルモノトス
五、天國側江岸驛ト國們側上三峰驛間ニ於ケル輸送費ハ兩鐵道ニ於テ實際ノ里程ニ依リ精算シ橋梁通過ノ貨物ハ每噸金十錢又旅客ハ一人宛金二錢徵收シ之カ收入ハ兩鐵道ニ於テ夫キ保管ノ上命令ニ基キ支出スルモノトス

第三條 本會社ノ資本ヲ三百萬元トシ日清兩國ヨリ各半額ヲ出資スヘシ
第四條 本會社ハ其ノ總局ヲ安東ニ設置ス又本會社力必要ト認ムルトキハ督辦ニ届出ノ上夫々各地ニ分局ヲ設置スルコトヲ得

第五條 本會社ハ從來ノ清國木把ノ事業ヲ保全スルコトニ同意ス因テ第一條ニ聲明セル劃定界内ハ會社ノ採伐ニ關係スルモ其ノ界外及渾江ノ森林ハ仍ホ從來ノ清國木把ノ採伐ニ歸スルモノトス但シ木把ノ要スル資本金ハ本會社ヨリ借入ルヘシ其ノ採伐セル木材ハ江浙鐵路公司所要ノ枕木及渾江沿岸居民自用ノ木材ヲ木把ヨリ直接買取り得ルノ外其ノ餘ハ全部會社ノ買取ニ歸ス會社ハ市價ヲ按シテ之ヲ發賣シ任意壟斷スルヲ得ス

第六條 會社自ラ採伐セル木材及木把ヨリ買取セル木材ニ

シテ清國政府及清國諸官署ニ於テ之ヲ需要スルトキハ護照ヲ差出シテ會社ヨリ買取ルヘシ但シ此ノ場合ニハ會社ハ實費ニ依リテ計算シ價格ヲ高ムルヲ得ス

第七條 本會社ノ營業期限ヲ二十五箇年トシ滿期ニ至リ清國政府ニ於テ會社ノ經營事業ヲ尙ホ妥當ナリト認ムルトキハ會社ハ清國政府ニ出願シテ期限延長ノ許可ヲ求ムルコトヲ得

第八條 本會社ニ督辦一人ヲ置キ奉天督撫ヨリ東邊道臺ニ命シテ兼任セシメ會社ノ經營事業ヲ監督ス又理事長二人ヲ置キ日清兩國ヨリ各一名ヲ任命シ會社一切ノ業務ヲ經理ス其ノ他ノ理事技師等ハ理事長協議ノ上選任ス若シ界内ニ於テ入山伐木ノ爲別國人ヲ僱用スルノ必要アルトキハ理事長ヨリ豫メ督辦ノ認可ヲ求メ之ヲ定ムヘシ

第九條 本會社ハ每年末ニ於テ其ノ年内一切ノ事業報告書及收支計算書ヲ作成シ兩國當該官憲ニ提出シテ査閱ヲ受クヘシ

第十條 本會社ハ其ノ收入中ヨリ一切ノ費用ヲ引去リタル純益ノ百分ノ五ヲ報效金トシテ清國政府ニ上納シ殘餘ノ利益ハ日清兩國株主ノ均等分配ニ歸ス會社ノ費用ハ任意支出スルヲ得ス期ヲ按シテ會社使用人ノ俸給其ノ他一切

ノ經費額ヲ豫算シ督辦ニ提出シテ認可ヲ受クヘン

第十一條 會社設立ニ關スル一切ノ辦法ハ此ノ大綱議定ノ後一箇月以内ニ奉天督撫及在奉天日本總領事ヨリ各一名ノ委員ヲ任命シテ詳細ナル章程ヲ商議セシメ協定ノ後之

ヲ會社ニ交付シテ遵照辦理セシメ三箇月以内ヲ限り開業スルモノトス以後會社ニ於テ別ニ規則ヲ定ムル場合ニハ督辦ノ認可ヲ經テ施行スヘシ

第十二條 本會社ノ納付スヘキ木材稅ハ奉天ニ於テ詳細ノ章程ヲ商議スル際兩國委員ニ於テ從來規定ノ稅額ヲ查明シ地方官ニ商議シ同意ノ上酌減スヘシ但シ會社力輸入スル機械及伐木ニ必要ナル器具等ニ就テハ一切ノ稅金盡金等ヲ免除スヘシ

第十三條 本會社開業ノ後ハ日本國政府ハ現在ノ鴨綠江木材廠ヲ全ク撤去スルコトニ同意ス

大日本國特命全權公使男爵 林 機助 (印)

大清國外務部會辦大臣 那 桐 (印)

大日本國明治四十一年五月十四日 在北京

大清國光緒三十四年四月十五日

更ニ株式募集章程ヲ定ムヘキモノトス

第三條 本會社ノ資本金三百萬元ハ開業ノ日ニ於テ日清兩國政府ヨリ各半額ヲ出資ス商辦ニ改ムル際ニハ各其ノ資本金ヲ全部回収スルモノトス

第四條 本會社ノ資本金並收支一切ノ勘定ハ凡テ清國銀元ヲ以テ定トナス且兩理事長協議ノ上日清兩國ノ銀行ニ分存スルモノトス

第五條 本會社ニ置ク職員ハ左ノ如シ
督辦 一人
理事長 二人
理事 二人以上

第六條 本會社ノ督辦及理事長並其他職員若干名

督辦ハ奉天督撫ヨリ東邊道臺ニ命シテ兼任セシメ會社ノ經營事業ヲ監督ス

理事長ハ日清兩國ヨリ各一名ヲ任命シ會社一切ノ業務ヲ經理ス

理事ハ理事長協議ノ上選任シ各政府ニ報告スルモノトス

技師及其ノ他ノ職員ハ理事長協議ノ上之ヲ採用ス

理事以下ノ員數ハ成ル可ク兩國人中ヨリ同數ヲ出スモノ

第六條 督辦ノ報酬ハ毎年一萬五千元理事長ノ俸給ハ毎年

一萬元トシ理事ノ俸給ハ理事長協議ノ上之ヲ定ム

第七條 技師及其ノ他ノ職員ノ定員數並俸給定額ハ理事長

ヨリ督辦ニ協議ノ上表ノ製シテ之ヲ定ム

第八條 本會社ノ文書帳簿中重要ナルモノハ日清兩國文ヲ

用キ各一通ヲ備ヘテ取調ニ便ナラシムヘシ兩國ハ官吏ヲ

派シテ隨時會社業務ノ施設ヲ監査シ會社ノ金庫帳簿及諸般ノ文書ヲ検査シ且會社ニ對シ營業上諸般ノ計畫及景況ニ關スル報告ヲ求ムルコトヲ得

第九條 本會社一切ノ結算記數ハ凡テ陰曆ヲ用キ以テ取引ニ便ナラシムヘシ商辦ニ改ムル際ニハ直チニ結算ヲナスモノトス

第十條 本會社ハ日清兩國ノ合資ニ係ルヲ以テ相互協商ノ上許可スルニ非サレハ本會社自ラ増資ノ爲メ借款ヲ爲スコトヲ得ス

第十一條 本會社ハ純益ノ百分ノ五ヲ以テ積立金トス此積

立金ノ額ハ資本金ノ三分ノ一ニ達スルヲ以テ限度トス

前項ノ積立金ハ前條ニ倣ヒ相互協商認可スルニ非サレハ使用スルコトヲ得ス

第十二條 理事長ハ歲入歲出ノ豫算表ヲ調製シ督辦ノ認可

第十三條 収入支出其ノ他會計ニ關スル規定ハ兩理事長ニ示スヘシ

第十四條 本會社カ取扱フ一切ノ木材ニ對スル稅金ハ從來

規定ノ山價及客稅ノ稅則（山價及客稅ノ稅則ハ別表ニ依ル）ニ照シ其ノ二割ヲ減シタルモノヲ本會社ヨリ納付スヘシ船捐ハ仍水從

來ノ規定ニ照シテ辦理シ本會社トハ關係ナキモノトス其ノ他木材ニ對スル檢查料、捕盜費等ノ各種ノ諸掛、料金等ハ一切之ヲ免除セラル若シ汽船ニ積載シテ輸出スル場合ニハ船捐ノ代リニ海關規則ニ依リテ輸出稅ヲ徵收セラルヘシ

本會社ノ納付スヘキ山價、客稅ハ從來ノ慣例ニ從ヒ木材ヲ本會社ヨリ賣却スルトキニ納ムルモノトス

本會社ノ營業及所得並會社使用ノ機械、伐木器具等ニ對スル稅金、諸掛ハ一切免除スルモノトス但シ會社所有ノ土地ニ對スル租稅ハ尙從來ノ規則ニ照シテ納付スルコトヲ要ス

第十五條 江浙鐵路公司所要ノ枕木ハ木把ヨリ直接ニ買取

ルコトヲ得ルモ必ス該鐵路公司ノ執照ヲ携帶スヘシ而シテ該執照ニハ數量ヲ明記シ先ツ東邊道臺ニ呈シ證明加印ヲ受タルヲ要ス輸出ノ際ニハ本會社督辦ヨリ員ヲ派シ検査ノ上通過セシムルモノトス

第十六條 漢江沿岸居民自用以外ノ木材ハ凡テ本會社ノ買取ニ歸スヘキハ已ニ北京取締書ノ規定スル處ニシテ先ツ地方官ヨリ之ヲ告示シ若シ北京取締書ニ違背スル者アル場合ニハ隨時本會社ヨリ地方官ニ協商議制シ假借スヘカラサルモノトス

第十七條 漂流木ノ整理ハ本會社之ニ任スルモノトス但シ漂流木整理ニ關スル規則ハ理事長協議ノ上督辦ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

從來存在セル木會ハ本會社成立ト同時ニ該管地方官ヨリ告示シテ悉ク解散スルモノトス

第十八條 本會社ノ伐木地域ハ北京取締書ニ從ヒ鴨綠江右岸朝鮮山ヨリ二十四道溝ニ至ル間江面ヲ距ル六十清里ヲ以テ界トナシ兩國ヨリ委員ヲ派遣シ該管地方官ト會同測定ノ上圖面ヲ作リ標立テ之ヲ表示ス

第十九條 本會社ハ森林ノ狀況ヲ酌量シテ伐採スヘキモノニシテ採伐計畫ノ順序及每年伐採シタル地城面積並樹木

大日本國領事岡部三郎大清國奉天度支使張錫鑾各本國政府ノ命ヲ奉シ明治四十一年五月十四日即チ光緒三十四年四月十五日協定セル鶴綠江採木公司業務章程ニ關スル覺書ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一 章程第四條ニ所謂清國銀元ハ北洋銀元ヲ指スモノニシテ將來奉天銀元力確實ニ流通スル後ニ至ラハ便宜改メテ奉天銀元ヲ用ユルモノトス

兩國最初ノ資本金ハ便宜兩銀ヲ以テ出資スルコトヲ得此ノ場合ニハ開業當日ニ於ケル北洋銀元ノ相場ニ照シ換算スヘキモノトス

第二 北京取締書第六條ニ依リ清國政府及清國諸官署ノ買取ル木材ニ對シテハ本會社ハ實際直接ニ要セル費用及稅金以外ニ會社ヲ維持スルニ必要ナル佈給其ノ他一切ノ經費ノ歩合ヲ加フルモノトス

第三 本會社成立以前ニ要スヘキ創立費ハ兩國ヨリ一時之ヲ立替ヘ置キ會社成立ト同時ニ會社ヨリ全部償還スヘキモノトス右創立費ノ額ハ七萬元以内トス

第四 銀行ヨリ預ケ金ヲ引出ス際ニハ兩理事長ノ連署花押ヲ要スルモノトス

第五 本會社ノ營業ニ關スル警務事宜ハ凡テ清國警察ノ管

慶福ヲ享受セシメムコトヲ欲シ茲ニ左ノ條款ヲ訂立セリ

第一條 日清兩國政府ハ圓們江、清韓兩國ノ國境トシ江源地方ニ於テハ定界碑ヲ起點トシテ石乙水ヲ以テ兩國ノ境界ト爲スコトヲ聲明ス

第二條 清國政府ハ本協約調印後成ルヘク速ニ左記ノ各地ヲ外國人ノ居住及貿易ノ爲開放スヘク日本國政府ハ此等ノ地ニ領事館若ハ領事館分館ヲ酌設スヘシ開放ノ期日ハ別ニ之ヲ定ム

龍井村　局子街　頭道溝　百草溝

第三條 清國政府ハ從來ノ通圓們江北ノ耕地ニ於テ韓民居住ヲ承准ス其ノ地域ノ境界ハ別圖ヲ以テ之ヲ示ス

第四條 圓們江北地方雜居地區域内耕地居住ノ韓民ハ清國ノ法權ニ服從シ清國地方官ノ管轄裁判ニ歸ス清國官憲ハ右韓民ヲ清國民ト同様ニ待遇スヘク納稅其ノ他一切行政

又ハ其ノ委任ヲ受ケタル官吏ハ自由ニ法廷ニ立會フコトヲ得但シ人命ニ關スル重案ニ付テハ須ラク先フ日本國領事官ニ知照スヘキモノトス日本國領事官ニ於テ若法律ヲ

右韓民ニ關係スル民事刑事一切ノ訴訟事件ハ清國官憲ニ於テ清國ノ法律ヲ按照シ公平ニ裁判スヘク日本國領事官ニ處分モ清國民ト同様タルヘシ

右韓民ニ關係スル民事刑事一切ノ訴訟事件ハ清國官憲ニ於テ清國ノ法律ヲ按照シ公平ニ裁判スヘク日本國領事官ニ處分モ清國民ト同様タルヘシ

理ニ歸ス

第六 本章程ハ兩國委員ノ協商ヲ經テ酌定シタルモノニシテ先ツ試ニ之ヲ施行シ商辦ニ改メタル後ニ至リ不都合ノ點ナキヲ認メタルトキハ即チ之ヲ該株式會社ニ交付シテ遵守辦理セシムヘシ

章程第五條ニ載スル所ノ本會社職員ハ商辦ニ改ムル際酌量シテ留任若クハ解職スルモノトス

大日本國領事　岡部　三郎　（印）
大清國奉天度支使　張錫鑾　（印）
大日本國明治四十一年九月十一日在奉天
大清國光緒三十四年八月十六日

間島ニ關スル協約

明治四十二年九月四日北京
ニ於テ調印

大日本國政府及大清國政府ハ善隣ノ好誼ニ鑑ミ圓們江、大清韓兩國ノ國境タルコトヲ互ニ確認シ茲妥協ノ精神ヲ以テ一切ノ辦法ヲ商定シ以テ清韓兩國ノ邊民ヲシテ永遠ニ治安ノ

按セヌシテ判斷セル廉アルコトア認メタルトキハ公正ノ裁判ヲ期セムカ爲別ニ官吏ヲ派シテ覆審スヘキコトヲ清國ニ請求スルヲ得
第五條 圓們江北雜居區域内ニ於ケル韓民所有ノ土地、家屋ハ清國政府ヨリ清國人民ノ財產同様完全ニ保護スヘシ又該江沿岸ニハ場所ヲ擇ミ渡船ヲ設ケ雙方人民ノ往來ヘ自由タルヘシ但シ兵器ヲ携帶スルモノハ公文又ハ護照ナクシテ境ヲ越ユルヲ得ス雜居區域内産出ノ米穀ハ韓民ノ販運ヲ許ス尤凶年ニ際シテハ仍禁止スルコトヲ得ヘク柴草ハ舊ニ依リ照辨スヘシ

第六條 清國政府ハ將來吉長鐵道ヲ延吉南境ニ延長シ韓國會寧ニ於テ韓國鐵道ト連絡スヘク其ノ一切ノ辦法ヘ吉長鐵道ト一律タルヘシ開辦ノ時期ハ清國政府ニ於テ情形ヲ酌量シ日本國政府ト商議ノ上之ヲ定ム

第七條 本協約ハ調印後直ニ效力ヲ生スヘク統監府派出所完了スヘシ日本國政府ハ二箇月以内ニ第二條所開ノ通商地ニ領事館ヲ開設スヘシ
右證據トシテ下名ハ各其ノ本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ得但シ人命ニ關スル重案ニ付テハ須ラク先フ日本國領事官ニ知照スヘキモノトス日本國領事官ニ於テ若法律ヲ

日本文及漢文ヲ以テ作成セル各二通ノ本協約ニ記名調印ス

ルモノナリ

明治四十二年九月四日北京ニ於テ

宣統元年七月二十日北京ニ於テ

大日本國特命全權公使伊集院彦吉（官印）

大清國欽命外務部尙書會辦大臣梁敦彥（花押）

（備考）別圖略

鮮滿國境通過鐵道貨物 關稅輕減取極

大正二年五月二十九日北京

ニ於テ調印

朝鮮ヨリ若ハ朝鮮ヲ通過シテ滿洲ニ輸入セラレ又ハ滿洲ヨリ朝鮮ニ若ハ朝鮮ヲ通過シテ輸出セラルル安東經由鐵道貨物ニ對スル減稅特典ニ關スル取極

第一條 滿洲ヨリ鐵道ニ依リ新義州以遠ノ各地ニ仕向ケラル有稅貨物及新義州以遠ノ各地ヨリ鐵道ニ依リ滿洲ニ仕向ケラルル有稅貨物ニ對シテハ各海關稅率三分ノ二ノ輸出稅又ハ輸入稅ヲ課ス

第二條 新義州ヨリ更ニ鳴綠江水路ニ依リ他ニ輸送セシカ
爲鐵道ニ依リ滿洲ヨリ輸出セラレ又ハ該水路ニ依リ新義州ニ到着シテ更ニ鐵道ニ依リ滿洲ニ輸入セラルル貨物ハ前記減稅ノ特典ヲ受クルコトヲ得ス
從テ滿洲ヨリ鐵道ニ依リ新義州ニ輸出セラルル一切ノ有稅貨物ニハ關稅全額ヲ課スルモ左記ノ貨物ニ限リ其ノ三分ノ一ノ拂戻ヲ爲スモノトス

（イ）新義州ニ於テ地方的消費ニ供セラルルモノ

（ロ）滿洲輸出ノ日より二年以内ニ更ニ鐵道ニ依リ新義州以遠ニ輸送セラルルモノ

前記（イ）ノ貨物ニ關シテハ新義州稅關發給ノ輸入免狀（輸入稅仕拂濟ヲ證セルモノ）（ロ）ノ貨物ニ關シテハ安東稅關ヲシテ原輸出貨物タルコトヲ識別セシメ得ルニ必要ナル細目ヲ記載セル新義州稅關發給ノ運送免狀ヲ以テ當該貨物カ關稅三分ノ一ノ拂戻ヲ受クルニ必要ナル條件ヲ具備スルノ證憑ト認ムヘシ

本條第一項ニ記載スルモノヲ除クノ外新義州ヨリ鐵道ニ依リ滿洲ニ輸入セラルル有稅貨物ハ船便ニ依リ到著シタルモノニ非サルコトヲ明記セル新義州稅關發給ノ輸出免狀又ハ運送免狀ヲ添附スルニ於テハ海關稅率三分ノ二ノ

日本國特命全權公使伊集院彦吉（印）

總稅務司エフ、エー、アグレン（印）

輸入稅ヲ課セラルヘシ
朝鮮稅關手續ニ何等變更アリタル場合ニハ本條記載ノ貨物ニ關スル支那海關手續モ亦改正ヲ要スルコトアルヘシ
第三條 三分ノ一減稅ノ特典ヲ受ケテ安東ニ輸入セラレ次ラル貨物ニ對スル抵代稅ハ海關稅率ノ三分ノ一即チ既納三分ノ二輸入稅ノ半額トス

第四條 三分ノ一減稅ノ特典ヲ受ケテ安東ニ輸入セラレ次テ鐵道ニ依リ滿洲以外ノ條約港若ハ支那本部各省ノ内地ニ仕向ケラレ又ハ海路滿洲若ハ支那本部ニ仕向ケラルル貨物ハ支那海關ニ右既減額ヲ納入スルニ非サレハ條約ノ規定ニ基キ外國輸入品ニ適用セラルヘキ普通ノ稅關取扱ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

支那外交總長發在支那國公使宛間島方面陸境
關稅三分ノ一減稅方承認ノ公文

大正八年五月三日

以書翰上仕候貴國政府ハ間島經由日滿鮮陸路貿易ハ明治三十八年滿洲條約附則第十一條ニ依リ當然最惠國待遇ヲ享ク可タ從テ前記間島地方ヲ經由スル貨物ニ對シテハ安奉鐵道經由貨物及其ノ他ノ陸路ヲ經由スル貨物ニ關スル協定ニ準シ輸出入稅共ニ三分ノ一ヲ輕減スヘキ趣御提議ニ相成候ト同様減稅方承認スルコトト相成居候様思考候致候ニ付本國政府ハ貴國政府今回ノ提議ニ對シテモ事同一ニ屬スルモノト認メテ當然之ヲ照拂可致即チ北鮮ニ近接スル間島珲春

等ノ地方ヨリ陸路琿春關及延吉分關ヲ經由シテ北鮮地方ニ輸出セラル各貨物並北鮮地方ヨリ琿春關及延吉分關ヲ經由シテ前記間島琿春等ノ地方へ輸入セラル各貨物ハ一千九百十九年議定ノ支那改訂稅率實施ノ日ヨリ以後民國二年日支間調印ノ朝鮮ヨリ滿洲ニ輸入セラレ及滿洲ヨリ朝鮮ニ輸出セラル安東經由鐵道貨物ニ對スル減稅辦法ニ照シテ之ヲ辦理スヘキ旨ヲ茲ニ聲明仕リ以テ謂一ニ歸セシメ度此段及回答候 敬具

在支帝國公使ヨリ支那 外交總長ニ交付セル間 島方面運貨區域ノ了解 ニ關スル覺書

大正八年五月十日

拜啓陳者北鮮地方ト之ニ接近スル貴國諸地方トノ陸路貿易ニ關シ本月三日附貴翰ヲ以テ貴國政府ニ於テハ北鮮接近間島琿春等ノ地方ヨリ陸路琿春稅關及延吉分關ヲ經由シテ北

滿洲五案件ニ關スル 協約

明治四十二年九月四日北京ニ於
テ調印

本國總領事ト議定セル大綱ヲ按照シ日清兩國人ノ合辦ト爲スヘク其ノ細則ハ追テ督撫ト日本國總領事トノ間ニ商定スヘシ

第五條 京奉鐵道ヲ奉天城根ニ延長スルコトハ日本國政府ニ於テ異議ナキコトヲ聲明ス其ノ實行ノ辦法ハ地方ニ於ケル兩國官憲並專門技師ヲシテ妥實商訂セシムヘシ

右證據トシテ下名ハ各其ノ本國政府ヨリ相當ノ委任ヲ受ケ日本文及漢文ヲ以テ作成セル各二通ノ本協約ニ記名調印スルモノナリ

關係ヲ益蒙固ニセムコトヲ希望シ茲ニ左ノ條款ヲ訂立セリ
第一條 清國政府ハ新民屯法庫門間ノ鐵道ヲ敷設セムトス
ル場合ニハ豫メ日本國政府ト商議スルコトニ同意ス
第二條 清國政府ハ大石橋營口支線ヲ南滿洲鐵道支線ト承認シ南滿洲鐵道期限滿了ノ際一律清國ニ交還スルコト竝該支線ノ末端ヲ營口ニ延長スルコトニ同意ス
第三條 日清兩國政府ハ撫順及煙臺兩處ノ炭鐵ニ關シ和平商定スルコト左ノ如シ

甲 淸國政府ハ日本國政府力上記兩炭鐵採掘權ヲ有ス
ルコトヲ承認ス

明治四十二年九月四日北京ニ於テ
宣統元年七月二十日

乙 日本國政府ハ清國ノ一切ノ主權ヲ尊重シ並上記兩炭鐵ノ採炭ニ對シ清國政府ニ納稅スルコトヲ承諾ス
右ノ稅率ハ清國他處ノ石炭ニ對スル最惠ノ稅率ヲ標準トシ別ニ協定スヘシ

丙 淸國政府ハ上記兩炭鐵ノ採炭ニ對シ他處ノ石炭ニ對スル最惠ノ稅率ヲ適用スルコトヲ承諾ス
丁 炭鐵ノ區域並一切ノ細則ハ別ニ委員ヲ派シテ協定スヘシ

滿蒙鐵道借款修築二關 スル交換公文

大正二年十月五日

第四條 安奉鐵道沿線及南滿洲鐵道幹線沿線ノ鐵務ハ撫順及煙臺ヲ除キ明治四十年即光緒三十三年東三省督撫カ日 敬啓陳者支那國ノ鐵道借款修築問題ハ屢次貴大臣ノ提議ニ

接シ茲ニ其磋商ヲ經既ニ辦法決定セルニ依リ茲ニ其全文ヲ
掲ケ照會得貴意候

鐵道借款修築辦法大綱

一、中華民國政府ハ日本國資本家ノ資金ヲ借入レ自ラ左記
各鐵道ヲ敷設スルコトヲ承諾ス

(甲) 四平街ヨリ起リ鄭家屯ヲ經テ洮南府ニ至ル線

(乙) 開原ヨリ起リ海龍城ニ至ル線

(丙) 長春ニ於ケル吉長鐵道停車場ヨリ起リ南滿鐵道ヲ
貫越シ洮南府ニ至ル線

以上ノ各鐵道ハ南滿鐵道及ヒ京奉鐵道ト聯絡スヘタ其辦法
ハ別ニ協定ヲ行フヘシ

二、前記借款辦法細目ハ須ク浦信鐵道借款合同定本ヲ以テ
標準トナシ本大綱議定後中國政府ハ速ニ日本資本家ト協
定スヘシ

三、中國政府ハ將來若シ洮南府、城承德府城間及ヒ海龍府
吉林省城間ニ兩鐵道ヲ敷設セントスル場合ニ外國資金ノ
借用ヲ要スル時ハ眞先キニ日本資本家ニ商議スヘシ

中華民國貳年拾月五日

中華民國外交總長 班多鈺

以上ノ各鐵道ハ南滿鐵道及ヒ京奉鐵道ト聯絡スヘタ其辦法
ハ別ニ協定ヲ行フヘシ

三、中國政府ハ將來若シ洮南府、城承德府城間及ヒ海龍府
吉林省城間ニ兩鐵道ヲ敷設セントスル場合ニ外國資金ノ
借用ヲ要スル時ハ眞先キニ日本資本家ニ商議スヘシ

以上ノ全文ハ直ニ當館ヨリ帝國政府へ申達致置候
此段貴答申述候也

大正二年十月五日

大日本帝國公使館

度候

右照會得貴意候 敬具

中華民國七年九月二十四日

中華民國特命全權公使 章宗群

外務大臣男爵 萩藤新平閣下

往 輸

右照會得貴意候 敬具

中華民國七年九月二十四日

中華民國特命全權公使 章宗群

外務大臣男爵 萩藤新平閣下

度候

來 輸

以書翰致啓上候支那國政府ハ日本國資本家ヨリスル借款ヲ
以テ速ニ左記地點間ノ鐵路ヲ建設スルコトニ決定シ茲ニ本
使ハ本國政府ノ委任ヲ受ケ特ニ此旨貴國政府ニ對シ致聲明
候

一、開原海龍吉林間

二、長春洮南間

三、洮南熱河間

四、洮南熱河間ノ一地點ヨリ某海港ニ至ル間（本線徑路
ハ追テ調査ノ上決定スルコト）

以上所載ニ關シ貴國政府ニ於テ異議無キ時ハ速ニ必要ノ處
置ヲ執リ貴國資本家ヲシテ該項借款ノ商議ニ應セシメムカ爲速ニ必要
性ヲ執リ貴國資本家ヲシテ該項借款ノ商議ニ應セシメラレ

滿蒙四鐵道ニ關スル交換公文

六九七

送復者貴曆貳年拾月五日附商字第貳拾六號貴部公文ヲ以テ
山座特命全權公使ト貴國政府ノ間ニ磋商決定ヲ經タル借款
修造鐵路豫約ノ辦法大綱左記全文御照會相成閱悉致シ候

一、中華民國政府ハ日本國資本家ノ資金ヲ借入レ自ラ左記
各鐵道ヲ敷設スルコトヲ承諾ス

(甲) 四平街ヨリ起リ鄭家屯ヲ經テ洮南府ニ至ル線

(乙) 開原ヨリ起リ海龍城ニ至ル線

(丙) 長春ニ於ケル吉長鐵道停車場ヨリ起リ南滿鐵道ヲ
貫越シ洮南府ニ至ル線

以上ノ各鐵道ハ南滿鐵道及ヒ京奉鐵道ト聯絡スヘタ其辦法
ハ別ニ協定ヲ行フヘシ

二、前記借款辦法細目ハ須ク浦信鐵道借款合同定本ヲ以テ
標準トナシ本大綱議定後中國政府ハ速ニ日本資本家ト協
定スヘシ

三、中國政府ハ將來若シ洮南府、城承德府城間及ヒ海龍府
吉林省城間ニ兩鐵道ヲ敷設セントスル場合ニ外國資金ノ
借用ヲ要スル時ハ眞先キニ日本資本家ニ商議スヘシ

以上ノ全文ハ直ニ當館ヨリ帝國政府へ申達致置候
此段貴答申述候也

以書翰致啓上候陳者貴國政府ニ於テハ日本國資本家ヨリス
ル借款ヲ以テ速ニ左記地點間ノ鐵道ヲ建設スルコトニ決定
ノ旨ヲ聲明セラレタル本日附書翰致聞悉候

帝國政府ハ欣然右支那國政府ノ聲明ヲ了承スルト共ニ日本

國資本家ヲシテ本件借款ノ商議ニ應セシムカ爲速ニ必要
性ヲ置ケルヘキコト茲ニ致首肯候

日本帝國外務大臣男爵後藤新平
支那共和國特命全權公使章宗群閣下
ノ協議ニ依リ決定スヘシ

満蒙四鐵道借款豫備契約

一千九百十八年九月二十八日
(民國七年九月二十八日)

中華民國政府(以下政府ト稱ス)ハ熱河ヨリ洮南ニ至ル鐵道、長春ヨリ洮南ニ至ル鐵道、吉林ヨリ海龍ヲ經テ開原ニ至ル鐵道、熱洮鐵道ノ一地點ヨリ某海港ニ達スル鐵道(以下滿蒙四鐵道ト稱ス)ヲ建設スル爲メ株式會社日本興業銀行ヲ代表スル株式會社日本興業銀行、株式會社臺灣銀行及朝鮮銀行ノ三行(以下銀行ト稱ス)トノ間ニ借款契約ノ締結ヲ目的トシテ左ノ豫備契約ヲ作成ス

第一條 政府ハ熱河洮南間、長春洮南間、吉林開原間及熱洮鐵道ノ一地點ヨリ某海港ニ達スル鐵道建設ニ要スル一切ノ資金ヲ中華民國政府熱洮鐵道金貨公債、吉開鐵道金貨公債、某々鐵道金貨公債(以下滿蒙四鐵道金貨公債ト

稱ス)ニ依リ銀行ニテ調達スルコトヲ認准ス但シ熱洮鐵道ノ一地點ヨリ某海港ニ達スル鐵道ノ線路ハ政府ト銀行ナル費用ヲ定メ銀行ノ同意ヲ求ムヘシ
第三條 政府ハ速ニ滿蒙四鐵道ノ建設費其ノ他一切ノ必要費還ハ公債發行ノ日ヨリ起算シ第十二年目ヨリ之ヲ開始シ年賦償還ノ方法ニ依ルモノトス
第四條 政府ハ滿蒙四鐵道借款本契約締結ト共ニ工事進行ノ計畫ヲ銀行ト協定シ其ノ協定ニヨリテ鐵道建設ニ着手シ速成ヲ圖ルモノトス
第五條 政府ハ滿蒙四鐵道金貨公債ノ元利金支拂ニ對スル擔保トシテ左ノ通銀行ニ提供スルモノトス
現在及將來ニ於テ滿蒙四鐵道ニ屬スル財產一切並ニ其ノ收入
政府ハ銀行ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ前項ノ財產又ハ收入ヲ擔保トシテ又保證物トシテ仙人ニ提供スルコトヲ得サルモノトス

第六條 滿蒙四鐵道金貨公債ノ發行價格及公債利率政府手取金額ハ發行當時ノ狀況ニ仍リ可成政府ニ有利ナル主義ノトス

ヲ以テ協定スルモノトス
第七條 前各條ニ規定ナキ條件ニ就テハ政府ハ銀行ト協議決定スルモノトス

第八條 滿蒙四鐵道借款本契約ハ本豫備契約ヲ基礎トシ其ノ成立ノ時ヨリ四箇月以内ニ之ヲ締結スルモノトス

第九條 銀行ハ豫備契約成立ト同時ニ政府ニ對シ日本金二千萬圓ヲ前貸スルモノトス

但シ本前貸金ハ無手數料ニテ交付スルモノトス

第十條 本前貸金ノ利子ハ年八分即チ日本金一百圓ニ付日
本金八圓ノ割合ヲ以テ支拂フモノトス

第十一條 本前貸金ハ政府ノ發行スル國庫證券ノ割引ノ方法ニ依リ之ヲ交付スルモノトス

第十二條 前條國庫證券ハ滿六箇月毎ニ切換ヘ發行シ其ノ都度滿六箇月分ノ利子ニ相當スル金額ヲ銀行ニ拂フモノトス

第十三條 政府ハ滿蒙四鐵道借款本契約成立ノ後本公債ノ募集ニヨリ得タル資金ヲ以テ優先ニ且ツ遲滞ナク本前貸金ヲ返済スルモノトス

第十四條 本前貸金ノ交付、返済並ニ利子ノ支拂其ノ他總テ受渡ハ日本東京ニ於テ之ヲ爲スモノトス

大正四年日支條約並交換公文

大正四年日支條約並交換公文

副總裁 小野英二郎
中華民國特命全權公使 章宗群

日本帝國大正七年九月二十八日
中華民國七年九月二十八日

株式會社日本興業銀行

大正四年五月二十五日北京
ニ於テ調印

日本國皇帝陛下及支那共和國大統領閣下ハ極東ニ於ケル全

大正四年日支條約並交換公文

六九九

大正四年日支條約並交換公文

七〇〇

局ノ平和ヲ維持シ且兩國ノ間ニ存スル友好善鄰ノ關係ヲ益
翠固ナラシメムコトヲ欲シ右ノ目的ヲ以テ條約ヲ締結スル
コトニ決シ之カ爲ニ日本國皇帝陛下ハ特命全權公使從四位
勳二等日置益（支那共和國大統領閣下ハ中興一等嘉禾勳章
外交總長陸徵祥ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委
員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メ以
テ左ノ條項ヲ協議決定セリ

第一條 支那國政府ハ獨逸國カ山東省ニ關シ條約其ノ他ニ

依リ支那國ニ對シテ有スル一切ノ權利利益讓與等ノ處分
ニ付日本國政府カ獨逸國政府ト協定スル一切ノ事項ヲ承

認スヘキコトヲ約ス

第二條 支那國政府自ラ芝罘又ハ龍口ヨリ膠濟鐵道ニ接續
スル鐵道ヲ敷設セムトスル場合ニ於テ獨逸國カ煙臺鐵道
信號機ヲ拋棄シタルトキハ支那國政府ハ日本國資本家ニ
對シ信號ヲ商議スヘキコトヲ約ス

第三條 支那國政府ハ成ルヘク速ニ外國人ノ居住貿易ノ爲
自ラ通ミテ山東省ニ於ケル適當ナル諸都市ヲ開放スヘキ
コトヲ約ス

第四條 本條約ハ調印ノ日ヨリ效力ヲ生ス

本條約ハ日本國皇帝陛下及支那共和國大統領閣下ニ於テ
右頤會得貴意候 敬具

山東不割讓ノ件

來 輸

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ支那國政府ハ山東省
内若ハ其ノ沿岸一帶ノ地又ハ島嶼ヲ何等ノ名義ヲ以テスル
ニ拘ラス外國ニ租與又ハ讓與スルコトナカルヘキ旨貴國政
府ノ名ニ於テ帝國政府ニ對シ聲明相成致領承候
右回答得貴意候 敬具

往 輸

之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致候
右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 徵 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

往 輸

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ支那國政府ハ山東省
内若ハ其ノ沿岸一帶ノ地又ハ島嶼ヲ何等ノ名義ヲ以テスル
ニ拘ラス外國ニ租與又ハ讓與スルコトナカルヘキ旨貴國政
府ノ名ニ於テ帝國政府ニ對シ聲明相成致領承候
右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 徵 祥（印）

山東開放地ノ件

來 輸

以書翰致啓上候陳者本日調印ノ山東省ニ關スル條約第三條
ニ規定セル開放スヘキ諸都市及開埠章程ハ支那國政府自ラ

大正四年日支條約並交換公文

批准セラルヘク其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交
換スヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ日本文及支那文ヲ以テ作成セ
ラレタル各二通ノ本條約ニ署名調印ス

大正四年五月二十五日即中華民國四年五月二十五日北京ニ
於テ之ヲ作ル

日本帝國特命全權
公使從四位勳二等 日 置 益（印）

支那共和國中興一等
嘉禾勳章外交總長 陸 徵 祥（印）

日本帝國特命全權
公使從四位勳二等 日 置 益（印）

支那共和國中興一等
嘉禾勳章外交總長 陸 徵 祥（印）

二、南滿洲及東部內蒙古ニ關ス
ル條約並附屬公文

大正四年五月二十五日北京

ニ於テ調印

同年同月八日東京ニ於テ批

准書交換

國政府ハ之ヲ承認スヘシ

セラレタル旅券ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受ケ又支那國警

察法令及課稅ニ服スヘシ

日本國皇帝陛下及支那共和國大統領閣下ハ南滿洲及東部內蒙古ニ於ケル兩國間ノ經濟關係ヲ發展セシメムコトヲ歎シ

右ノ目的ヲ以テ條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲ニ日本國

皇帝陛下ハ特命全權公使從四位勳二等日置益ヲ支那共和國

大統領閣下ハ中興一等嘉禾勳章外交總長陸徵祥ヲ各其ノ全

權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ

示シ之カ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ條項ヲ協議決定セリ

第一條 兩締約國ハ旅順大連ノ租借期限並南滿洲鐵道及安奉鐵道ニ關スル期限ヲ何レモ九十九箇年ニ延長スヘキコトヲ約ス

奉鐵道ニ關スル期限ヲ何レモ九十九箇年ニ延長スヘキコトヲ約ス

第二條 日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業ヲ經營スル爲必要ナル土地ヲ商租スルコトヲ得

第三條 日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得

第四條 日本國臣民カ東部内蒙古ニ於テ支那國國民ト合辦ニ依リ農業及附隨工業ノ經營ヲ爲サムトスルトキハ支那ノ商工業者其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得

第五條 前三條ノ場合ニ於テ日本國臣民ハ例規ニ依リ下附之ヲ又支那國國民被告タル場合ニハ支那國官吏ニ於テ之ヲ審判シ互ニ員ヲ派シ陪席傍聴セシムルコトヲ得但シ士地ニ關スル日本國臣民及支那國國民間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方慣習ニ依リ兩國ヨリ員ヲ派シ共同審判スヘシ

第六條 支那國政府ハ成ルヘク速ニ外國人ノ居住貿易ノ爲自ラ通ミテ東部内蒙古ニ於ケル適當ナル諸都市ヲ開放スヘキコトヲ約ス

第七條 支那國政府ハ從來支那國ト各外國資本家トノ間ニ締結シタル鐵道借款契約規定事項ヲ標準ト爲シ速ニ吉長鐵道ニ關スル諸協約並契約ノ根本的改訂ヲ行フヘキコトヲ約ス將來支那國政府ニ於テ鐵道借款事項ニ關シ外國資本家ニ於テ借款契約ノ改訂ヲ行フヘシ

第八條 滿洲ニ關スル日支現行各條約ハ本條約ニ別ニ規定スルモノヲ除クノ外一切從前ノ通り實行スヘシ

第九條 本條約ハ調印ノ日ヨリ效力ヲ生ス

本條約ハ日本國皇帝陛下及支那共和國大統領閣下ニ於テ批准セラルヘク其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ日本文及支那文ヲ以テ作成セラレタル各二通ノ本條約ニ署名調印ス

大正四年五月二十五日即中華民國四年五月二十五日北京ニ於テ之ヲ作ル

日本帝國特命全權公使從四位勳二等 日置益（印）

支那共和國中興一等嘉禾勳章外交總長 陸徵祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置益（印）

附屬公文

大正四年日支條約並交換公文

以書翰致啓上候陳者本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第一條ニ規定セル旅順大連租借期限附期限ハ民國九十年即西曆二千二年ニ至リ滿期トナリ南滿洲鐵道還附期限ハ民國九十年即西曆一千九百九十七年ニ至リ滿期トナリ南滿洲鐵道成尚其ノ原條約第十二條ニ記載セル運轉開始ノ日ヨリ三十年後支那國政府ニ於テ買戻スヲ得ルノ一節ハ之ヲ無效トスヘク又安奉鐵道ノ期限ハ民國九十六年即西曆二千七年ニ至リ滿期ト可相成候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日
支那共和國外交總長 陸徵祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置益（印）

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第一條ニ規定セル旅順大連租借期限ノ延長ハ民國八十六年即西曆一千九百九十七年ニ至リ滿期トナリ南滿洲鐵道還附期限ハ民國九十年即西曆二千二年ニ至リ滿期ト可相成候其ノ原條約第十二條ニ記載セル運轉開始ノ日ヨリ三十六年ノ後支那國政府ニ於テ買戻スヲ得ルノ一節ハ之ヲ無效トスヘク又安奉鐵道ノ期限ハ民國九十六

大正四年日支條約並交換公文

年即西曆二千七年ニ至リ滿期ト可相成旨御照會ノ趣致領承候

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）
支那共和國外交總長 陸徵祥殿

東蒙開放地ノ件

以書翰致啓上候陳者本日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第六條ニ規定セル開放ヘキ諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 陸徵祥（印）
日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第六條ニ規定セル開放ヘキ諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致旨御照會相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 陸徵祥（印）
日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者日本國臣民ニ於テ南滿洲ニ於ケル左記各鐵山（既ニ試掘又ハ探掘セラレタル各鐵山ヲ除ク）ヲ遠ニ調査ノ上選定シタル節ハ支那國政府ハ其ノ試掘又ハ探掘ヲ允許可致但シ鐵業條例確定ニ至ル迄ハ現行辦法ニ準據スヘキモノニ有之候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 陸徵祥（印）
日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第六條ニ規定セル開放ヘキ諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致旨御照會相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日
日本帝國特命全權公使 日置 益（印）
支那共和國外交總長 陸徵祥殿

南滿鐵山ノ件

以書翰致啓上候陳者日本國臣民ニ於テ南滿洲ニ於ケル左記各鐵山（既ニ試掘又ハ探掘セラレタル各鐵山ヲ除ク）ヲ遠ニ調査ノ上選定シタル節ハ支那國政府ハ其ノ試掘又ハ探掘ヲ

允許可致但シ鐵業條例確定ニ至ル迄ハ現行辦法ニ準據スヘキモノニ有之候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 陸徵祥（印）
日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第六條ニ規定セル開放ヘキ諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致旨御照會相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第六條ニ規定セル開放ヘキ諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定可致旨御照會相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

鐵廠通化

暖池塘

錦縣

石炭、鐵

鞍山站一帶

遼陽縣ヨリ
本溪縣ニ瓦ル

鐵種

所在地
牛心臺
田什付溝
杉松園
暖池塘
鞍山站一帶

縣名
本溪
本溪
本溪
本溪
本溪

鐵廠通化

暖池塘

錦縣

石炭、鐵

鞍山西

和龍

金石炭

滿鐵優先權ノ件

以書翰致啓上候陳者本總長ハ支那國政府ノ名ニ於テ茲ニ左ノ如ク貴國政府ニ對シ聲明スルノ光榮ヲ有シ候

支那國政府ハ將來南滿洲及東部內蒙古ニ於テ鐵道ヲ敷設スル場合ニハ自國ノ資金ヲ以テスヘク若シ外資ヲ要スルトキハ先フ日本國資本家ニ借款ヲ商議スヘシ又支那國政府ハ前記地方ノ各種稅課（但シ既ニ支那中央政府借款ノ擔保トナ

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）
支那共和國外交總長 陸徵祥殿

左記

一、奉天省

七〇五

（レル鹽稅關稅等ノ類ヲ除ク）ヲ擔保トシテ外國ヨリ借款ヲ

起サムトルトキハ先ツ日本國資本家ニ商議スヘシ
右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 微 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ支那國政府ハ將來南滿洲及東部内蒙古ニ於テ鐵道ヲ敷設スル場合ニハ自國ノ資金ヲ以テスヘク若シ外資ヲ要スルトキハ先ツ日本國資本家ニ借款ヲ商議可致又支那國政府ハ前記地方ノ各種稅課（但シ既ニ支那中央政府借款ノ擔保トナレル鹽稅關稅等ノ類ヲ除ク）ヲ擔保トシテ外國ヨリ借款ヲ起サムトルトキハ先ツ日本國資本家ニ商議可致旨貴國政府ノ名ニ於テ帝國政府ニ對シ聲明相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 微 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ政治財政軍事警察等ニ關スル外國顧問教官ヲ歸聘セムトルトキハ最先ニ日本人ヲ歸聘スヘキ旨貴國政府ノ名ニ於テ帝國政府ニ對シ聲明相成致領承候

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

南滿顧問ノ件

以書翰致啓上候陳者本總長ハ支那國政府ノ名ニ於テ茲ニ左ノ如ク貴國政府ニ對シ聲明スルノ光榮ヲ有シ候

支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ政治財政軍事警察ニ關スル外國顧問教官ヲ歸聘セムトルトキハ最先ニ日本人ヲ歸聘スヘシ

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 微 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益殿

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 微 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第二條ニ記載セル商租ノ文字ニハ三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ヘキ租借ヲ含ムモノト了解致候

右照會得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

右照會得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

右照會得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

警察法令及課稅ノ件

以書翰致啓上候陳者本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第二條ニ記載セル商租ノ文字ニハ三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ヘキ租借ヲ含ムモノト了解致候

右照會得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益（印）

支那共和國外交總長 陸 微 祥殿

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第二條ニ記載セル商租ノ文字ニハ三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ヘキ租借ヲ含ムモノト了解致候

右回答得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 微 祥（印）

日本帝國特命全權公使 日置 益殿

大正四年日支條約並交換公文

條約實施期ノ件

以書翰致啓上候陳者本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第二條第三條第四條及第五條ハ支那國政府ニ於テ諸般ノ準備ヲ整フル必要上同條約調印後三箇月間其ノ實施ヲ延期致度候ニ付貴國政府ノ御同意ヲ得度候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 徵 譲 (印)

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ本日調印ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第二條第三條第四條及第五條ハ支那國政府ニ於テ諸般ノ準備ヲ整フル必要上同條約調印後三箇月間其ノ實施ヲ延期シタキ旨御照會相成領承帝國政府ニ於テハ事情已ムヲ得サルモノト認メ右ニ致同意候

右回答得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益 (印)

支那共和國外交總長 陸 徵 譲

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

三、漢治萍公司ニ關スル交換 文公

大正四年五月二十五日

來 翰

以書翰致啓上候陳者支那國政府ハ日本國資本家ト漢治萍公司トノ關係極メテ密接ナルニ鑑ミ將來同公司ト日本國資本家トノ間ニ合辦ノ議成リタルトキハ之ヲ承認スヘク又同公司ヲ沒收スルコトナカルヘク又日本國資本家ノ同意ナクシテ同公司ヲ國有ト爲スコトナカルヘク又日本國以外ヨリ外資ヲ同公司ニ入レシムルコトナカルヘク候

右照會得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 徵 譲 (印)

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ支那國政府ハ日本國資本家ト漢治萍公司トノ關係極メテ密接ナルニ鑑ミ將來同

公司ト日本國資本家トノ間ニ合辦ノ議成リタルトキハ之ヲ承認スヘク又同公司ヲ沒收スルコトナカルヘク又日本國資本家ノ同意ナクシテ同公司ヲ國有ト爲スコトナカルヘク又日本國以外ヨリ外資ヲ同公司ニ入レシムルコトナカルヘク

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益 (印)

支那共和國外交總長 陸 徵 譲

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣致領承候
支那國政府ハ福建省沿岸地方ニ於テ外國ニ造船所軍用貯炭所海軍根據地其ノ他一切ノ軍事上ノ施設ヲ爲スヲ許スカ如キコト決シテ無之又外資ヲ借入レ前記施設ヲ爲サムト欲スルカ如キ意思ナキコトヲ茲ニ致聲明候

右回答得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 徵 譲 (印)

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

往 翰

以書翰致啓上候陳者聞ク所ニヨレハ支那國政府ハ福建省沿岸地方ニ於テ外國ニ造船所軍用貯炭所海軍根據地其ノ他一切ノ軍事上ノ施設ヲ爲スコトヲ許シ又支那自ラ外資ヲ借入レ前記各施設ヲ行ハムトスルカ如キ意思アル趣ナルカ支那國政府ニ於テハ果シテ斯カル意思ヲ有セラルルナ否十御回答ヲ得度此段御照會得貴意候 敬具

四、福建二關スル交換公文

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益嚴

五、膠州灣租借地ニ關スル交換 公文

大正四年五月二十五日

支那共和國外交總長 陸 徵 譲 (印)

以書翰致啓上候陳者本使ハ帝國政府ノ名ニ於テ茲ニ左ノ如
ク貴國政府ニ對シ聲明スルノ光榮ヲ有シ候
日本國政府ハ現下ノ戰役終結後膠州灣租借地ニシテ全然日
本国ノ自由處分ニ委セラル場合ニ於テハ左記條件ノ下ニ
該租借地ヲ支那國ニ還附スヘシ

一 膜州灣全部ヲ商港トシテ開放スルコト
二 日本國政府ニ於テ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ
設置スルコト

一 膜州灣全部ヲ商港トシテ開放スルコト
二 日本國政府ニ於テ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ
設置スルコト

一 膜州灣全部ヲ商港トシテ開放スルコト
二 日本國政府ニ於テ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ
設置スルコト

三 列國ニシテ希望スルニ於テハ別ニ共同居留地ヲ設置
スルコト
四 右ノ外獨逸ノ營造物及財產ノ處分並其ノ他ノ條件手
續等ニ付キテハ還附實行ニ先チ日本國政府ト支那國政
府トノ間ニ協定ヲ遂クヘキコト
右照會得貴意候 敬具

大正四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益 (印)
支那共和國外交總長 陸徵祥殿

一 膜州灣全部ヲ商港トシテ開放スルコト
二 日本國政府ニ於テ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ
設置スルコト
三 列國ニシテ希望スルニ於テハ別ニ共同居留地ヲ設置
スルコト
四 右ノ外獨逸ノ營造物及財產ノ處分並其ノ他ノ條件手
續等ニ付キテハ還附實行ニ先チ日本國政府ト支那國政
府トノ間ニ協定ヲ遂クヘキコト
右回答得貴意候 敬具

中華民國四年五月二十五日

日本帝國特命全權公使 日置 益 (印)
支那共和國外交總長 陸徵祥殿

【参考】

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ日本國政府ハ現下ノ

大正四年日支交渉關係公文書

來翰

第一 加藤外相ノ日置公使ニ與ヘタル訓令

(大正三年十二月三日附
ニテ東京ニ於テ交付)

帝國政府ニ於テハ時局ノ善後ヲ圖リ且帝國將來ノ地歩ヲ鞏
固ニシ以テ東洋ノ平和ヲ永遠ニ保持セムカ爲此際支那政府
トノ間ニ大體別紙第一號乃至第四號ノ趣旨ノ條約及取締ヲ
締結貢度意圖ニ有之右ノ内別紙第一號ハ山東問題ノ處分ニ
係り別紙第二號ハ大體南滿洲及東部内蒙古地方ニ於ケル我
地位ヲ明確ナラシムルノ趣旨ニ有之畢竟南滿洲及東部内蒙
古ニ關シテハ帝國ノ地位明確ナラサル點斯カラサル爲從來
モ好マシカラヌ影響ヲ及ホシタルコト一再ナラサル次第ナ
ルニ付帝國政府ニ於テハ此際同地方ニ於ケル帝國ノ當然有
セサルヘカラサル地位ヲ支那政府ヲシテ確認セシムトス
ニシテ要スルニ以上三項共何レモ格段ニ新規ノ事態ヲ現出
關係ニ顧ミ同公司將來ノ爲最善ノ方策ヲ講セムトスルモノ
セムトスルモノニハ無之若シ夫レ別紙第四號ニ至テハ帝國
政府ニ於テ屢次内外ニ宣明シタル支那領土保全ノ大則ニ更

ニ一步ヲ進エムトスルモノニ過キサル次第ニ有之候帝國政
府ニ於テハ此機ニ於テ東亞ニ於ケル帝國ノ地位ヲ益確保シ
以テ大局ヲ保全セムカ爲以上各項目ノ實行ヲ以テ絕對ニ必
要ト思考スル次第ニシテ帝國政府ハ是非共之力貫徹リ圖リ
タキ極メテ堅固ナル決心ヲ有スル義ニ付貴官ニ於テモ克タ
政府ノ意ノアル所ワ體シ極力御盡瘁相成度將又別紙第五號
ハ別紙第一號乃至第四號ノ各項トハ全然別個ノ問題トシテ
此際支那ニ其ノ實行ヲ勸告致度事項ニ有之日支兩國親交ノ
增進ヲ圖リ其ノ共通利益ヲ擁護セムカ爲ニハ何レモ堅要ノ
案件ニシテ中ニハ既ニ日支兩國間ニ墨案ト成リ居レル項目
モ有之次第ニ付是又成ルヘタ我方希望ヲ實現セシムル様精
細御盡力相成度又本件交渉中支那當局ハ必ス膠州灣最後ノ
處分ニ關スル帝國政府ノ意旨ヲ承知シヨキ旨申出ツヘタ候
處帝國政府ニ於テハ若シ支那政府ニシテ我要求ヲ應諾スル
場合ニハ支那ノ領土保全主義ヲ重シ日支國交ノ親善ヲ増進
スル爲同地還附ノコトヲ證議スルモ苦シカラス思料致居候
テ商港トナシ日支那管居留地ヲ設ケル等ノ條件ヲ附スルコ
ト絶対ニ必要ト被存候間還附ノ證議ヲ聲明セラルルトセハ
別ニ請調ノ上措置セラルコトト御承知相成度此段及調會

候也

第一號

日本國政府及支那國政府ハ個ニ極東ニ於ケル全局ノ平和ヲ維持シ且兩國ノ間ニ存スル友好善鄰ノ關係ヲ益蒙固ナラシメムコトヲ希望シ茲ニ左ノ條款ヲ締約セリ

第一條 支那國政府ハ獨逸國カ山東省ニ關シ條約其ノ他ニ

依リ支那國ニ對シテ有スル一切ノ權利利益讓與等ノ處分ニ付日本國政府カ獨逸國政府ト協定スヘキ一切ノ事項ヲ承認スヘキコトヲ約ス

第二條 支那國政府ハ山東省內若クハ其ノ沿海一帶ノ地又ハ島嶼ヲ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス他國ニ讓與シ又ハ貸與セサルヘキコトヲ約ス

第三條 支那國政府ハ芝罘又ハ龍口ト膠州灣ヨリ濟南ニ至ル鐵道トヲ駕緒スヘキ鐵道ノ敷設ヲ日本國ニ允許ス

第四條 支那國政府ハ成ルヘク速ニ外國人ノ居住及貿易ノ爲自ラ通テ山東省ニ於ケル主要都市ヲ開クヘキコトヲ約ス其ノ地點ハ別ニ協定スヘシ

第二號

日本國政府及支那國政府ハ支那國政府カ南滿洲及東部内蒙古ニ於ケル日本國ノ優越ナル地位ヲ承認スルニヨリ茲ニ左ノ條款ヲ締約セリ

第一條 兩締約國ハ旗順大連租借期限並滿洲及安奉兩鐵道各期限ヲ何レモ更ニ九十九箇年ツツ延長スヘキコトヲ約ス

第二條 日本國臣民ハ南滿洲及東部内蒙古ニ於テ各種商業ノ建物ノ建設又ハ耕作ノ爲必要ナル土地ノ賃借權又ハ其ノ所有權ヲ取得スルコトヲ得

第三條 日本國臣民ハ南滿洲及東部内蒙古ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業及其ノ他ノ業務ニ從事スルコトア得

第四條 支那國政府ハ南滿洲及東部内蒙古ニ於ケル鐵山ノ採掘權ヲ日本國臣民ニ許與ス其ノ採掘スヘキ鐵山ハ別ニ協定スヘシ

第五條 支那國政府ハ左ノ事項ニ關シテハ豫メ日本國政府ノ同意ヲ經ヘキコトヲ承諾ス

(一) 南滿洲及東部内蒙古ニ於テ他國人ニ鐵道敷設權ア與ヘ又ヘ鐵道敷設ノ爲ニ他國人ヨリ資金ノ供給ヲ仰クコト

(二) 南滿洲及東部内蒙古ニ於ケル諸稅ヲ擔保トシテ他國ヨリ借款ヲ起スコト

第六條 支那國政府ハ南滿洲及東部内蒙古ニ於ケル政治財政軍事ニ關シ顧問教官ヲ要スル場合ニハ必ス先ツ日本國ニ協議スヘキコトヲ約ス

第七條 支那國政府ハ本條約締結ノ日ヨリ九十九箇年間日本國ニ吉長鐵道ノ管理經營ヲ委任ス

第三號

日本國政府及支那國政府ハ日本國資本家ト漢治萍公司トノ間ニ存スル密接ナル關係ニ顧ミ且兩國共通ノ利益ヲ増進セムカ爲左ノ條款ヲ締約セリ

第一條 兩締約國ハ將來適當ノ時機ニ於テ漢治萍公司ヲ兩國ノ合併トナスコト並支那國政府ハ日本國政府ノ同意ナカシテ同公司ニ屬スル一分ノ權利財產ヲ自ラ處分シ又ハ同公司ヲシテ處分セシメサルヘキコトヲ約ス

第二條 日本國資本家側債權保護ノ必要上支那國政府ハ漢治萍公司ニ屬スル諸鐵山附近ニ於ケル鐵山ニ付テハ同公司ノ承諾ナクシテハ之を採掘ツ同公司以外ノモノニ許可セサルヘキコト並其ノ他直接間接同公司ニ影響ヲ及ホス

第五號

一、中央政府ニ政治財政及軍事顧問トシテ有力ナル日本人ヲ備聘スルコト

二、支那内地ニ於ケル日本ノ病院、寺院及學校ニ對シテハ其ノ土地所有權ヲ認ムルコト

三、從來日支間ニ醫療事故ノ發生ヲ見ルコト多ク不快ナル論争ヲ醸シタルコトモ専カラサルニ付此際必要ノ地方ニ於ケル警察ヲ日本人民ヲ備聘シ以テ一面支那警察機關ノ刷新確立ヲ圖ルニ資スルコト

四、日本ヨリ一定數量ノ兵器ノ供給ヲ仰クカ又ハ支那ニ日立ツルニ資スルコト

支合辦ノ兵器廠ヲ設立シ日本ヨリ技師及材料ノ供給ヲ仰
クコト

五、日本國資本家ト密接ノ關係ヲ有スル南昌九江鐵道ノ發
展ニ資スル爲且南支鐵道問題ニ關スル永年ノ交渉ニ顧ミ

武昌ト九江南昌線トヲ聯絡スル鐵道及南昌杭州間、南昌
湖州間鐵道數設權ヲ日本ニ許與スルコト

六、臺灣トノ關係及福建不割讓約定トノ關係ニ顧ミ福建省
ニ於ケル鐵道、鐵山、港灣ノ設備(造船所ヲ含ム)ニ關シ
外國資本ヲ要スル場合ニハ先ツ日本ニ協議スルコト

七、支那ニ於ケル日本人ノ布教權ヲ認ムルコト

第二 東鄉國政府提出ノ對案(譯文)

(大正四年二月十二日在支日)
置公使支那國政府ヨリ接受

第一號

日本國政府及支那國政府ハ個ニ極東ニ於ケル全局ノ平和ヲ
維持シ且兩國ノ間に存スル友好善鄰ノ關係ヲ益蒙固ナラシ
メムコトヲ希望シ茲ニ左ノ條款ヲ締約セリ

第一條 今後日獨兩國政府間ニ於テ獨逸國カ山東省内ニ在

第四條 支那國政府ハ外國人通商ノ目的ヲ以テ山東省内ニ
於テ自ラ適宜ノ地方ヲ選ヒ開キテ商埠トナスコトヲ承諾
ス其ノ開埠章程ハ正ニ支那國自ラ之ヲ定ムヘシ

第二號

日本國政府ハ支那國ノ東三省ニ於ケル完全ナル領土主權ヲ
終始尊重スルコトヲ聲明シ茲ニ支那日本兩國政府ハ彼我ノ
東三省南部ニ於ケル商務ヲ發展セシムル目的ノ爲ニ條款ヲ
議定スルコト左ノ如シ

第一條 支那國政府ハ旅順大連租借期限ヲ九十九箇年ニ延
長シ民國八十六年即西暦一千九百九十七年ヲ以テ滿期ト
シ又南滿洲鐵道ノ全部ヲ支那ニ還附スヘキ期限ヲ九十九
箇年ニ延長シ民國九十年即西暦二千一年ヲ以テ滿期トナ
シ其ノ他ハ總テ各當該原條約ニ照シテ辦理スヘキコトヲ
承諾ス

第二條 支那國政府ハ日本國カ安奉鐵道經營期限滿了スル
トキ期限延長ノ辦法ヲ商議スヘク其ノ他ノ各節ハ日支滿

洲協約附屬第六號ニ照シ引續キ實行スヘキコトヲ承諾ス
第三條 支那國政府ハ現在東三省ニ於テ開放シタル商埠ノ
外更ニ地點ヲ酌定シ自ラ開埠通商ヲ行ヒ境界線ヲ劃定シ

リテ條約及成案ノ辦法(獨逸國膠州灣租借條約第一章ヲ
除ク)ニ依リ支那國政府ニ對シ享有スル一切ノ利益等ニ
關シ處分ヲ協定スルトキハ支那國政府ハ總テ之ヲ承認ス
ヘキコトヲ聲明ス

日本國政府ハ支那國政府カ前項利益ヲ承認シタルトキハ
日本國ハ膠州灣ヲ支那國ニ還附スヘキコトヲ聲明シ茲ニ
後日獨兩國政府間ニ前項ノ協商ヲナストキハ支那國政府
カ會議ニ加入スルノ權アルコトヲ承認ス

第二條 今回日本國カ膠州灣ニ兵ヲ用ヒタル爲生シタル所
ノ各種損害ノ賠償ハ日本國政府ニ於テハ當分從來ノ辦法ニヨリ辦理スヘ
キモ其ノ用兵ノ爲ニ添設セル軍用鐵道電線等即時撤廢シ
又膠州灣租借地域外ニ殘留スル日本軍隊ハ先ツ撤退シ租
借地域内ニ於ケル殘留兵ハ膠州灣ヲ支那ニ還附スル際全
部撤退スヘシ

第三條 支那國政府自ラ芝罘或ハ龍口ヨリ膠濟鐵道ニ接続
スヘキ鐵道ヲ建設セムトスルトキ若シ外國資本ヲ借入ル
ル場合ニ獨逸國ニシテ烟濱鐵道借款權ノ拋棄ヲ承諾スル
トキハ最先ニ日本資本家ニ商議スヘキコトヲ承諾ス

第四條 本協約調印ノ日ヨリ一箇年以内ニ日本資本團カ東
三省南部ニ在リテ鐵業ヲ經營セムコトヲ希望スルトキヘ
必要ナル建物ヲ建設スル爲各持主ニ對シ公平ニ借地料ヲ
商議シテ土地ノ借入ヲ爲スコトヲ許ス但シ一律ニ各種ノ
稅捐ヲ完納スヘシ

第五條 支那國政府ハ今後東三省南部ニ於テ鐵道ノ敷設ヲ
ニ附與スルコトヲ承諾ス調查シタル鐵山ニ對シテハ其ノ
半數ヲ選擇セシメ支那鐵業條例ニ照シテ採掘ヲ實行スル
コトヲ許シ其ノ他ノ各鐵山ハ支那自ラ處置ヲ行フヘシ
第六條 支那國政府ハ今後東三省南部ニ於テ鐵道ノ敷設ヲ
ノ外國各顧問ヲ聘用セムトスルトキハ最先ニ日本人ヲ聘
用スヘキコトヲ聲明ス

定アルモノヲ除ク外一切從前ノ通實行スヘシ

漢治萍公司ニ關スル交換公文案

第三號

查スルニ漢治萍公司ハ支那ノ商辦公司ニシテ支那ノ法律ヲ按照スルニ固ヨリ財產ヲ保全シ營業管理ノ權アルカ故ニ政府ハ未タ該公司ト商定セスシテ直ニ自ラ代リテ處置ヲ爲スニ便ナラス但シ該公司ニシテ將來若シ機會アリテ現在ノ事業ニ付日本國商人ト合意ノ辦法ヲ商訂セムコトヲ希望スルトキハ本國ノ法律ニ違背セサル限り支那國政府ハ之ヲ允許スヘシ

第三 帝國政府ノ修正案

(大正四年四月二十六日在支
日置公使支那國政府へ提出)

第一號

日本國政府及支那國政府ハ個ニ極東ニ於ケル全局ノ平和ヲ維持シ且兩國ノ間ニ存スル友好善鄰ノ關係ヲ益蒙固ナラシメムコトヲ希望シ茲ニ條款ヲ締約セリ

附屬交換公文案

開放地點及開埠章程ニ付テハ支那國政府ヨリ蒙メ日本國公使ニ協議ノ上決定スヘシ

第二號

日本國政府及支那國政府ハ南滿洲及東部內蒙古ニ於ケル被

我ノ經濟關係ヲ發展セシムル目的ノ爲ニ左ノ條款ヲ議定セリ
第一條 兩締約國ヘ旅順大連租借期限竝南滿洲及安奉兩鐵道ノ各期限ヲ何レモ九十九箇年ツツ延長スヘキコトヲ約ス

附屬交換公文案

於テ承認シタル審察法令ニ服従シ同シタ其ノ承認シタル課稅ニ服スヘシ民刑訴訟ハ日本人被告タル場合ニハ日本國領事官ニ於テ又支那人被告タル場合ニハ支那國官吏ニ於テ之ヲ審判シ互ニ員ヲ派シ臨席傍聴スルコトヲ得但シ土地ニ關スル日本人支那人間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方慣習ニ依リ日本國領事官及支那官吏ニ於テ共同審判スヘシ但シ將來同地方ノ司法制度完全ニ改良セラルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民刑訴訟ハ完全ニ支那國法廷ニ於テ審理スヘシ

第四條 (公文交換ニテモ可ナリ) 支那國政府ハ日本國臣民ニ對シ南滿洲ニ於テ別ニ指定シタル各鐵山(既ニ試掘或ハ採掘セラレタル各鐵區ヲ除ク)ヲ速ニ調査選定ノ上試掘或ハ採掘ヲ允許スヘシ但シ鐵業條例確定ニ至ル迄ハ現行辦法ニ據ル

一、奉天省

所在地	縣名	鐵種
牛心臺	本溪	石炭
田什付溝	本溪	石炭
杉松園	海龍	石炭
通化	石炭	石炭

第三條 日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業經營ノ爲必要ナル土地ヲ賃借又ハ購買スルコトヲ得
ノ商工業及其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得
第二條 並本條ニ關シ日本國臣民ハ例規ニ依リ下附セラレタル旅券ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受ケ且日本國領事官ニ

暖池塘 錦 石炭
鞍山站一帶 遼陽縣ヨリ 鐵
本溪縣ニ瓦ル

二、吉林省南部

杉松園

和龍

石炭、鐵

金

石炭

鐵

石炭、鐵

金

石炭

鐵

石炭

スヘシ

大正四年日支交渉關係公文書

將來支那國政府ニ於テ鐵道借款ニ關シ外國資本家ニ對シ現在ノ鐵道借款契約事項ニ比シ有利ナル條件ヲ付與シタルトキハ日本國ノ希望ニヨリ再ヒ前記吉長鐵道借款契約ノ改訂ヲ行フヘシ

第八條（支那國政府提出對案第七條）滿洲ニ關スル日支現行各條約ハ本協約ニ別ニ規定スルモノヲ除タノ外一切從前ノ通實行スヘシ

東部內蒙古ニ關スル事項

一 支那國政府ハ將來東部內蒙古ノ各種稅課ヲ擔保トシテ外國ヨリ借款ヲ爲サムトスルトキハ先ツ日本國政府ニ向テ商議スヘキコトヲ允諾ス

二 支那國政府ハ將來東部內蒙古ニ於テ自國ノ資金ヲ以テ鐵道ヲ敷設スヘク若シ外債ヲ要スルトキハ日本國政府ニ向テ商議スヘキコトヲ允諾ス

三 支那國政府ハ外國人ノ居住貿易ノ爲ニ速ニ東部內蒙古内ノ適當ノ地點ヲ開放スヘキコトヲ允諾ス其ノ地點及開埠章程ハ支那國政府ヨリ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定スヘシ

第六條（公文交換ニテモ可ナリ）支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ政治財政軍事警察等ノ外國各顧問教官ヲ僱聘スルトキハ最先ニ日本人ヲ僱聘スヘキコトヲ聲明ス

第七條 支那國政府ハ將來支那國ト各外國資本家トノ間ニ締結シタル鐵道借款契約規定事項ヲ標準ト爲シ速ニ吉長鐵道借款契約ノ根本的改訂ヲ行フヘキコトヲ允諾ス

四 東部內蒙古ニ於テ日支兩國臣民合辦ニ依リ農業及附隨工業ノ經營ヲ爲サムトスルトキハ支那國政府ハ之ヲ允諾スヘシ

二（交換公文案）

武昌ト九江南昌線トヲ聯絡スル鐵道及南昌杭州間、南昌潮州間鐵道借款權ニ付テハ他外國ニ於テ故障ナキコト明ナルニ至リタル場合ニハ必ス日本國ニ許與スヘク又ハ別ニ日本國政府ヨリ本件關係他外國トノ間ニ直接交渉ヲ經ムヘキニ付右經マル迄ハ本件鐵道ハ何レノ國ヘモ許與セサルヘキコト

三（陸外交總長聲明案）

（一）支那國政府ハ將來必要ノ場合ニハ日本人顧問ヲ僱聘スヘシ

（二）日本人支那内地ニ於テ學校、病院ヲ設立スル爲士地ヲ租借購買セムトスルトキハ中央政府ハ之ヲ允許スヘシ

（三）他日適當ノ機會ニ於テ支那ヨリ陸軍武官ヲ日本國ニ派シ日本軍事當局者ト直接兵器購入若クハ合辦兵器廠設立ノコトヲ協議スヘシ

四（日置公使聲明案）

支那ニ於ケル日本人ノ布數權ノコトハ追テ更メテ我方ヨリ交渉ヲ開始スヘシ

五 警察ノ件（撤回）

(大正四年五月一日在支日置)(公使支那國政府ヨリ接受)

帝國政府ハ支那國政府ニ於テ以上我修正案ヲ承認スルニ於テハ戰役終結後膠州灣租借地ニシテ全然我自由處分ニ委セラル場合ニハ左記條件ノ下ニ之ヲ支那ニ還附スヘキ旨支那國政府ニ對シ約束スヘシ

一 全部商港トシテ開放スルコト

二 日本国カ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ設置スルコト

三 列國ニシテ希望スルニ於テハ共同居留地ヲモ設置スルコト

四 獨逸施設物ノ處分其ノ他ノ條件手續等ニ付テハ還附實行ニ先チ日支兩國間ニ協定ヲ達クヘキコト

以上修正案提出ノ際日置公使ハ支那國政府ニ對シ左ノ通聲明セリ

以上各條文公文譯文等ノ辭句用語等ニ付テハ追テ確定ノ際修正スル所アルヘキコトヲ留保ス

第四 支那國政府最後修正案(譯文)

第一號

日本國政府及支那國政府ハ個ニ極東ニ於ケル全局ノ平和ヲ維持シ且兩國ノ間ニ存スル友好善鄰ノ關係ヲ益榮固ナラシメムコトヲ希望シ茲ニ左ノ條款ヲ締約セリ

第一條 支那國政府ハ今後日獨兩國政府間ニ獨逸カ山東省内ニ於テ條約及成案ノ辦法ニ據り支那國政府ニ對シテ享有スル一切ノ利益等ノ處分ヲ協定シタルトキハ總テ承認スヘキコトヲ聲明ス

日本國政府ハ支那國政府カ前項利益ヲ承認シタルトキハ日本國ハ膠州灣ヲ支那國ニ還附スヘキコトヲ聲明シ且今後日獨兩國政府間ニ協商ヲナストキハ支那國政府カ會議ニ加入スルノ權アルコトヲ承認ス

第二條 今回日本國カ膠州灣ニ於テ兵ヲ用ヒタル爲生シタル所ノ各種損害賠償ニ對シテハ日本國政府ニ於テ凡テ之ヲ擔任シ並膠州灣内ノ稅關電報郵便等ノ各事ニ付テハ膠州灣カ還附セラレサル以前ニ於テハ從來ノ辦法ニ據り辦理スヘキコトヲ承認ス其ノ兵ヲ用フル爲添架セル軍用鐵

日本支那兩國政府ハ南滿洲ニ於ケル彼我ノ經濟關係ヲ發展セシムル目的ノ爲ニ左ノ條款ヲ議定セリ

第一條 兩締約國ハ旅順大連租借期限並南滿洲及安奉兩鐵道ノ各期限ヲ何レモ九十九箇年ウツ延長スヘキコトヲ約ス

附屬交換公文案

旅順大連租借期限ハ民國八十六年即西曆一千九百九十七年ニ至リ滿期トス南滿鐵道還附期限ハ民國九十二年即西曆二千二年ニ至リ滿期トス其ノ原條約第十二條ニ記載スル運轉開始ノ日ヨリ三十六年ノ後清國政府ニ於テ代金ヲ支拂ヒテ回收スルノ權アリ云々ノ一節ハ之ヲ無効トス安奉鐵道ノ期限ハ民國九十六年即西曆二千七年ニ至リ滿期トス

第二條 日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ開工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業經營ノ爲必要ナル土地ヲ其ノ所有者ヨリ商租スルコトヲ得

第三條 日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往来シ各種ノ商工業及其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得

前二條ニ記載スル日本國臣民ハ例規ニ依リ下付セラレタル旅券ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受ケ應ニ支那邊警律及邊警章程ニ服從シ一切ノ賦稅ヲ支那人同様ニ完納スヘタ民效タルヘキモノトス

刑訴訟ニ至リテハ各被告ノ本國官吏ノ審判ニ歸シ彼我員
ヲ派シ傍聴スルコトヲ得但シ日本人ト日本人トノ訴訟及
日本人ト支那入トノ訴訟ニシテ土地若クハ租契ニ關スル
争執ハ支那官吏ノ審判ニ歸シ日本領事官ヨリ員ヲ派シ
傍聴スルコトヲ得但シ將來同地方ノ司法制度完全ニ改良
セラルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民刑訴訟ハ完
全ニ支那國法廷ニ於テ審理スヘシ

第四條 支那國政府ハ從來支那國ト各國資本家トノ間ニ締
結シタル鐵道借款契約規定事項ヲ標準トナシ速ニ吉長鐵
道借款契約ノ根本的改訂ヲ行フヘキコトヲ允諾ス
將來支那國政府ニ於テ鐵道借款ニ關シ外國資本家ニ對シ
現在ノ鐵道借款契約事項ニ比シ有利ナル條件ヲ付與シタ
ルトキハ日本國ノ希望ニヨリ再ヒ前記吉長鐵道借款契約
ノ改訂ヲ行フヘシ

第五條 (交換公文案) 支那國政府ハ日本國臣民ニ對シ南滿
洲ニ於テ別ニ指定シタル各鐵山(既ニ試掘或ハ探査セラ
レタル各鐵山ヲ除ク)ヲ速ニ調査選定ノ上試掘或ハ探査
ヲ允諾スヘシ但シ鐵礦條例確定ニ至ル迄ハ現行辦法ニヨ
ル

第六條 (交換公文案) 支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ自國

ア聲明ス
(一) 支那國政府ハ外國人居住貿易ノ爲成ルヘク速ニ自ラ
南滿洲及熱河道所轄ノ東部内蒙古ニ於ケル適當ノ地方ヲ
商埠ト爲スコトヲ承諾ス其ノ章程ハ支那國ノ他地方ニ於
テ既ニ自ラ開ケル商埠ノ辦法ヲ按照シテ辦理スヘシ

第三號 外交總長ヨリ日置公使ニ發スル回答案

聞ク所ニ據レハ支那國政府ハ福建省沿岸地方ニ於テ外國
ニ造船所軍用貯炭所海軍根據地及其ノ他一切ノ軍事上ノ
施設ヲ爲スコトヲ許シ又支那國自ラ外資ヲ借入レ前記各
施設ヲ行フヘシトノ趣ナルカ斯ル事實アリヤ否ヤ回答ア
ラムコトヲ請フ

何月何日附來示ノ趣問悉セリ支那國政府ハ福建省沿岸地
方ニ於テ外國ニ造船所軍用貯炭所海軍根據地及其ノ他一
切ノ軍事上ノ施設ヲ爲スツカ如キコト決シテ無之又
外資ヲ借入レ前記施設ヲ爲サムト欲スルカ如キ意思ナキ
旨聲明スルコトヲ得ヘシ茲ニ回答ス

第五 支那國政府ニ對スル帝國政府最後

通牒

(大正四年五月七日在支日置)
(公使支那國政府へ交付)

支那國政府ハ自己ノ發意ニ基キ左ノ宣言ヲ爲スコト
支那國政府ハ支那國沿岸ノ港灣及島嶼ヲ他國ニ譲與若ク
ハ貸與セサルヘキコト

リ外資ヲ公司ニ入レシムルコトナカルヘシ

第四號

支那國政府ハ自己ノ發意ニ基キ左ノ宣言ヲ爲スコト
支那國政府ハ支那國沿岸ノ港灣及島嶼ヲ他國ニ譲與若ク
ハ貸與セサルヘキコト

第五號

大正四年日支交渉關係公文書

ノ資金ヲ以テ鐵道ヲ敷設スヘク若シ外債ヲ要スルトキハ
先ツ日本國資本家ニ向ツテ借款ヲ商議スヘキコトヲ允諾
ス
支那國政府ハ將來南滿洲ノ各種稅課(但シ已ニ中央政府
借款ノ擔保トナレル鹽稅關稅等ノ類ヲ除ク)ヲ擔保トシ
テ外國ヨリ借款ヲ爲ストキハ先ツ日本國資本家ニ向ツテ
借款ヲ商議スヘシ

第七條 (交換公文案) 支那國政府ハ將來南滿洲ニ於テ政治
財政軍事警察ノ外國各顧問教官ヲ僱聘スルトキハ最先ニ
日本人ヲ僱聘スヘキコトヲ聲明ス
第八條 滿洲ニ關スル日支現行各條約ハ本協約ニ別ニ規定
スルモノヲ除クノ外一切從前ノ通實行スヘシ
東部内蒙古ニ關スル交換公文案

(一) 支那國政府ハ嗣後南滿洲及熱河道所轄ノ東部内蒙古
ニ於テハ關稅鹽稅以外各種ノ稅課ヲ以テ外債ノ擔保トセ
サルコトヲ聲明ス
(二) 支那國政府ハ嗣後南滿洲及熱河道所轄ノ東部内蒙古
ニ於テ鐵道ヲ敷設セムトスルトキハ支那國自ラ資金ヲ調
達シテ敷設スヘク若シ外債ヲ要スル場合ニハ他國トノ成
約ニ抵觸セサル限り先ツ日本國資本家ト商議スヘキコト
ヲ既ニ自ラ開ケル商埠ノ辦法ヲ按照シテ辦理スヘシ